

「大学入試研究の動向」

特集 令和4年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第17回）

●全体会 1（大学入試センターセミナー）

変貌する高校教育現場：大学はどう応えるか

●全体会 2

探究活動を入試でどのように評価するか

●全体会 3

私立大学の入試改革の現状と課題—首都圏私立大学を中心に—

大学入試研究の動向

第 40 号

独立行政法人大学入試センターは、令和 4 年 5 月 26 日～28 日、明治大学との共催で、令和 4 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 17 回）をオンラインで開催した。本報告書は、同大会における講演、討論等を当センターの文責で採録したものである。

* 本報告書で言及されている高大接続改革の進捗状況及び講演者の肩書等は、大会開催当日のものである。

目 次

令和 4 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 17 回）特集

● 全体会 1（大学入試センターセミナー）

「変貌する高校教育現場：大学はどう応えるか」 **3**

● 全体会 2

「探究活動を入試でどのように評価するか」 **77**

● 全体会 3

「私立大学の入試改革の現状と課題—首都圏私立大学を中心に—」
..... **147**

「変貌する高校教育現場：大学はどう応えるか」

司 会： 本郷 真紹（立命館大学教授）・小野 賢志（大学入試センター試験・研究統括補佐官）

概 説	変貌する高校教育現場	4
	小野 賢志（大学入試センター試験・研究統括補佐官）	
報 告 ①	宮城県仙台第三高等学校の事例	18
	渡部 敦（宮城県仙台第三高等学校教諭）	
報 告 ②	岡山県立和気閑谷高等学校の事例	28
	藤岡 隆幸（岡山県立和気閑谷高等学校長）	
報 告 ③	三重県立宇治山田商業高等学校の事例	42
	北尾 健（三重県立宇治山田商業高等学校教頭）	
報 告 ④	東京工業大学の教養教育改革の事例	52
	上田 紀行（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授）	
全体討論		63

内 容：

今年度からいよいよ新学習指導要領での高校教育がスタートした。とともに、今年4月から学校教育法施行規則および高等学校設置基準等の一部改正が施行され、各高校はスクール・ミッションと「三つの方針」を公表することとなっている。こうして大きく変貌しつつある高校教育から育ってくる学生に対して、大学は十分な教育接続を実現できるであろうか。本セッションでは、新たな高校教育の具体事例をいくつか紹介したうえで、大学側の先駆的な対応事例を共有し、今後の高大接続のあり方を広く議論する場としたい。

高校事例としては、まず、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校として特に学習評価の組織的改善に取り組み、大学入試の先を見据えた資質・能力を育成する宮城県仙台第三高等学校、次に、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」指定校として、生徒が地域課題に取り組む独自の探究学習を展開する岡山県立和気閑谷高等学校、そして、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」指定校として、教科でSDGsの基礎を学び総合的な探究の時間で課題研究を行う三重県立宇治山田商業高等学校の各実践報告をいただく。それに応える形で、大学側の教育改革事例として、東京工業大学の教養教育改革を紹介いただき、全体討論につなげる計画である。

全体会 1（センターセミナー）◎ 概説

変貌する高校教育現場

■小野 賢志（大学入試センター試験・研究統括補佐官）

それでは、お時間になりましたので、令和 4 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会全体会 1 を開会させていただきます。

令和4年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会
全体会1(大学入試センターセミナー)

変貌する高校教育現場：大学はどう応えるか

令和4年5月26日(木) 14:00～17:00

司会：

本郷 真紹

立命館大学教授

小野 賢志

大学入試センター試験・研究統括補佐官・試験企画部長

この全体会 1 では、「変貌する高校教育現場：大学はどう応えるか」をテーマに、3 つの高等学校の実践事例として宮城県仙台第三高等学校の渡部先生，岡山県立和気閑谷高等学校の藤岡先生，三重県立宇治山田商業高等学校の北尾先生からそれぞれのお取り組みをご発表いただいた後に，休憩を挟みまして，東京工業大学のリベラルアーツ教育の取り組みにつきまして東京工業大学の上田先生にご発表をいただきます。この全体会 1 の司会は，私，大学入試センター小野と立命館大学の本郷先生の 2 人で担当させていただきます。よろしくお願いします。

それではまず，概説としてお話をさせていただきます。

令和4年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会
全体会1(大学入試センターセミナー)

変貌する高校教育現場：大学はどう応えるか

- 14:00～14:20 趣旨説明および概説「変貌する高校教育現場」
小野賢志(大学入試センター試験・研究統括補佐官)
- 14:20～14:43 報告①「宮城県仙台第三高等学校の事例」
渡部敦(宮城県仙台第三高等学校教諭)
- 14:43～15:06 報告②「岡山県立和気閑谷高等学校の事例」
藤岡隆幸(岡山県立和気閑谷高等学校校長)
- 15:06～15:29 報告③「三重県立宇治山田商業高等学校の事例」
北尾健(三重県立宇治山田商業高等学校教頭)
- 15:29～15:40 休憩
- 15:40～16:03 報告④「東京工業大学の教養教育改革の事例」
上田紀行(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授)
- 16:03～17:00 全体討論

全体会 1 はお示しのような日程で、各高等学校の事例の発表と、3 分程度お時間の許す限り質疑応答をさせていただいた後に、全体討論をさせていただきます。

趣旨説明・概説

小野 賢志

独立行政法人 大学入試センター
試験・研究統括補佐官（兼）試験企画部長

- ・大学入学共通テストに関する企画調整
- ・新学習指導要領への対応
- ・「試験問題調査官」の総括
- ・研究支援
- ・を担当



文部科学省(～R3.3)

- ・小、中、高等学校学習指導要領の改訂の事務局
- ・総合的な探究(学習)の時間、外国語(英語)などの改訂、実施のための施策、学習評価
- …などを担当

3

まず、それぞれの事例発表をいただく前に、概説・趣旨説明をさせていただきます。この全体会は高校教育がテーマですが、私は大学入試センターで、令和 7 年度からの新しい学習指導要領に対応した共通テストの在り方の検討を担当しているのと併せまして、センターに来るまでは、文部科学省で 5 年ほど新しい学習指導要領の改訂、実施に関わる仕事をしていたことから、先生方の事例発表をいただく前に概説として今の高校教育を取り巻く状況についてお話をさせていただければと思います。

令和4年度 高校教育がこう変わる

令和4年度 高校教育がこう変わる

新学習指導要領
R4.4入学者から年次進行

18歳成年
R4.4民法改正施行

3つの方針の策定・公表
「育成を目指す資質・能力に関する方針」
「教育課程の編成及び実施に関する方針」
「入学者の受入れに関する方針」を策定、公表
(学校教育法施行規則改正)

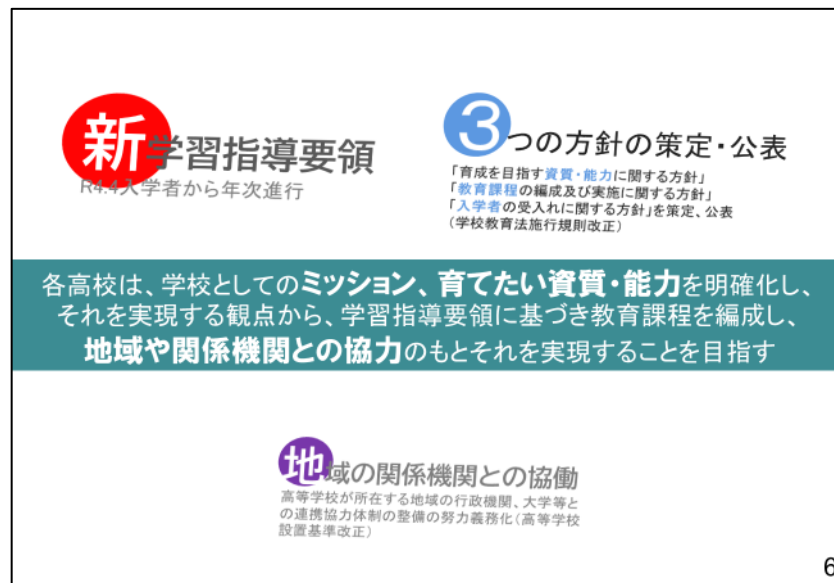
普通科改革
学際的に学ぶことを重視する学科、
地域社会の課題を学ぶ学科の設置
(高等学校設置基準の改正)

日本語指導の制度化
外国人生徒等に特別的教育課程を編成し
て行う日本語指導の制度化
(学校教育法施行規則改正)

地域の関係機関との協働
高等学校が所在する地域の行政機関、大学等と
の連携協力体制の整備の努力義務化(高等学校
設置基準改正)

5

今回の全体会 1 で「変貌する高校教育現場」というテーマを取り上げさせていただきました背景としまして、この令和 4 年 4 月からの高校教育を巡るさまざまな大きな改革の動きがあります。今年の 4 月に入学した今年の 1 年生から新しい高等学校学習指導要領の下での学びが始まっています。また、この 4 月に改正された民法が施行され、成年年齢が 18 歳に引き下げられました。このことも高校教育において何を育てていくのかということと大きな関わりを持っていくのかと考えます。

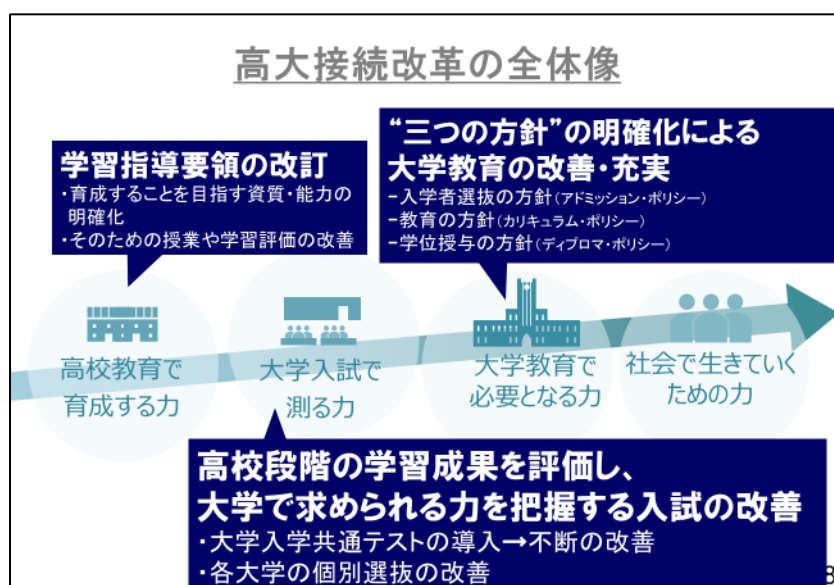
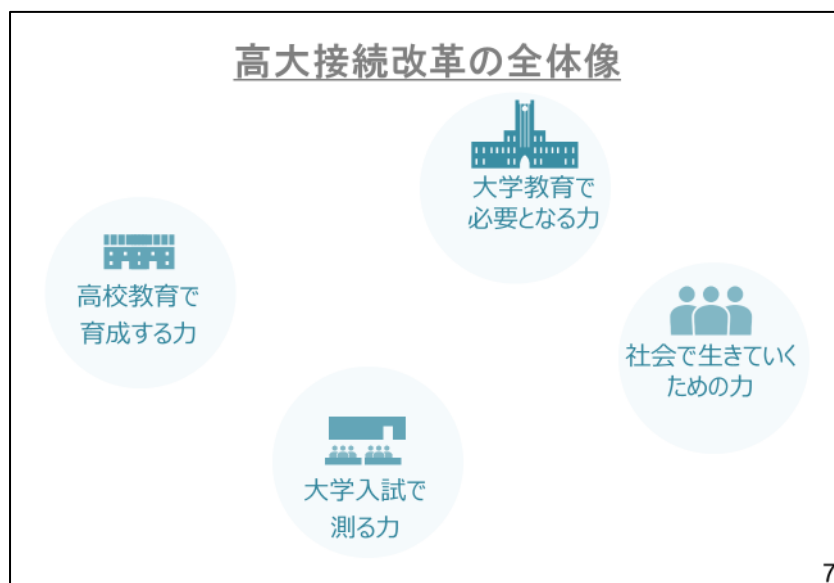


また、学校教育法施行規則の改正で3つの大きな動きがあります。1つは、高等学校はそれぞれの社会的な使命を踏まえ、3つの方針を策定、公表するということになりました。「教育を通じて育成を目指す資質・能力に関する方針」、「教育課程の編成及び実施に関する方針」、「入学者の受け入れに関する方針」を策定、公表するということになっています。

また、高校教育の中でも特に普通科改革と銘打ちまして、普通科の中でも、例えば学際的に学ぶことを重視する学科、地域社会の課題を学ぶ学科の設置ということが可能であるということが明確になりました。また、こうしたことを実施していくに当たって、地域の関係機関との協働、大学や行政機関など地域のさまざまな機関と協働していくということが努力義務として規定されました。

また、少し違う角度になりますが、今年の4月から外国人生徒に対して特別な教育課程を編成して行う日本語指導の制度化というものが行われました。数年前から、障害のある生徒のための通級指導の制度化ということも行われていますが、高校教育においてさまざまな生徒が学べるようにするという大きな流れの中の一つとして、こちらも大きな意義があるかと思い、紹介をさせていただきました。

このようなこの4月からの流れの中で、特に新学習指導要領などを中心に考えますと、各高校に求められていることとしましては、学校としてのミッション、育てたい資質・能力を明確化し、それを実現する観点から学習指導要領に基づいて教育課程を編成し、地域や関係機関との協力の下、それを実現することを目指すといったことが、さまざまな改革の中の根底にある考え方と考えられます。



高校、大学教育、そして、大学入試を通じた高大接続改革の全体像に少し触れされていただけだと思います。高大接続改革の問題意識は、高校教育で目指すもの、大学教育で必要となるもの、大学入試が一致しないことによりまして、例えば高校からしますと、大学で求められること、社会で求められることを教えるよりも、どうすれば大学入試で点が取れるかということに偏重した授業にならざるを得なかったり、あるいは入試が学習のモチベーションにならない場合に一体何をを目指すのかということが曖昧であったりという問題が起きていました。大学から見ますと、高校まででしっかりと大学教育で必要となる力を学んできていないことによって、学び直しに大きな力を入れざるを得ないという課題もあると考えています。

こうした状況を一体として変えていくということから、まず、高校教育では新しい学習指導要領により育成することを目指す資質・能力の明確化、そのための授業や評価の改善

に取り組み、大学では3つの方針の明確化による大学教育の改善・充実に取り組み、そして、その懸け橋となる大学入試では、高校段階の学習成果を適切に評価し、大学で求められる力を把握することができるよう、大学入学共通テストの導入と不断の改善を進めていくこと、それから、各大学の個別選抜を改善していくこと、こうしたことに取り組むということが課題となります。

新学習指導要領のポイント

ここで、新しい学習指導要領のポイントにつきまして、改めて共有をさせていただければと思います。

学習指導要領

小・中・高等学校が教育課程を編成する際の基準として
文部科学大臣が定める

各教科の目標、内容、教育課程編成上の留意点等を設定

昭和33年(高等学校は昭和35年)に告示されて以降、

児童生徒の実態や社会の変化を踏まえて、

概ね10年に1度改訂

実際に教育課程を編成、実施する主体は学校



学習指導要領は、生徒の実態や社会の変化を踏まえて、おおむね10年に1回改訂が行われてきました。重要なこととしましては、国の基準としての学習指導要領がありますが、実際に教育課程を編成、実施する主体はそれぞれの学校であるという点です。

新学習指導要領のポイント

（本日の発表に特に関わる部分）

- ・ 「社会に開かれた教育課程」
- ・ 「何を教えるか」ではなく、「何ができるようになるか」
- ・ 「総合的な探究の時間」
- ・ 目標、指導と評価の一体化

新学習指導要領にはさまざまなポイントがありますが、本日のテーマに主に関わりそうな以下の 4 つにつきまして、この解説の中で情報共有をさせていただければと思います。

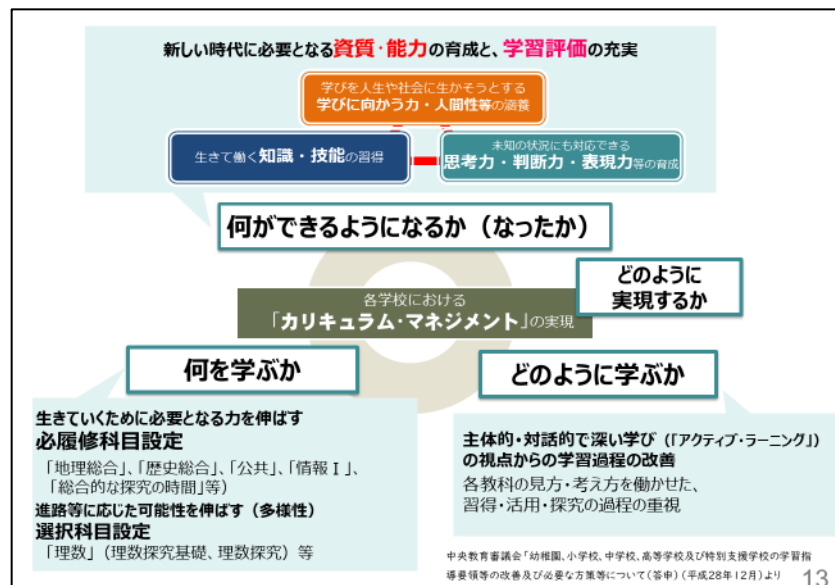
社会に開かれた教育課程

よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創る



- ・ 社会で求められる力を育てることを目指す
- ・ その目標を社会と共有する
- ・ 学校と家庭、社会全体の力を合わせて子供を育てる

まず、小学校から高校までを通じて、学習指導要領の根底にあるテーマとして、社会に開かれた教育課程というキーワードが挙げられています。このテーマは教育の目標として、社会で求められる力を育てることを目指すということ、その目標を社会と広く共有するということ、学校はこういう教育を目指していくということを広く理解してもらうということです。そして、その目標を地域や社会、家庭などの力を合わせて実現していくという 3 つの観点から説明がされています。



こうした社会に開かれた教育課程という理念の上に、今回の新しい学習指導要領のコンセプトを 1 枚にまとめるとこのような形になるかと思います。これまでの学習指導要領は、例えばゆとりか詰め込みかといわれるように、何を学ぶかという内容や量の議論に寄りがちでした。今回の学習指導要領は、ゆとりか詰め込みかというところの前の段階、個々の教科を越えて、どのような力を子どもたちに付けていくことが必要か、何ができるようになることを目指すかということから議論をスタートしています。そこで、各教科、講師を通じて共通して育てたい力を、①生きて働く知識、技能の習得、②未知の状況でも対応できる思考力、判断力、表現力等の育成、③学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性のかん養という、大きな 3 つの柱で資質・能力を整理しようということが打ち出されました。

この資質・能力については、それぞれの教科特有のものとして、各教科ならではの学びの中で育てていくものと、教科横断的に、教科全体で育てていくものという両方があると整理されています。そして、何ができるようになるかという目標を実現するために、何を学んだらよいかということで、高等学校の教科・科目についても整理されました。生きていくために高校生に共通する、必要となる力を伸ばす必修科目として、「地理総合」、「歴史総合」、「公共」、「情報Ⅰ」、「総合的な探究の時間」が設定されました。一方で、一人一人の多様な進路等に応じた可能性を伸ばすという観点から、選択科目として、例えば「理数探究基礎」、「理数探究」からなる「理数」という教科が設定されるなどといったような内容の見直しが行われました。

そして、もう一つ大きなポイントとして、何を学ぶかだけでなく、どのように学ぶかという考え方についても学習指導要領でポイントが示されています。「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善というキーワードの中で、特に、深い学びの視点としまして、各教科それぞれの見方・考え方を働かせた習得、活用、探究という学びの過程を重視していこうというコンセプトが打ち出されています。それぞれの教科ならではの見方・

考え方を働かせるというところで、その教科をなぜ学ぶのかという意義も改めて強調していくところがポイントになっています。そして、「何ができるようになるか」という目標、「何を学ぶか」という内容、「どのように学ぶか」という学習の方法から、また上にぐるっと1周回って戻ってきて、何を学ぶかという学習を通じて、「何ができるようになったか」という学習評価の充実も大きなポイントとして挙げられています。

そして、目標から学習評価までのこの一連の過程をどのように実現するかという、各学校におけるカリキュラムマネジメントの実現ということも大きなテーマとして掲げられています。

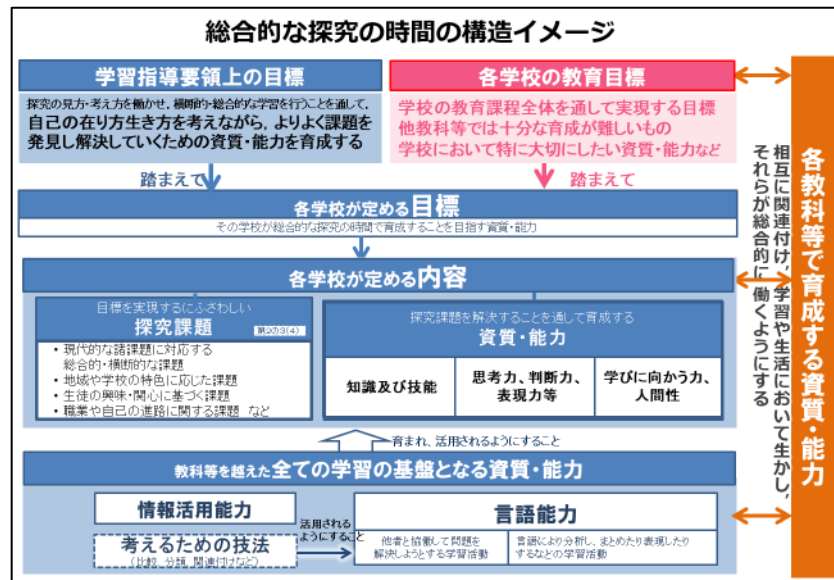
総合的な探究の時間

こうした学習指導要領のコンセプトを実現する上で一つのポイントとなる総合的な探究の時間について触れさせていただきたいと思います。

「総合的な探究の時間」の特徴

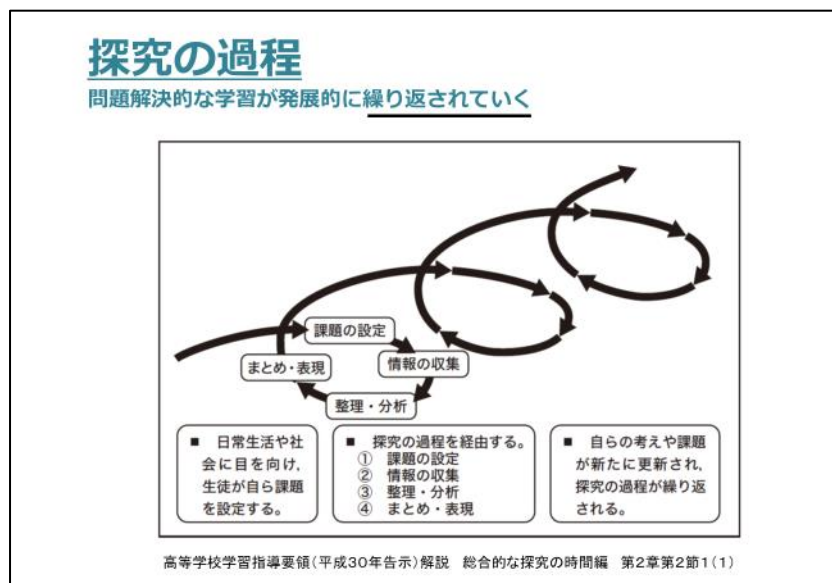
- （１）目標や内容は各学校が定めること
→学校のミッション、3つの方針と直結
- （２）教科横断的、統合的な学習であること
- （３）実社会・実生活の課題解決や、
自分自身の在り方生き方に関する学習であること

総合的な探究の時間は、これまでは高等学校において総合的な学習の時間として取り組まれてきたものをさらに発展させるということで、位置付けが行われました。他の教科等にはない大きな特徴としまして、この時間の目標や内容は各学校がそれぞれのミッションや 3 つの方針と直結させて定めるということ、教科横断的、統合的な学習であるということ、実社会や実生活の課題解決や自分自身の在り方や生き方に関する学習であるということが挙げられます。



これを少し細かく見ていきますと、各学校は、学習指導要領の上で定められた総合的な探究の時間の目標と各学校の教育目標を踏まえて、この総合的な探究の時間で何を目指すのかという目標を設定します。その目標を実現するために、どのような探究課題に取り組んでいくか、その探究課題を解決することを通してどのような力を育成するかということを目指していくということになっています。言い方を変えますと、各学校の目標が総合的な学習の時間の目標に直結しているということは、総合的な探究の時間に何を取り組むのかということにその学校の教育の特色が大きく表れるということが見えてくるかと思います。そして、この学習を進める上では教科等を越えた学習の基盤となる力として、情報活用能力、それから言語能力などの充実にも取り組むということが挙げられています。

そして、もう一つ大きな考え方としまして、各教科の学習と総合的な探究の時間の学習を行ったり来たり、往還していくということになります。各教科で学んだことを総合的な探究の中で生かし、また、探究の中で各教科で学んだことを使っていくことによって、なぜそれを学ばなければいけなかったのかという学ぶ意義が分かったり、学んだことの理解がより深まったりということで、お互いに学んだことが行ったり来たりするということが大きな特徴と考えられます。



そして、この探究の過程は、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現といった過程を1回ぐるっと回すだけではなくて、これを2回、3回と、いったん自分が調べ、整理し、発表したことを基に次の問題に気が付き、また次の探究に取り組むという、このぐるぐる回るような過程を経ていくということが大事であるということが打ち出されています。何かを調べて発表するという発表がゴールではなく、そこからまた次の課題に取り組むということが大きなポイントだということが示されています。

「理数探究」「理数探究基礎」の創設

- 数学と理科の知識・技能を総合的に活用して主体的な探究活動を行う新たな選択科目。
(文科省指定「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」等での成果も踏まえた科目)
- 同様の成果が期待できる場合は、「総合的な探究の時間」の履修の一部又は全部に替えることができる。

※国語や地理歴史科における「探究」科目は、必修科目を学んだ後に発展的に学習する選択科目であり、「理数探究」とは性格が大きく異なる
(国語「古典探究」、地理歴史「地理探究」「日本史探究」「世界史探究」)

新しい学習指導要領では、「総合的な探究の時間」の創設に併せて、「理数探究」、「理数探究基礎」という科目も創設されています。これは本日発表いただく仙台第三高等学校も含めまして、文部科学省の指定事業として取り組まれてきたスーパーサイエンスハイスクールなどでの成果も踏まえまして、数学や理科の知識、技能を総合的に活用して探究を行うような新たな科目です。同様の成果が期待できる場合には、「総合的な探究の時間」

の実施に代えて、この「理数探究」等を行うこともできるということになっています。また、これらは教科という位置付けになりますので、例えば理数探究基礎の教科書というものも発刊されています。

なお、学習指導要領の中では、国語や地理歴史科において探究と名の付く科目が幾つかありますが、それらの科目は、必修科目を学んだ後にさらに発展する学習を行うという選択科目であり、総合的な探究の時間や理数探究のような教科横断的な探究を行う科目とは性格が大きく異なります。

様々な探究

職業系学科の課題研究科目

- ・ 農業、工業、商業、水産、家庭、情報の各教科の「課題研究」、
- ・ 看護の「看護臨地実習」又は福祉の「介護総合演習」
- ・ 課題研究等の履修をもって総合的な探究の時間の履修の一部又は全部に替えることができること。

学校設定教科・科目

高等学校は、学習指導要領に定められた以外の教科・科目を開設することができる。

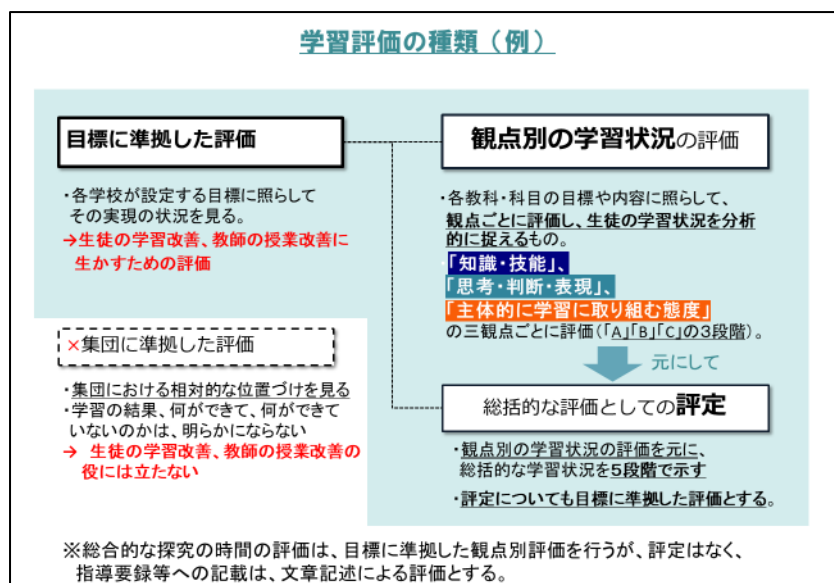
教育課程の特例

国が指定する研究開発学校、教育課程特例校などでは、独自の教科・科目構成等をとることができる。（スーパーサイエンスハイスクール等を含む）

また、これまでも行われてきた職業系の学科における課題研究科目、例えば農業、商業、工業などの課題研究といった科目も総合的な探究の時間と同じような目標の追究ということに挙げられるかなということで紹介をさせていただきます。

学習評価の改善 (目標、指導、評価の一体化)

もう一つのキーワードとして、学習評価の改善という点についても触れさせていただきたいと思います。



これまで小・中学校に比べて高等学校は、学習評価により指導の改善を行っていくというところが大きく遅れているという指摘が再三なされてきました。新学習指導要領の下での学習評価の充実として、まずは、集団に準拠した評価、他の生徒との比較ということではなく、それぞれの学校が設定した目標に準拠した評価、目標に対してどのようなことができるようになったかという評価に切り替えていこうということが挙げられています。そして、目標に準拠した評価を学習指導要領の目標が知識・技能、思考力・判断力・表現力等の3つの柱に分けられたことに対応して、観点別に生徒の評価を行っていこうということが挙げられています。

なぜ観点別に目標に準拠した評価を行うのかというところでありますが、集団に準拠した生徒の相対的な評価では、生徒が今どこに課題があるのか、どこの学習を改善すればさらに伸びるのかということが明らかにならないのに対して、観点別の評価であれば、どこに課題があって、次に取り組むべきことは何かということが生徒にとっての学習改善のヒントになり、また先生にとっての授業改善のヒントになるということがあります。このような目標に準拠した評価に取り組むということが高校教育の大きな課題ということになってきます。

総合的な探究の時間に関しましては、5段階で評価を行うという評価の形は行いませんが、指導要録に記録する評価としては、文章記述によって行うということになっています。探究した成果をどう評価するかということは、探究によってどういう力を育てるのかということと共通した非常に大きなテーマかと思います。

学習評価の改善のポイント

指導と評価の一体化による学習・授業改善

- 目標に準拠した評価（ $\longleftrightarrow$ 集団に準拠した評価（相対評価））
- 学校としての組織的、計画的な取組
例）教師同士での評価規準や評価方法の検討、明確化など
- 学習の過程の評価
定期テストや成果物（作品）等だけでなく、学習の過程における成長を見取る
- 目標や評価結果の生徒との共有
- 検定試験・測定ツール等の活用
あくまで教師が行う評価の補完材料として活用することに留意（代替されるものではない）

「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」
（平成31年3月29日付け文部科学省初等中等教育局長通知）より

学習評価のポイントとしましては、目標に準拠した評価を行うということの他、学校としての組織的、計画的な取り組みを行うということ、定期テストや成果物などの結果だけではなく、学習の過程を評価していこうということ、学習の過程の中でどのような力が身に付いたかという成長を見取っていこうということ、それから、評価の目標や評価結果を生徒と共有することによって生徒の学びの改善につなげていこうということ、検定試験や測定ツールなど外部から提供される材料を活用していくということも考えられること、ただ、これらのツールの活用は、あくまで先生が行う評価を補完するためにあるものであって、代わりになるものではないということを前提に活用するという。こういったことがポイントとして挙げられています。

本日は、ここまでに挙げたような学習指導要領のポイントになるような、育成することを目指す資質・能力、探究的な学習、学習評価の改善といった課題に、それぞれの形で組織的に取り組んでいらっしゃる学校からご紹介いただくようお願いをさせていただきました。

明日の全体会 2 では、高校における探究の成果をどのように入試で測るかということが予定されていますが、まず高等学校自体がこの探究の成果を評価できなければ、大学入試でその評価を行うということは大変難しいということになります。

今日の、この後の事例発表、それから全体討論、さらには明日の全体会にもつながっていくことを願いまして、学習指導要領の改訂などの概況につきまして解説をさせていただきました。■

全体会 1 (センターセミナー) ○ 報告 1

宮城県仙台第三高等学校の事例

■ 渡部 敦 (宮城県仙台第三高等学校教諭)

宮城県仙台第三高等学校の渡部敦と申します。本日は貴重な機会を与えていただきまして、どうもありがとうございます。



それでは、本校の発表をさせていただきたいと思います。

宮城県仙台第三高等学校の取り組み	
宮城県仙台第三高等学校の紹介	
	概要 昭和38年開校 令和4年度で60年目をむかえる。理数科2学級(80名)・普通科6学級(240名) 計8学級 SSH(Ⅰ期(H22～H26),Ⅱ期(H29～R3),Ⅲ期(R4～R8))指定校
	育成する資質能力
	建学の精神(昭和38年) 心身の健康・真善美の追求・愛と知の秘り
	学校教育目標(平成30年度) ① 仙台三高は、多様な人々と協働する寛容な心を持ち、社会の変化にしなやかに対応する、逞しく豊かな人間性を育みます。 ② 仙台三高は、人類が積み上げた英知に学び、真理の追求を通して知性と感性を磨き、事象を深く探究する態度を養います。 ③ 仙台三高は、博愛の精神と創造する知を育む人づくりを通して、よりよき未来の創出に貢献します。
	育成する6つの資質・能力(令和元年度) ① 自己管理能力:心身の健康を維持するために、健全な生活習慣を身につけ、様々な壁を柔軟に乗り越えるしなやかさを持つ。 ② 信頼構築力:相手の立場を思いやり、尊重し、互いに信頼関係を築くことができる。 ③ 自己研鑽力:人類が築き上げてきた真理を重んじ、それを教養として身につけることを通して、自らの資質・能力を高めようとする。 ④ 課題突破力:困難な課題に立ち向かい、解決するために、個人の資質を高め、チーム一丸となる実行力を持つ。 ⑤ 未来デザイン力:未知なるものに立ち向かうために、自己の可能性や周囲の可能性を信じ、能動的に知性を高め行動していく。 ⑥ 社会牽引力:他者理解力・思考力など総合的な判断力をもって、集団を牽引し、社会貢献し、共生して生きていくこと。
宮城県仙台第三高等学校 Miyagi Prefecture Sendai Daisan High School	

本校は、今年度で60年目を迎える県内で初めての理数科を設置した8学級の学校となっています。県内では、三高といえばSSH事業というように、理数科教育に特化した教育が特徴だと考えられている学校です。

昭和 38 年、開校のときに作られました建学の精神に基づいて、本校の先生方で学校教育目標を設定し、さらに、育成する 6 つの資質・能力を教員のワークショップなどで考えて設定し、これらを達成するために、授業のみならず、部活動、あるいは課外活動を含めて生徒の育成に力を入れている学校となります。

宮城県仙台第三高等学校の取り組み

説明の流れ

- ①SSH・授業づくり研究センター(学校組織)について
- ②これまでの授業改善の取り組み
- ③さらなる授業改善を目指して

宮城県仙台第三高等学校
Miyagi Prefecture Sendai Daisan High School

本日の説明についてですが、まず学校全体で取り組んでいる組織の説明です。SSH・授業づくり研究センターと、少し名前が長いので、この場では研究センターと説明させていただきます。学校の組織についての説明、その組織を通じて今まで行われていた授業改善の取り組み、そして、今後どのような授業改善を目指していくかということについて大きく 3 点について説明をさせていただきたいと思います。

宮城県仙台第三高等学校の取り組み

①SSH・授業づくり研究センター

組織図

```

graph TD
    A[宮城県教育委員会] --> B[運営アドバイザー]
    A --> C[運営指導委員会]
    C --> D[校長]
    D --> E[SSH・授業づくり研究センター(全校員が所属)]
    E --> F[SSH事業部]
    E --> G[授業づくり事業部]
    F --> H[SSH 事務局]
    F --> I[STEAM教育研究部]
    F --> J[評価研究部]
    F --> K[広報・普及部]
    G --> L[連携企画・国際部]
    G --> M[校内研修部]
    G --> N[地域フィールド開発部]
    G --> O[授業研究・開発部]
    E --> P[学校評議員会]
    P --> Q[地域自治会]
        
```

SSH事業部と授業づくり事業部の関係

SSHの運営
STEAM教育研究
評価法研究
広報・普及

授業づくり事業部
授業づくりプログラム研究開発
授業づくりプログラム実践開発
授業づくりプログラム評価開発
授業づくりプログラム評価開発
授業づくりプログラム評価開発

校内研究機関

仙台三高「学校づくりプロジェクト」

・教科や探究のプログラムを開発し、教員間で共有
・12月のSSH中間報告会・授業づくりプロジェクトフォーラムで研究成果を外部へ公開している。

全職員が所属し、SSH事業や授業改善のための研究・開発を実施する機関。教科や分掌の枠をこえて、迅速かつ、臨機応変に活動できるのが強み。

宮城県仙台第三高等学校
Miyagi Prefecture Sendai Daisan High School

まず、研究センターの組織なのですが、SSH の実施をする SSH 事業部と、授業の改善に取り組む授業づくり事業部、この大きく 2 つがあります。もともと 2 つは独立していたのですが、SSH2 期の申請のときにこの 2 つを合わせ、研究センターとしました。全職員が 8 つの班のどれかに所属するという形を取っています。な

ぜこの形としたかという、学校全体ではさまざまな仕事があります。分掌や学年、教科などがあるのですが、それらの横のつながりがあまりない。他の分掌で何の仕事をしているか、他の教科でどのような授業をしているかということが分かりにくい部分がありました。本当は良いものはもっともっと広めていかなければいけないと考えていましたので、さまざまな分掌、教科、教員自身の特性などを考えてグループ分けをして、横のつながりをもっと持たせようと考えました。そして、職員一人一人が所属することによって、学校全体の教育改革に自分が携わっているという自覚を持っていただきたいということでこのような組織をつくり上げました。

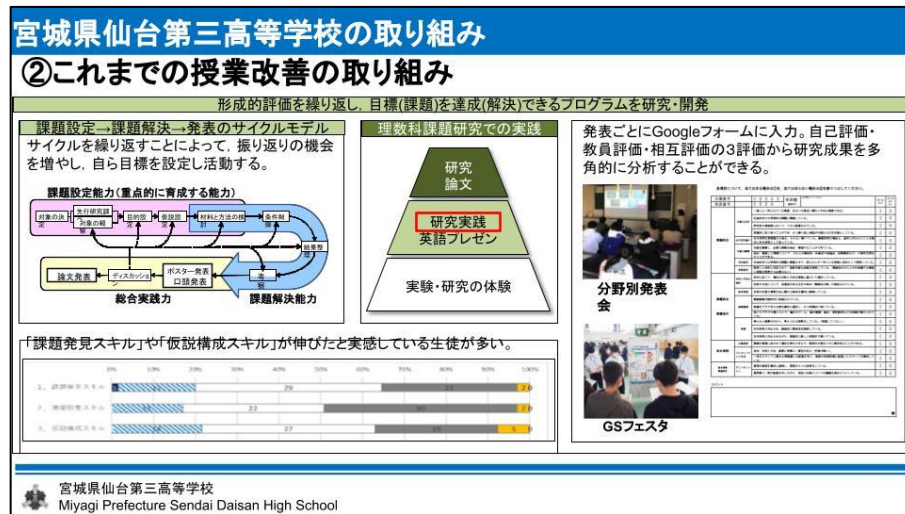
この組織の中では、それぞれの班に自由裁量が与えられていますので、さまざまな活動に臨機応変に対応してくれており、これまでも授業改善、あるいはさまざまな外部機関との連携などが進められてきました。

SSH 事業部と授業づくり事業部が統合することで、今までお互いに研究してきた研究成果を相互に交換、あるいは普及させながら、学校全体でより良い授業改善に取り組んでいます。この成果を毎年 12 月の SSH 中間報告会・授業づくりプロジェクトフォーラムという研究発表会で、先生方に 1 年間どの授業研究をしたかということを発表させていただき、内外の先生からご意見を頂いて、さらに授業改善につなげています。



これらの授業改善の取り組みの中で、今までどのような授業改善をしていたか、例をお示ししていきたいと思います。実は、仙台三高では、宮城県の平成 22 年度から行われた入試制度の大きな改善、全県 1 区になるということで、どのような高校が魅力的かということを職員が研修の中で考えた結果、授業をもっと大事にしていこうという結論に至りました。その授業をつくる上で、どのような観点で授業をつくっていくかということで、3つの観点を策定しています。3つの観点についてはスライドの真ん中にあります。この3つの観点は、新学習指導要領で示されている3つの評価の観点と偶然にも非常に似通っているのですが、平成 22 年度以降、授業を公開するときにはこの3観点のどの部分に特化した授業なのか、あるいは複数またがる授業であるかなどを表示して、どんな観点で、あるいは視点を置いて授業を構成しているか、一目で分かるようなシンボリック

なマークにもなっています。



このような取り組みの中で各教科で授業を実施していくということです。最近の、授業改善の最も大きな取り組みとしては、課題解決型の PBL の研究が非常に進んでいまして、どの授業でも課題解決型の授業が実施されており、さらに長期的なプログラムに関しては形成的評価を取り入れて、生徒が主体的に学べる仕組み、プログラムをどのようにつくっていくかということが研究されています。

こういった授業の改善、そして、PBL や形成的評価の普及の背景には、やはり理数科が SSH で培われてきた課題研究の成果があると言えます。課題研究は課題を設定し、課題解決、そして発表というサイクルの中で実施されるわけですが、このサイクルを複数回繰り返すことによって、本人たちが今まで分からなかった新たな課題の発見や、あるいは自分のこういった特性が伸びたかを発見できる大きな機会になって、生徒のリテラシー、そして、コンピテンシーが非常に伸びていると感じられます。特に発表では、評価を自己評価、教員評価、総合評価と3つの評価を実施しています。これにより、自分の課題解決の活動を客観的に見ることができ、この3つの評価をすることで、次なる目標、あるいは新しい課題の発見につながっています。

こういった活動を通して、生徒たちはたった1年でも課題発見スキルが伸びたと感じる生徒が60%以上、仮説を設定する力についても伸びたと感じている人は60%以上に達し、このカリキュラムをやって良かったと考えています。

宮城県仙台第三高等学校の取り組み

②これまでの授業改善の取り組み

形成的評価を繰り返し、目標(課題)を達成(解決)できるプログラムを研究・開発

SS英語表現Ⅱ

研究を英語のスライドで作成。また東北大学グローバルラーニングセンターと連携し、留学生からの指導を受ける。(年8回のセッション)
2学年の1月にマラヤ大学の学生へ発表する。

Zoomセッション

何度も留学生とのセッションを繰り返し、課題や次の目標を明確にする。

Googleサイトの活用

いつでもスライドを確認し、情報を共有することができる。

2020 Sanko SSH×GLC

理数科課題研究での実践

発表会(オンライン)

さまざまな考えや価値観を持った人々が自分たちの研究に新しい視点や課題をもたらしてくれる。

自己評価の変容(5段階評価)

発表レベルが向上しても、必ずしも自己評価は高くない。

宮城県仙台第三高等学校
Miyagi Prefecture Sendai Daisan High School

さらに、この課題研究ですが、実は課題研究を通じて2年生の1月にマラヤ大学の学生に英語で自分たちの課題研究を発表するというプログラムを実施しています。課題研究と並行してやっているので非常に大変なのですが、この英語で発表するプログラムに際しては、東北大学のご協力を得ています。東北大学から留学生を派遣していただいて、留学生にこの課題研究の発表を聞いてもらい、何度も意見交換をしてもらって、課題研究の進化を目指していました。全部で8回セッションがあるのですが、それ以外にもGoogleサイトを活用して、いつでも相互に意見交換ができる状況をつくって、最終的に初めて会うマラヤ大学の学生の方々に発表します。

実は、本当はこの企画は、最初は台湾の師範大学付属の高級中学校へ実際に行って発表をしていたのですが、コロナの影響もあり、オンラインでマラヤ大学の大学生に発表することになりました。ただ、大学生で専門的な学びをやっている人たちのさまざまな指摘、あるいはアドバイスを得られる機会というのは、生徒にとって非常に実りあるプログラムだと感じています。

その特徴として、自己評価の変容についてご覧いただきたいと思います。自分のプレゼンテーションの自己評価、最初は4です。5段階評価で4を評価する人が多かったのですが、実際にやってみたら、客観的に力は伸びているのですが、5が若干増えています。意外なほど3が増えているという結果になりました。われわれ教員から見て非常に上達して、しかも的確に発表していると思っているのですが、なぜ自己評価が低くなっているのかと分析してみますと、彼らは8回のセッション、あるいはさまざまな活動を通して、もっと上手にプレゼンテーションができると自然に高い目標を設定していたということが分かりました。

彼らが高い目標、われわれの想定する以上の高い目標を設定していたがために、このように5段階評価で自己評価が低くなっています。むしろこういった姿が望ましいと、この課題研究、さらには英語発表をやって良かったなと感じています。

宮城県仙台第三高等学校の取り組み

②これまでの授業改善の取り組み

形成的評価を繰り返し、目標(課題)を達成(解決)できるプログラムを研究・開発

SS探究
SDGsなどの視点から社会への貢献を目指した課題設定や解決を目指す。

さまざまな体験プログラム



SDGs講演会 SDGsカードゲーム体験
模擬国連体験 国連ユネスコ本部講話

普通科探究での実践



研究論文
探究活動
探究スキルを習得しながら課題を設定

地域フィールドを活用した探究活動



関係諸団体と連携し、近隣の大堤沼の整備に関して探究活動を実践。

宮城県仙台第三高等学校
Miyagi Prefecture Sendai Daisan High School

この状況を、もっと普通科にも波及させなければいけないのではないかとすることで、2期では普通科の探究活動を充実させています。普通科の場合は、科学的な部分よりも社会にどう貢献、還元していくかという視点で、最初はさまざまなプログラムを通じて社会や国際的な課題についてどのようなものがあるかを知ってもらい、2年次に課題研究や探究活動に取り組んでもらうようにしています。

実際に、社会に根差すということであれば、学校内だけではもう手に負えない課題がたくさんあるので、われわれは外部連携を強化していています。外部の資源のことをわれわれは地域フィールドと呼んでいます。生徒が社会と交流することによって社会の課題を知り、より良い解決方法を探っていければと考えております。

ここに載せてあるものに関してですが、地元にある沼やその周辺が少し荒れているのですが、これを近所の自治会の人たちと協力しながらどう直していこうかということを探したグループの作品の一部となっています。

宮城県仙台第三高等学校の取り組み

②これまでの授業改善の取り組み

形成的評価を繰り返し、目標(課題)を達成(解決)できるプログラムを研究・開発

他校連携の推進
他地域の生徒と交流することにより、自分が住んでいる地域の現状を再確認することで、課題の発見や解決する資質能力の向上につながる。

若狭高校 山形高校
立花館中学校 飯沼第三高校

- SSH事業等の生徒・教員の相互参加
- 共通テーマを用いた探究活動
- 探究活動のための情報交換
- 授業プログラムの共同開発・実施
- 修学旅行等での生徒交流

若狭高校とのオンライン意見交換会



普通科探究での実践



研究論文
探究活動
探究スキルを習得しながら課題を設定

外部発表の増加



探究活動のデータベース化



これまでの研究ポスター、論文、スライドをいつでも閲覧することができる。研究内容は常に共有。

宮城県仙台第三高等学校
Miyagi Prefecture Sendai Daisan High School

外部連携は地域、大学のみならず、他校の高校生にも協力していただいています。同世代の高校と連携し、他校の人たちと交流することによって地域の違いを知ることというところでもそうですが、この交流を通じて改めて自分たちの地元を見つめ直す、あるいは自分の状態を知ることというところで、新たな発見を得られることが期待できますので、他校とさまざまな連携を進めているところです。

このように地域フィールドを利用して、社会に根差したプログラムを実施することによって、徐々に外部発表に参加することを目標とするグループが多くなり、普通科の半分ぐらいは外部で発表するというところまで来ました。

また、このような活動が、どのように進学実績などにつながっているかというところを検証しています。実は本校に入ってくる生徒の約 90%以上は国公立を志望してしまっていて、このような活動を通じて生徒の力は伸びているかというところ、あくまでも大学入試という限定的なところではあるのですが、実際に国公立合格者数は増加しています。そして、最近顕著なところは、総合型選抜や、あるいは学校推薦型、その合格者数が非常に増えているということです。生徒は自分たちがやった探究活動を通じて、社会にどう貢献していくかを考えたときに、やはり大学にもそういったところをアピールして、大学に行って社会に貢献したいという意欲の高い生徒が増えてきたということがこの学校推薦型や総合型選抜の入試で合格者を増やしている要因だと考えています。この合格者の推移に関しては、事前資料には入れていませんでした。大変申し訳ありません。

宮城県仙台第三高等学校の取り組み

③さらなる授業改善を目指して

校内研修の実施

【講演】「指導と評価の一体化」の実践や先進事例を把握【2020.9.10】
文部科学省 初等中等教育局外国語教育推進室長 小野 賢志 氏

【講演】「指導と評価の一体化」の具体的な方法を共有する【2021.6.10】
東洋大学 食環境科学部 教授 後藤 顕一 氏

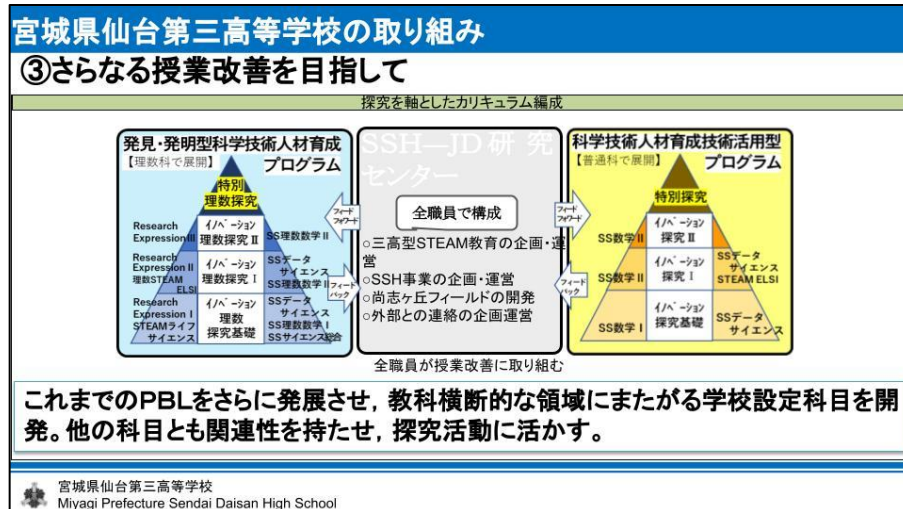
【ワークショップ】各教科で単元のまとまりの1例について「指導と評価の一体化」の計画シートを作成【2021.9.9】
・観測評価に関する情報を確認
・グループで評価方法・評価規準を入力する。
・内的動機づけをどのように刺激するかを考える。

【講演】「指導と評価の一体化」について他校の取り組みと情報共有【2021.11.25】
青森県立青森高等学校 教諭 笠井 敦司 氏

宮城県仙台第三高等学校
Miyagi Prefecture Sendai Daisan High School

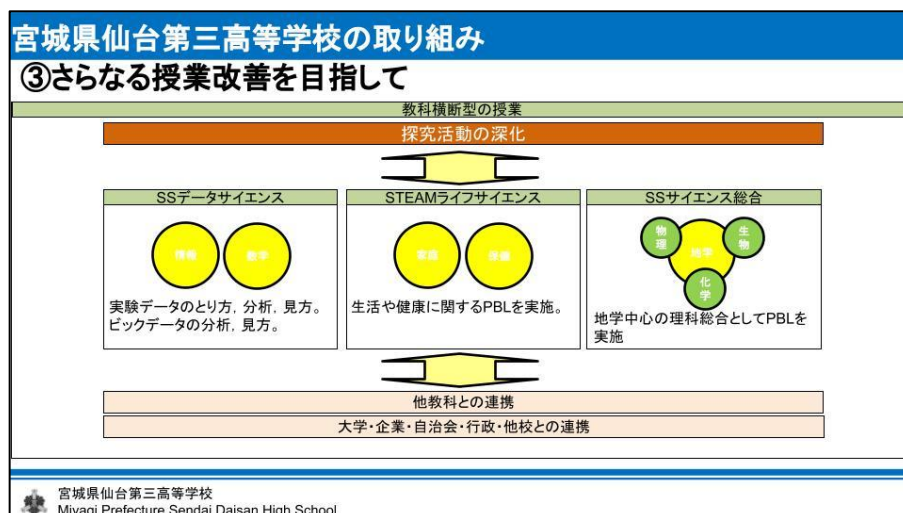
こういった活動の中でわれわれはさらなる授業改善を目指していこうと考えています。今年度から新学習指導要領が実施されますので、そこをきっかけとして、指導と、そして評価をもう一度見直そうということで、一昨年からの計 4 回の研修を行ってきました。先ほどご報告いただいた小野試験・研究統括補佐官にもご講演いただいています。

これらの研修を通じて、われわれは探究を重要視するカリキュラム編成というのが非常に大事ではないかと考えました。そこで、これは第 3 期の実施モデルなのですが、探究を理数科も普通科も前面に置いて、教科・科目との結び付きを強めて、探究をもっと進化させていこうと考えています。



ただ、普通教科と探究との間で、実はプログラムに少し差があります。普通教科の中でも PBL 型の授業は取り入れているのですが、やはり探究とは少し乖離（かいり）があります。そこでわれわれはこれをつなぐ教科横断型の学校設定科目を設定し、地域や他教科で学んだもの、さらには学校設定科目で学んだこと、そういったものを最終的には探究活動の進化につなげることができればと考えています。

やはり普通教科と探究活動をつなぐ教科がやはり必要で、この教科を手厚くしていく中で、普通教科の内容が探究活動にも生かされるという理想的な形を目指しています。



宮城県仙台第三高等学校の取り組み

③さらなる授業改善を目指して

観点別評価について共通の評価シートを作成し、活用

定期考査の点数を重視するのではなく、単元ごとに目的に応じた取り組みを評価する。これまで培われたPBLやパフォーマンステストを活用しながら、生徒自身が学習を振り返り、次の目標を設定することができる。また授業者が授業改善の手がかりとする。

観点別評価	評定
AAA	5
AAB	
ABB	
BBB	4
BBC	
BCC	
CCC	3
ACC	
ABC	
BCC	2
BBC	
BBC	
CCC	1
CCC	
CCC	

「評価」は学習者が次の目標に向けて意欲的に取り組むためのもの、という意識を全職員で共有。→各教科で授業プランを作成。

数学科の工夫

Googleサイトでいつでも予習・復習ができる環境を提供。

国語科の工夫

観点にそってワークシートを組み立て、単元ごとに意見を共有し、自己評価ができるようにする。

宮城県仙台第三高等学校
Miyagi Prefecture Sendai Daisan High School

そして、新学習指導要領の評価に関してなのですが、先ほどの研修を通じて、われわれは観点別にどのように実施していくかのモデルを策定しました。これはどの教科でもほぼ同じものを作っています。1年間のプログラムを幾つかの単元に分けて、例えばスライドに示された場合は、11個の単元に分けて、3観点で評価していきましょと、共通認識のもと普段の授業が全て評価に関わるというやり方で、生徒の資質・能力の向上を目指していきたいと考えています。また業務が増えないようにさまざまな教科の工夫をしながら、生徒の主体性を育成したり、形成的評価を実現するように工夫しているところです。

宮城県仙台第三高等学校の取り組み

課題は...

- ①教科横断型授業では、どのように形成的評価を実施するか。
- ②大学をはじめ、社会とのさらなる連携が必要。
- ③新学習指導要領で大学入試はどう変化するか。

ご清聴ありがとうございました。

宮城県仙台第三高等学校
Miyagi Prefecture Sendai Daisan High School

最後になりますが、今後の課題というのも幾つか持っています。例えば先ほど言った教科横断型の授業では、どのように形成的評価を実現していくか。普通教科、探究活動では今までやってきたのですが、新たに設定した教科横断型の授業でどのように評価していくかというのは、実は今試行錯誤しているところです。

続いて 2 番目です。探究活動においては、社会とのつながりを強化していかなければいけません。今もさまざまな大学や自治会、そして、他校との協力が行われているのです

が、まだまだ足りないと感じています。他の学校ではコンソーシアム体制を取って本当に自由に外部との連携が進んでいる学校もあるのですが、そういったものをわれわれの学校でも目指していかなければいけないなと考えています。

最後に、大学入試に関してです。新学習指導要領になって大学入試はどう変わるか、非常に関心が高いところです。ただ、大学でも高校でも社会にこのような人材を送りたいというビジョンは多分一致していると思うので、その高校と大学をつなぐとき、そのビジョンが生かされるような入試制度、あるいは大学との連携ができればいいかなと思っています。

以上で、仙台第三高校の事例発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【小野・司会】 渡部先生、どうもありがとうございました。今のご発表につきまして、Q&Aに1つご質問を頂いています。「大変充実した取り組みについて、ご報告ありがとうございました」ということで、「仙台三高は課外活動にも積極的と伺っています。今回のお話を聞いて、先生や生徒さんの皆さんが過度に多忙となることはないか、忙し過ぎることはないかということが気になりました。それを防ぐためにどのような学校経営などを心掛けておられるでしょうか」ということで、今お答えできる範囲で、もしお答えできることがありましたらお願いしたいと思います。

【渡部】 質問どうもありがとうございました。そうですね。われわれもそれはかなり懸念しているところです。さまざまな課外活動が増えているので、生徒に負担がいていないかということもあります。ただ、われわれは生徒に時間を返すことをもっとやっていきたいと思います。念頭に置いています。

例えばホームルームの時間を短くしたり、配布物に関しては、今1人1台 Chromebook を持っていますので、データで配布したり。今までだと連絡があるたびに一定数の人たちを職員室に集めて、そして指示をするということをやっていたのですが、グループごとに、今 Google のクラスルームがありますので、いつでも連絡ができ、生徒も見たらそれで返事をするという感じで、連絡伝達については ICT を活用して時間短縮をしています。

さらに、外部に関しては生徒に選択させるということで、別に必須ではないんだと。自分で決めて、やりたいときはやりなさいという姿勢を取って、生徒がいろいろな行事の中で、取捨選択をするという、そういったふうに指導の方針として実施しています。まだまだ削減とはいかないのですが、このような工夫をしています。以上です。

【小野・司会】 渡部先生、ありがとうございました。■

全体会 1 (センターセミナー) 〇 報告 2

岡山県立和気閑谷高等学校の事例

■ 藤岡 隆幸 (岡山県立和気閑谷高等学校長)

和気閑谷高等学校の藤岡と申します。本日は発表のお時間を頂きましてありがとうございます。

令和 4 年 5 月 2 6 日

令和 4 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会
全体会 1

岡山県立和気閑谷高等学校
校長 藤 岡 隆 幸

地域との協働による取り組み

1

今日は、まずは概要をお話しさせていただきまして、その後に運営全体に関わること、最後に、総合的な探究の時間の閑谷學について発表をさせていただきたいと思います。

概況 (本校の概要)

- ・ 生徒数 259名 (男117、女142) (令和4年5月1日現在)
- ・ 学科・定員等

学 科	募集定員	学区	2 年次からの選択系
普 通	8 0 人	東備	協働探究、特別進学
キャリア探求 (専門学科)	4 0 人	全県	福祉、流通、会計

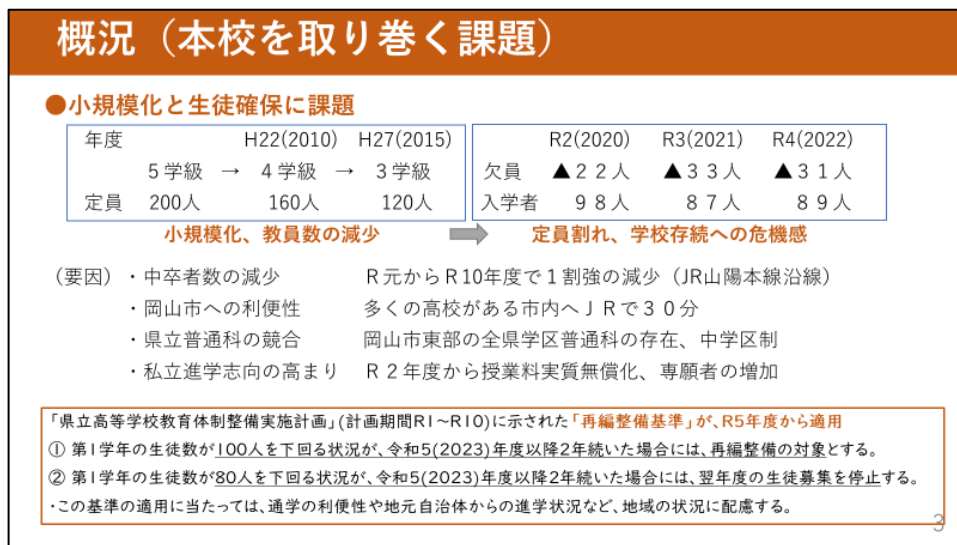
- ・ 全国募集 (平成30年度～) 募集枠12名 (外枠、定員の 1 割)
在籍数 14名 (1 年 5 名、2 年 2 名、3 年 7 名)
- ・ 指定校 文科省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」(令和元～3)
- ・ 起源 1670年、岡山藩が閑谷学校創建 → 閑谷中学校 → 和気高校閑谷校舎
1922年、和気高等女学校設立 → 和気高校本荘校舎 → 和気閑谷高校
1949年、統合 1965年、完全統合

令和2(2020)年“創学350年” 令和4(2022)年“和気の地に女学校ができて100年”

2

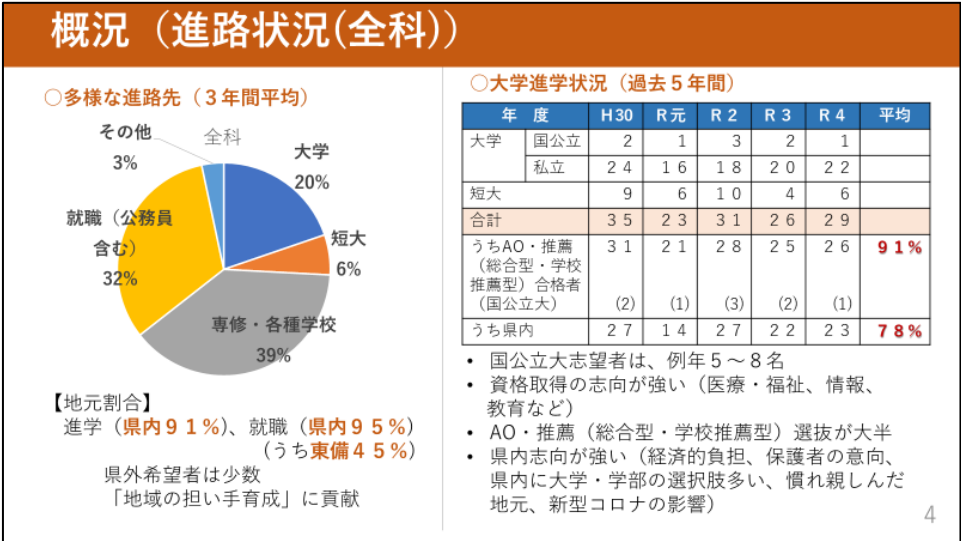
本校は県南東部の和気町にあり、JR 山陽本線沿線では東の端に位置する高校です。JR 沿線の近隣 4 自治体の生徒が大半を占めています。1 学年が普通科 2 学級と専門学科であるキャリア探求科 1 学級からなる、本県最小規模の高校の一つです。5 年前から全国募集を行っており、本年度は 5 名が入学し、全校で現在 14 名が学んでいます。昨年までの 3 年間、文部科学省事業により、高校生による地域課題の解決等の探究的な学びを実現し、地域を支える人材育成に資するための教育活動と体制づくりに取り組んできました。

本校は江戸時代、岡山藩が庶民のためにつくった閑谷学校の流れを汲んでおり、一昨年に閑谷学校創建から数えて 350 年を迎えました。また、もう一方の流れであるここ和気の地に高等女学校が設置されて今年でちょうど 100 年となります。

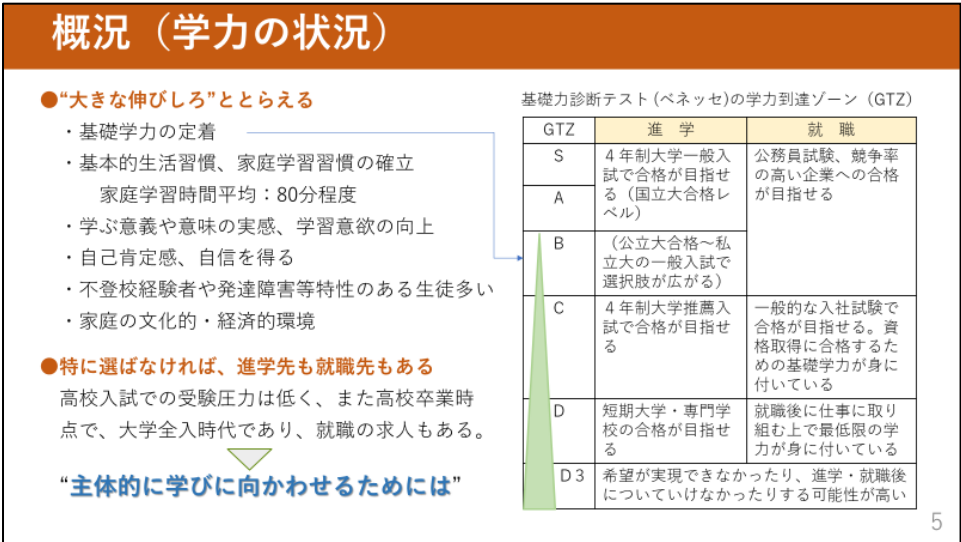


本校は少子化などから、平成 27 年度に 3 学級になりました。それから、5 年ほどがたち、現在さらに定員確保が難しくなっています。主な要因としましては、地元中卒者数の減少、利便性が良い岡山市への進学、そして、私学の授業料実質無償化による選択のしやすさなどが挙げられます。人口が岡山市と倉敷市に集中する本県では、周辺部の高校は小規模化、定員割れの状況にあり、都市部の高校との学校規模や志願倍率の差が顕著となっています。

下の枠囲みは県教育委員会が示す教育体制整備実施計画です。その中に来年度入学者以降適用される再編整備基準が示されています。100 人や 80 人を下回る場合の措置が示しており、この数字に当てはまらないよう、生徒募集活動に取り組んでいるところです。



これは卒業時の進路状況です。左側は全体の状況で、進路先は多様で、大学と短大、専門学校、就職がそれぞれ3分の1ずつです。地元の進学、就職が大変多いことが特徴となっています。右側は大学進学状況で、国公立大学は例年5名から8名が希望しますが、学力面から高いハードルとなっており、合格に至る生徒は少数です。資格取得の志向が強く、大学に進まなければ取得できない資格の場合は大学を選択しますが、それ以外は専門学校を選択するケースが多くなっています。また、一般入試の利用者は少なく、AO・推薦、現在の総合型・学校推薦型選抜利用者が大半を占めています。総合的な探究の時間の実績など、特色ある活動による成果を利用できる入試を活用して、合格につなげています。



学力についてですが、民間テストでの3年生4月の状況ですが、右の表で一番下のD層が多くを占めています。基礎学力の定着、学習意欲や目的意識、自己肯定感などを得させることが必要と考えています。基礎学力が定着しなければ、進路の実現、さらには進学や就職後についていけなくなります。本校がある学区は岡山市内の高校と偏差値的序列があり、また、本校ではここ数年定員割れもあり、高校入試の受験圧力は低い状況と言え

ます。さらに、高校卒業後の進学や就職も特に選ばなければ進路先はあるという状況でもあります。こうしたことから、何よりも生徒を主体的に学びに向かわせるにはどうすれば良いかということが重要となってまいります。

運営（卒業時点で身に付けさせたい力）

○「育てたい生徒像」（スクール・ポリシーのうち）

- ・幅広い知識・教養を身に付け、自身の成長を目指し、何事にも挑み続ける生徒
- ・探究心を持ち、持続可能な地域社会の実現に向け積極的に行動できる生徒
- ・「恕」（思いやり）の心を持ち、自分と他者の良さを認め、互いに高め合える生徒



○資質・能力として「7つの力」を示し、評価と関連づけて、生徒とも共有

- 自分を理解する力、職業とつなぐ力、考える力、行動する力、コミュニケーション力、チームワーク力、自立する力
- ・「主体的な学び」を身に付けるために、「主体的な学習に必要な基礎スキル」の習得と、「非認知能力」（目標設定、他者との協働、感情処理）の育成

私は、和気閑谷高校に入学してから、いろいろな経験を通して、大きく変わることが出来ました。中学生の時は、人と関わるのが苦手で、積極的に何事にも挑戦することが出来ませんでした。しかし、挑戦する勇気をくれ、応援してくれる先生方や友達、家族がいたからこそ一歩を踏み出すことができ、その積み重ねとして大きく成長することが出来ました。これからは自分の足で一歩一歩、歩んでいきます。

6

そうした生徒の実態を踏まえ、高校におけるスクール・ポリシーである3つの方針を昨年度定め、公表しています。スライドはそのうちの卒業時での本校が育てたい生徒像を示しています。そして、具体的にコンピテンシーとして身に付けてほしい力を7つの力として示し、評価と関連付けて生徒と共有しています。主体的な学びを身に付けるためには主体的な学習に必要な基礎スキルを習得させること、そして、非認知能力を育成することが大切であると考えています。

一番下の枠囲みですが、これは卒業生の言葉です。卒業時点で社会的自立に向かう土台がつけられる場でありたいと考えています。

運営（どのように学ぶか）

○主体的・対話的で深い学びの実践、様々な機会への主体的選択と挑戦を促す

- ・学習方法や教材の最適な組合せによる効果と主体性の伸張
1人1台端末やAI教材等、効果的なICT活用
- ・生徒はルーブリック評価をもとに自己目標を設定し、「見通し→行動→振り返り」を通して主体的に取り組む
- ・視野や考え方を豊かにする「聞き書き」「哲学対話」等の対話手法の重視
- ・探究活動や体験活動での調査、発表会の工夫（オンライン等）
- ・生徒会や委員会活動、部活動、ボランティア活動への積極的参加
- ・各種検定や資格試験、校外の様々な発表会やコンテスト等への参加



調べた内容を説明しあう

○地域や社会の課題を発見解決する探究学習、ESD教育の推進

- ・ユネスコスクールとして、地域課題とSDGsをつなぐ
- ・「閑谷學」「地域協働探究」等の授業でのリアルな体験・探究の活動
- ・地域での体験・交流機会の推進、地域行事の企画運営への生徒の参画



中学校との生徒会交流 7

⇒生徒自身が、学んだ・考えたと実感できる様々な「機会」「場」の設定

そうした力を伸ばすための本年度教育課程を実施するに当たって重視する観点や方法

を示しています。主体的・対話的で深い学びの実践、さまざまな機会への生徒の主体的選択と挑戦を促すという柱と、地域や社会の課題を発見・解決する探究学習、ESD 教育を推進するという柱を立てています。そして、スライドに示しましたさまざまな方法を通して、学習が社会とつながり、学ぶ意味を実感できるさまざまな機会や場を生徒に提供したいと考えています。

運営（様々な教育活動）	
取組と主なねらい	主 な 内 容
旧閑谷学校での研修や「論語」に関わる学習を通して自己の在り方・生き方を学ぶ	本校制作の「論語百章」や「論語手帳」を活用した論語朗読の実施、論語かるた大会の開催、小中学校への論語の出前授業など
地域協働による探究学習、就業体験やボランティア活動を通して、課題解決に向けた力、社会や仕事とつながる力や社会貢献意識を高める	地域課題に取り組む総合的な探究の時間「閑谷学」、就業体験等に取り組む独自科目「地域協働探究」、ボランティア活動や社会貢献活動など
様々な対話活動を通して、対話技法を学び、コミュニケーション力、主体性や共感性を高める	「聞き書き」「哲学対話」「多様な主体との協働会議」の実施など
対人関係スキル等の研修により、人間関係づくりの基礎を学ぶ。不登校経験者や特性のある生徒への配慮	初年次の定着・安心感の醸成に向けた少人数学級編成や少人数指導。ソーシャルスキルトレーニング、アンガーマネジメント研修など
海外姉妹校等との交流を通して、視野の拡大やコミュニケーション力の向上、多様性の理解を深める	中国・韓国・台湾の姉妹校と修学旅行やオンラインによる交流。町のイングリッシュ・フェスの企画運営。訪日教育旅行の受入れなど



旧閑谷学校での研修

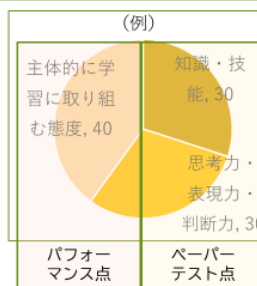


姉妹校・オンライン交流

8

これは具体的な活動内容です。自己や他者、社会との対話、交流などを重視し、さまざまな活動を行っています。表の一番上にあります、本校の源流である旧閑谷学校での研修や、論語の活用などは本校の特色といえます。本校が独自に作成した論語手帳に掲載した章句を毎朝ショートホームルームでクラスごとに朗読して、授業に臨みます。また、学期ごとの始業式や終業式でも全校生徒が体育館で論語朗読を行うなど、日常的な活用によって人格の陶冶（とうや）を目指しています。

運営（指導と評価）	
○授業のスタンダード（授業の様式）を提示 ①授業ごと・単元ごとに生徒との「授業の目標」の共有 目標は、単に「知識として理解・分かる」から、「～することができる」を示す ②「学習の手順」の説明 ③生徒ができたかを「振り返り」 ○パフォーマンス評価、ポートフォリオ活用など評価の工夫 ・ペーパーテストの工夫、パフォーマンス評価（個別課題、協働の様子）とルーブリックの作成 ・活動の成果や結果、活動の動機、目標達成に向けた活動の過程を評価	
・生徒が評価を自分事化する 生徒が、授業改善に向けた委員会への参加と授業改善に向けた意見を述べる。	



9

授業では目標の共有、手段の説明、最後に振り返るという流れを授業の様式として分かりやすく示しています。目標については何々が「分かる」というだけでなく、何々「することができる」という態度目標として示すようにしています。評価については、ペーパーテストでの工夫とパフォーマンス課題などによる評価方法を組み合わせて 3 観点を測るように努めています。また、生徒自身の評価する力につながるようにルーブリックを活用し、目標を可視化して生徒と共有し、その達成状況を生徒自らが確認できるようにしています。また、生徒の自身の変化について確認する上で、ポートフォリオ評価を行っています。そして、一番下の写真がありますが、生徒が授業の改善に向けた意見を述べることで、授業アンケートにとどまらない授業に臨む当事者意識を持たせたいと考えています。

[illegible]

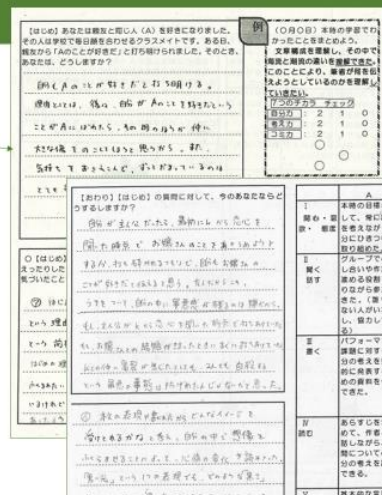
これは学校のホームページに公開しています授業実践の紹介シートです。全教員がより良い授業を目指し、授業のねらいや身に付けてほしいこと、授業の山場や評価をまとめ掲載しています。この資料にもありますように、パフォーマンス課題については、これは例えば家庭科ですが、単元のまとめとして、条件を基に住みやすい住環境を考え説明するという課題を評価基準とともに生徒に課しています。さまざまな、こうしたパフォーマンス課題を単元で繰り返し行います。知識を得て終わりではなくて、複数の知識やスキルを総合して考え、そして他者への説明も目標とするということで、相互の考えを評価し合い、できる、そして使いこなす力の育成を図っているところです。

運営（ポートフォリオ評価）

○生徒自身の成長の過程と振り返りの蓄積、見通しを持つ

- 授業での振り返り
OPP（ワンページポートフォリオ）シート活用
単元の始まりと終わりで感想や気づきを記入
- 「論語手帳」を活用し、週の初めに計画し、週末に振り返りを記録
- 年2回の三者面談での振り返り
生徒は、努力と成長・成果、見通しを具体的な取組を踏まえて端末にまとめ、保護者等に説明、助言を得る
- 「キャリア・パスポート」を活用し、年度初めに学習や活動の見通しを立て、各学期末と年度末に振り返りを記録

***ポートフォリオ活用による効果的、効率的なマネジメント**
→ 自律的学習者へ



The image shows several examples of student portfolios and evaluation sheets. On the left, there are handwritten notes in Japanese, including reflections on learning and future goals. On the right, there are printed forms with checkboxes and scales for evaluation, such as 'I can do it myself' (自分でできる) and 'I can do it with help' (手助けがある). The forms include sections for 'Self-reflection' (自己評価) and 'Teacher/Parent evaluation' (先生・保護者評価).

ポートフォリオ評価の例ですが、さまざまな場面で生徒が自身の活動を記録し、振り返りを行うことで自己評価、自己管理できることを目指しています。このうち、ワンページポートフォリオでは、生徒は単元の最後に単元最初と同じ問いに対する自分の考えを書き、単元の始まりに書いた内容と比べて、感想や気づきを記入します。単元ごとに学びがどう深まり、自分がどう成長できたかを記録を基に実感することができます。

また、中ほどの三者面談であります。生徒が努力と成長を実績に基づいて保護者や教員に説明する機会を持っています。これは、いわゆる口頭によるポートフォリオでもあります。生徒は取り組んだことについて、自らの感想や見通しを言語化して、さまざまな気づきを内在化させていくと考えています。こういった積み重ねにより、自律的に学習できる力を育てていきたいと考えています。

運営（地域との協働の推進）

○学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）の導入

- 令和元(2019)年度～、本県県立学校初の設置
- 2市1町（**備前市、赤磐市、和気町**）の首長・教育長、商工会議所や商工会、大学教授、PTA、同窓会等15名の委員

○学校支援職員の配置

- 町は「第2次和気町総合計画」（R3～R12）に「**和気閑谷高校魅力化事業**」を定める。
- 地域おこし協力隊2名、魅力化コーディネーター1名を派遣
- 県教委からも魅力化事業によるコーディネーター1名を配置
- 役割
 - 「閑谷学」等での外部人材や事業所をコーディネート
 - 小中学校や地域行事での交流の企画・運営をコーディネート
 - 進路指導に係る情報提供、放課後の生徒の学習支援
 - 生徒募集に向けた広報活動

※前職や出身地が異なる多彩なメンバーが関わり、多様な視点・アイデア・手法による豊かな教育活動の創出・継続がなされている。



The image shows a meeting of the School Management Council. Several people are seated around a table, discussing the school's management and future plans. A caption below the image reads: "協議会の会議には生徒も参加" (Students also participate in the council meeting).

こうした活動を支える基盤として、3年前に学校運営協議会制度を活用し、コミュニティ・スクールを導入しました。導入するに当たり、生徒の通学範囲、生徒が就職していく範囲、そして、在学中の学習フィールド先という点から、地元和気町だけでなく、隣接

する備前市や赤磐市に協力関係を広げています。

また、和気町は地域衰退を防ぐには教育の充実が重要課題であるとの考えのもと、第1次総合計画に続き、第2次計画でも和気閑谷高校魅力化事業を定めています。平成26年度以降、和気町から複数の支援職員を派遣していただいています。地域からの物心両面の支援が本校の活動、生徒の成長の大きな支えとなっています。こうして多様な主体が関わることで、活動に幅と深まりができ、多様な価値観の下で学習ができるようになってきています。

総合的な探究の時間「閑谷學」

【目的】 地域との関わりを重視しながら、自ら学び、自ら考える姿勢と、問題を解決していく力を身に付ける。

【育てようとする資質や能力及び態度】

①生きて働く知識や技能

「探究の手法」：対話や協働の方法、目標や論題の設定の方法、情報の収集・整理の方法、論理的に考える方法、発表の方法、振り返りの方法

②未知の状況にも対応できる思考力や判断力、表現力

「情報活用能力」「問題発見・解決力」「表現力」

③学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性

態度：「自己の将来について夢や希望を持って具体的に考えようとする」

「異なる意見や他者を受け入れ、相互に認め合い、共同して課題解決しようとする」

「社会を取り巻く様々な事柄に目を向けて探究し、自分の言葉で整理しようとする」

「社会活動に当事者意識を持って参加し、現在及び将来の学習に生かそうとする」

「閑谷学校の精神を継承しようとする」

13

地域との協働の取り組みの中心となっている総合的な探究の時間「閑谷學」について説明します。これは、閑谷學での、3観点に即して育てたい資質・能力及び態度であります。平成22年から閑谷學という名称で探究の学習の時間を設定しています。先ほど申し上げました平成26年度からは、地元和気町から複数の地域おこし協力隊員が支援職員として学校に入り、地域課題を中心とするテーマの学習に地域と連携・協働して取り組んでいます。

総合的な探究の時間「閑谷學」

【活動計画】 単位数：1年次(1)、2年次(1)、3年次(1)

	1年次	2年次	3年次
1学期	学校への適応 仲間づくり 単元Ⅰ探究基礎 イントロダクション、2市1町バスツアー ウィキペディア作成、発表準備、リハーサル ※探究手法の習得1[発想法、文献調査の方法、プレゼン手法(Google スライド)] クラス内発表 探究学習発表会(引き継ぎ)	単元Ⅱ地域探究 イントロダクション ※SDGsについて 問いの再設定、仮説→検証 2市1町フィールドワーク 発表準備、リハーサル 探究学習発表会	単元Ⅲ未来探究 イントロダクション 問いの再設定、仮説→検証 調査・分析・実践 発表準備、リハーサル 探究学習発表会
2学期	単元Ⅱ地域探究 校内ミニ探究 問いの設定、仮説→検証 2市1町フィールドワーク ※探究手法の習得2[インタビュー手法、アンケート手法]、SDGsについて 発表準備、リハーサル	単元Ⅲ未来探究 問いの設定、仮説→検証 調査・分析・実践 ※文献調査 発表	単元Ⅲ未来探究 問いの再設定、仮説→検証 調査・分析・実践 単元Ⅳ卒業論文 論文の書き方 論文集作成 ※卒業論文の機会を確保
3学期	ゼミ内中間発表 ふりかえり	ゼミ内中間発表 ふりかえり	ふりかえり 後輩の指導

○4つのステージを設定
探究学習を深めるとともに、個々のキャリアの探求（社会の中でどう生きていくか）につなげる。

協力した外部人材
R1：79名
R2：30名
R3：75名

14

3年間の計画についてですが、単発でイベント的なものでなく、系統的に積み上げられるように毎年改善をしてきています。活動は単元Ⅲを3年次の2学期半ばまでとして、総合型・学校推薦型選抜に生かせるようにしています。課題の設定、情報の収集、整理と分析、まとめと表現といったプロセスを繰り返し、社会との接点の中で生徒自身の適性や関心を知り、生徒の将来の目標や進路を見つけ、その実現に向けて進めていくという流れとしています。また、発表機会を数多く持ち、アウトプットすることを重視しています。地域の協力を得て、大人や社会と関わる体験を重視しています。外部の協力者は、昨年度は75名でありました。

総合的な探究の時間「閑谷學」							
【3年間の成長イメージ】							
学年	単元	活動内容	問い	探究サイクル	協働	口頭発表	聞き手として
3	Ⅳ 論文作成	・個人探究の内容を、2000字以上の論文にまとめる		・自ら探究サイクルを回すことができる		(成果発表)	
	Ⅲ 未来探究（個人探究）	・興味関心に基づき、個人で自律的に探究を行う ・フィールドワークや地域で実際に課題解決のための活動をするなど、必ず自分で一次情報を取りに行く ・スライドを使っての発表をする	・「調べて考えてやってみたい(仮説)を作ることができる		・自ら協力者を見つけ学校外のひとと協力して活動することができる	(中間発表) ・メモを持たずに発表することができる ・質疑応答を通して聞き手と対話することができる	・発表者の探究の発展に資する(本質的かつ具体的な)質問ができる
2	Ⅱ グループ探究（個人探究）	・選択したテーマごとに健康・ビジネス・自然科学・歴史文化・教育のいずれかのゼミに所属し、チームで活動する ・探究(問いを立て、実践を通して検証し、まとめ、発表するサイクルを繰り返す)を行う ・情報収集や問い、目標、計画の設定など探究のための技法を学ぶ	・「調べて考えてわかる」問い(仮説)を作ることができる	・教員の補助のもと探究サイクルを回すことができる	・学校外のひととの付き合い方のマナーを説明できる ・チームの中での役割を理解し、果たすことができる	(中間発表) ・メモを元に発表することができる ・質問に的確に答え、次の計画を立てたり考えを修正したりできる	
	Ⅰ 探究基礎	・自分で選んだ事柄について調べ、Wikipediaの記事を書く(対象は2市1町に関わるものこと)	・「調べてわかる」問いに切り込むことができる	・教員の指示のもと探究サイクルを経験し、理解することができる	・他者の考えと自分の考えを比べながら、理由を明確にして意見を言える	(成果発表・引継ぎ会) ・原稿を読まずに発表することができる ・質問に的確に答えることができる (中間発表) ・原稿を読まずに発表することができる	・発表者の探究内容を理解した上で質問することができる ・5W1Hの質問を使い分けることができる
1	Ⅰ 探究基礎	・バスツアーで五感をを使って2市1町(前期:南郷・和歌山)に臨み、情報を得る ・体験で注目した事柄についてスライドにまとめ、発表する	・「調べてわかる」問いに切り込むことができる	・相手の話を聞き、自分の意見を言うことができる ・話し合ってから結論を出すことができる		・原稿を元に、聞き手の顔をしながら発表ができる ・質問に答えることができる ・同級生の前で発表することができる	・興味や疑問を元に簡単な質問をすることができる

このような3年間の成長イメージを教職員で共有して、生徒に示しています。資質・能力、態度に関して、探究活動の中で重視する項目について、単元ごとの到達目標をイメージできるようにしています。単元ごとの活動で常に意識をさせ、見通しを持たせるようにしています。

総合的な探究の時間「閑谷學」	
単元Ⅰ「探究基礎」（1年前期） 個人 ⇄ グループ活動 “学校や地域と自分のつながりを感じる”“探究の基本を身に付ける” ・フィールドワークで、地域（2市1町が中心）への興味と関心を持たせるとともに必要な情報活用や探究手法の基礎を学ぶ。	
単元Ⅱ「地域探究」（1年後期～2年前期） “自己と社会・世界とのつながりを体験・調査し考察する” ・地域課題について問いを立て、地域の協力を得てフィールドワークや探究活動を行い、探究を深め、解決策を考察・提案 ・例年、5テーマ（健康、教育、歴史文化、ビジネス、自然科学）いずれかのゼミに所属して活動。適宜、ゼミ内で活動を共有 ・グループでの探究活動（1班8人程度） ・先輩から後輩へ引き継ぐテーマもある ・教職員は全員が担当	

1 年次初めの単元Ⅰでは、これから学んでいく地元 2 市 1 町へのバスツアーから学習が始まります。その後、発想法や調査法など探究学習の技法を学んだ後、地元和気町をフィールドにミニ探究を行います。

単元Ⅱでは、1 年次後期から年次をまたいで 1 年間かけて地域を題材に課題の認識と解決策を目指してグループ探究に取り組みます。地元行政や商工会、地域の方から地域課題を提供いただき、参考にしながら生徒がテーマを設定します。課題によっては先輩から引き継ぐものもあります。行動することから気づきを得て、探究サイクルを回していきます。

総合的な探究の時間「閑谷學」		
令和 3 年度 2 年次 地域探究(グループ探究) テーマ一覧		
ゼミ(分野)	チーム(テーマ)	講師
健康	①小学生の心身の健康をUP！しよう。	今田早美子氏（本荘児童クラブ主任指導員）
	②患者と高齢者・障がい者が幸せに暮らすために、今 自分たちにできること。	大森雅勝氏（有限会社ビッグモリーズ代表取締役）
	③スポーツdeサイエンスらぼ～気軽に誰でもスポーツ(運動)ができるコミュニティを立ち上げよう！	和田広子氏（公益財団法人福武教育文化振興財団）
教育	①小中学生に論語を広めよう！	山本真氏（元和気町地域おこし協力隊）
	②和気閑谷高校の魅力を発信しよう(全国募集に生かそう)	香山真一氏（岡山県青少年教育センター閑谷学校所長）
	③国際交流のプロデューサーになろう！	本校教頭
歴史・文化	①大國家の保存修復作業に参加しながら活用方法を考える。	吉岡香織氏（和気町教育委員会学校教育課/地域おこし協力隊）
	②プロジェクションマッピングを使って、何ができるか考える。	森元純一氏（和気町教育委員会社会教育課）
	③Riverside art プロジェクト～川沿いにあたたかな居場所づくりを。	有正典之氏（有正建設一級建築士事務所一級建築士）
ビジネス	①備前焼を盛り上げる方法を考え、実施する。	芥川英祐氏（新東住建工業株式会社建築技術者（番匠））
	②梅村さんをカフェにしよう！	江森真矢子氏（本校カリキュラム開発等専門家）
	③具体的な観光プランを考えて、実践しよう。	松穂重花音氏（和気町地域おこし協力隊）
自然科学	①校内のビオトープを発展させ、活用しよう。	森敏彰氏（宝山窯備前焼作家）
	②自然保護センターに地元の中高生を呼ぼう！	梅村竜矢氏（本校カリキュラム開発等専門家）
	③使われていない放棄地を何かに生かそう！	下島誠氏（ワケベル代表）

これは昨年度の 2 年次生のグループ探究のテーマと関わっていただいた外部講師の一覧です。5 分野 15 のテーマに分かれて活動しています。設定したテーマに関わる地元の方や専門家など関係者に協力を依頼し、都合のつくときに随時関わっていただくようにしています。

総合的な探究の時間「閑谷學」	
単元Ⅲ「未来探究」（2 年後期～3 年前期） 個人の探究活動	
“自らの進路やつくりたい未来を構想し実現するための探究活動を行う”	
・これまでの学習経験を個人の問題意識に沿って発展させる。 ・自らの関心と社会・地域の課題とをつないだ問いを立てる。 ※問いの設定が重要 自己や社会のより良い未来をつくるための探究へ SDGs の視点、専門分野の大学等への協力を依頼、課題解決という視点で意識化 ・ミニ発表会を繰り返すことで、目的意識を高め、振り返りによる整理につなげる。探究サイクルを 3 回まわす。	
【テーマ例】	
・音楽による地域活性化 ・優しい機械とは ・弟の不登校 脱出大作戦 ・新しい生活様式のための香りの研究 ・言語聴覚士の探究から「障害」に対する考え方と知的障害者の接し方を考える ・普通って何だろう？～生きづらさがなくなる世界へ、自分のものさしの壊し方～	



2年次後期から3年次前期にかけての単元Ⅲでは、個人での探究活動を行います。自分の興味・関心と地域や社会の課題をつないだ問いを設定できるよう学習活動を取り入れ、SDGsの視点から課題を調べ、解決する方法を考えます。下にある探究テーマの例は、自己や社会をより良くするための方向性を示すものといえます。探究活動を通して、自分の将来の在り方、生き方を考え、進路やキャリアを探究し、進路の目標を生徒は固めていきます。

総合的な探究の時間「閑谷學」

○探究学習発表会（7月）

- ・全校生徒、地域の方などが参加。生徒実行委員中心の企画・運営。
- ・2・3年次生は、身に付けてきた力を活用し、探究学習の内容と成果を発表。
- ・3年次生は、個人探究を通して、自分の夢や希望を具体的に述べる機会でもあり、2年次生は、グループ探究として、地域課題に取り組んだ成果や課題を発表し、地域社会にかかわる意識を伸長し、現在及び将来の学習につなげる機会。
- ・1年次生は、2・3年次生をロールモデルとして、自分たちの学びの見通しと目標を持つ。



単元Ⅳ「卒業論文」（3年後期）

個人探究を論文形式、2,000字以上にまとめる。

19

例年7月には全校で探究学習発表会を開催し、取り組んできた内容を発表します。新型コロナウイルスにより、ここ2年間はオンラインも組み入れていますが、地域の方や大学教員などを招いて、各教室での発表や代表生徒による全体での発表、相互評価、講評などを行っています。全員に発表の機会を持たせるようにしています。まとめ、説明する力を伸ばして、人前で話すことができなかった生徒が自信を付ける上でも大切な機会となっています。

そして、3年次最後の単元Ⅳでは、個人探究で取り組んできたことを2,000字以上の論文形式にまとめます。

総合的な探究の時間「閑谷學」

【指導と評価】

○運営・指導体制

- ・「探究学習委員会」を設置（支援職員を含め、担当者7名が週1回ミーティング）
- ・指導は全教員で関わる、基本は年次団ごと
5分野のゼミで、グループ・個別テーマ決定への助言、一人一人に合わせた助言
教員だけでは、細かくサポートするのが難しい
- ・和気町の学校支援職員（地域おこし協力隊）2名がコーディネート
- ・連携先 地域の行政や商工会議所・商工会、事業所、大学等



○評価場面とその方法

- ・ポートフォリオ評価 毎回の取り組み状況、振り返りシート、レポートなど成果物
- ・毎時の活動の振り返りをシートに入力
- ・いかに資質や能力及び態度を伸ばすことが出来たか、変化や目標等を自分の言葉で語れるか

20

閑谷學の運営・指導体制についてですが、校内に探究学習委員会を置き、和気町から派遣された支援職員も加わり、週に1回ミーティングを行います。探究活動には全教員が関わりますが、地域など外部との調整、運営には支援職員が中心となって動いてもらいます。評価については毎時間の活動の振り返りを入力し、レポートなどの成果物、取り組みの過程や発表の様子などを基に行います。

教育課程外の活動

【ねらい】 体験活動を通じた主体性や協調性、貢献意識等の伸長、探究活動の深化など

○ボランティア活動（社会貢献活動）

活動ごとのポイント取得と校内表彰による奨励、小学校での「学童保育ボランティア」、中学校での「放課後学習支援」、旧閑谷学校ボランティアガイドなど

○部活動 硬式野球部での障害者野球チームとの交流、障害者用グラブ作り

和気町と英語研究部の共催「イングリッシュ・フェス」による交流機会の創出

○様々なコンテストや発表会への積極的な参加

○地域行事や会議への参画 和気駅前イルミネーション製作、「多様な主体による協働会議」、和気町の第2次和気町総合計画の高校生ワークショップへの参加（R2）など



中学校での放課後学習支援



イルミネーション製作



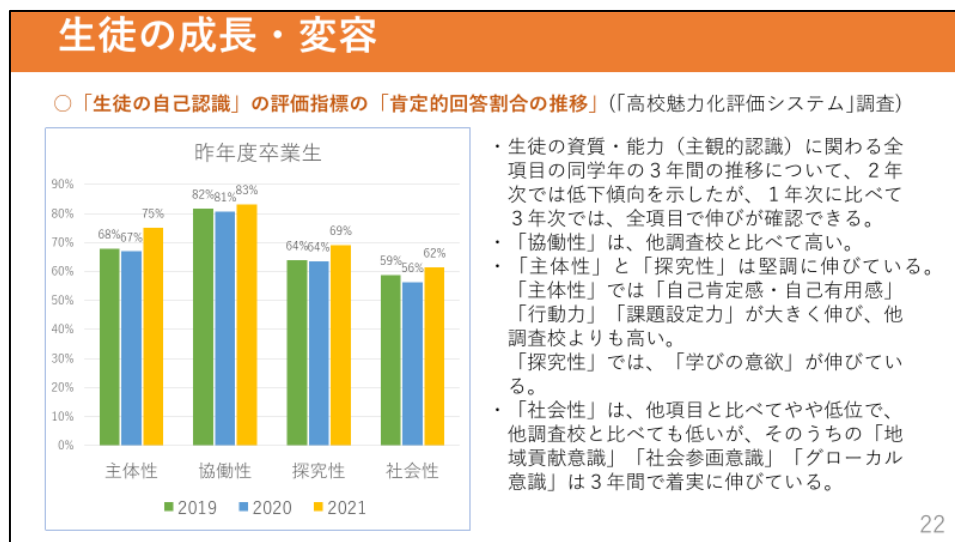
多様な主体による協働会議



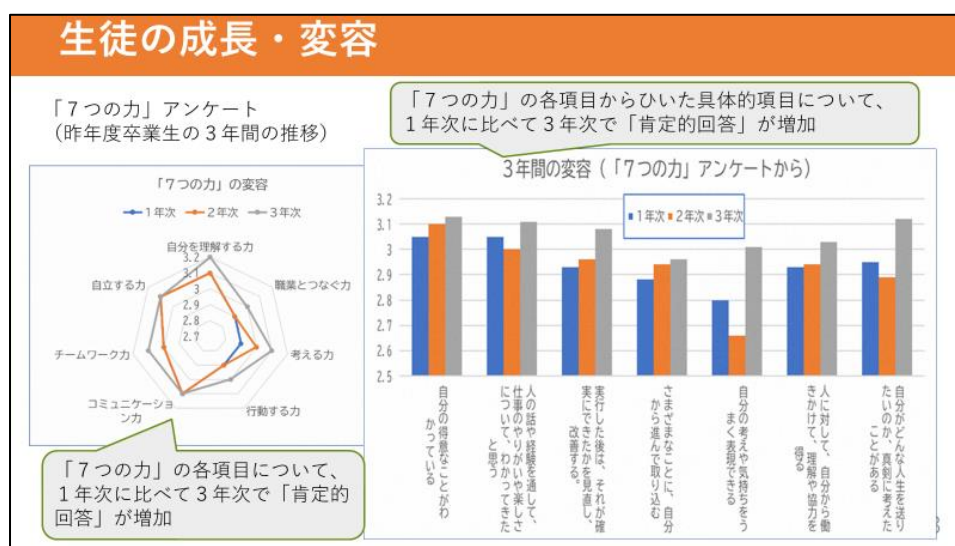
和気町総合計画WS参加

21

さらに、これは教育課程外の活動を示していますが、生徒の主体性や協調性、社会への貢献意識、そして、個人個人の探究活動を深める機会としても重視しています。この2年間は新型コロナの影響で地域行事やボランティア活動での制約がありましたが、学校と地域双方から生徒が参加、活躍できるさまざまな機会を紹介し、挑戦するよう背中を押しています。本校を選ぶ理由に、こうした教育課程外の活動ができることを魅力として挙げる生徒もいます。



最後に、こうした取り組みを通しての生徒の成長・変容ですが、文部科学省事業の下での「高校魅力化評価システム」の調査からは生徒の資質・能力に関わる全項目の同学年の3年間の推移について、1年次に比べて3年次では全項目で伸びが確認できます。協働性は、他の調査校と比べて高いとのこと。主体性と探究性は堅調に伸びています。主体性では自己肯定感や自己有用感、行動力、課題設定力が大きく伸び、他の調査校よりも高いとの結果を得ています。探究性では学びの意欲が伸びていることが成果といえます。一番右の社会性は他の項目と比べてやや低く、他の調査校と比べても低いという結果になっていますが、そのうちの地域貢献意識や社会参画意識、グローバル意識は3年間で伸びてきています。



もう1点、本校が卒業時に身に付けさせたい資質・能力として掲げる7つの力について

での調査です。全体の傾向として、3年次ではいずれの項目でも成長実感を得ており、特に考える力の伸びが大きいと言えます。「自分の考えや気持ちをうまく表現できる」や「自分がどのような人生を送りたいのか真剣に考えたことがある」が伸びています。教員の側でも「自分の言葉で、思いや考えを話すこと、伝えることのできる生徒が増えている」という実感、そういった声を聞くことができます。

以上、取り組みの概要を説明いたしました。ご清聴ありがとうございました。

なお、今日は実際の指導に当たっている教員もそばにいます。質問がありましたらご対応させていただきたいと思います。ありがとうございます。

【小野・司会】 藤岡先生、多岐にわたる取り組みのご紹介ありがとうございました。1点、Q&Aで質問を頂いています。「パフォーマンス課題の取り組みなどの評価につきまして教えていただきましたが、ペーパーテストの工夫につきましても少し教えていただけたら幸いです」ということで、もし共有いただける情報がありましたらお願いします。

【藤岡】 今どの学校でもそうであると思いますが、単に知識、理解を問うではなくて、思考力、判断力や表現力を問うようにということを全教員で確認しながら、このたび最初の中間考査がありましたが、そういったところのペーパーテストに取り入れるようにということを全体で確認しています。具体的な例ということは今お示しできませんが、そのような了解の下で行っております。

【小野・司会】 ありがとうございました。もう一つご質問を頂いていますが、よろしければ先に進ませていただきまして、後ほどもしお時間があるときに先生ご確認いただきまして、Q&Aにもご回答頂けたらと思います。改めて藤岡先生、ありがとうございました。

■

全体会 1（センターセミナー）◎ 報告 3

三重県立宇治山田商業高等学校の事例

■北尾 健（三重県立宇治山田商業高等学校教頭）

三重県立宇治山田商業高等学校の北尾と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

三重県立宇治山田商業高等学校の事例

報告：北尾 健

令和 4 年度
全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会
全体会 1

では、本校の取り組みについて報告させていただきます。本校は地域との協働による高等学校教育改革推進事業ということで、グルーカル型の授業も 3 年間やってまいりました。その報告になります。

「グルーカル型」 三重県立宇治山田商業高等学校

1 研究概要

「観光都市 with SDGs」～伊勢志摩！未来創造プロジェクト～

- 1 目的：持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成
- 2 目標：「地球市民力」と「未来創造力」を育成するカリキュラム開発
- 3 取組概要

地球市民力の育成

グローバルな視野をもち、持続可能な社会を構築する力
（課題解決力、「未来の想像力」、「地域への貢献力」、「学習力」）

1. SDGs 推進プログラム開発

- ① SDGs 基礎プログラム（教科横断的な視点）
 - ◆ 諸国の現状（経済・社会開発）と持続可能な社会（課題）の両立や不平等（格差）の是正等について、様々な教科・科目で系統的に学習
- ② SDGs 探究プログラム
 - ◆ 科目「課題研究」において、グローバルカンパニーでのインターンシップ、教材を活用した商品開発等を実践
- ③ SDGs 語学向上プログラム
 - ◆ 科目「グローバル・コミュニケーション」において、地産地消の課題について、ディスカッションやディベートを実施

未来創造力の育成

「地域・世界（人・モノ・サービス）をつなぐ力」
（企画力、課題解決力、実践力、発信力、創造力）

2. 観光都市を描くプログラム開発

- ① 伊勢志摩 PR プログラム
 - ◆ 科目「課題研究」で、コンソーシアムと連携し、SDGs の視点から語った課題解決型学習の実施
 - ◆ みえグルーカル学生大使として県内の観光地での英語ガイドを実施
- ② 国際交流プログラム
 - ◆ オーストラリア姉妹校との連携を強化（Web 会議システム活用、長期留学生受け入れ）
 - ◆ SDGs や観光についての海外研修プログラム作成

効果の測定と評価方法

- ◆ GROW
- ◆ パワーアセス評価
- ◆ 生徒アンケート
- ◆ コンソーシアム会議等での評価等

数値目標

- ◆ 英語の語学化プラン作成率：3年/3年間
- ◆ 海外と交流を行った回数：3回/年
- ◆ ディベート・ディスカッション等の研修履修作成：5年/3年間
- ◆ 国際的なイベント等への参加回数：3回/年 等

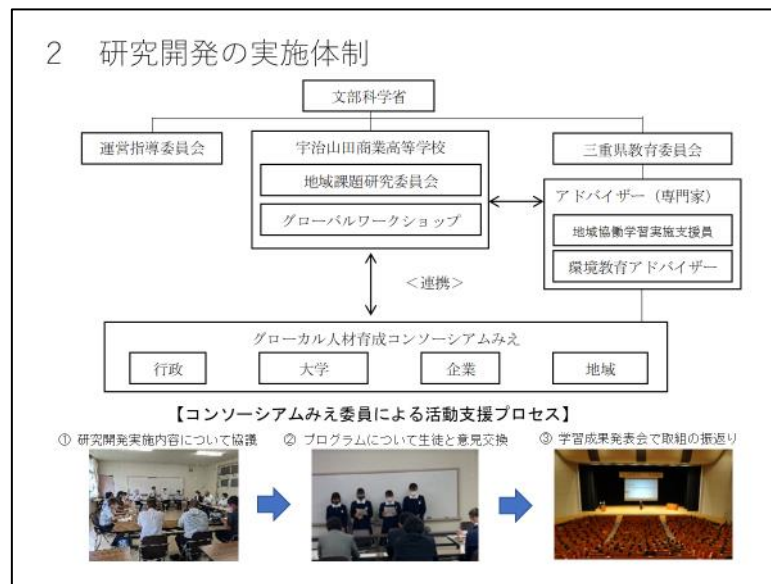
連携協力

- ◆ 宇治山田大学文学部コミュニケーション学科
- ◆ 地方自治体（伊勢市等）
- ◆ JIA伊勢、伊勢市商店街 等
- ◆ センパルク・カレッジ（オーストラリア姉妹校）

少し本校の紹介をさせていただきます。本校は三重県の伊勢市にある学校で、商業科、情報処理科、国際科の3つの学科があります。全校生徒は512名、3学年が5クラス、2学年、1学年が1クラス減って4クラスの規模で、明治41年創立の、今年で114年目を迎える伝統のある商業高校です。この伊勢志摩地域なのですが、伊勢神宮をはじめ、伊勢志摩国立公園や、歴史と風光明媚（めいび）で豊かな自然や食材に恵まれている地域です。その一方で、人口減少、少子高齢化などの課題を抱えている地域でもあります。

そこで、本校としましては、「観光都市 with SDGs」～伊勢志摩！未来創造プロジェクト～というテーマで、持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成するということを目的として、大きく2つ、地球市民力の育成と未来創造力の育成というカリキュラムの開発を実施してまいりました。具体的なプログラムとしましては、地球市民力の育成としまして、SDGsをテーマにした推進プログラムとなっています。SDGs推進プログラムのうち、1番：基礎プログラム、2番：探究プログラム、3番：語学向上プログラムというプログラムの実践をしてきました。

また、未来創造力の育成ということで、こちらは2つのプログラムになります。未来都市を描くプログラムは伊勢志摩PRプログラムと、国際交流プログラムという構成になっています。どのプログラムにおいても、地域の方々に協力いただきまして、小学校、中学校、企業の方々、そして行政の方々と協力しながら授業展開をしてまいりました。



この研究開発の実施体制についてはこちらのとおりになります。校内では地域課題研究委員会というのを設けまして、週に1時間、時間割の中に組み込んで、10名程度の教員で構成して、開催してきました。プログラムの進捗や情報共有をしたり、コロナ禍等の日々の状況の変化によって計画や企画変更の対応、そういったものを協議して進めてきました。また、図の下に「グローバル人材育成コンソーシアムみえ」というのがありますが、地域の方々、有識者の方々と連携しながら、地域課題研究委員会の委員による活動支援をやってまいりました。

そのプロセスとしましては、下の画像になりますが、年に3回実施しています。まず、年度の初めに、研究開発実施内容についての協議を行い、年度の半ばにプログラムについて生徒と意見交換や進捗報告を行います。さらに、年度のまとめとしまして、学習成果発表会で取り組みの振り返りをして、全教職員、そして全生徒と学習の成果を共有しています。そして、年度ごとに出た課題などは次年度に改善できるように体制の下、つなげてきました。

3 実践内容

【SDGs推進プログラムの開発・実践】

① SDGs基礎プログラム(教科横断的な視点)

各教科・科目でSDGsに関連する知識を学ぶ

(授業例)

学年	科目	単元	SDGs目標
1年	国語総合	評論「未来をつくる創造力」	①②③④
	生物基礎	生物の多様性と共通性	②③④⑤
	保健	私たちの健康のすがた	③④⑤⑥
2年	現代文	評論「新しい地球感」	①②③④
	コミュニケーション講座	From Landmines to Herbs	①②③④
	家庭総合	青年期と家族	③④⑤⑥
3年	ビジネス経済の基	サービス経済化とサービス産業	①②③④
	地理	堆積平野	②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩
	財務会計	会計基準の国際的統合	⑤⑥



環境教育アドバイザーや企業のSDGs担当者による講演会の実施



次に、それぞれのプログラムで実践してきた内容について報告させていただきます。まず、SDGs推進プログラムの1つ目でありますSDGs基礎プログラムについてです。ここでは各教科でSDGsに関連する知識を学ぶプログラムを実践しました。具体的には普段の授業の中で全ての教科、SDGsに関連する授業を年に1回以上実施してまいりました。どの単元でどのSDGsの目標に関連する授業をしたかというのを各教科の担当者から提出してもらい、集約して表にまとめ、全体で共有しました。延べ91の単元で取り上げたという結果になっています。

幾つか紹介させていただきますが、まず1学年の国語総合「未来をつくる創造力」につきましては、どのような内容だったかといいますと、「未来をつくる創造力」という論を使ってまず学習してから、持続可能な未来をつくるために私たちに必要なことは何かというのを考える授業展開です。SDGsの目標の番号でいいますと、例えば11番の「住み続けられるまちづくりを」というものなどを中心に学習していました。他には、1年生の保健ですが、「私たちの健康のすがた」という単元で、健康の姿を正しく理解していく上で、わが国の健康水準や社会経済の発展から、栄養状態や生活環境の衛生状態の改善、生活の質などを理解することによって学習を進めてきました。

グループづくりからディスカッションまで取り組んだということです。こちらについては、「働きがいも経済成長も」という8番の目標、「安全な水とトイレを世界中に」、そして、「すべての人に健康と福祉を」というテーマで取り上げています。

もう一つだけ紹介させていただきます。商業の科目でビジネス経済応用という科目があるのですが、こちらは2年生で実施しました。「サービス経済化とサービス産業」という単元で、経済社会の変化や人々のライフスタイルの変化に伴う新しいサービスが登場する現状の説明において、ニーズの変化に的確に対応することが大切である、社会のニーズの中にはSDGsの観点が必要であるということを話題に授業展開をしたということになります。SDGsの目標でいいますと12番の「つくる責任やつかう責任」、そして、9番の「産業と技術革新の基盤をつくろう」というテーマを取り上げてきました。そのような形で全ての教科で授業をやってもらったということです。それをするによって、生徒へのSDGsというテーマの浸透につながったかと思います。

また、年に1回、地元でSDGsに取り組む企業の方をお招きしまして、SDGsの講演会を実施しました。1年生から3年生の生徒を1つのグループに混ざるように形成して、ワークショップやグループワークをすることで、学びの進度の違う学年の生徒同士が交流します。意識の向上や知識の定着を図ったり、講師との意見交換やフィードバックによって、気付きや学びの発展につなげていきました。

また、教員向けの研修も行っています。SDGsのカードゲームを用いたもので、外部から公認のファシリテーターの方をお呼びして、基本について学んだり、学校行事や進路指導にもSDGsを取り入れてきました。文化祭や進路指導であれば小論文指導のテーマにSDGsに関連したものを取り上げたという取り組みです。

3 実践内容

【SDGs推進プログラムの開発・実践】

② SDGs探究プログラム

科目「課題研究」において、1・2年次で学習したSDGsに関する知識を活用し、より探究的な学びを実践する。

「日本経済学」



「地域ボランティア」



「ビジネスプラン」



「財務分析」



「ネットショップ」



「商品開発」



「地域活性化」



「未来の教室」



「観光とビジネス」



次に、探究プログラムですが、商業科目であります課題研究において、1, 2年次で学習したSDGsに関する知識を活用して、より探究的な学びを学習しました。課題研究では、3年生が3つの学科の枠を超えて、今、映っています9つのテーマに分かれて活動を行いました。コロナ禍ということもありますが、外部の方にたくさん協力いただいて、時にはリモートで講義をいただいたり、協力していただいたり、そういったことを行っていました。ほぼ全ての講座で外部の方に関わっていただきながら、探究的な学びを実践

していきました。

3 実践内容

【SDGs推進プログラムの開発・実践】

③ SDGs語学力向上プログラム

英語のみを使用する環境を創出するとともに、国際交流活動の充実を図ることで、英語コミュニケーション能力の向上及び異文化理解の促進を図る

学校設定科目
「グローバル・コミュニケーション」
英語でプレゼンテーション

英語セミナー
使用言語は英語のみで1日生活

各種英語スピーチコンテストに出場

続いて、3つ目になりますが、語学力向上プログラムです。こちらは英語のみを使用する環境をつくり出して、国際交流活動の充実を図ることで英語コミュニケーション能力の向上や異文化の促進を図りました。具体的には、これは学校設定科目になるのですが、グローバル・コミュニケーションという科目を設定しています。国際科のみならず、商業科や情報処理科でも1年生のときに設定している科目でして、こちらでSDGsに関する調べ学習や英語でのプレゼンテーションをしまいいりました。

また、国際科については、1年生、2年生、3年生、それぞれ年に1回英語セミナーというのを開いていまして、英語のみで1日他校のALTの協力をいただきながら、1日英語だけで生活をするという取り組みです。また、各種英語のスピーチコンテストにも出場をしています。

3 実践内容

【観光都市を描くプログラムの開発・実践】

① 伊勢志摩PRプログラム

課題研究「観光とビジネス」

観光について学習

グリーンツーリズム体験

スローツーリズム

(株)JTに観光プランを提案

みえグローバル学生大使活動

外国クルーズ船観光客への通訳ボランティア

小学校で外国語活動ボランティア

Instagramで三重県をPR

続いて、2つ目のプログラム開発であります「観光都市を描くプログラム」の1つ目、伊勢志摩 PR プログラムとしては、課題研究の観光とビジネスという講座、こちらでは観光について学習しています。鳥羽市の答志島という離島に行ってグリーンツーリズムを体験したり、それらの学びと1、2年次から学んできたSDGsやビジネスの視点も生かしながら、地元地域における観光プランを作成しています。

作成したプランを旅行会社であります株式会社 JTB さんをお願いして、提案するという、そのような取り組みもしてきました。また、観光甲子園というものにも出ていまして、準決勝まで進出したという成果があります。また、右側になります、本校生徒は三重県のみえグローバル学生大使としても活動しています。こちらは国際交流や国際貢献などの国際的活動を継続実施する学生が県から委嘱されているというものになります。鳥羽市へ外国からのクルーズ船が来たときに、観光客への通訳としてボランティアをしました。2人1組で6人ぐらいの外国人を連れながら、鳥羽市の観光地を案内、全部で20名ほどが参加したというところでした。余談ではありますが、クルーズ船で来られる外国人の方はお金持ちの方が多くて、チップとして1万円を渡されそうになったと。それを英語で断るのがすごく大変だったということも聞いています。また、Instagramなどで英語で三重県をPRしたり、近隣の小学校へ出向いて外国語の活動ボランティアをしたりしています。

3 実践内容

【観光都市を描くプログラムの開発・実践】

② 国際交流プログラム

◎オーストラリア姉妹校との交流



短期留学受入(2019年9月)



科目「家庭基礎」にて(2019年9月)



オンラインでの交流(2020年以降)

◎アジア高校生架け橋プロジェクト フィリピンからの留学生受入

※ 新型コロナウイルス感染症拡大のため中止となったもの

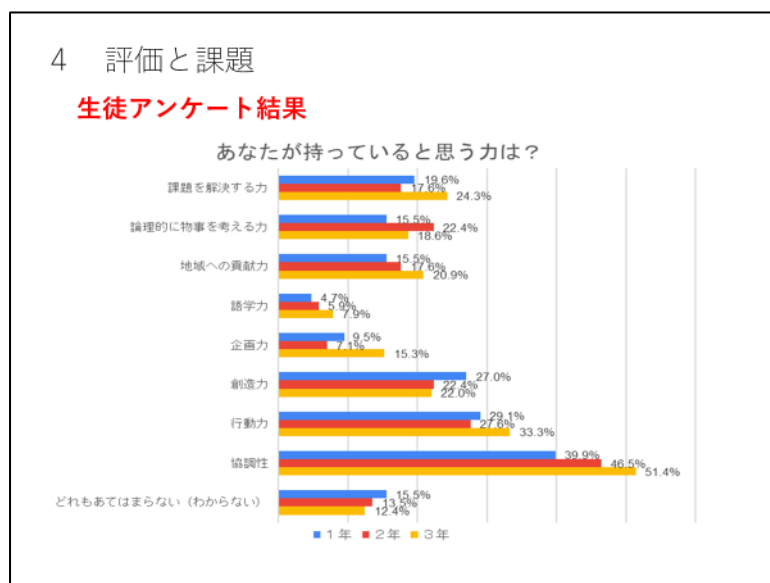
- ・ 皇学館大学留学生との交流
- ・ 羅東商業高校生(台湾)との交流
- ・ スウェーデン研修プログラム
- ・ マレーシア研修プログラム

国内研修で実施

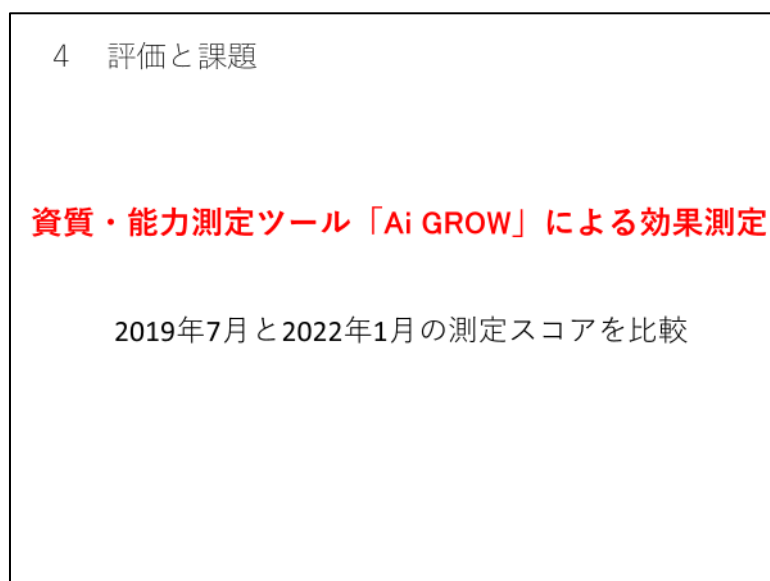


2つ目ですが、国際交流プログラムになります。オーストラリアの姉妹校でありますモンバルク・カレッジ、こちらはもう20年以上の付き合いになりますが、交流をしています。通常であれば、9月に受け入れて3月に本校の生徒がオーストラリアへ行くのですが、ここ2年はコロナ禍のためオンラインでの交流というところまでとどまっています。また、昨年度については、アジア高校生懸け橋プロジェクトというもので、フィリピンからの留学生を受け入れて、10月下旬から3月まで、1年生の国際科と一緒に学んでいました。1年生にとっては貴重な経験ができたのではないかなと思います。

そして、本事業につきまして、スウェーデンでの研修プログラムにおいて SDGs の先進的な取り組みを学んだり、マレーシアの研修プログラムで観光資源を活用したエコツアーやグリーンツーリズムを学ぶ予定ではあったのですが、コロナ禍のため、それに代えて国内での研修に切り替えて実施をしました。宮城県や青森県、鹿児島県、兵庫県へそれぞれ研修班がお世話になりました。高校や大学さんにも協力をいただきました。本当にありがとうございました。



最後に、評価と課題についてですが、こちらは昨年の SDGs 講演会の後にアンケートを取ったものになります。7月の SDGs 講演会の後で取ったものですが、協調性が最も多く、次いで行動力が高いという結果になっています。あくまでも自己評価によるものですので、客観的に見ても、もっと数値が伸びていいのかなと感じています。特に、語学力の自己評価が低いのですが、こちらは自分よりもっとできる人がいるからという控えめな回答でこのような結果になっているという部分もあるのではないかなと推察しています。



ですので、客観的な資質向上の測定が必要であるという観点から、各教育活動の教育活動を可視化、定量化するツールとして、Institution for a Global Society 株式会社、IGSさんと呼ばせてもらっていますが、「Ai GROW」というものを用いて、資質や能力をAIを用いて分析しています。これは本事業において、2019年度入学生を対象に入学年次から調査を継続してきました。3年間の受検結果を比較することによって各種プログラムの効果を検証しています。生徒自身も客観的にどのような力が伸びているか、どのようなことができるようになったかということを見ることで自信につなげていけたツールとなっています。

分野	コンピテンシー	2019年7月	2022年1月	差	有意確率（両側）
認知系	課題設定	0.556	0.591	0.03**	0.06
	論理的思考	0.553	0.600	0.05**	0.12
	読解力	0.570	0.602	0.03**	0.00
	創造性	0.503	0.600	0.10**	0.00
自己系	個人的実行力	0.628	0.583	-0.05**	0.03
	自己効力	0.554	0.606	0.05**	0.03
	耐性	0.584	0.593	0.01	0.62
	決断力	0.586	0.573	-0.01	0.00
他者系	表現力	0.544	0.548	0.00	0.01
	共感・傾聴力	0.604	0.580	-0.02	0.03
	柔軟性	0.564	0.593	0.03*	0.04
	影響力の行使	0.476	0.583	0.11**	0.00
コミュニティ系	地球市民	0.513	0.577	0.06**	0.40
	主体性	0.607	0.578	-0.03*	0.00
	協働性	0.515	0.594	0.08**	0.00
	リーダーシップ	0.561	0.586	0.02*	0.00
その他	イノベーション	0.560	0.592	0.03*	0.03
	批判的思考力	0.557	0.575	0.02	0.00
	創造的思考力	0.554	0.590	0.04**	0.00
	協働的思考力	0.594	0.587	-0.01	0.13
地球市民力	課題解決力	0.556	0.591	0.03**	0.06
	論理的思考力	0.553	0.600	0.05**	0.12
	地域への貢献力	0.513	0.577	0.06**	0.40
	企画力	0.560	0.592	0.03**	0.03
未来創造力	調整力	0.515	0.594	0.08**	0.00
	実践力	0.628	0.583	-0.05**	0.03
	突破力	0.586	0.573	-0.01	0.00
	創造力	0.503	0.600	0.10**	0.00

初回と最終のものを比較したスコアです。少し細かくて見にくいのですが、全体の7割において、行動特性といわれるコンピテンシーにおいて成長の優位性が見られたという結果になります。右から2列目の数値、2つの星印が付いているものが優位性が認められたものになります。本事業のキーコンピテンシーとして、実践力と突破力以外で優位性が認められています。課題解決力や企画力には特に大きな成長が認められたという結果です。一方で、実践力については3年間通しての課題となったという結果が出ています。

5 今後の展望

- ・SDGsの視点による教育活動の継続
- ・「総合的な探究の時間」を2年次から導入
継続的な探究活動の展開（令和4年度入学生より）
- ・地域社会と連携した教育実践の更新
コンソーシアム委員等による継続支援



持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成

今後の展望ですが、SDGsの視点による教育活動を継続していきたいと思っています。今は3年生の課題研究ですが、総合的な探究の時間を2年次から導入することになりました。継続的な探究活動を展開することで、深まった探究活動になると考えています。この課題となっていることをどう改善していくかというのを教員同士で情報共有・認識をしながら、指導力のスキルアップにもつなげていければなと思っています。

また、コンソーシアムの委員の方や地域の方による継続支援を受けながら、教育活動を行っていく予定です。持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成していきたいと考えています。

以上で報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

【小野・司会】 北尾先生、発表ありがとうございました。地域との連携ということで、各教科の学びとSDGsというテーマの往還をするというさまざまな取り組みをご紹介いただきましてありがとうございます。今の時点ではQ&Aにはご質問が来ていないようですが、もし良ければ私から1点ご質問させてください。

非常に教科横断的な学習ということで、ほぼあらゆる教科、専門教科から共通教科の先生方を巻き込んでいるというところなのですが、当然新しくいらっしゃる先生もたくさんいらっしゃると思います。どうやって学校全体のイメージに、新しく来た先生が同じ方向を向いてやっていけるように取り組みをされていらっしゃるのかというところで、何か共有できることがあったらお願いします。

【北尾】 最初にも言いましたとおり、委員会を構成していきまして、週に1回会議を開いています。また、学習指導委員会という各教科の主任の先生に出てもらって委員会を通じながら、本校としての取り組み、どこに重点を置いているかというのを理解してもらいながら、共通理解で展開していってもらっているというところです。

【小野・司会】 ありがとうございます。あと1点、よろしければこの魅力的な取り組み、例えば地元の中学校などから見るとどのような評価を得ているかというところ、もし何か感触的なものがありましたらお願いします。

【北尾】 そうですね。実際に一昨年度は定員が割れた学科があります。なかなかPRがうまくいっていなかった部分もあるのですが、昨年度は全ての学科において中学校に対して本校の魅力であるこういった取り組みをPRし続けました。昨年度は非常に倍率の高い状況で、たくさんの方に受験していただきましたので、PR活動としてはうまくいっているのかなと思います。ただ、地元の有識者の方からのアドバイスとしましては、もっともっと小学校や中学校にSDGsのことを学んだ生徒が出前授業に行ってもらったほうがいいと。そういった年代から地球や世界にとって大事なものがこういったものだという意識付けができるのではないかと。宇治山田商業としてのPRができるのではないかとご意見を頂いています。

【小野・司会】 ありがとうございました。今日の機会がもしPRの一助になれば幸いに存じます。■

全体会 1（センターセミナー）◎ 報告 4

東京工業大学の教養教育改革の事例

■上田 紀行（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授）

どうぞよろしくお願いします。東京工業大学の上田です。今日は素晴らしい高校の先生方のご発表を3つお聞きしまして、大学はどう応えるかという、応えるほうが私の東工大だけしかないという非常に責任が重いというか、荷が重過ぎて応えられるわけないでしょうという感じでスタートしています。今のお三方の先生方のやはりパッションあふれるお話を伺って、私たちも東工大の教育改革をやるときに、熱いパッションでは負けないというか、この大学を本当にいいものにしていく、そして、この大学だけではなくて、私たちの大学が変わっていくことで、日本の大学を見る目も変わっていき、そして、そこから輩出させていく若い人たちが日本を変え、世界を変えていくという大きな志の下にやってまいりました。ということで、パッションだけでは負けないぞという心意気で頑張ってやっていきたいと思います。



これが私たちのパンフレットで、このリベラルアーツ研究教育院を東工大で2016年に作りしました。その前に、2012年にリベラルアーツセンターという前身のセンターをつくりまして、そこにジャーナリストの池上彰なども赴任して、池上彰などとMITやハーバード、ケンブリッジ、オックスフォード、カルテック・カリフォルニア工科大学、あとはアメリカのリベラルアーツ・カレッジなどを見にいくなどしながら案を練っていたところです。

2016年にリベラルアーツ研究教育院ができて、私は8年間ぐらい教育改革に携わって、

この3月まで院長をやっていました。うちのページやいろいろなものをチャットに貼っておきます。あと、『とがったリーダーを育てる—東工大リベラルアーツ教育10年の軌跡』（中公新書ラクレ）に教育改革のねらいやそのプロセスは全部書き込みましたので、そちらも参照していただければと思いますし、その他の関連図書などもチャットに貼っておきます。

パンフレットをばんと開くと「志」という文字が入っています。カラフルな「志」と書いてあるところがみそで、黒1色の志だと「この企業のために死になさい」「お国のためには死になさい」というような感じにもなってしまいますが、カラフルにすることで、一人一人が個性豊かな志を形成していった、その志を持っている人たちが切磋琢磨（せっさたくま）しながら高め合っていくというイメージです。もう1ページ開くと、うちのファカルティメンバーが出ています。そこを上を開くとページ自体が丸くなっていて、これが「えんたくん」といって、円い段ボールを4人組で膝に乗せて、段ボールの上に何か書きながら、アクティブラーニング、みんなで思ったことを言い合うという授業が多いので、このページも丸い形にしました。

さて、私はどのような人間かという、教育改革の専門家ではありません。おそらく私の著書で最も有名なのは、この『生きる意味』（岩波新書）という本なのではないかと思うのですが、私は文化人類学をやっている、この2005年に出版した『生きる意味』では、日本人は経済不況以上に生きる意味が貧しいのではないかということを行いました。私は、よきものを持っているにもかかわらず、それが発揮できない人や、もっともっとやれるにもかかわらずやれない状況に追い込まれているなど、そういう人を見ると援助したくなる、君はもっともっとできるよと言いたくなるような人間なのです。この『生きる意味』はちなみに、100以上の大学で入試問題に使っていただき、今日このシンポジウムにお招きいただいたのも何かのご縁を感じます。

にもかかわらず、私の実感としましては、入ってくる学生さんの生きる意味が年々貧しくなっていくということが教育改革に着手した一つの理由でもあります。私が東工大に着任したのが1996年になりますので、もう26年前なのですが、そのときの学生さんは「うわ。このような頭のいい学生さんたち、いるんか」と。ばんばん質問が来て、「先生、この前の授業で言っていることと、今回が矛盾してるんじゃないか。どちらが法則でどちらが例外なんだ」など、どんどん責められるような感じで、「いや、素晴らしいな」と思っていたのですが、それがそれ以後、どんどん質問の数が減っていきます。

あと、2000年代に新自由主義的な風潮が強まってからは、もう質問があっても評価方法の質問が多いです。学生さんがすごく評価を気にしてきます。あと、点数になるようなことをやらないと無駄ではないかという意識が強まってきます。

私も大学は理科系で入りました。途中であまりにも数学と物理ができないので文系に転じましたが。それで私は64歳で、あと2年で定年なのですが、私の学生の頃は理工系であっても例えば岩波新書を何冊か読んでいない、哲学や歴史を知らないというとばかにされる雰囲気がありました。

ところが、2000年代ぐらいからもう、本当に大学に入るためには受験科目だけをやっ

てくればいい、他の無駄科目をやればそれだけ時間の無駄だという意識が広がってきた。うちの大学の場合は数学と物理と化学と、あとは英語を少しやればいいという感じですね。これは理系だけではなくて、文系もそうです。今はどんどん受験科目を減らしていますので、そうすると、その科目だけに集中していくし、高校さんは文系と理系のクラスを早めに分けてしまうという。そうすると、それだけやってきた子が入ってきて、もちろん物理や数学などはお出来になるのですが、しかし、非常にまずいことが起きつつあることに気が付いてきました。当時、1996年から大学の大綱化などが行われてきて、教養部が解体していきます。「教養教育なんかいいから、もっと実践的にやれ」と。あとは「即戦力を出せ」、「専門教育をどんどんやれ」ということでやっていたわけなのですが、その子たちが結局のところ、即戦力にもならないというところがあります。あと、イノベーションが求められているのに全然イノベティブではないということです。

皆さんがおっしゃっているように、誰かが問いを与えればものすごくエレガントに解きます。「この問いを15分、30分でやりなさい」と言ったら、「はい」といい答えが出てきますが、その反面、自分で問いを発見することができない。この科学技術を全世界のどのような問題に今そこにぶつければ一番いいのか、この世界で一番問題になっていることは何なのか、そもそもあなたは世界の中で何を変えたいのという、そういう根本的に人生を支える問いというものがあまり出てこないわけです。

あと、評価を非常に気にしますので、例えば「レポートを書いてください」と言うと、「はい」と手が挙がって、「そのレポートの評価軸はどこでしょうか」と。私の頃はそのような恥ずかしいことは聞けなかったのですが、そういうことを平気で聞かれます。評価軸を教えてしまうと、その評価軸を狙ってほとんど同じようなレポートがどばっと出てきます。

私たちのリベラルアーツという言葉なのですが、教養教育と言わないで、この頃リベラルアーツと言うことが増えたのは、一つはやはり、昔の教養教育というのは旧帝大などで、教養部というのは専門の下でしょうというイメージがあるのも一つありますし、あと、教養教育というのはうんちくだけという感じもあるところもあります。

もう一つはリベラルアーツという言葉です。リベラル、アーツ、人間を自由にする技。リベラルが自由、アートが技です。人間を自由にする技という意味があります。ギリシャ・ローマ時代にソクラテスさんやプラトンさん、アリストテレスさんのような人たちは自由市民という人たちで、ひたすら自分の知性と感性を使い尽くして、良きこととは何か、あるいは本当に善や悪などはどういうものなのかなど、哲学に没頭しつつ、ポリスという共同体のリーダーでもあるわけです。

自由市民の下には奴隷という階級があって、奴隷は自分の知性や感性を使わなくてもよくて、ひたすら自由市民の言うことを着実に遂行する人たちが奴隷です。私はやはり現代社会というのは非常にわれわれが奴隷化しているシステム社会だと思っています。私は東工大で学部長や、今副学長をやっているのですが、副学長をやっているれば奴隷ではないかという奴隷のところもあって、ここに文科省の方もいらっしゃるが、もうどれだけ書類を書かされているか。このようなところで愚痴を言ってもしょうがありませんが。

学生に評価軸を教えた途端に、その評価を狙って同じようなレポートが出てくるとい
う、その学生たちは自由市民なのか奴隷なのか。たいへんよくお出来になる奴隷なのだが、
それは自由市民とは言えないのではないか。言論の自由がなくて、言いたいことを言っ
たら処刑されるという国があります。そういうところで誰もが同じことを言っているとい
うのは分かるのですが、言論の自由があるにもかかわらず「こういうことをしたら評価さ
れるよ」と言った途端に、同じことを書くというのは、そういった言論の自由がない国よ
りも恐ろしいことになっているのではないかと、そのような背景がありました。

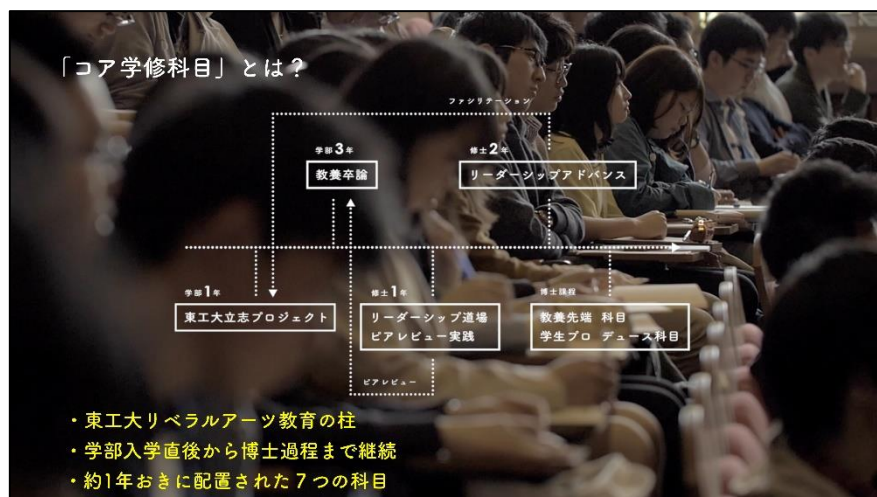
そして、これではいけないと。本当イノベティブに、あるいはもう先ほど来先生方が
おっしゃっているように、主体性や当事者性など、自分事として学問も捉えていくし、本
当に、世界を自分の手で変えていくという、そういった人たちを育成していかなければい
けないのではないかとということで、教育改革を進めていくという、志の教育に行ったわけ
です。



では具体的に、資料を共有しながら、私たちのストラクチャーをご覧になっていただ
きたいと思います。

そもそも東工大はかなりリベラルアーツ教育が盛んなところでして、昔から伊藤整や
宮城音弥、川喜田二郎、永井陽之助、江藤淳など、そうそうたる巨大な人がいました。
ところが、96年から2016年ぐらいまで重点化されていったということです。

でも、リベラルアーツ研究教育院を創設して、それ以後30人ぐらい人事をやったので
すが、元からおられる先生方も含めて、ここに1人1冊ずつの本の表紙が挙がっていま
すが、とにかく社会的発信をして、このような本を出したりして、書店に行ったら本が並
んでいるような方にもたくさん来ていただきました。華のある人、発信力のある人の多い
ファカルティです。



コア学修科目というものが、だいたい2年に1回あります。学部1年では全員必修の東工大立志プロジェクト、学部3年では5,000字から10,000字ぐらいの教養卒論をこちらも1,100人の3年生全員が書きます。修士1年のリーダーシップ道場は必修ではありませんので、1,500人の修士1年生の半分ぐらいが履修する感じです。その後のピアレビュー実践の履修者がピアレビューアとして学士3年の教養卒論のクラスにアドバイザーとして入り、修士2年のリーダーシップアドバンスというクラスの履修者が学部1年の東工大立志プロジェクトにファシリテーターとして入っていきます。加えて、今回の教育改革では、博士課程までリベラルアーツの必修科目を延伸しました。

コア学修科目の特徴

1

志
vision

- ・自分はどうな人間か？
- ・よりよい社会とは何か？
- ・将来何をなしたいか？

答えのない問いに向き合い、ものごとを批判的・創造的にとらえる力を養います。
どんな社会を実現したいのか。それに対して自分はいかなる貢献ができるのか。
リベラルアーツ教育を通して立てた「志」を実現するのが、理工系の専門的な知識です。

東工大のリベラルアーツ教育の大きなテーマは志、自分はどのような人間なのか、より良い社会とはいかなるものなのか、将来何をなしたいのか。答えのない問いに向かい合うということはとても重要で、よくできる学生さんたちはすべてのことに最適解があると信じてきていますので、答えは1つ、正解だけあるわけではないということを言っています。どのような社会を実現したいのか、どのような貢献ができるのかということを強調しています。



次ですが、主体的な学びのストーリー。どのような科目を選択して、どのような学びを積み重ねればいいのか。自分の学びを、自分をデザインする、主体性、一生学び続ける姿勢を身につけるということです。本当お恥ずかしいながらも、私は大学に入って1年目は先輩から回ってきた丸バツ三角の表を見ながら、勉強しなくても「優」だけは取れるという、これがお得科目という科目を取っていましたが、そのようなことをやっても実力が身につくこともなく、社会に出て学問が役に立つわけがありません。そして、3年のときに、今までのリベラルアーツ教育のまとめの教養卒論を書くためには、自分自身で学びのストーリーを作っていかなければいけないということです。



今回の教育改革では、従来の学部を改組し、学修一貫の「学院」を6つ作りました。理学院、工学院、物質理工学院、情報理工学院、生命理工学院、環境・社会理工學院の6つです。リベラルアーツのコア科目では、教え合い・学び合いのため、その6学院の学生たちからアトラダムに組み合わせた少人数グループを作って、アクティブラーニングでやっています。専門の違う子たちが小グループで学び合う。そこに修士のお兄さん、お姉

さんたちが入ってくれます。だから、水平的にも垂直的にもコミュニケーションを縦横無尽にやっていきます。先ほどのお話で東北大の学生さんに入ってもらおうというお話がありました。本当そういうことです。東北大の学生さんものすごく勉強になっているはずですね。人を教えることほど教育になることはないのです。ということで、そういう場をどんどんつくりだそうではないかということです。



さて、ひとつひとつのコア科目を見ていきたいと思います。東工大立志プロジェクトですが、これは1年の第1クォーターで行われています。今はクォーター制ですので、週2回の授業なのですが、木曜日と月曜日に行われていて、木曜日は講堂で、入学式の3日後ぐらいから池上彰のような著名人が講演をします。池上さんなんて言うことがきつくて「物事をうのみにしちゃ駄目だ」「偉い先生が言っている、正しいとは限らない」といった「批判的思考」の話も入学直後から出ますし、「昔は鉄鋼業がいいと言って、鉄鋼業に行って、だが、鉄鋼業が駄目になって、その後はテレビ局がいいって言って、テレビ局にみんな行こうとすると、それも今は落ち目になっていたりする。だから、今AIがいいなんて言っても、何年後かにはわからない。だから今どこで評価されるとかいうんじゃないで、あなたたちが何をやりたいのかってということなんだ」といったことをばんばん言います。

平田オリザさんに来もらったり、哲学者の永井均さんとか、講師は毎年変わっています。あと、宗教者に来もらったりもしています。それが木曜日。月曜日は、28人クラスを40クラスつくります。そこにはうちのリベラルアーツの教員の担任が担任として付くとともに、修士2年生の学生がファシリテーターの補佐として入ります。そこでは4人一组でのグループディスカッションも多く行われ、例えば池上彰さんの講義にしても、徹底的に池上彰のどこが良くて、どこが駄目だ、駄目だったかというのは変な話ですが、どこが納得できなかったかといった話をやり合うのです。そうすると、「ここが良かった」、「ここが良くなかった」というのはやはり人によって違うわけです。あと、他の学生の意見を聞いて、「あの発言にはそういう意味があったのか」と気づいたり、世界が広がっていきます。

私が大学に入ったときは、数学や物理も、そして人文社会科目も大教室で授業を受けるわけです。大教室でひたすらノート取りながら授業を受けているメタメッセージは何かというと、「私がこの教室にいてもいなくても、全く先生は同じ授業をやっている」。つまり「私がこの世界に存在しても存在しなくても、世界は同じように進行していくんだ。たとえ私が腹痛で家で寝ていても、ここにいても」。そういうメタメッセージです。「私がいなくても世界は変化しないし、私のできることなんか何もなく、もう既に確立してるんだ」というそのメタメッセージを入学の最初からぶっ壊していきたいということです。

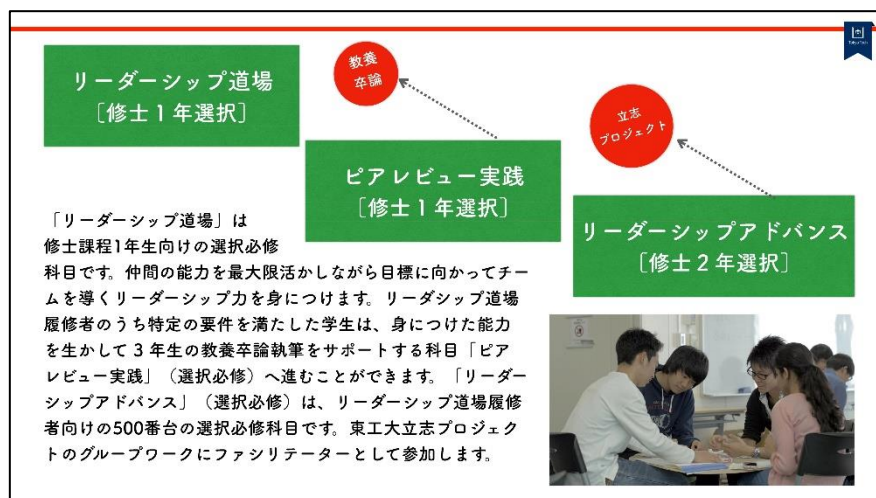
あと、東工大の7不思議というか、よくマスコミの方に聞かれるのは、大学の教員はともプライドが高くて、このような1年生のクラス担任のようなことはやりたがらないはずなのに、なんで東工大のリベラルアーツ教員はそれが出来ているのか、ということです。確かにFD研修もたくさんやり、ファシリテーター研修もみっちりやるのですが、教授たちは真摯に参加しています。それがいかにして可能なのかというのは、これはなかなか秘密があります。



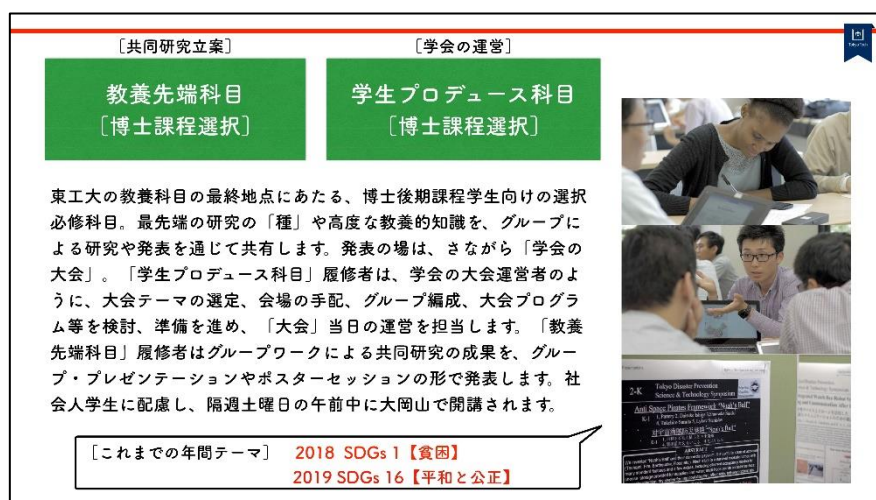
教養卒論ですが、これが3年生の必修科目です。1年と3年の間には、いわゆる社会学を取ったり、文化人類学を取ったり、経済学を取ったりという、人文社会分野のいろいろな科目を取っていきます。また英語や第二外国語、ウェルネス科目もあります。1年生の東工大立志プロジェクトでは1年の6月には自分が東工大でこれからどのような志で生きていくかということの宣言をして、授業が終わるのですが、教養卒論では、また1年のときのクラスがリユニオンしまして、学生同士が「君はあれから2年間なにしてた？」という感じで再度集まり、そこで5,000字から10,000字くらいの教養卒論を書きます。自分の研究の意義とか、世界的にどのようなインパクトがあるのかといったことを書くのですが、村上春樹論を書いてしまう学生もいれば、東工大の授業改善案など書いてしまう学生もいて、ほんとうに個性にあふれています。ここも4人1人でピアレビューをしながら、修士からお兄さん、お姉さんたちがピアレビューアとして入ってくるということで

全体会1（大学入試センターセミナー）

す。



これは修士のコア科目です。修士にはこの他にも社会学や哲学といった授業もありますが、リーダーシップ道場、ピアレビュー実践、リーダーシップアドバンスがコア科目になっています。これは選択必修なのですが、半分ぐらいの学生がリーダーシップ道場を選択しています。



こちらが博士課程のコア科目で、必修科目です。従来でしたらば、博士学生はラボにこもりっきりで隣のラボで何をやっているかも分からなかったようなところを改革しました。あと、留学生がいるので、この科目は全部英語でやっています。ここでも各学院の博士課程の学生をランダムに組み合わせて4~5人にして、SDGsの様々なテーマを取り上げています。例えば貧困とか、衛生とかいうテーマを与えて、2カ月間でそのグループで、それを解決するためのプロダクトの創出とか、あるいは社会システムの構想などを論じます。



最後にポスターセッションをやって、相互投票して、グランプリを決めたり、学長賞を決めたりします。そのときにシンポジウムも開催しています。

駆け足でご説明してきましたが、『とがったリーダーを育てる』に詳細は書きましたので、ぜひそちらもご覧ください。単なるリーダーではなくて、今とがったリーダーというのは何なのかということもそこでは論じています。

その本では、プロジェクト X のように、この改革が始まり、途中で困難にぶち当たった経緯もこと細かに書いてあります。「教養なんか教授がやることじゃなくて、助教にやらせとけ」、「そんなくだらないことはやりたくない」という教員などもいるわけです。教育担当の副学長と私が居酒屋の 2 階で 2 人同時に号泣しましたという話も書いてあります。あまりの情けなさに、「何でこんなに自分のことしか考えない教員がいるんだ」と言っただけ泣いたなど、まさにプロジェクト X です。ぜひ大学関係者の方にお読みいただければと思います。

あと、これはうちのリベラルアーツの教員 14 人で書いたのですが、『新・大学でなにを学ぶか』、岩波のジュニア新書です。1980 年代に隅谷三喜男先生という、偉大な先生がお

1人で『大学でなにを学ぶか』を書かれたのですが、今はやはり多様な学びです。多様な学び、いろいろな角度から大学でこのようなことが学べるよということです。それは何とか学の多様性もありますが、学び自体の多様性、重層性でもあります。この14人ぐらいの優れた書き手たちの文章を読んでもらえば、「大学ってこのような角度からも勉強できるんだ」「こんなこともできるのか」と高校生、中学生の方にも分かってもらえる。あるいは既に入學した大学生の方にも分かってもらって、やはり大学というのは自分の学びを深めていく、そして、それで世界を変えていく場なんていうことが分かっていたのではないかなと思うので、ぜひそれもお覧になっていただき、ぜひ学生さんたちにも読んでいただければと思います。

時間が来てしまいましたので、ここまでにしたいと思います。それで、学生がどう変わったのかといった話は時間がそこまで取れませんでしたので、次のディスカッションの中ででもまた述べられればと思います。どうもありがとうございました。

【小野・司会】 上田先生、パッションのあるご発表ありがとうございました。今のところQ&Aには質問が直接来ていませんが、恐らく先生が最後に触れられた「これで学生さんがどう変わったのか」というところは皆さんたくさん聞きたいことがあるのではないかと思いますので、そこはこの後の全体セッションの中でまた教えていただけたらと思います。ありがとうございました。■

全体会1（センターセミナー）◎ 全体討論

変貌する高校教育現場：大学はどう応えるか

■渡部 敦（宮城県仙台第三高等学校教諭）/藤岡 隆幸（岡山県立和気閑谷高等学校長）/北尾 健（三重県立宇治山田商業高等学校教頭）/
上田 紀行（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授）/
本郷 真紹（立命館大学教授■司会）/小野 賢志（大学入試センター試験・研究統括補佐官■司会）

【本郷・司会】 それでは、これから立命館の本郷が進めさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。今、高校現場のお三方の先生方のそれぞれのご報告を頂きまして、それから、東工大の上田先生より、大学の側としての受け止め方と申しますか、とりわけ東工大で先進的に推進されているリベラルアーツ教育について、理系の子にこそこういう教育が必要であるという認識の下になされているということで、これからの高校と大学の教育接続という観点において非常に重要なヒントを頂けたと思います。

本来ですと、大学入試センターの入研協の企画ですので、大学入試が今後どうあるべきかと、いわゆる入学者選抜をどうすべきかということが主題になるのですが、それはご案内のとおり、明日の全体会2で取り上げますので、まずは教育接続という観点からご意見の交換ができればと思っています。

このような企画を出させていただきました契機としては、私がある場で、京都市の教育長からこういうことを言われました。「今後、ドラスティックに高校現場の教育スタイルが変わる、その課程も変わる」と。そうした場合に、大学には学習指導要領がありませんから、「何ら拘束されることなく従来どおりの教育の形を続けていれば、つまり新入生に対して数百名単位の講義をする、それで事足りるということでやっていたら、愛想を尽かされるぞ」と。大学はどうするつもりなんだ、という問いを寄せられたときに、即答できなかったという経験があります。

そういった点から今日は、3先生方の報告を基に、大学現場の方が参加者に多くいらっしゃると思いますので、さらにお伺いしたいことをお伺いさせていただいて、大学としてはこういう取り組みというか、姿勢を持っているのだという情報を共有させていただければと思っています。

差し当たって、私から3つほど柱を出させていただきたいと思います。

1つ目は、いろいろと新しい形での探究学習という取り組みを進められて、それぞれの高等学校の先生方がそれをどの程度の達成度合いがあったかということの数値化してお

示しいただいたわけなのですが、こういうアンケート等のペーパー等で窺われる生徒さんの成長と志向性とともに、やはり意識と申しますか、それぞれの生徒さんが持っている達成感、その上で、例えば大学という場に対する期待感、あるいは社会へ出てからの自らの生活を構想する力、そういうものに具体的にどのような変化があったのかということ、明らかにその辺りのところの意識が変わってきたと。それがひいては、高等学校の日常における学びの成果というものにどう反映されたのかということです。その辺りのところを改めてお聞かせいただきたいということが1つあります。

2つ目には、評価ということになってまいりますと、入試でもそうなのですが、個々人の成長の度合い、あるいは個々人の意識というものを推し量るということに目標を設定しがちなのですが、一番重要なポイントとして見逃してはいけないのは、学びの場であると思います。協働という観点、これは非常に大きいと思います。つまり生徒さんにしましても、大学の学生さんにしましても、交ぜて初めて見られる成長があります。人と交わって、時には侃々諤々とした議論を展開して、多少感情的には不愉快になりながらも、そういうことを通じて成長していくというのがあります。

そういう協働の場ということ、一緒に働く、あるいは一緒に学ぶ場を設えるということは、大きな意味を持つてくると思うのですが、その辺りは高校現場、あるいは大学でどう受け止めていただけるか、これが2つ目のポイントです。

3つ目に、ちょうどこれは最初の小野試験・研究統括補佐官のカリキュラムに関するお話にも出てきていましたし、仙台三高の例でも、そして上田先生の大学でもそうだと思うのですが、一般によく言われていますように、もともと理数系、理系を目指していた子が、ある時から、少し自分自身の意識を変えて文系に転ずると、つまり文転、それはあり得るのですが、逆はあり得ないと思うのです。

文系の教育を重点的に展開していった、自然系、理系に変わるというのは、やはりパーセンテージ的には非常に低いと。そういう点からすると、今後の一つのエデュケーションとして、先ほど小野試験・研究統括補佐官は理数科の探究と社会の探究は少し性格が違うということをおっしゃいましたが、その辺りの成長過程と併せた意識と申しますか、自らの志向性の自覚とその過程を今後どのように受け止めていったらいいのかということについて、いろいろ議論を交わせればと思っています。

少し長くなりましたが、以上申し上げました3つの点等について、Q&Aにお寄せいただいたご意見や質問も交えながら進めさせていただきたいと思います。まずは、それぞれの先生方に簡単に、お考えになっているところをお聞かせいただければと思います。

それでは、渡部先生からお願いできますでしょうか。

【渡部】 まずは探究の活動に関してなのですが、われわれ仙台三高のエデュケーションの中で、探究あるいは課題研究という、大きなPBL型のプログラムを実施することで、生徒の成長というのが非常に実感できると考えています。

先ほども申したとおり、われわれが目標としている位置、例えば英語の発表などここまですれば十分だろうというところからさらにもっと上を行きたいという生徒が出てく

るということは、やはりプログラムを用意して非常に良かったなと考えています。生徒が社会に向けて活動をしていく中で、分からなかったことを知る喜び、社会というのはこういう仕組みになっていたんだと知ると同時に、さらなる疑問が出てきます。また、実際に探究をやってきた中で、これはなぜできなかったのだろうか、挫折ではないのですが、非常に悔しい思いをする場面もたくさんあります。そういったところを、実は将来に向けて何ができるかという問題意識につながっていく意味ではやはり探究というのはいいのかなと思います。

先ほど本郷先生がおっしゃっていたとおり、やはり社会とつながる必要性は当然あります。実際に行ってみたり、見て、あるいは人と話すことでないと、なかなか問題意識というのが出てこないのかなと思います。時間がないところではありますが、探究の活動を通して、今言った意識の向上、そして、将来において自分がどうすべきかということを考える機会になっているのかなと思います。

2つ目です。評価について、さまざまな学びの場を提供する必要があるということです。評価というのは自分で自分を知る評価と、あと一般的に教員が総括的に評価をするという場面が多かったと思います。

しかし、実際にはさまざまな価値の人たちがいたり、さまざまな場面があると思います。そういった中でさまざまな人たちが複数の目でその人を見て、評価することで、自分自身を改めて発見する機会が増えると思います。多くの人たちがその人の活動をどう見ているかという複数の視点によって、平面的で点であった評価が立体的に広がっていく。そのためには、社会全体というか、さまざまな社会の場面や社会とのつながりというのは必要ではないかなと考えています。

最後です。3つ目の理系・文系については、われわれの学校でもそれぞれ科を設けていますので、それぞれの特徴を出さなければいけないということで、目指す資質・能力には若干違いがあります。ただ、社会には人それぞれ役割があるのでこちらに特化しましょうと、例えば理系側だったら研究などに特化していきましょう、文系の人だったら社会でどのようにそれらを活用できるかに特化しましょうなど、本当は分けたくはないです。多分みんな、理系・文系を考えて仕事はしていないのですが、今のわれわれの学校の限界かもしれないかもしれませんが、そのように分けてやっているというところも現実的にはやはりあります。将来的なところ、大学進学に興味・関心があるときは文理の選択教科は何かなど、そういったところばかりクローズアップされる場面があります。例えばこの学部を受けるときはどの教科が必要なのかなど、そのようなところがやはり文系・理系と偏らされる部分があるのかなと思うのですが、仕方がないところもあったりするのですが、学校ではPBLの機会を通じて、理系だけ、文系だけという考えにとらわれないように柔軟な考えを持つように指導するということが大事かなと私は思います。

少し長くなりましたが、よろしくお願いします。以上です。

【本郷・司会】 渡部先生、ありがとうございました。藤岡先生、よろしくお願いします。

【藤岡】 失礼します。先ほど概況でもお伝えしましたように、中山間地域にある本校は現在小規模校となっており、かつては大学進学から就職までという子が多く多様にいたのですが、今は、やはり都市中心部へ流れていくということで、いわゆる偏差値的に言うと輪切りが進んでいるということで、大学進学を当初から具体的に希望して入ってくるという子が非常に少ない状況です。

本校では探究については、学問や、アカデミックな研究、大学へと直線的に考えるよりも、まず体験を重視し、それを経験に変えるということです。現実のところは 45 分間の授業なので、ずっと座り続けられない子もいます。新学習指導要領で教科にも探究的な学びが入ってきていますが、本校の役割、教育課程の 1 つの軸としては、単位数が少ないながらも総合的な探究の時間で、特に地域へ出ていき体験をさせて、社会とつながることを意識させます。将来は大学、あるいは専門学校、就職と多様ですが、いずれにしても社会へ出ていきます。いろいろなところで、地域で市民としてそれぞれの役割を担っていくという、その基礎的な力、スキルと、マインドを育てたい。地域で、身近なところで頑張っている大人がいる、あるいはそういった課題があると、それに対して自分たちは何ができるのかというところを具体的に、大人たちとの間で考えていくということを大事にしたいということから組み立てられてきたと思っています。

私はここで勤めて 3 年目なのですが、やはり本校の規模、生徒の実態に即して工夫されて作り上げられてきたと思っています。仕事、働くことや社会につながる、あるいは社会の中で役割を果たしていくことを経験の中から考えさせたい。その体験から学びへ、授業へ戻ってくればいいのですが、個々の学習時間や授業への臨み方というのはまだまだ課題はあるかと思いますが、そこをしっかりとこれからもつないでいきたいと思っています。

実際には、特性のある子や、中学校時代に教室に入れなかった子もかなり多いのですが、そういう子たちが小規模な中で、学校の教室だけでなく、地域に開かれた中で多様な方と出会って、さまざまな価値観に触れる、あるいはフォーマルな教育、授業だけではなくて、ノンフォーマルな場というのも選択していけるという、さまざまな学びの場が選択できるというのは非常にいいと思います。そういう中で先ほどの探究という役割、意義が機能していければと思っています。

それから、入試での評価ということでは、自己評価という点で自信のない、自己有用感や肯定感が低い子がたくさんいますので、他者と交わる機会や場は本当に大事だと思っています。ですので、生徒同士も、社会のいろいろな方々との協働も大事にしています。その中で自分自身や、他との価値観の違いを知りながら、自分は自分としてどうありたいのか、生きたいのかということ、そして、自分の今の学び方や、それから今の考え方や姿勢などがどうなのかということを常に振り返りさせながら、問わせながら、それを言葉にして、相互に伝え合わせながら、自己の評価を高めていくことにつながっていければと思っています。

お答えになっていないかもしれませんが、全体として前提が入試のためというのではありませんで、生徒の実情に応じて、結果としての大学選択があるということで、まずは社会へ出る、仕事を持つというところをベースにしながら、それぞれの進路選択に結び付

いていくような過程、プロセスを得させていきたいと考えているところです。

最後の文系・理系については、お答えになかなかないかと思いますが、本校では大学に進学できる標準的な教育課程は用意していますが、大学進学希望者、特に国公立進学者は限られており、なかでも理数系へ進む生徒はごく少数であるということのみお答えをさせていただきたいと思います。以上です。

【本郷・司会】 ありがとうございます。それでは、北尾先生、お願いできますでしょうか。

【北尾】 よろしく申し上げます。まず1つ目の探究学習がどの程度達成したか、どのように生徒の意識が変わったかというところですが、本校はSDGsをテーマ、軸として探究活動を行ってきたというところもあるのですが、毎年1月の末に学習成果発表会という、1日取り組んできた内容を発表して、全職員、全生徒で共有する場面があります。そこで、「SDGsについて高校入学前と現在で何か意識が変わりましたか」というアンケートを3年生全員に実施しました。9割以上の生徒が「かなり変わった」、「やや変わった」と回答しています。恐らくこのような取り組みがなければ、今世界でどういう問題がどういう課題として進んでいるのかということも多く生徒が認識しないまま社会へ出ていくということもあったのかなと思いますし、一人一人のアンケートの答えを見ていると、SDGsのことが理解できた生徒が多く見受けられています。一人一人は本当に非力だが、無力ではないという、そのような内容の回答が多かったように思います。自分でできることをしっかりやっていると、それが世の中のためになっていくのだという、そういう意識に変わっていったのかなと感じました。

先ほど報告の中でもお伝えさせてもらったのですが、客観的な分析の中で、7割の項目において優位性があったと。結果は一人一人に渡していきまして、それを見て自分がどの部分で3年間で成長できたのか。また、どの部分でできるようになったかということを経験書き留めていくことで振り返りにもなるし、自信にもなるし、次の課題を見つけることができます。それが進路に大きくプラスになっているのではないかなと感じます。

2点目について、学びの成果についてですが、これは個人的な私の捉え方ですが、1番は教員がたくさんの知識と外部の方と関わってもらうことでいろいろなものを吸収できたのかなと。やはり高校というのはまだまだ狭い世界でもありますので、多くの教員が外部の方と関わる、それが生徒に還元されていく、いわば社会の今の状況を学ぶ、生きた学びというものにつながっているのではないかなと思います。

ですので、こういった探究の学習の学びというのは本当に商業高校としてはかなり成果につながっているのかなと。先ほども申しましたとおり、大学受験について、一般受験で臨む生徒はほとんどいません。自己推薦だったり学校推薦であったり、総合型の選抜であったり、そういったもので進学していきます。

3年前の本校の進学率は約60%でした。一昨年度が65%、昨年度につきましては72%でしたので、非常に進学志向の高い生徒がどんどん増えていって、集まってきているのかなと思います。それに応えるためにも、やはり探究活動によって課題解決をする、PDCA

をしっかりコンスタントに回していく。そして、何よりも自分の考えを人と共有しながら協働して、その考えをみんなでまとめて、人に自分の思いを伝えるという力、こういったものが非常に伸びているのかなと。本校の 3 年間に於いて、そのための活動は非常に多いと思っています。中学校へもそのような生徒を育てていますということも PR していますし、それが成果につながっているのかなと思っています。

3 番目の質問については、本校については、ほとんど文系といいますか、商業系の学部に進みますので、理系から文系、その逆はという、そういった指導は実際教育活動の中では行われないのですが、やはり推薦型の試験で臨んでいく生徒が多いので、面接であったり、小論文の指導であったり、この辺りは全教職員で手厚く指導していきます。少し質問とはずれているような回答になるかも知れませんが、本校の現状であります。以上です。

【本郷・司会】 どうもありがとうございます。そうしましたら、先生方のお答えも踏まえまして、上田先生から一言コメント頂けますでしょうか。

【上田】 どうもありがとうございます。私も 3 先生方のお話にすごく感銘を受けているところで、やはり日本の中等教育というところが偏差値の高い大学に何人入れればそれで成功でという、輪切りということを先ほどおっしゃいましたが、そういう道具になり果てているというところがどれだけ日本の教育力を疎外してきたのかということをお思います。

では、大学に入ったほうが本当に幸せなのかということも分からないところで、高卒で、お寿司屋さんでお寿司握っていて一流の板前になる人間と、大学入って「俺は何もできない、大したことはないんだ」と思いながらブラック企業などに勤めてしまう人間と。あと、大学院の博士課程まで行っても、研究者として競争にさらされて。有名な大学の理工系を出てドクター取って、ポスドクで 3 年任期付きを 4 回も 5 回もやって、ボスの評価を気にしながら定職に付けないという、博士課程まで取ってもそのような状態というのが実はあるわけで、そうなってくると、やはり自分の中に、どういうことが自分にフィットしているのか、どういうことが自分の中の幸せなのか。幸せは誰かから「あなた幸せです」という、点数で先生から与えられるものではなくて、自分の中に何か、私はこれをやっていたら幸せなんだ、あるいはこの人の役に立てたら幸せなんだという、そういう芽を育てている子がたくさんいるということが、やはり日本社会の中でとても重要なことだと思いますので、3 先生方の取り組みというのは本当に力強く聞きました。

東工大の場合はむちゃくちゃ勉強しなければ入れない大学で、総合的なところを捨てて、受験に特化している子でないと入れないという、そこにそもそもものすごくひずみがあって。なおかつ、うちは首都圏出身者が 75% 近くで、だから、よく首都圏の地方大学だと言っているのです。早稲田や慶応も今 70% を超えていますので、首都圏の地方大学ではあるのですが。東大が 60% ぐらいですかね。だから、もうみんな首都圏の地方大学になってきていて、小学校のときから塾へ行って、教育投資をむちゃくちゃされて、そこから進学校に行って、またそこで教育投資がされてという。

しかし、投資されてきた子たちが本当にそこから伸びていくのか。あるいは本当にそれがその子のやりたいことだったのかという根本が忘れられているような気がします。

だから、そういう意味では、中等教育のところで本当に自分自身に向かい合うという、その体験をしてきた子が東工大だけではなくて、いろいろな大学に入って来てほしいし、あるいは大学に入らなくてもいろいろな分野で活躍してほしいなということを思ったところです。

文系と理系に関しては、アメリカなどだとリベラルアーツ・カレッジに行ってからメディカルスクールなどに行きます。最初はリベラルアーツをやっておいて、理系にも行くし、文系にもまた行くというのがあります。日本でもそのようにもう少し緩く考えたほうがいいのではないかというのが一つ。

あともう一つは、文系・理系はお友達がいればいいのです。「文系の人間もAI知らなければ」、「DXしなければ」とか言っていますが、もちろんそのことを知らなければいけないが、そういう教育を受けていなくてもお友達にそういう人がいればいいので。もちろん自分がそういう本を読んでおく、素養があるのは重要だと思いますが、どれだけそういうお友達を持っているかということも結構重要です。キャリアビルディングやキャリア教育というと、一見自分のキャリアをどのように形成するかということだけを言うように見えるのですが、その中で仲間としてどういう人がいるのかということは存外重要だと思います。ですから、高校のときからいろいろな人と語り合っていて、そこでのネットワーク力を強めていくというのはとても素晴らしいことなのではないかなと感じられました。以上です。ありがとうございます。

【本郷・司会】 ありがとうございます。今のお話にも出てまいりましたが、多様な学びに触れさせる。とりわけ昨今、社会では「選択と集中」に価値があると訴えられて、高校生に対する教育でも早々と「選択と集中」という形で行わせるような一つの傾向がありました。それが果たして本当にいい結果をもたらすものなのかというのは保障の限りではありません。

今日のご意見といいますか、ご質問の中でも、大綱化以降、大学教育にはリベラルアーツが大切であると実感したのだが、実際の方向性は逆ではないか。理系や工学系の人材を増やすなど掛け声ばかりが目立っていて、自分自身で自分の志向性と将来というものを考え合わせた上での選択の機会が十分に保障されていないのではないか、そういう意見も出されました。

それから、これはなかなか俄には答えにくいところなのですが、こういう探究学習の成果を重視し、それに応じて大学でさらに学びの場を提供するのであれば、今日のように当初から制約された大学の出願しかできないのではなくて、総合選抜型の場合、もっと多くの併願を認めて、むしろ大学が取りたい子を取るという形にしたほうがいいのかとも思うが、高校の先生方の立場から、進路指導を行う場合に、そういう意見についてどう思われますかという質問が寄せられています。

大学は一方で、アドミッション・ポリシーを明確にして、ミスマッチをなくすようにと

ということも言われています。当然現行の制度下では、とりわけ国公立大学の場合は出願先が幾つかに限定されてくることになりますから、どのようにミスマッチをなくしていくかということについて、高校の先生方のご意見を伺わせていただきたいと思いますのですが、渡部先生、どのようにお考えでしょうか。

【渡部】 大学のこのミスマッチというのは、やはり偏差値ベースで受験した子、あるいは受験の途中で「ここは入れる」と決めた場合などは結構起こりやすいなと思います。そういう意味では時間がかかる、選抜にすごく労力がかかる総合選抜や学校推薦に関しましては、非常に多角的に見ていらっしゃる大学が非常に多いと感じています。探究の成果だけでなく、基礎学力をきちんと見てもらっているところも非常に多いです。

そういう中で、今話にあった総合選抜や学校推薦などは大体専願というか、1つ受けて合否が出るまで、あるいは合格したらもうほぼ入らなければいけないという状態になっていて、実は大学を決める上で生徒はいろいろ悩んでいます。本当に入りたいと前から思っているが、本当に入りたいかどうかという検証をせず、昔からの憧れでその大学に入りたいとただ思っていて、目指しているというところも実際にはあります。大学の労力もたくさんかかるような気はするのですが、自分の高校生活でやってきたさまざまな取り組みを大学に伝えることができる複数の試験機会があれば非常にいいかなと思います。そして、たくさん受けてもらった中で、大学は誰を取るかと選択の余地が広がって、ミスマッチがだんだんとなくなるのではないかなと思っています。以上です。

【本郷・司会】 ありがとうございます。藤岡先生、先ほど御校の場合は、入学時から大学というものを意識して学び続ける生徒は数的には多くないとおっしゃいましたが、今申しましたように、大学からむしろ、その子の高校での活動などを評価して採りたいという、そういう志向性の入試にだんだんと変わっていくということについて、どのようにお考えかお答えいただけますでしょうか。

【藤岡】 本校は、一般入試でなくて、総合型や学校推薦型でというのが実情ですので、それは今大学が割合を増やしていかれており、さまざまなアドミッション・ポリシーを設定されて、それに見合う生徒を選抜するというのを工夫されていく流れはいいかなと思っています。これは大学側でいかに多様な選抜方法、評価方法で選ばれるのかということになり、大学側の労力がかなり必要になってくると思います。先ほどの複数でという場合も、本校は国公立ではなくて私立を選ぶときにも、何を学びたいのかということを踏まえて、類似の複数の学部・学科を生徒が選択します。そうしたときに、選抜で用いられる材料や資料などが同じような方式であれば、ありがたいと思います。それぞれの大学の選抜方式があって、それに見合う準備をしなければならないものが多様であればあるほど、高校側や受験生の労力が要り対応が難しくなるかなと思います。

いずれにしても、そういう流れにあるのは本校にとってもいいことだと思います。ミスマッチを防ぐということであれば、本校の学びでこのように成長したということを高

校側が証明するだけでなく、大学側で実際に面接などを十分に行って生徒の様子や言葉などから評価していただければありがたいと思います。そのために、大学からあらかじめ具体的に評価基準を示されることが必要になってくると思っています。以上です。

【本郷・司会】 ありがとうございます。北尾先生、御校の場合は商業科ということで、高校の入学段階からある程度将来の志向性のようなものを持った子どもたちもたくさん通っておられると思うのですが、今のように大学の門戸に関して、むしろそこをある意味多様化して、高校での学びを踏まえた上で選抜の機会を増やすということについて、何かお考えがありましたらお聞かせいただきたいと思います。

【北尾】 同じような意見になるかも分かりませんが、本校については経営学部、経済学部、商学部、そういったところがメインになってきます。ミスマッチを防ぐために、手厚い進路指導はやっているつもりです。卒業生に講演してもらったり、面接指導の段階での志望動機の聞き取りにおいて建前でなく本音でぶつかるといいますか、そういうことを重ねていくことで、生徒たちは自分の将来が見えてくるのかなと思いますし、そこで自己実現できるかどうか十分調べ切れていないようであれば、担任だけではなくて、声を掛けられればうちの職員は全員その辺りを重点的に面談しますので、ミスマッチについてはある程度は防げているのかなと感じてはいます。学部がある程度限定されるというところもちろん、そのように働いている一つの要因かなとは思っています。

それと、併願でという話ですが、やはり生徒にとって選択肢が増えるというのは非常にありがたいことですし、準備するための時間のロスを短縮するというか、幾つか同時に受けられるのであれば、それはありがたい話かなとは思っています。以上です。

【本郷・司会】 ありがとうございます。そういった受験生と申しますか、高校の生徒さんを受け入れる側の立場として、上田先生にコメントをお願いしたいと思うのですが。

【上田】 昨今、特定の大学への入学は結構難しいが、卒業するのは異常に優しいというのは、旧来からの、入学した人には何としても卒業してもらわないといけないという考えによるのですが、私としては、もう少し入り口を緩めて、でも、全員がそこで本当に何もやらなくても出てしまうというもおかしいのではないかなと思っています。それなので、入試自体の選抜の考え方も変える時期に来ているのかもしれないなと思います。

あと、私たちのような大学で今問題になっているのはジェンダーです。理系は男の子が多くて、女の子が高校で数学など頑張っていると、「女の子なのに数学できてすごいね」など、中学、高校のときからある、女性が理系に行ったらおかしいという社会の文化が非常にゆがんだ形にしています。東工大は今、女子学生比率が15%ぐらいであり、倍増は絶対させたいと言っていて、さあ、どうしようかという。つまり理工系が男性頭のようなものでできているというのは変で、海外の大学などは半々ぐらいの大学が多いわけです。

だから、そういう意味でも、進路がそもそもマッチしているか、ミスマッチしているか

ということへの文化的な規定感というのもすごくあると思います。だから、高大の間でそういった、まさにミスマッチ、この日本社会だったら男性が理系行って当たり前というところは表面上は一見マッチしているかもしれないですが、根本的に本当にそうなのかという議論をしたいなと思っているところです。以上です。

【本郷・司会】 ありがとうございます。理系の女子というのは確かに、私どもの大学でも30年ほど前に理工学部でそれが大きな課題になって、わざわざそのために理系女子入試を設定して、女子枠で理工学部を志願してくださいということをやったのですが、思うように集まらずにやめてしまったという経緯があります。

ただ、最近では、その分野に関心を持たれる方が増えてきて、ご承知おきのとおり、例えば関西にあります奈良女子大学さんなども女子の理系の学部の新設を構想されており、やはり今課題として取り上げられるところだと思います。

それと、フロアから、受験の機会というのを増やすという趣旨は分かるが、それぞれに対して検定料がかかっていることを忘れておられるのではないかと。複数受けるということはそれだけ経済的負担を大きくすることになるから、逆に言うと、大学進学者の経済格差というのをより助長することになりかねないので、その辺は注意する必要があるだろうという意見を頂戴しました。確かに、これは懸念されるころではあるかと思います。その辺りは入試全体のシステムを今後考えていく必要があるかと感じました。

それから、これまでの先生方に対する個別の質問を全部まとめさせていただいた上で複数から出されているご質問なのですが、「高等学校の先生方は正課指導のみならず、校務分掌や生活指導、課外まで含めて、課外は最近少し変わってきましたが、かなり負担がある中で、体験学習・探究型という時間と労力のかかる教育を実践されていくにあたっては、さらに負担という問題が出てくるだろうと。この課題をどういう形で克服しようと考えられていますか」という質問です。

すみませんが、渡部先生から、お答えいただけますでしょうか。

【渡部】 確かに社会とつながるということは労力が要るかなと思います。先生方の時間も限られているところでやっていくということも非常に難しいのですが、まずは社会につながる前に、先生方もそれぞれ教員としてのキャリアがあるのでそういったところでつながりがつくれるというのが一つ。もともと持っているものをつないでいくということが一つ。

準備については、われわれは提示して持っているだけで、実際に連絡して会うかどうかというのは生徒に任せて、教員の力を借りないと突破できないことがあったときだけ教員が入るようにしています。今はかなりオンラインも充実していて、大学の先生方も高校生が聞きたいと言うと、時間を取って聞いてくれるので、数年来というか、ひと昔前とはもう全然違うなと私は思っています。そういう中で、オンラインでつないで気軽にできるとなると引率も要らないので、意見を聞くというだけであれば、今の状態で大きな負担はないかなと思います。ただ、日本全国各地でフィールドワークを、うちの学校ではやって

いるのですが、3日、4日など泊りがけで行く場合もあるので、そういったところでいろいろな先生に負担を掛けているところは否めないかなと思っています。行事やフィードバック、あるいは外に行くことに対してうまく運用できる方法がないかというのは、実際には悩みの部分です。このようなところでしょうか。

【本郷・司会】 ありがとうございます。藤岡先生、よろしくお願いします。

【藤岡】 負担等について、先生方が実際に地域へ出て行ったり、地域の方が入られたりということが多岐にわたって行うことは、地域によって立つ学校ですので、先生方にとっても、経験や知識を得るという点、ネットワークをつくる点でプラスになっていると思います。一方で探究活動のほかに、地域との調整や引率、それから就職も進学も、大学だけでなく専門学校もあつたりしますので、そういったところを幅広く生徒一人一人に応じで行っていくということについては、小規模の学校ですので、連携や調整が必要になります。総合的な探究の時間は教職員全員で関わると同時に、支援員が幸いなことに複数おり、各年次に1人ずつ入る形を取れているので、その方にできるだけ企画や運営、あるいは企業や外部との折衝などの調整をお願いすることにより、教員の負担を減らしていきたいと思っています。ストレスのチェックによると、負担感はかなり高いという結果も出ていますので、やりがいと実際の負担感の調整は継続していかないといけないと思っています。以上です。

【本郷・司会】 ありがとうございます。北尾先生、先ほど先生のお話の中で、むしろ教員の側が社会とのいろいろなふれあいの中で、成長といいますか、そういうものをもたらされたのだというご報告も頂いたのですが、その点を踏まえまして、今の問題について一言お願いできますでしょうか。

【北尾】 ありがとうございます。高校の現場におきましても、働き方改革というのは本当に今厳しく言われているところではあります。部活動指導やいろいろな学校行事の準備、そういったものの効率化・スリム化を進めながら、学校としてどのような生徒を育てたいかという、育みたい生徒像というものに沿って探究活動をよく考えてくださいということを先生方にお願いしています。それが負担になるのであればやめたらいいし、自分たちで考えてどういうことが生徒のためになるか。そして、自分の働き方のことを意識できるかというのを考えてやってもらっているところですが、実際にはやはり負担にはなっているかなとは感じます。

ただ、自分の知識やスキル、技術が上がってくことで準備から実践から工夫する引き出しが増えてくるというか、その辺りも織り交ぜながらやっていただくようにはお願いしています。私自身も商業の教員ですので、いろいろな相談に教員が来たときには自分の持てる知識とアドバイスをさせてもらいながらやっているところです。負担にはなっていると思いますが。

【本郷・司会】 どうもありがとうございます。率直なところを伺いました。上田先生、先ほど高等学校の現場は、そうは言いながらもオブリゲーションで、みんなでこれをやっていかなければならないということで、一生懸命先生方が取り組んでおられると思います。大学となりますと、かなり自由選択と申しますか、特に御校のようにもともと理系の大学で、あえてリベラルアーツという、社会と多くの接点を持つような教育にぎなうということについては、かなり壁もあって大変なことであったとおっしゃったのですが、差し障りのない範囲で結構ですので、その辺りのところをご教示いただけますでしょうか。

【上田】 理工系であっても東工大の場合、ビッグネームの人たちの講義を受けたような 65 から上の世代はやはり「理工系の大学に来たのに江藤淳さんの話が聞けて」、「川喜田二郎さんすごかった」とか言っています。ところが、その後、大綱化・重点化のなかで、ひたすら外部資金を稼いで、自分の専門だけやらないと評価が落ちると言われる時代に入ってきたので、その時代の教員たちはリベラルアーツに抵抗感があったりします。だから、博士課程でも SDGs について何かやるといったら、「うちの学生が駆り出されて、研究テーマとは何の関係もない世界の貧困について語らせられている」と言うような教授もいる。しかしながら、人生 100 年時代となって、研究者としてやっても、本当にその人がそれを一生やっていけるのかという問題もあります。あと、われわれの理工系分野も 5 年後には自分の分野があるかどうかすら分かりません。その分野が分野ごとなくなってしまう可能性もあるし、先端科学は常にリニューアルしています。だから、自分の専門だけをやってたというのではなくて、いかに人間のほうのボディーを鍛えておくかが重要になるということです。

私の『立て直す力』という本にもあるのですが、昔はサクセスストーリーでこうやったら成功するという教育をやっていたら良かったが、今は立て直す力のほうが重要で、挫折をしたときにリニューアルして新たな分野を立てていく、そのとき全く違う職業に就いてもいいわけです。立て直す力を持っているということがかなり重要になっていくのではないかなと思います。ですから、やはり人間の根っこの部分を鍛えておかないと、枝葉の部分で何かちゃらちゃらやっても仕方ないという部分があるのではないかと思います。

少し Q&A にもお答えすると、まずは「大学 1 年に入ったらほとんどがオンラインで週 2 回しか学校へ行かない」と。そうなのです。これだけの規模の大学になってしまうと学生を集めてしまうと感染が広がるのではと、去年、一昨年とオンラインにし、うちのリベラルアーツの先生はもう徹底的に Zoom の使い方の FD をやりました。それで、ブレークアウトセッションという、4 人 1 組や 5 人 1 組などでどんどん議論をする機能を活用し、なおかつ Google Forms などに「質問を書いてくれ」と言って、次の授業のときに DJ のように「こういう質問が来てますが」と答えたりするのも好評だったようです。

うちのリベラルアーツではみんなを触れ合わせる授業をやっているのです、理工系の先生などからも感謝されています。理工系の、やはり数学などを教えるときに少人数ではな

かなかできなくて、やはり一方的に教える授業になってしまいがちです。今年からはオンキャンパスに来てもらうという取り組みをしているのですが、みんなマスクですから、オンキャンパスであっても顔を見られずに卒業してしまうなんていったら、同窓会に行ったときに「おまえ誰だ？」という話になってしまいます。だから、ハイブリッドで進めなければいけないのかなと思っています。

あとは、「リベラルアーツが重要だという掛け声ばかりで、結局は理学系、工学系の人材を増やすばかりだ」というご意見があります。文学部不要論が4～5年前にありましたよね？私はそれには大反対ですが、一方で、「理工系の人材は社会のことを考えてない」と言うけれど、それでは文学部の先生は考えているのかということ考えていない人がけっこう多いです。理工系はまだ「自分の技術をどういうふうに生かすかな」と、逆に社会的なところがありますが、文学部の先生の中にはまったく自分の研究テーマだけに閉じている方々もおられる。でも、そのテーマが現代社会や人間にとってどんな関わりがあるのかということも、一方で文系が考えていかないと。文系は社会に開かれているなんてうそです、文系の研究者もそこを突き詰めていくことが必要だと思います。

うちの文系の先生はこういう科学技術の大学にいますので、そういう意味で科学技術も動いてもらわないといけないし、そこに文系のエッセンスがどう加わるかによって、日本がどう変わっていくのかということも考えています。旧帝大であれば、文学部の先生に「工学部に行って、リベラルアーツの授業をしろ」と言ったら拒否すると思います。「うちは文学部のために授業をやっているのですから」という。

だから、やはり教員の意識改革というのは文系側も必要になってきているのだと思います。ただただ何とか哲学をやっているから、それで尊いんだと。それは尊いのですが、それを説明する能力というのがやはり必要になってくるのではないかなと思います。だから、そういう先生方がこのお三方の高校のようなところに行って、まさに総合学習をわれわれ教員がやるべきではないかと今日感じられました。ありがとうございます。

【本郷・司会】 先生、ありがとうございます。私も文学部の教員ですので、非常に耳の痛い話でございまして、反省しきりです。

本当に、今日は4人の先生方から大変貴重で、示唆に富んだお話を頂きましてどうもありがとうございます。まだまだ昨今の状況を含めてお話ししたいところですが、予定された時間が参りました。あすの全体会2では、入学者選抜の観点から高大の接続をどう捉えていくのかという議論が展開されると思いますので、そちらに引き継いでいただくことにいたしまして、本日のこの大学入試センターセミナーの全体会1はここでお開きとさせていただきますと思います。

先生方、本日はどうもありがとうございました。

【小野・司会】 先生方、また、ご参加の皆さま、本日はありがとうございました。それでは、これにて全体会1を終了させていただきたいと思います。また、あす以降もご参加のほどよろしく願います。本当にありがとうございました。■

探究活動を入試でどのように評価するか

司 会： 中島 範行（富山県立大学教授）・池田 文人（北海道大学教授）

報 告 ① ディスカバ！1万人提供による入試および入学者への影響	78
高原 幸治（桜美林大学入学部部長／学長補佐（入学・高大連携））	
今村 亮（桜美林大学入学部高大連携コーディネーター）	
報 告 ② 探究力入試「Q」が目指すもの	95
高岡 尚子（奈良女子大学研究院人文科学系教授）	
報 告 ③ へるん入試が求める学びのタネをどう育てるか	105
美濃地 裕子（島根大学教育・学生支援本部大学教育センター准教授）	
報 告 ④ ブレインストーミングで探究力の何を見るか	121
羽鳥 広平（高崎商科大学広報・入試室室長）	
全体討論	131

内 容：

令和4年度から「探究」の名前がつく科目が7つ新設され、そのうち「総合的な探究の時間」は必修科目に指定される。このように高校教育において探究的な学びが重視されていく中、探究的な学びで培われた能力や資質を大学入試で適切に評価していくことが求められている。そこで本全体会では高校での探究的な学びの評価に取り組んでいる特徴的な大学入試について話題提供いただき、ディスカッションを行う。

まず桜美林大学から入学前教育を入試で評価するディスカバ！プロジェクトについて紹介いただき、次に奈良女子大学から探究のための基礎学力・思考力・表現力を評価している文学部の「探究力入試「Q」」について紹介いただく。続いて島根大学から「学びのタネ（知的好奇心・探究心）」を重視している「へるん入試」について紹介いただき、最後に高崎商科大学から「これまでの成長」よりも「これからの成長可能性」を重視する「総合型選抜 探究・ブレインストーミング型」について紹介いただく。

これらの話題提供を受けて、パネリストを交え、高校での探究学習を入試で評価するあり方について会場とディスカッションを行い、これからの探究学習の評価方法について模索する。

全体会 2 ○ 報告 1

ディスカバ！ 1万人提供による入試および入学者への影響

■高原 幸治（桜美林大学入学部部長／学長補佐（入学・高大連携））／
今村 亮（桜美林大学入学部高大連携コーディネーター）

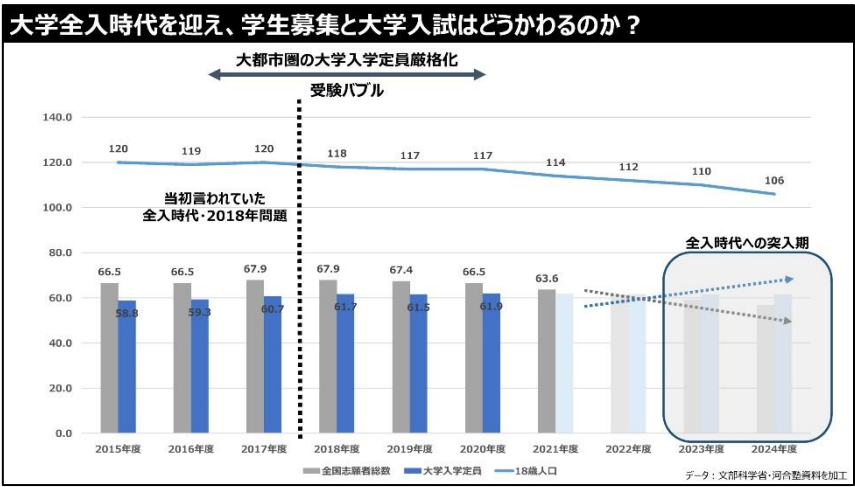
【高原】 おはようございます。ご紹介いただきました桜美林大学入学部の高原です。どうぞよろしくお願いします。



桜美林大学のディスカバの取り組みを通して、今回のテーマである探究活動を入試でどのように評価するかについて、事例共有をさせていただきます。

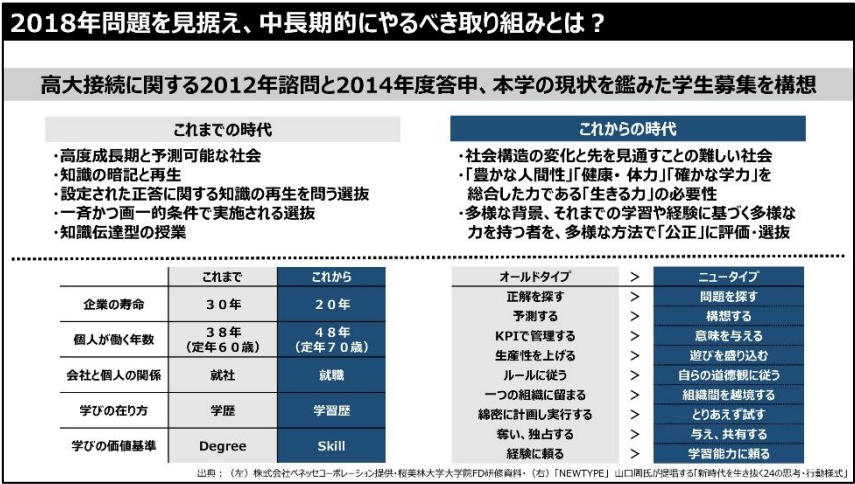


前半はディスカバの導入経緯を私から説明をさせていただき、後半はその内容についてディスカバ統括コーディネーターの今村より説明をさせていただきます。



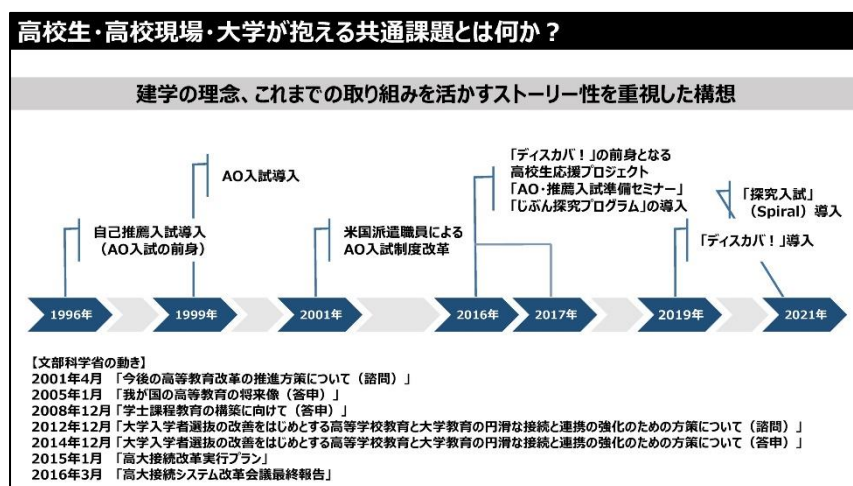
タイトルは「大学全入時代を迎え、学生募集と大学入試はどう変わるのか」です。言わずもがなですが、いよいよ全入時代を迎え、一部の選抜性の高いブランド校、いわゆる偏差値上位校や大規模校の大学以外は受験生の選抜が非常に難しくなる状況の中で、学生募集や選抜そのものの在り方について見直す必要に迫られると考えます。本学は少し前の2014年度に志願者状況が過去最低となり、その当時、目前に迫った2018年問題に対してアクションを起こし、今もって試行錯誤を繰り返しています。この当時の問いに対する1つの解が、この後に情報共有させていただくディスカバだと考えています。

2018年問題を見据え、中長期的にやるべき取り組みとは何なのかということです。先ほど申し上げましたように桜美林大学は2018年問題に直面し学生募集や選抜の在り方を見直すことになるわけですが、その際ベースになったポイントをここに少しまとめておきました。



2018年問題がささやかれ始める前後のタイミングだったと思いますが、後の高大接続

改革プランへとつながる諮問や議論，答申が 2012 から 2014 年になされます。社会構造の変化に伴い求められる人材の変化が起こる中で，これからの時代に必要とされるいろいろな人材要件があるわけです。ここにきちんと素地を持つ高校生といかに早期に出会い，育て，マッチングする方法はないものかというのが現在のディスカバへとつながる構想の原点となるわけです。



高校生と高校現場，そして大学が抱える共通の課題とは何かということです。構想がどのように発展しディスカバの導入へとつながるのかについて情報共有したいと思います。先のスライドで，これからの時代に必要であると示された素地を持つ 10 代に巡り合うために，ただ大学が会いたいと思うだけではなかなか出会えませんので，どこに軸を置くかを考えました。その結果として，本学の学生募集や選抜の特色でもあった AO 入試（現・総合型選抜）がそれだという考えに行き着きました。

本学は，AO 入試導入の年度も 1999 年と古く，当時で言えば慶應義塾大学の SFC に次いで首都圏ではその次に導入をした経緯があったと記憶しています。また大学教員ではなく入試に関わるアドミッション・オフィサーが書類審査を行うということなどから，首都圏を中心とした高校の中でも，AO 入試といえば桜美林大学という印象が強かったこともその要素であったと思います。AO 入試は賛否を含めいろいろ批判はありましたが，教科や科目の学力だけでは測れない能力や個性を多面的に評価し大学進学へとつなげる選抜の 1 つであり，今では全国の大学の入学者の半がこの方式を選択していることも目を付けた要素であると考えています。

一方で高校生は，AO 入試で合格を得るためには，自分自身が何者であり，これまでどのような学びや経験をしてきたから大学で何を学び将来につなげたいのかということや大学の出願書類に落とし込む必要があるわけです。しかし，高校生にとっても指導する高校現場にとっても，これらを言語化するには大変な労力がかかり課題となっていました。この全国の高校生と高校の現場，そして大学が抱えるこの共通の課題を解消する取り組みをプログラム化することが，これからの時代に必要であると示された素地を持つ 10 代に巡り合う装置になると考えてプログラム設計を始めたわけです。まずは 2016 年と 2017

年に 2 つのプログラムを導入し一定の高校市場に対する手応えを感じたタイミングで、2019 年にディスカバというブランド名に統合し現在に至るという形です。



パラダイムシフトする教育や大学入試の中で何を価値基準にするのかということです。スライドの左側に本学の選抜ごとの志願者の割合と、学びの構成員となる入学者の割合が示されています。この中で各学年において学びの構成員となる年内入試である総合型選抜や学校推薦型選抜の学生の中で、多面評価を通じてこれからの時代に必要であると示された素地を持つ者が仮に多くなったとすれば、それは学内のこの後の教育改革や入試改革のパラダイムシフトにもつながって、その結果として社会に求める人材輩出へともつながっていくだろうと考えました。その上で、高校生の学びや経験、出会いの機会が現行の高校教育の中では限られていると強く感じて、探究学習やキャリア教育のインプットとなるプログラムの提供と、これからの学びや経験を言語化して大学進学の意味を示すということです。つまり出願書類に落とし込むというアウトプットのプログラムです。この2つのフレームでディスカバとしてスタートさせることが世の中への価値提供になると考えてこの取り組みが始まりました。

以降のディスカバの具体的な取り組み内容については、統括コーディネーターの今村より説明させていただきます。今村さん、よろしくお願いします。

【今村】 はい。よろしくお願いします。今日は貴重な機会を頂きましてありがとうございます。




桜美林大学 探究入試



話題提供者

桜美林大学 入学部 ディスカバ事務局
今村亮 Imamura_r@obirin.ac.jp

7

部長の高原より引き継ぎまして、より現場レベルの話を申し上げます。桜美林大学入学部でディスカバを担当しています今村です。私からは本日、高大連携のプログラムのディスカバと、探究の取り組みを評価する探究入試 Spiral の2点についてご報告をします。



1万人提供の実態とは？

8

高大連携プロジェクト「ディスカバ！」の歩み



- Since 2021**
学校導入を拡大し、年間1万人参加を達成
- Since 2020**
コロナ禍においてオンライン型のプログラム提供開始
- Since 2019**
東京部の創業支援コンテスト TOKYOSTARTUP GATEWAY ファイナリストに選出
- 桜美林大学の
高大連携プロジェクトとして始動

2022年4月から、高等学校の新学習指導要領が開始し「総合的な探究の時間」ふくむ**探究7科目**が新設。

**高大連携ニーズの
今までにない高まり。**



9

まずディスカバは 1 万人提供とタイトルにも出していますが、これが一体どのような実態にあるかをご報告します。部長の高原からもありましたとおり、新しい学習指導要領の開始に伴い 2019 年から始まったディスカバが、2022 年では今までにない高大連携の引き合いをいただく状況となっています。

プログラム説明

2022年サマープログラム事例

探究支援プログラム×40分野
進路応援プログラム×4分野

初級 はじめての方へ 探究体験	グローバルを視野へ！ 世界探究
中級 探究に挑戦！ 探究チャレンジ	可能性を拓く！ 芸術探究
上級 さらに進歩する人へ 探究ゼミ	高校3年生のための！ 進路探究
全国高校総体に出場！ ディスカバ！アワード	進路探究や入試対策になる 総合・推薦型入試対策セミナー

具体的にディスカバがご提供しているのは、探究支援のプログラムが 40 分野、そして進路を応援するプログラムが 4 分野です。私たち現場は今この準備に追われているところです。少し具体的にご紹介します。

プログラム説明 進路応援プログラム (Output)

Output 自分の学びや経験を整理して、大学入試の出願書類に落とし込む！

総合・推薦型入試準備セミナー

準備セミナー実践編 課題図書対策セミナー オンライン面接対策セミナー 探究入試対策セミナー 小論文対策セミナー

まず進路を応援する自分の経験を言語化するプログラムの分野では、自分の学びや経験を整理して大学の出願書類に落とし込むという趣旨で、総合・推薦型入試準備セミナーという、本学が入試の現場から編み出したノウハウを詰め込んだ独自のワークブックでお送りするセミナーを主として開催しています。これは必ずしも本学を志望する方のみならず、どのような大学のどのような書類を作る上でもまず必ず重要になる、自分の取り組みの整理と振り返り言語化するプロセスを学ぶものになります。そしてこのセミナーをベースとして、個別分野として課題図書やオンライン面接、探究入試の準備、小論文な

ど各分野でもさらにステップアップしていくプログラム構成にしています。

プログラム説明 探究支援プログラム (Input)

Input 自らが学びたいことやなりたいたい人に会うためのサマープログラム！

ビジネス探究	SDGs探究	芸術探究	世界探究
ディズニーの新商品企画をマーケティング	気づかないうちに学校で生まれるジェンダー格差とは？	演劇やダンスを理論と実践で学ぼう。	海外に日本を伝える雑誌を編集しよう！
			
社会をよくするビジネスアイデアを発想しよう！	長く着られる社会にやさしいファッションとは？	音楽を自宅のPCでつくってみよう！	中国語を学び、自分を紹介できるようになる！
			

ただ、冒頭にありましたとおり、高校 3 年生になって経験を振り返りましょうといったときに、これまで自分で主体的に取り組んできたことが何もないと気づき、そこから焦り始める受験生をたくさん目にしてきました。そのためより早い高校 1 年生や 2 年生の段階で体験の経験をインプットします。すなわち自らが学びたいことやなりたいたい人に会い、答えのない問いに向き合っていく経験が大事だということです。そのため、探究のプログラムを多面展開しています。

こちらは本学の学問分野にひも付ける形になっています。例えばビジネス探究では、ディズニーの新商品企画をマーケティングするプログラムや社会を良くするビジネスアイデアを構想するワークショップなどがあります。ビジネスマネジメント学群という学群があり、そこからピックアップした学びの分野です。またはリベラルアーツの学群からは、SDGs の探究ということで学校におけるジェンダー格差のプログラムやファッションにおける SDGs のプログラムなどがあります。

プログラムのポイント

正解のない問い × 大学生メンターの伴走

 **桜美林大学**
J. F. Oberlin University

学問の最先端や
社会の課題から
ピックアップする。



このように、この夏は 40 分野のプログラムを準備しています。これらのプログラムの

ポイントは正解のない問いをプログラムにすることです。また、それに向き合う高校生の取り組みを大学生メンターが伴走をすることです。この 2 つの要素の掛け合わせが高校生の探究的な資質を大きく花開かせるものと見てプログラムを企画しています。

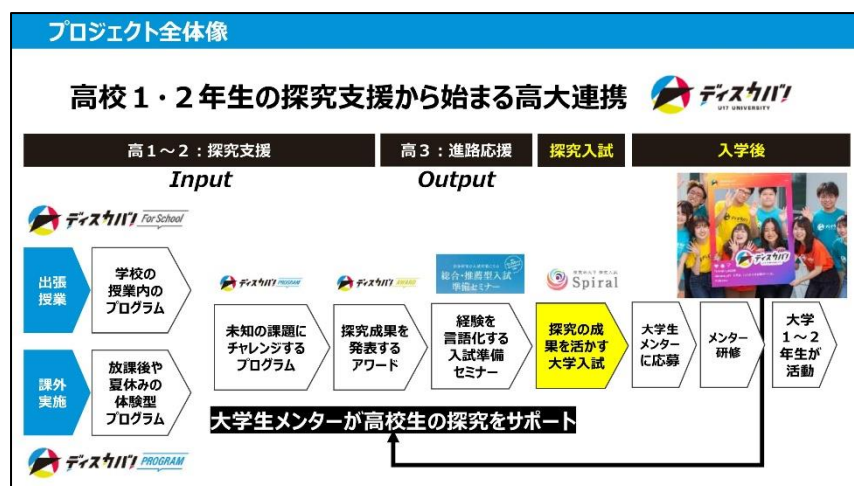


では、参加した高校生が具体的にどのような成長を得るのかという具体的事例も幾つかご紹介いたします。まずディズニー探究の事例です。これは素晴らしい探究で、私も高校生に本当にびっくりしてしまいました。ご覧いただいている円が 3 つ重なっている図はディズニーのミッキーマウスのマークです。高校生が調べてきたところ、ミッキーマウスのマークには数学的な法則性が定義されていないらしいのです。これを数学アプリを使って、いろいろなところにある身近なミッキーマウスのマークが一体どのような図形的な配置になっているかを計測して、それを統計的に解析し、最も確からしいミッキーマウスのマークを数学的に検証した探究の事例です。これには本学の教員も非常に感銘を受けて、これは大学 3 年生ゼミでも通用する研究レベルだと驚嘆しました。これは 1 つの事例です。



一方で芸術の分野も見てみます。先ほどもご覧いただいたメインのプロモーション写

真があるのですが、実はこの広報用写真もディスカバの芸術探究のプログラムに参加した、当時高校生だった写真家による作品です。この左の写真は被写体も参加者から公募したものです。この写真を撮ったフォトグラファーは、高校時代から芸術的な体験をたくさん積んだことで、今はまだ二十歳になったばかりなのですがいろいろなブランドに起用される人気のフォトグラファーになっています。



こうした学校における探究や学校外での探究を掛け合わせながらプロジェクト的に学んでいく機会をお届けしていくのがディスカバのプログラムの趣旨なのですが、全体像としてどのように入試につながっているかを少し細かくご紹介します。

これは左から右に体験が推移していくような図になっています。今、高等学校では特に学期が始まっている授業の期間です。私たちはまずこういう期間に学校にお邪魔をして探究の出張授業のプログラムをお届けしています。これが私たちの最初の接点です。本日は私がこの場にお邪魔をしています、別のコーディネーターは今都立高校の探究の授業にお邪魔をして、1年生が探究の授業を始めるためのキックオフを行っています。そのように私たちは普段から学校にお邪魔をして探究を届けています。そこでさらに大学の探究にもっと挑戦してみようと思った方は、放課後や夏休み、春休みなどに集まっていたいで体験していただきます。

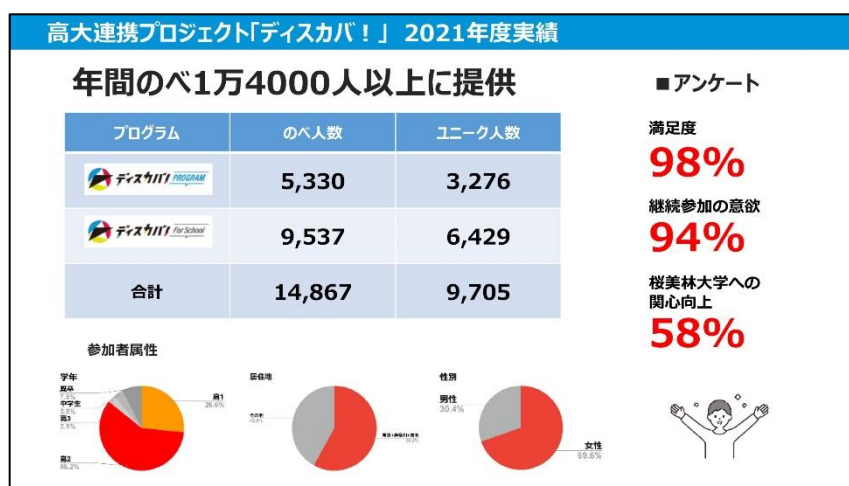
こうした入門的なところから、次はさらに難易度が高い未知の課題にチャレンジするプログラムや、その探究成果を大学教員にプレゼンテーションをして本気のフィードバックを受ける機会などを得て、高1から高2の期間に「自分はこのテーマをしっかりと探究した」と言える一つのものに会える機会を届けています。そうした経験を積んだ後で、高校3年生になり進路選択のフェーズ来到と、これまでの探究の経験や、また学校生活や部活動など自分が主体的に取り組んできたテーマがたくさんある状態から受験生としての学年が始まります。今度はこれらの経験を言語化するセミナーの中で言葉に落としていくという形です。

今日は桜美林大学のみならず他大学の事例にもたくさんありますとおり、そのような受験生が探究の成果を生かす大学入試に挑戦していくことを応援しています。その後も

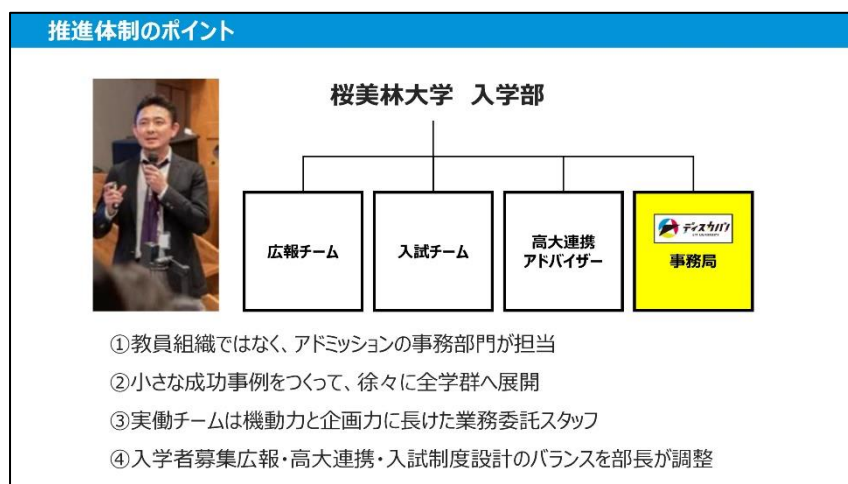
しめでたく合格を勝ち取った場合は、大学に進学後、今度は高校生の伴走支援をする大学生メンターとして活動に加わってもらうというように活動がどんどん循環していくわけです。これがディスカバの高大連携から探究へ、そしてその後の大学入学後の流れまで一連になっているフローになります。



こうした活動は、昨年度ベースで出張授業を32校で行い、放課後や夏休みに101プログラムを実施しました。探究成果の発表会も去年は2プログラムをやりながらどんどん拡大をしていこうというペースになっています。

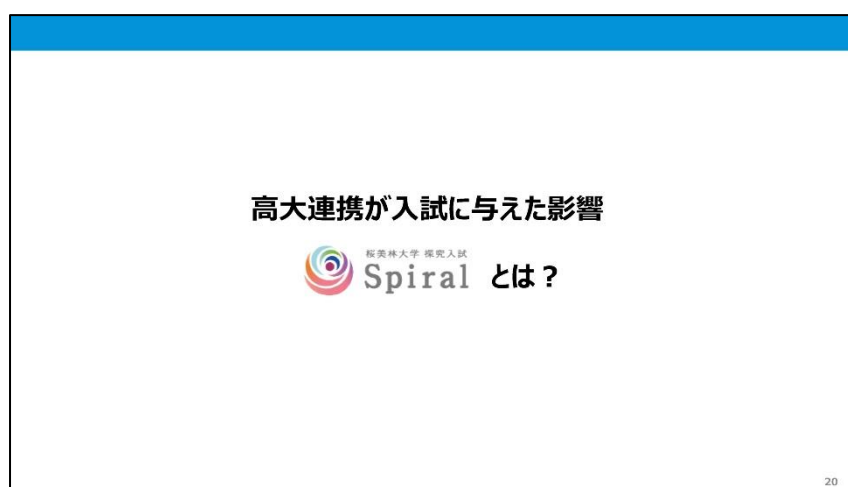


全体としては昨年度で延べ14,867人です。これは1人複数回参加している生徒さんもいますので、ユニークの人数にすると9,705名が参加した形になります。満足度を見ると非常に高く、成長実感も高く得られています。その中で、実はディスカバは桜美林大学が運営しているとそれほど強く公開しアピールしていないのですが、参加をした後に「これは桜美林大学というところがやっていたのですね」という感想も得られ、後々よく考えてみたらこの学びは自分にフィットするということで本学への関心が向上することもあります。



こうした体制を丸 3 年かけて導き出してきたのですが、簡単にうまくいったことばかりではありません。今日は他大学の皆さんからも苦労話をぜひいろいろ教えていただけるとありがたいです。涙ぐましい努力のプロセスがありました。部長の高原の推進が鍵なのですが、まず本学の場合はこれを教員組織ではなくアドミSSIONの事務部門が担当するところから始めました。また「1 万人展開」というのは大きな目標ではあったのですが、最初は小さな成功事例をつくって、それを徐々に各学部に展開していくというやり方を取りました。そして実働チームは私を含めディスカバの事務局ということでアドミSSIONの中に 1 つチームを置いているのですが、機動力や企画力にたけた私を含め業務委託のスタッフが担っており、大学の職員と業務委託のスタッフの連携が非常に重要なポイントになっています。

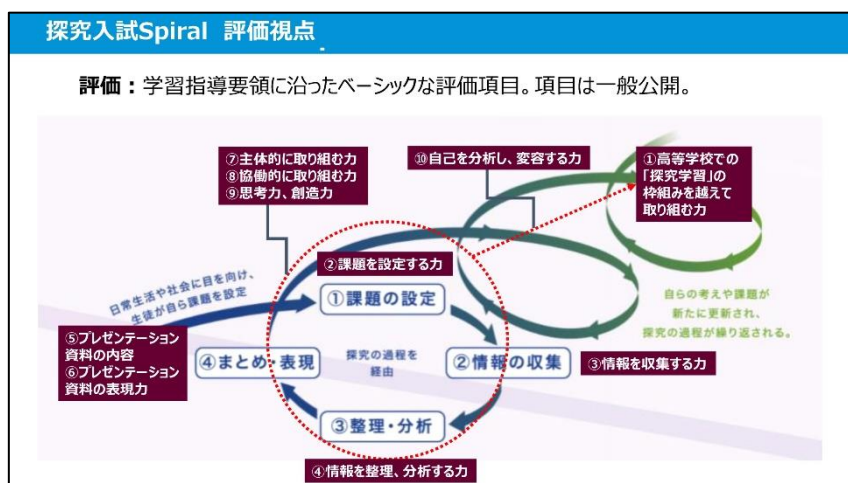
アドミSSIONの部署としては、入学者の募集広報の要素と高大連携の要素、入試制度設計の要素のバランスを損なうと意味を失ってるところがあります。過度に広報的になっても仕方がないですし、かといって高校の支援に偏り過ぎるとアドミSSIONとしての役割や意味を損ないます。このバランスを部長が調整しながら推進しているというのが本学の重要な点になろうかと思います。



そして Spiral という探究の入試が昨年度より始まり、今年度で 2 回目を迎えます。本学の場合はこれを総合型選抜の一方式として位置付けています。これは、新しい学習指導要領の中で位置付けられた探究は大学入試につながります、というメッセージを高校側に発信したいという本学の強い意志表明や思いがあります。また入試の評価基準を完全公開することで、高校側の探究の育成目標と大学入試の評価基準の目線合わせをしていきたいと思いますという表明でもあります。昨年度から試験的にスタートをして、拡大に向けて本年度の方式を公開準備中です。



本方式は、まずは総合型選抜の定員比率 5% から試行的にスタートしました。選抜方法は非常にベーシックで奇をてらったものではありません。探究の経験をアピールする書類を提出してもらい、その後の一次審査は書類審査で、二次審査はプレゼンテーションという非常にベーシックなやり方です。



評価基準も高等学校の学習指導要領にのっとったベーシックな項目にっていて、本学独自の色合いを強く出すというよりは大きな流れの中で高大の目線を合わせていこうというところを強く意識しています。



こうした流れが入学者に質的、量的影響をもたらすのはまだこれからというフェーズなので、今はまだ予兆をお伝えするにとどまります。

探究入試Spiral 入学者事例

2022年4月入学者（大学1年生）の事例

**高3で人材開発を
テーマに株式会社を設立**



リベラルアーツ学群で
心理学とコミュニケーション学を
かけあわせながら学ぶ。

**ディスカバの出張授業をきっかけに、
高3では航空会社に
新しい制服を企画・提案**

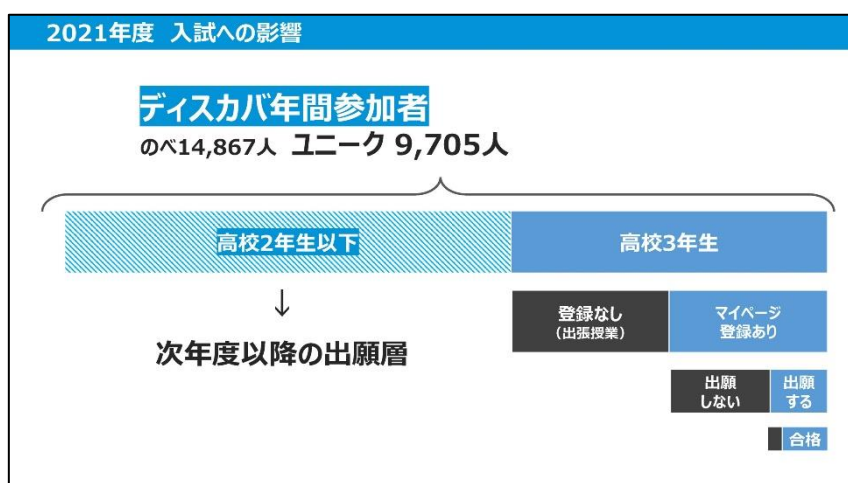


ビジネスマネジメント学群で
グランドスタッフを目指し
エアラインコースに向けて学ぶ。

昨年度始めた探究入試1期生の例です。この志願者は高校3年生で人材開発の株式会社を設立し、高校卒業後は株式会社の経営をして大学には進学しなかったそうです。会社経営を1年やっている間にいろいろと成長の行き詰まりを感じ、改めて学問を学び直しながら経営をやっていこうと本学で学び始めています。または、ディスカバの出張授業をきっかけに高校で航空会社に新しい制服を企画し提案するという探究学習をした高校生は、ビジネスマネジメント学群でグランドスタッフを目指し、航空の道を目指して学び始めています。



これらの入学者も今はメンターとして高校生に関わる形で活動をしていて、どんどん年度を追えば追うほど活動が循環するというのがポイントになります。



最後に入試への影響です。延べ 14,000 人、ユニーク 9,700 人と言いましたが、これがどのように入試にヒットするかというポイントです。実はディスカバは高校 1～2 年生にターゲットを向けていますので、今年度の入試に関わるのが全体の半分ほどになります。その中で本学の入試用のマイページに登録をしない方も半分ほどいます。そしてさらにそこから出願するのはさらにその半分という形で、実は 1 万人の規模がいてもまだ入試へのインパクトはこれからというところになります。ただ、ご覧のとおり次年度以降の出願見込み層が潜在している状態で新しい年度を始められますので、高大連携の積み重ねが確実に入試にヒットしているという手応えを得ています。

課題とポイント
① 単年度では成果が実らない。 導入3ヶ年にしてようやく入学者への影響が見え始めた。 ② 志望度が高くない高校・高校生とも、じっくり付き合うことが重要。 ③ 推進には相応のパワーが必要。 学内の合意形成を推進する調整力と、現場の機動力が欠かせない。 ④ 探究入試は制度が複雑に見えてしまうと敬遠される。 いかにシンプルに整理し、シンプルに広報するか？

まとめです。ご覧いただいたとおりこのように単年度で成果が見えるという趣旨ではありません。本学でも導入丸3年をかけてようやく入学者の影響が見え始めたタイミングです。また、本学への志望度が高くない高校や高校生とのお付き合いをどうしようかという本音が出てくるともあるのですが、ここを割り切らずにじっくりお付き合いをし、高大連携の中で探究を育んでいくことが重要であると感じています。こうした推進にはやはり相応のパワーが必要でして、予算面や調整面など課題は山積みです。学内の合意形成をいかに推進するかということはどの大学さんも悩まれていると思いますが、簡単ではないとかなり感じながらここまでやってきました。また、これを入試に落とすときに制度が複雑に見えてしまうと敬遠されてしまうところがありますので、複雑なものをいかにシンプルに整理し、シンプルに広報するかということを心掛けています。本学もなかなかうまくいっていないのですが頑張っていきたいと思っています。



今後の展望①



桜美林大学
J. F. Oberlin University

「新しい教育学」で
人の成長を支援する

教育探究科学群
2023年4月開設準備中

最後は学群での学びにつなげるために来年度の新学群の設置を見込んでいます。

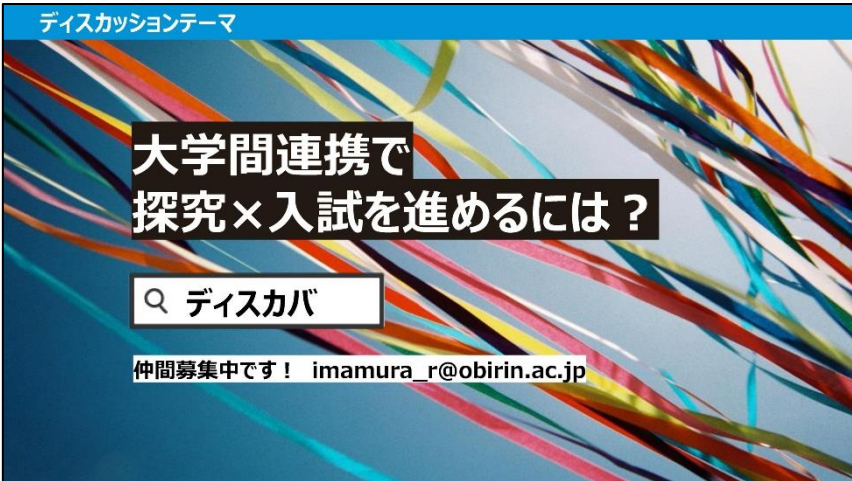
今後の展望②



MISSION
国が進める高大接続改革の
完成年度である
2024年に向けて
3万人に届ける。

こうしたテーマで本日お集りの皆さんで議論ができることを非常にありがたく思っています。単独の大学のみならず大学間連携の中で議論ができる場にできるとありがたいです。

ディスカッションテーマ



**大学間連携で
探究×入試を進めるには？**

🔍 ディスカバ

仲間募集中です！ imamura_r@obirin.ac.jp

これにて桜美林大学からの発表は以上です。中島先生にお戻しします。ありがとうございました。

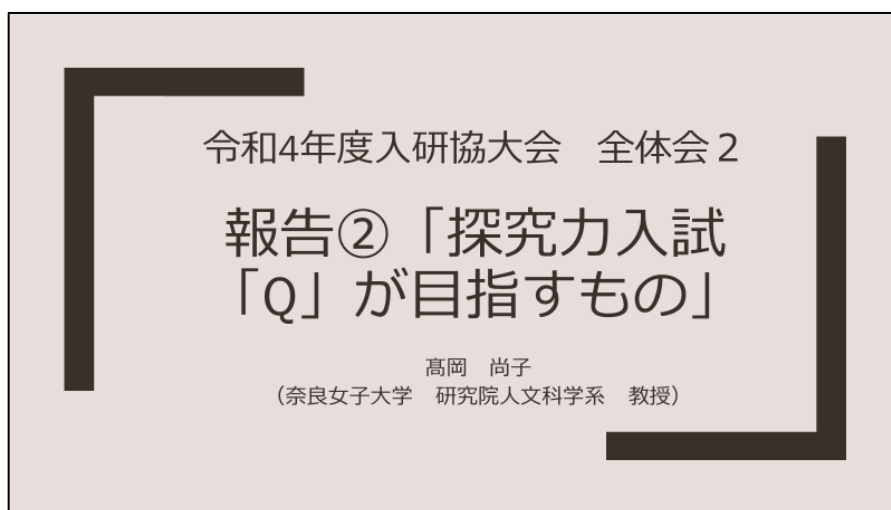
【中島・司会】 高原さん、今村さん、ありがとうございました。時間の都合もありますので質疑応答はまた次の機会にさせていただきます。ありがとうございました。■

全体会 2 ● 報告 2

探究力入試「Q」が目指すもの

■ 高岡 尚子（奈良女子大学研究院人文科学系教授）

【高岡】 奈良女子大学の高岡尚子です。



研究院人文科学系と書いていますが、これは大きく文学部と捉えてください。今回は、文学部の構成員の1人として入試に携わっている立場からお話をします。

①「総合型選抜 探究力入試『Q』」 導入の背景




奈良女子大学の総合型選抜
来たれ！探究好き

- これからの学生に求められる「探究力」
- 高校までに自分で見出したテーマについて独自に探究する意欲をみるという形の入試を「総合型選抜」として設計し、「総合型選抜 探究力入試「Q」」と名づけた。
- 多様な学生が入学することで、学びのあり方や各自が取り組む研究の内容が、相互に影響し合うことも含め、重層的かつ豊かになる。



奈良女子大学
Nara Women's University

奈良女子大学で現在行っている探究力入試は「Q」という名前を付けているのですが、

まずはこの導入の背景をご説明します。先ほどから高等学校の学習指導要領の改訂の話が出ていますが、これからの学生に求められる力として総合的な探究の時間が設けられています。改訂以前にも既に総合的な学習の時間があり、こちらでも重視されていた探究的な学習を展開し、それによって探究力を身に付けた高校生が大学でさらにその力を深めていくことを目指すものです。そこで、高校までに自分で見いだしたテーマについて独自に探究する意欲を見るという形の入試を新たに総合型選抜として設計し、総合型選抜探究力入試「Q」と名付けました。

名称の「Q」ですが、これは日本語の探究の「究」、それから英語の「question」「quest」の「Q」です。単に答えを出すのではなく、自分で問いを立ててそれを解き明かしていくことが好きな人を、この入試は歓迎します、とうたっています。そういった学生が一般選抜とは異なる形で入学してくることによって、学びの在り方や各自が取り組む研究の内容が、相互に影響し合うことも含め、重層的かつ豊かになることを目指しました。そこで作り上げたのが次のコンセプトです。

**奈良女子大学 総合型選抜 探究力
入試「Q」のコンセプト**

■「大学にいるのは教師と生徒ではありません。教員も学生もともに探究をする者として同じ地平に立ち、互いの知的関心を尊重しながら進んでいく。それが大学です。」

■「そこでは、試験問題等を解くべく身につけた勉強の能力だけではなく、日頃から瑞々しい問いを抱き、考え、答えをだし、さらにそれを疑う力が大切です。」

「総合型選抜 探究力入試「Q」の実施にあたって」より
<http://koto.nara-wu.ac.jp/nyusi/qnyusi/message/index.html>



奈良女子大学
Nara Women's University

こちらに書いてあるとおり、大学にいるのは教師と生徒ではなく、どちらも探究する者として同じ地平に立ち、互いの知的関心を尊重しながら進んでいくのだということです。そこでは試験問題等を解く勉強の能力のみならず、日頃からみずみずしい問いを抱き、考え、答えを出し、さらにそれを疑う力が大切ですよということを、「総合型選抜 探究力入試『Q』の実施にあたって」というトップページに掲げています。これからお話する内容については、奈良女子大学の Web サイトの入試のページから入っていただきますと、Q入試のコーナーが設けられていますので、詳しくはそちらをご参照ください。

②文学部の「総合型選抜 探究力入試『Q』」では何をみるか？

- 「文学部総合型選抜 探究力入試『Q』」では、高等学校での教科や総合的な学習の時間および課外活動を通じて得た興味や関心、基礎知識をもとに
- 文学部で特定のテーマを探究する意欲とそのための基礎学力、思考力、表現力をみます。」

「総合型選抜 探究力入試『Q』文学部」より

<http://koto.nara-wu.ac.jp/nyusi/qnyusi/bungaku/index.html>

- 「大学入学共通テスト」は課さない



奈良女子大学
Nara Women's University

それによって出来上がった入試方法を、「Q 入試」と私たちは呼んでいるので、今からこのように呼ばさせていただきます。「Q 入試」には 3 つの特徴があります。1 つは、一般選抜ではなく総合型選抜であり、大学入試センターによる大学入学共通テストは合否判定には用いていません。2 つ目として、探究の力を存分に発揮できる多彩な選考方法があります。のちほど文学部の取り組みについてお話しますが、それぞれの学部・学科、選抜単位によって独自の選抜方法を提供しています。例えば事前課題に取り組んだり実験をしたりといったことです。

3 つ目として、この入試には全学部が参画していて、募集人員は計 46 名です。全入学定員の約 10% になります。奈良女子大学はあまり規模の大きくない国立大学で、学部は 4 つあります。文学部、理学部、生活環境学部、新しくできた工学部の 4 学部です。規模は小さいのですが、学びの分野がバランスよく揃った総合大学をフィールドに活躍してみませんか、といううたい文句を設けています。

ここからは詳しくは文学部についてのお話をしていきます。奈良女子大学の文学部には 3 つの学科がありますが、一般選抜での入学は学部で一括募集をしており、最初から学科に所属することはありません。また、Q 入試の募集人員は 12 名以内としており、これは一般選抜前期日程の募集人員 95 名中に含まれます。

それでは具体的に文学部の Q 入試の内容をご紹介します。こちらホームページに掲載しておりますが、文学部の Q 入試では、高等学校での教科や総合的な学習の時間および課外活動を通じて得た興味や関心、基礎知識を基に、文学部で特定のテーマを探究する意欲とそのための基礎学力、思考力、表現力を見ます。高校での総合的な探究の時間や、教科の中での探究、あるいは教科時間以外の課外活動の中で得た興味や関心などがあると思いますので、そういったものを文学部で特定のテーマに落とし込んで、見せていただきたいということです。


 奈良女子大学
Nara Women's University

■ 文学部の学問と探究力の位置づけ

「文学部の学問は、人と社会との関係や表現活動について考えることを通して、私たち人間がどのような存在であるのかという問いを究めようとするものです」

←本を読んで考察するのが好き・調べるのが好き・何かをとことん見極めたいという内的動機と、それをどうすれば「わかるようになるか」という手段を考え、実践し、考察の結果として表現する

←高校生の間に培ってきた「探究力」とそのポテンシャルを、奈良女子大学文学部で学ぶことのできる「4つのテーマ」に落とし込む形でみせてもらいたいという意図

その際には文学部における学問についての考えを理解していただく必要があります。それは「文学部の学問は、人と社会との関係や表現活動について考えることを通して、私たち人間がどのような存在であるのかという問いを究めようとするものです。」というものです。これを受けて、本を読んで考えることが好き、気になった問題について調べるのが好きといった、大きくまとめると、何かをとことん究めたいという内的動機と、それをどうすれば分かるようになるかという手段を考え、実践し、考察の結果として表現してもらいます。このような形で高校生の間に培ってきた探究力とそのポテンシャルを、奈良女子大学文学部で学ぶことのできる 4 つのテーマに落とし込む形で見せてもらいたいというのが、この入試の設計意図です。


 奈良女子大学
Nara Women's University

③文学部「総合型選抜 探究力入試『Q』」の4つのテーマ

- ことばと人間の探究
- 社会と人間の探究
- 地域と環境の探究
- ならの探究

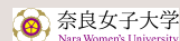
←それぞれのテーマについて、
「求める学生像」
「入試でみる能力」
「探究の道すじ」
(入試／入学後)
を提示

ではその 4 つのテーマとはどういうものかということですが、現在掲げているテーマは、「ことばと人間の探究」、「社会と人間の探究」、「地域と環境の探究」、「ならの探究」の 4 つです。なぜこの 4 つにしたかというと、文学部には 3 つの学科があつてかなり広

④選抜方法・評価の観点

○選抜内容とスケジュール（文学部の「Q」）

- 第1次選考：提出書類による（出願期限：9月上旬）
- 第1次選考結果発表： 9月中旬
- 第1次選考合格者にレポート等課題を課す（提出期限：10月中旬）
- 第2次選考： 10月中～下旬
- 合格発表： 11月上旬
- 入学手続き： 11月下旬



続いて選抜方法と評価の観点です。まずは全体像を選抜のスケジュールとともにご紹介します。文学部の Q 入試では、選抜方法は第一次選考と第二次選考の 2 段階で、第一次選考は提出書類によります。第一次選考の結果発表時に、合格者には、レポート等の課題を送付します。およそ 1 か月後にレポート等課題を提出していただき、それをもって第二次選考に臨むという形になります。合格発表、入学手続きについては、このようなスケジュールとなっています。

○第一次選考（書類による評価）

- 出願書類：出身学校長が作成した調査書等の他

志望理由書（出願者本人が作成）

「募集要項のテーマ別の求める学生像を参照のうえ、①あなたが上記のテーマを選択するに至ったこれまでの「探究」の体験や学びについて、具体例をあげて説明してください。また、②大学入学後にその体験や学びをどのように生かしてどんなことを「探究」したいと考えているのかも記してください。」

←選択したテーマについて、出願者がこれまで実際に行ってきた「探究の体験や学び」の過程をみる／それがどのような探究に結びつくかという応用力（さらなる探究の可能性とそれを行うための強い意欲）をみる



さて、それではここから具体的に第一次選考の内容と、どのような意図で評価をしているかということについて説明します。第一次選考の書類は三点です。1 つは調査書です。2 つ目に志望理由書ですが、こちらは出願者本人に作成していただきます。ここにどのようなものを書いてもらうかですが、文学部 Q 入試の趣旨を理解し、募集要項のテーマ別の求める学生像をきちんと読んでもらった上で、あなたが上記のテーマを選択するに至ったこれまでの探究の体験や学びについて具体例を挙げて説明してください、それから大学入学後にその体験や学びをどのように生かしてどのような探究ができるかも書いてください、ということを求めています。

4つのテーマについては複数選択はできませんので1つだけ選んでもらいます。出願者がこれまで実際に行ってきた探究の体験や学びの過程を見せてもらうのと同時に、それがどのような探究に結び付くのかということを示していただき、それによって応用力と、探究の可能性とそれを行うための強い意欲を見せてもらいます。


 奈良女子大学
Nara Women's University

○第一次選考（書類による評価）

■ 出願書類：志願者評価書（本人の探究活動をよく知る人が作成）

「本評価書は、あなたが志望する「探究」に関連して、あなたのことを良く知っている方に、客観的かつ具体的に作成することを依頼してください。依頼時には、評価者に下枠内の1.～2.を伝え、上、志望理由書のコピーを必ずお渡しください。」

■ 「テーマに関する志願者評価書」を作成される方へのお願い

「本評価書は、奈良女子大学総合型選抜 探究力入試「Q」で志願者が提出する書類の一つとなっています。志願者が作成する「志望理由書」をよくお読みいただき、客観的立場から作成をお願いします。」

次の3つ目の書類はやや独特なのですが、志願者評価書というもので、本人の探究活動をよく知る人に作成してもらうことになっています。この書類の説明として、志願者本人宛てのメッセージと、それを書いていただく方へのメッセージを2つに分けて書いています。まず志願者に対しては「本評価書は、あなたが志望する「探究」に関連して、あなたのことをよく知っている方に客観的かつ具体的に作成することを依頼してください」としています。また、依頼時には、志望理由書のコピーを必ず渡すように伝えています。書いていただく方へのメッセージとして、「本評価書は奈良女子大学総合型選抜、探究力入試「Q」で志願者が提出する書類の1つとなっています。志願者が作成する志望理由書をよく読んでいただいて、客観的立場から作成をお願いします」と指示しています。

これによって何を求めているかということですが、探究活動そのものは志願者個人の体験、あるいは学びであるわけですが、当然それには周囲からの助言や進言、サポート、協力などが欠かせません。このような第三者からの客観的評価を出願書類に加えることで、個人の探究意欲に加えて周囲からのサポートも得たより充実した探究の経験や学びを行ってもらいたいという意図があります。加えて、この書類の存在は本人が志願者評価書を書いてくれる人に対して、自分の探究活動がどのようなものであるかということ、いったん立ち止まって自分のこれまでの経験を振り返り言語化する機会にもなります。先ほどのご発表の中でもキーワードになっていましたが、いったん言語化を行うことで自分の探究活動について振り返る機会を持ってもらえると考えています。



奈良女子大学
Nara Women's University

○第一次選考通過者には、**指定図書・指定資料（前年度試験終了後にweb上で公開済）**に関するレポート等の課題に取り組み、提出してもらう。

← 独自に「探究活動」を設計・実行・表現できるかどうか、そのポテンシャルと応用力を見る

○第二次選考

「①**指定図書・指定資料に関する小論文**（テーマによっては、題材の中に英語を含むことがあります）」

「②**口述試験**（受験生が提出した課題レポート等についての質疑応答）を実施し、総合的に判定します。」

← 各テーマを探究するための基礎学力、思考力、表現力をみる

次に第一次選考通過者ですが、合格した方には指定図書か指定資料に関するレポート等の課題を送付します。それに対して1か月程度の間に、課題に取り組み、その成果を提出していただくことになります。ここで「指定図書・指定資料」としているものですが、こちらは前年度の試験終了後に、Web上に公開しています。例えば次回の2023年度入試ですが、2022年度の入試が昨年の11月に終わった時点で検討を始め、12月にはWebで公開しています。ですので、2023年度入試の指定図書と指定資料は既にご覧いただける状態になっています。

このように指定図書と指定資料を公開しておくことで前もって取り組んでもらうということもありますし、それについてのレポートを課すことによって独自に探究活動を設計、実行、表現できるかどうか、そのポテンシャルと応用力が見られると考えています。

第二次選考ではその指定図書と指定資料に関する小論文をまず課します。それを書いていただいたうえで、さらに口述試験を行います。こちらは受験生が提出した課題レポートについての質疑応答です。小論文と口述試験を総合的に判断し、可否を決定します。各テーマを探究するための基礎学力、思考力、表現力を見ています。

■ [ことばと人間の探究] 指定図書 ■ 伊藤亜紗・中島岳志・若松英輔・國分功一郎・磯崎憲一郎『「利他」とは何か』集英社新書, 2021年 ■ 北村紗衣『批評の教室-チョウのように読み、ハチのように書く』ちくま新書, 2021年	■ [社会と人間の探究] 指定図書 ■ 内藤正典『外国人労働者・移民・難民ってだれのこと?』集英社, 2019年 ■ 筒井淳也『結婚と家族のこれから：共働き社会の限界』光文社新書, 2016年
■ [ならの探究] 指定図書 ■ 奈良女子大学文学部なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド-こだわりの歩き方』昭和堂, 2009年 ■ 網野善彦『日本中世に何が起きたか-都市と宗教と「資本主義」』角川ソフィア文庫, 2017年 ■ 河添房江『唐物の文化史-舶来品からみた日本』岩波新書, 2014年	■ [地域と環境の探究] 指定資料 ■ 国土地理院発行1/25,000地形図 ■ 参考図書： ■ 伊藤喜栄・藤原吉浩編『図説21世紀日本の地域問題』古今書院, 2008年 ■ 岸由二『「流域地図」の作り方-川から地球を考える』ちくまプリマー新書, 2013年 ■ 山下祐介『地域学をはじめよう』岩波ジュニア新書, 2020年

4 つのテーマに関するそれぞれの指定図書と指定資料についてはスライドをご覧ください。少し見にくいので、またホームページのほうでご確認ください。

第一次選考と第二次選考ともにそうなのですがこの入試では 4 つのテーマを設定しており、それぞれ 4 つの違うテーマに対して受験生が出願してくるため、統一した評価の基準が必要です。こちらは公開はしていませんが、基礎学力、思考力、表現力などの能力が見られるような、そして探究力に対する意欲が見られるような内部での基準を持っています。

⑤合格後の道すじ



- 入学前教育（4つのテーマに共通）
「第2次選考の合格者には、スクーリングを含む入学前指導を行う予定です。（遠方者や、スクーリングの日に高等学校の行事などがある場合は、別途対応します。）」
- 入学後の「探究」（4つのテーマに共通）
「この入試で入学した学生には、1年次前期に「探究入門」の授業が開講されます。また、2年次以降は、テーマごとに予め定められた学科やコースに所属しながら、「探究」を続けます。」

合格後は入学前教育を行います。第二次選考の合格者にはスクーリングを含む入学前指導を行います。また、Q 入試で入学した後も 1 年次の前期には探究入門という特別の授業があります。

⑥まとめ



- 奈良女子大学文学部「探究力入試「Q」」
- 内発的な「問い」を「課題」ととらえ、調査・考察する方法をみずから見出し、実践し、まとめる力＝「探究力」
- 文学部で学べる学問分野の輪郭を「4つのテーマ」として提示
- 出願よりかなり前に公開する「指定図書・指定資料」によって、「4つのテーマ」のイメージを具体的に示す

[評価のポイント]

- 「探究力」とその表現方法（第一次選考）
- 「探究」のための基礎／応用力と「探究力」のポテンシャル（第二次選考）

まとめに入ります。奈良女子大学文学部総合型選抜探究力入試「Q」は、内発的な問いを課題として捉え、調査し考察する方法を自ら見だし、実践しまとめる力を探究力と捉えます。文学部で学べる学問分野の輪郭を 4 つのテーマとして提示し、出題よりかなり

前に公開する指定図書と指定資料によって 4 つのテーマのイメージを具体的に示すようにしています。評価のポイントとしましては探究力とその表現方法を第一次選考で、探究のための基礎と応用力と「探究力」のポテンシャルは主に第二次選考で見させてもらっています。

最後にご参考までにですが、2 年分の入試が終わっています。Q 入試の募集人員は 12 名以内で、初年度には 62 名の出願者がありました。第二次選考に進んだ方が 20 名、合格は 9 名、入学者は 9 名です。同様に 4 年度は 12 名に対して出願者が 48 名でした。二次選考に進んだ方は 16 名、合格者は 7 名、入学者は 7 名です。

私の報告は以上です。実際に入学した学生がどういう考えを持っているかなどをまた時間があればご紹介したいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

【中島・司会】 高岡先生、ありがとうございました。奈良女子大学の Q 入試について文学部の例を参考に教えていただきました。ありがとうございます。Q&A に質問を書いていただけると後で取り上げてご回答いただく形にしたいと思います。時間が来ていますので高岡先生のご報告はこれまでとします。ありがとうございました。■

全体会 2 ○ 報告 3

へるん入試が求める学びのタネをどう育てるか

■美濃地 裕子（島根大学教育・学生支援本部大学教育センター准教授）

どうぞよろしくお願いいたします。私は島根大学の大学教育センターに所属しており、入試と高大接続を担当しています。

全体会 2 「探究活動を入試でどのように評価するか」

「へるん入試」が求める学びのタネを どう育てるか

（島根大学 教育・学生支援本部 大学教育センター） 美濃地 裕子

本日の要旨

- 1 なぜ、学びのタネを重視するのか
- 2 アドミッション・ポリシー
- 3 評価の仕方
- 4 育成型入試としてのへるん入試

出願前教育 → 入学前教育 → 初年次教育

本日はこの流れで説明いたします。

島根大学総合型選抜

へるん入試[®]

HEARN
ENTRANCE EXAM



あなたの **学びのタネ**

【大学の学びに必要な、特定の領域・専攻に、
最も強い好奇心と探究心】を重視します。

「へるん」とは

小泉八雲
ラフカディオ・ハーン (1850~1904)のこと

ハーンが滞在した松江では
親しみをこめて今でも
「へるん」と呼称しています

ハーンは
文学者・新聞記者・民俗学者・英語教師として
多方面で才能を発揮し
異文化の架け橋となりました

「へるん」さんの魅力と才能の多様性を
高校生の持つ多様な可能性に
重ね合わせました

まず「へるん」という名称についてです。明治期に島根県松江市に住んだラフカディオ・ハーンという人で、文学者の他にいろいろな顔を持っています。帰化して小泉八雲となりました。この方の愛称「へるんさん」から来ています。いろいろな才能をもつへるんさんなのですが、高校生のもつ多様な可能性に重ね合わせて命名しました。

えっ
なんか へんだなあ

どうして
なんで

すごい
すてき

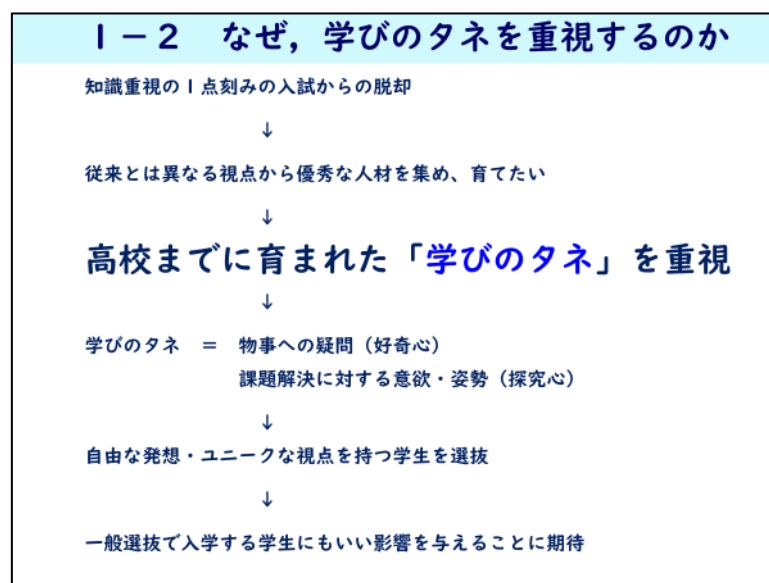
違和感

好奇心
探究心

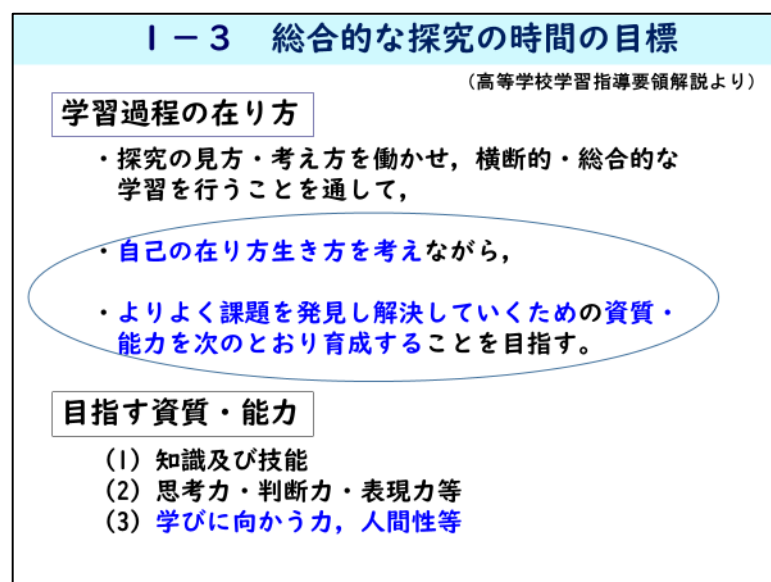
憧れ

へるん入試では、「あなたの学びのタネを重視します」をキャッチフレーズにしています。「学びのタネ」とは、高校生の持っている知的な好奇心や探究心のことです。感動、違和感、疑問、課題意識、こういったものの全部が「学びのタネ」です。資格など何かの成

果ではなく、どのような志向性を持っているのか、興味を持っているのか、これらを「学びのタネ」と名付けました。物事に対する違和感、好奇心、探究心、憧れも「学びのタネ」です。



では、なぜへるん入試で「学びのタネ」を重視するのかですが、知識重視の入試から脱却し、従来とは異なる視点から募集し選抜し、入学した学生を育てたいという意図からです。へるん入試で入学した学生は、一般選抜で入学する学生にもいい影響を与えるであろう、と期待しました。



さて、ここで「総合的な探究の時間」の目標について、学習指導要領解説から抜粋します。「学習過程の在り方」の2つ目と3つ目をご覧ください。「総合的な学習の時間」とは異なり「総合的な探究の時間」は、自己の在り方や生き方を考えながら、課題を発見し

解決していくための資質・能力を育成することを目指す、とあります。自分自身の生き方や在り方を考えることと課題解決能力を育てていくこと、これを不可分の一体的なものとして目的にしているということです。そして目指す資質・能力は、3つをバランスよく、ということです。特に、3つ目の「学びに向かう力」「人間性等」。こういった主体性等のところをへるん入試では重視したいと考えました。

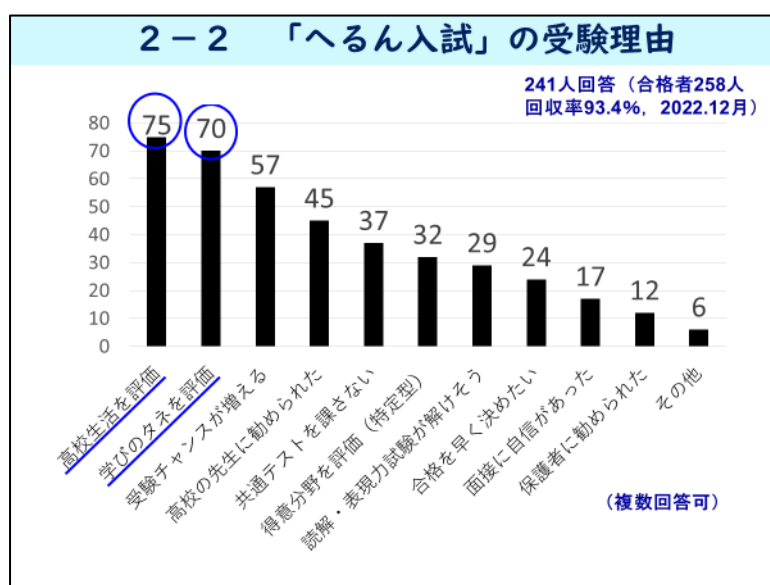
2-1 アドミッションポリシー

具体的には以下のような学生を求めます

- ・ 大学での学びに必要な**基礎的学力**を有する人
- ・ 特定の学問・教科に**関心**を持ち
それに**継続的に向きあったことのある人**
- ・ 知的**好奇心**を有し、
それを主体的・積極的な**探究**により
深めた経験のある人
- ・ 他者と**協働**して何かをなし
それを自らの学びに役立てたことのある人

学びのタネ

こちらはへるん入試のアドミッション・ポリシーです。4つの学部でへるん入試を行いますが、このアドミッション・ポリシーは全て共通です。大学での学びに必要な基礎的学力はもちろん必要なのですが、特に2つ目と3つ目。関心や知的好奇心を持っているのか。「学びのタネ」です。一時的なものではなく、そういったものに継続的に向き合った、主体的に積極的に探究で深めたなどの経験のある人を求めています。



では、こういったアドミッション・ポリシーに対して、実際どのような学生が入学してきたのでしょうか。これは、この春にへるん入試で入学したへるん入試 2 期生に当たる人を対象にしたアンケートの結果です。258 人の入学者に対し 90%以上の回収率があり、241 人が答えたものです。複数回答可なのですが、へるん入試の受験理由を尋ねたところ、8 割近くの人が「高校生活で頑張ったことを評価してくれるから」、7 割の人が「学びのタネを評価してくれるから」と回答しています。まさに私たちが狙った高校段階の活動を評価したいというところを理由としてきてくれたことが分かりました。

その合格者を担任した高校の先生に、へるん入試の出願や受験を通して生徒さんが成長した、変容したと感じますかという問い掛けをしたところ、99%の先生から、変容や成長を感じるという答えをいただきました。これもへるん入試の意図したところで、入試では高校段階のことをしっかり評価するし、受験生には入試を通して成長してほしい、育てほしいと意図して設計した入試がどうだったのか、検証できたと考えています。このことに関しては、明日の第 4 セッションでも説明します。

総合型選抜「へるん入試」志願者数・志願倍率				
	令和4年度		令和3年度	
	志願者数	倍率	志願者数	倍率
法文学部	109	1.8	122	2.0
教育学部	37	3.7	41	4.1
総合理工学部	184	1.6	124	1.1
生物資源科学部	107	1.5	78	1.1
総合計	437	1.7	365	1.4
募集人員	257		254	

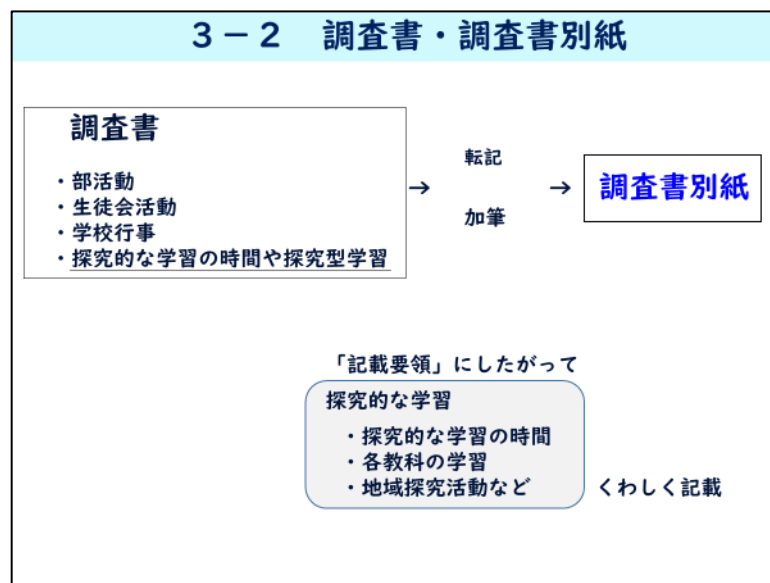
さて、へるん入試の規模感ですが、今 2 年分が終わったところです。令和 3 年度入試では 254 人の募集に対し倍率は 1.4 倍です。令和 4 年度入試では 257 人の募集に対し、少し倍率が上がり 1.7 倍でした。広報の結果も出てきたのか、理系の学部において、志願者が増えている状況です。今後へるん入試は拡大し、257 人をさらに増やしていく予定です。



もう 1 つの規模感です。島根大学の学部入試は一般選抜と特別選抜がありますが、その募集人員はこのような割合になっています。一般選抜で 7 割を切ります。特別選抜が今 32%です。そのうち、共通テストを課さない総合型選抜のへるん入試は 22%。今後さらに、へるん入試の割合を増やしていきます。

3-1 求める力（評価する力）					
「へるん一般型」（生物資源科学部）					
区分	選抜方法	知識・技能	読解力・ 思考力・ 表現力	協調性・ 協働性	知的な好奇心・ 探究心
提出書類 80点	「調査書」及び 「クローズアップシート」	◎		◎	◎
筆記試験 100点	読解・表現力試験		◎		
面接試験 100点	志望理由書を用いた 「面接」	○	○		◎

こちらは、「へるん一般型」の生物資源科学部の場合ですが、どのような方法で、どのような力を評価するかを表にしたものです。学力の 3 要素をバランスよく評価したいということです。書類と筆記試験、面接によって評価します。特に右側の 2 つ、主体性等に当たるところで、協調性・協働性と知的な好奇心・探究心を、提出書類や面接で評価するという設計です。



では、実際どのような書類が必要なのか。まず、担任の先生に書いていただく調査書で、このような項目を評価します。上の 3 つは調査書別紙の表形式のところに記入していただくのですが、一番下の探究的な学習の時間や探究型の学習については、記載要領に従って少し詳しく書いていただく欄があります。総合的な探究の時間のみではなく、例えば教科における探究的な学びや課外における探究的な活動でもいいのです。そこでの主体性や探究心がどのようなものであったかを記述していただくようにしています。

調査書別紙 主体性・探究心に関する記述

探究的活動に対する主体性、探究心に関する特徴を具体的に記述してください

(1) 主体性の具体

活動の意義を認識し
具体的に取組んだことや取組みに対して振り返りが行われ
失敗や問題を克服しようとしたことなどを簡潔に記述してください

(2) 探究心の具体

情報収集を積極的に行ったことや
仮説、検証の手続きをとることができたことなど簡潔に記述してください

その際、本人から面接や質問票等によって、以下のことを確認し記述されることが望ましいです

- ① なぜそのテーマや問題・課題を探究しようと思いましたか
- ② 探究的な取り組みをする中で、どんな気づきがあり
そのことを活動の中にどう活かそうとしましたか
- ③ 探究的な取り組みをする中でどんなことに苦勞しましたか
- ④ 探究的な取り組みをしたことによって得られたことは何ですか

次のような注意書きを付けています。事前にご本人との面接、あるいは質問票等によって、なぜそのようなテーマを選んだか、どのような気づきがあり、また苦勞をしたのかなども聞き取っていただくことが望ましいです。

昨日は、総合的な探究の時間の評価について、小野試験・研究統括補佐官からご説明がありました。学習過程の評価で「成長をしっかり見取る」、「目標や評価結果を生徒と共有する」などが大事、とありました。へるん入試における調査書別紙には、まさにそういった成長の見取りや生徒さんと共有したことについて、記載していただきたいのです。

3-3 クローズアップシート

「クローズアップシート」は 志願者が記述するものです

高校段階の活動の中で最も力を入れて取り組んだものを
一つだけ挙げて

- ・その活動にどう取り組んだのか
- ・振り返って記述してください

800字程度にまとめてください。

※ 志望理由書に記載する「学びのタネ」に
関係があることでも
ないことでも かまいません

体験したことを 言葉にして、価値づけする

- ① 問題・課題を探究しようと思った理由・きっかけ
- ② 苦勞したこと・失敗したこと
- ③ 取り組みの中の気づきと気づきに基づく発展
- ④ 取り組みによって得られたこと

ここからは生徒さんが記述する書類です。「クローズアップシート」は、高校段階の活動の中で最も力を入れて取り組んだものを1つだけクローズアップして振り返ってください、というものです。高校での活動の振り返りや、自分自身の客観的な成長等を書いてもらいます。このようにして体験したことを言葉にし価値付けをします。生徒さん自身の成長にもつながるでしょうし、このことによって未来に展望を持つことにつながるでしょう。

3-4 志望理由書

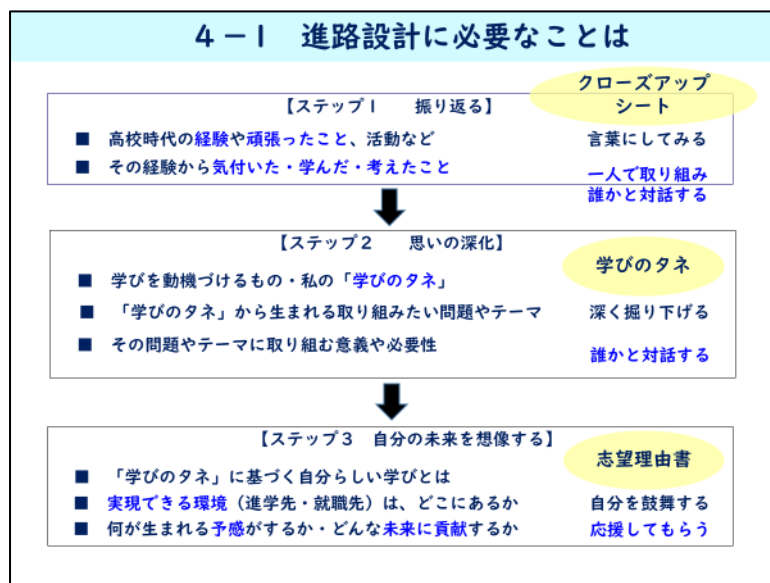
「志望理由書」は、志願者が記述するものです

- ・ **学びのタネ**
 - ・ 学びのタネは40字以内で記述します
 - ・ 簡潔な記述でも構いません
 - ・ 記述した字数の長短は問いません
- ※ 今後、記載例をホームページに掲載しますので参照してください
- ・ **なぜ島根大学で学びたいのか**
何を、どう学びたいのか を記述します

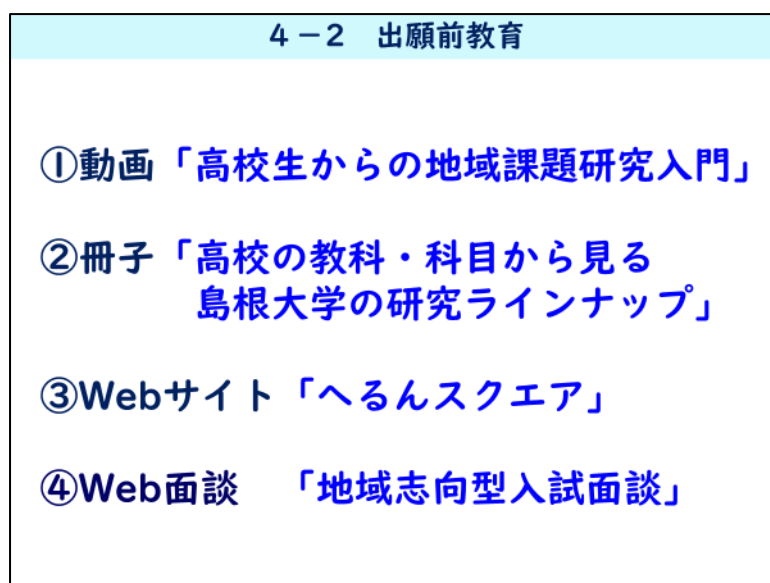
次に志望理由書です。「学びのタネ」を40字で書いた上で、なぜ島根大学で学びたいのか、何をどう学びたいのかを書いてください、としています。

- ・ 物理の知識を極めて
 地域に貢献する人材を育てる教員になりたい。
理科教育学
- ・ プログラム言語は学校以外でも自学しており
 将来はシステムエンジニアになる。
ソフトウェア工学
- ・ 世界一エコで暮らしやすい家を作る。
建築環境工学
- ・ 生命の本質に迫りたい。
分子生物学
- ・ 効率的な農業生産と快適な暮らしを両立させて
 豊かで元気な農村社会を実現する。
農村経済学

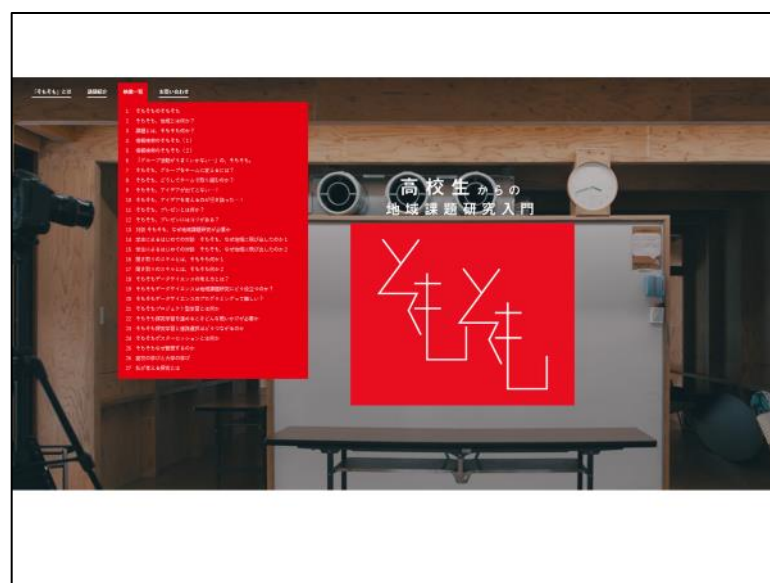
これは「学びのタネ」の例です。「学びのタネ」について考えたときに、これは学問分野でいえば理科教育学なのだ、ソフトウェア工学なのだというふうに考えていただけると、学部や学科の志望につなげることができます。



まとめに入っていきます。進路指導あるいは進路を設計するステップには3つあると考えます。1つ目は、高校時代の経験や気づきを振り返る段階。ここでは言語化、言葉にすることが必要です。2つ目に、その思いを深化させる段階です。島根大学では「学びのタネ」というキーワードを表示していますが、これにより、自分は何に対して問題意識があるのか、そのことが未来や社会にどうつながるのかを掘り下げる段階です。3つ目は、その振り返りを基に未来を創造する段階です。「学びのタネ」をどこで、どのような大学で誰と一緒に学びたいのか、どんな未来に向かって行くのか。こういったことを想像する段階です。これらは1人で取り組む段階と、誰かと壁打ちをしてもらって対話をする段階、そして具体的に書いて周囲から応援してもらう段階とも言えます。へるん入試では、このように、「クローズアップシート」で言葉にする段階、「学びのタネ」について考える段階、志望理由書を書く段階と、まさにステップを踏んでいただけていると思っています。



さて、ここからは出願に至るまでの大学側のサポートについてです。出願前の段階で高校生に考えてもらうツールとして、動画や冊子、Web サイト、面談などを用意しています。



動画コンテンツは「地域課題研究に取り組んでいる君に！」としています。今 27 本を上げています。なぜ地域課題について学ぶのだろうか、アイデアが出ないときにはどうしたらいいのだろうか、プレゼンテーションはどうしたらいいのだろうかなど、答えではなくヒントの形でそれぞれ 5 分程度の動画で提示しています。どなたでもご覧いただけます。

高校の教科・科目から見る 「島根大学の研究ラインナップ」

この冊子について

高校の教科・科目から見る
島根大学の
研究ラインナップ

大学について、何を調べたいんだろう？ どうやって調べたいんだろう？
得意な教科・科目から、興味のある分野を探してみよう！
島根大学の研究のラインナップを知りたい！
島根大学の研究のラインナップを知りたい！

この冊子について

高校で学習する教科・科目から
島根大学の教員の研究を
のぞいてみる冊子です

大学について

何を調べたいんだろう
どうやって調べたいんだろう
と思っている人

**バラバラと
自分の好きな教科・科目を
のぞいてみてください**

あなたの好奇心とつながる
大学教員の専門を
探し出すことが大学選択です

あなたの好奇心が
島根大学へとつながると
嬉しいです

01 国語

佐田 健二 (オサダ ケンジ)

国語科 国語教育

国語科 国語教育

国語科 国語教育

佐田 健二 (オサダ ケンジ)

国語科 国語教育

国語科 国語教育

国語科 国語教育

田中 健二 (タナカ ケンジ)

国語科 国語教育

国語科 国語教育

国語科 国語教育

田中 健二 (タナカ ケンジ)

国語科 国語教育

国語科 国語教育

国語科 国語教育

内藤 忠和 (ナカノタケカズ)

国語科 国語教育

国語科 国語教育

国語科 国語教育

内藤 忠和 (ナカノタケカズ)

国語科 国語教育

国語科 国語教育

国語科 国語教育

02 地理歴史

野本 深美 (ノモト コカミ)

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

野本 深美 (ノモト コカミ)

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

福田 健二 (フクダ ケンジ)

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

福田 健二 (フクダ ケンジ)

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

井上 亮 (イノウエ リョウ)

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

井上 亮 (イノウエ リョウ)

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

地理歴史科 地理歴史教育

こちらは冊子です。大学の研究というのがなかなか見えにくいということで、それを高校の教科を索引にして見てもらうというものです。例えば、国語や地理歴史が得意だ、好きだというときは、そのページを開けてもらいます。すると、その教科の奥や広がりのところ、このような研究をしている先生が島根大学にはいる、ということで、キーワードとともに 140 字以内で研究を紹介しています。QR コードからはその先生がお持ちのホームページや学科のサイトに飛ぶことができます。「学びのタネ」を研究と結び付けるツールとしてもご活用いただけます。



こちらは「へるんスクエア」というサイトで、へるん入試に関するいろいろな情報や動画、パンフレット、学びのタネについて等を見ることができます。

地域志向型入試 Web 面談

あなたと島根大学職員との対話の場です
 あなたの想いを聞きながら
 あなたのやりたいことについて一緒に考えます
 職員との対話（面談）から
 自分だけのストーリーを掘り起こし
 まち・ひと・未来をつくる自分をイメージしてみませんか

【参加者感想】

「自分の進みたい方向へ勇気をもらった」
 「自分の考えはまだあいまいで
 もっと地域について具体的に考えていく必要があると気づいた」

・対象 全国の高校生 ※ 出願要件ではありません

これは「Web 面談」というものです。へるん入試の中でも「地域志向入試」という特定の入試があります。将来は島根や鳥取で、あるいはそれ以外の県であれば地元に戻って地域のために何かしたいと考える生徒さんのための入試枠です。少し特殊ですので、ではなぜその地域なのか、その地域の魅力をどう思っていて将来どのようなことをしたいのか、ということに対話として大学の職員が聞き取るという面談を、オンラインで行っています。これは地域志向入試を受けるための必須要件ではないのですが、例年数十人から100名程度のご参加をいただいております、多くの方に地域志向入試に出願していただいております。

4-3 入学前教育（ふれ大学）

- ① **入学前セミナー**（12月）
在学生とのグループディスカッションなど
- ② **英語eラーニング**（12月～3月）
- ③ **LMSによる学科専攻別課題**（12月～3月）

合格した後の教育についてです。入学前の段階では次の3つを行っています。

4-4 初年次教育

- ① **スタートアップ・イングリッシュ**
英語が苦手な学生のための英語クラス
- ② **フレッシュゼミナール**
「学びのタネ」を深化・展開するために専門分野に触れる機会を学科ごとに設けた講座
- ③ **へるんスプラウトROOM**
「学びのタネ」を育てるための居場所・学びの場
プラットフォームをWeb上に立ち上げ

入学後の初年次ではこのようなことを行っています。その中でも、特に3番目。へるん入試で合格した方だけのSNS上のルームを昨年度後期に立ち上げました。



イメージとしてはこのようなものです。へるん入試は二百数十人の入学者がいて、学部や学科もさまざまです。その人たちが幾つかのチャンネルに分かれて語り、時には一緒にワークをし、あるいは一緒に講演を聞くことによってさらにお互いの「学びのタネ」が刺激を受けて展開したり変容したりということを目指す共同の学びの場です。SNS 上の学びの場を今構築しています。



最後のまとめです。へるん入試ではこのように、出願前、入試、入学前、そして初年次教育と4つのフェーズがあります。それぞれの段階で生徒さんに育っていただき「学びのタネ」を大学入学後あるいは大学卒業後の人生の中で成長させて花開かせてもらうようにと考え、それぞれの段階で応援しています。

島根大学の説明は以上です。ご清聴ありがとうございました。

【中島・司会】 美濃地先生，ありがとうございました。少し時間がありますので1つだけお答えください。共通テストを課さないということですが，調査書や小論文，面接で十分に学力の保証はできますか，各部局からの心配はなかったでしょうかという質問が来ています。後で奈良女子大学の先生にもお答えいただきたいのですが，島根大学はいかがでしょうか。お願いします。

【美濃地】 はい。学力をどういう定義で考えるかということもあると思います。今，特にご心配のところはいわゆる共通テスト等で測れる学力で，知識や技能，思考力というところだと思います。これにつきましては事前の書類の調査書等で見させていただくことと，読解・表現力試験という島根大学独自の筆記試験で，学力の基礎の部分を評価したいと考えています。へるん入試の導入に当たっては，各学部から今もっていろいろな心配やご意見も頂いています。ですが，いろいろな学生に入ってきてほしいのです。専門高校や進路多様校からも来てほしいということがあり，このような評価方法を取っています。今入学した学生はそれほど大きな不安はなく大学になじんでいると見えています。

【中島・司会】 先生，もう1つお願いします。入試で不合格になった受験生の学生さんは，一般選抜前期日程などで再チャレンジをしているケースが多いのかどうかという話です。この点はいかがですか。

【美濃地】 きちんとした統計は取っていません。多いか少ないかというとは多くはないでしょう。もちろん再チャレンジされる方もいますし，もともとへるん入試のみを念頭に出願されてきている方もいます。多いか少ないかというとは，多いとは言えないと思います。

【中島・司会】 ありがとうございました。これで美濃地先生のご報告は終わりとさせていただきます。■

全体会 2 ● 報告 4

ブレインストーミングで探究力の何を見るか

■羽鳥 広平（高崎商科大学広報・入試室室長）

よろしくお願いします。皆さん、初めまして。高崎商科大学，広報・入試室の羽鳥です。
本日は貴重なお時間を頂きまして誠にありがとうございます。



本日は総合型選抜，探究・ブレインストーミング型という本学独自の入試についてご説明をしていきます。私は今，広報・入試で募集と入試を兼ねていますが，そちらの部門の責任者をしています。広報歴としては今年で 9 年目です。今回取り上げますブレインストーミング型でブレインストラクターとしても活動をしているところです。



入試の説明に進む前に、まず本学について少し紹介させてください。本学高崎商科大学は群馬県高崎市にある商学部を擁する大学です。入学定員は 200 名と小規模です。商学部の中では経営学科は定員 130 名、会計学科は定員 70 名を設置しています。今回ご紹介するブレスト入試についてはこの経営学科のみで実施をしている入試です。

本日のテーマは、

**ブレインストーミングで
探究力の何を見るか**



今回取り上げるテーマはブレインストーミングで探究力の何を見るのかということで、こちらは事務局から頂いたテーマをそのまま掲げました。恐らく皆さんはこちらに興味があるのかなと思っています。せっかく良いテーマを頂きましたので、この探究力という言葉からお話を始めていきます。

探究力とは

「面白がる力」

色々なことに興味を持って自分で考えられる。
誰かに言われなくても、自分から動ける。
つまらないと思うことでも、自分事化できる。



探究力という言葉にはそれぞれの解釈があると思いますが、私の理解としては探究力とは面白がる力と考えています。いろいろなことに興味を持って自分で考えられる、誰かに言われなくても自分から動ける、つまらないと思うことでも自分事として捉えられるというマインドが面白がる力と考えています。例えばゲームを買ってもらえなくても友達と泥団子を作って、その泥団子を鋼鉄の硬さにまでできて、もっと言えばその泥団子を

友達のお菓子と交換できる，そういった人物像が面白い力につながっていくイメージなのかなと思います。

**探究・ブレインストーミング型は、
ブレストを活用して
「面白がれる人」を
見極めています。**



今回ご紹介するブレスト入試については，ブレストを活用してこの面白い力を持っている人や面白がれる人を見極めています。さらにこの探究力という言葉について深掘りしていきたいと思います。今回この入試を説明するに当たってわれわれがどのように探究を捉えているのかというところにも非常に深くつながってきますので，こちらからいきたいと思います。

面白がれる



**主体性を持って
多様な人々と協働して学ぶ
状態**

マインド
態度



探究力は，語学力やコミュニケーション能力のような何か一種の能力のような言葉に聞こえます。ですので探究力を向上させようと考えたときには，探究学習をしようという流れが一般的だと思いますが，恐らくここで大きくずれが出てしまうと思います。といいますのもわれわれが考えている探究学習とは，探究を学ぶのではなくて探究で学ぶということです。この方法としての探究をクローズアップしていると考えています。これは学

習指導要領の解説にも幾つか触れられているところです。問題解決的な学習が発展的に繰り返されていくその様を指していたり、もしくはこの探究的な学習を実現するため4つの探究のプロセスを明示しといった言及があります。恐らく探究は、目的ではなくて学び方、つまり手段だと考えています。

その意味で言いますと、先ほどの言葉を借りれば探究とは面白がり方だと思います。そもそもこの探究、われわれの言葉で言いますと面白がり方がなぜ必要になったかというところに少し立ち戻りたいと思います。これは端的に言えばやはり社会が変化したからということに尽きると思います。会の冒頭でのごあいさつでもありましたが、社会構造が変化して個々の価値観も変化して、いわゆる VUCA の時代になったと。その中で生きるための力が必要になってきたと。そのための方法としてこの探究というのが持ち出されたのかなと思います。そういった言及についてもこの学習指導要領の解説の中に載っています。こういった現状にあって学び方をアップデートしようというのが探究導入のきっかけとなっています。

今までの学び方は、高校現場も大学現場もそうですが恐らく学習転移モデル的な学び方が大きく行われてきたのでしょう。学習転移モデルとは、例えば研究者が新たな知見を概念化して、それをクラスやゼミで教師が学生や生徒にそれを伝達して、それを習得した学生や生徒が現場でその知識を活用するというものです。この学習転移モデルも非常に有効な学び方の1つであったと思います。しかし今回の議論の中では、恐らくこれだけでは足りないという課題感があつたのでしょうか。これまでの学校教育の蓄積も生かしながらか学習の質を一層高める授業改善の取り組みを活性化していくことが必要であるという課題感。だからこの探究が必要になったのでしょうか。

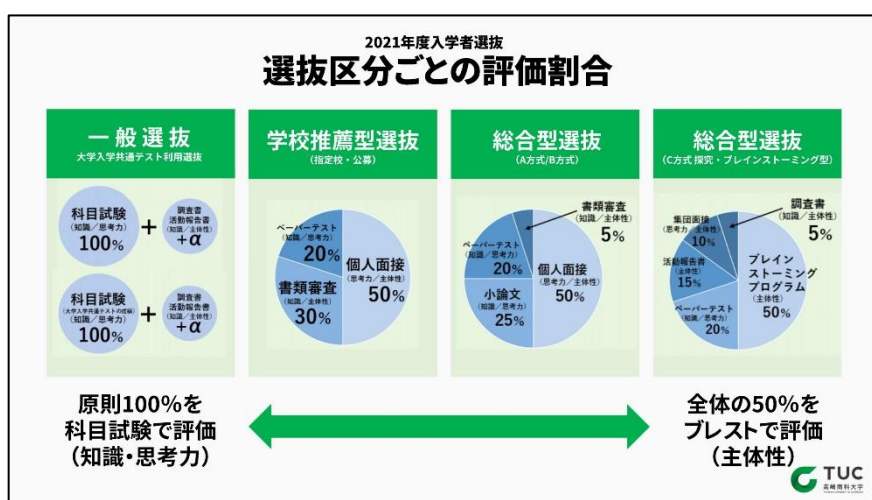
この探究という学び方は、先ほどの学習転移モデルといったモデルで考えますと経験学習モデルに属すると思います。この経験学習モデルは、受け身で知識を覚えるだけではなくて自らの行動や経験からオリジナルな知見を見いだすと。これは「学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解する」というところとつながっています。経験学習モデルは4つのフェーズを、サイクルを回しながら発展をさせていくというモデルです。探究のサイクルについても同様なサイクルを回していくということで、この学び方は非常に類似する点があります。これからの学び方としては今まで学校現場で行われていた学習転移モデルにプラスして、経験学習モデルとの橋渡しを行ってこの質を高めていくという流れの中で探究というものが出てきたと思っています。

アクティブラーニングからの流れも考えますと、実は今こういった形が多く大学の大学では行われているのだらうと思います。そういった意味では今回この高校の現場で探究という学び方が導入されたのは、大学での教育や学習についても非常に意義のあることだと考えています。面白がれる力と冒頭で言いましたが、こちらは主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度、マインドを持っている状態と私たちは考えています。

だから
探究・ブレインストーミング型は、
ブレストを活用して
主体性を大きく
評価しています。



ですので探究・ブレインストーミング型は、ブレストを活用して先ほどの面白がる力を、主体性を大きく評価して面白がる人を見極めています。これが今回入試を導入する際の前提として考えていたところです。



ここからは本学のブレスト入試について深掘りをしていきます。ブレストという特殊な方法を使った入試であり、主体性を大きく評価する入試であるということもあり、話を分かりやすくするために今回は本学の一般選抜との対比でご説明をしていきます。本学には多様な入試をそろえています。一般選抜は原則として 100 パーセント科目試験で評価をしていきます。これと対極にあるのが総合型選抜で今回のブレインストーミング型です。全体の 50%をブレストで評価しています。両極端にある入試といえます。この間に評価軸の異なる学校推薦型選抜、それからブレインストーミング型以外の総合型選抜を配置していき、多様な選抜方法と評価尺度を担保しています。主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度は学びに向かう姿勢ともいわれますが、今回学力の 3 要素のうち他の 2 つを方向性を規定する重要な要素として捉えられています。今回の入試改革の議論では、これをきちんと評価しましょうというのが大元にあったと思われます。

ブレスト入試では、

**主体性を持ち
多様な人々と協働して
学ぶ態度**

を **4つの資質** に細分化して評価

 TUC
近畿大学

先ほどの一般選抜とブレスト入試の対比でさらに説明をしていきます。一般選抜が今までの知識や思考力を評価する知識の再現可能性を確認する入試としての位置付けであるとするば、ブレスト入試はこれからの成長可能性を評価していきます。大学に入ってから学びに向かう姿勢、つまりマインドの再現可能性を評価していくということで、こちらにも非常に対比的な位置付けとなっています。

プログラムで評価する4つの資質

ドライバー資質(主体性) ●みんなでアイデアを出しあうことを楽しんでいる。 ●他のメンバーの意見を巻き込みながら、たくさんのアイデアを出している。 	フォロワー資質(協働性) ●アイデアが出しやすい雰囲気をつくりだしている。 ●他のメンバーの意見をよく聞き、共感や尊重の姿勢をもって接している。 	ラーニング資質(多様性) ブレインストーミングの経験を重ねることで、自分の意見や価値観を提示することを楽しめる人材に成長する可能性を持っている。 	クリエイティビティ資質(創造性) チームまたは個人として、創造的なアイデアを生み出す力を持っている。 
--	---	---	---

↑

これらをブレストを活用して評価

 TUC
近畿大学

ブレスト入試では、先ほどから言っていますこの主体性を大きく評価していきますが、主体性を 4 つの資質に細分化して評価を行っていきます。ブレインストーミングを使ったプログラムでこの資質を評価していくわけですが、4つの資質というのがこちらに出ているドライバー資質、フォロワー資質、ラーニング資質、クリエイティビティ資質です。これらをブレストを活用したワークを通して評価していきます。

今回ご紹介しているこのブレスト入試は、ブレインストーミングという方法の新規性にプラスして企業と共同開発をした入試としても注目を集めていたところでもあります。鎌倉にあります IT 企業の面白法人カヤックの人事部と共同開発した入試で、この場で言

っていいのかわかりませんが例えば UNKO MUSEUM などを手掛けています。そういったあっと驚かせる、既成概念を越えていくアイデアを基にして企画を立ててバズらせるコンテンツを作っているのが、この面白法人カヤックです。こちらの人事部との共同開発でこのブレスト入試が出来上がっています。

ブレストでは、

**複数人でアイデアを出すことによって
化学反応を起こし、ひとりでは出せない
アイデアを生み出すことを目的とする。**

**アイデアをたくさん出した人が
合格するわけではない。**



ブレスト入試ではカヤックが開発したブレストカードをワークの中で使用していきます。ブレストとはアイデア出しの手法と理解されているところですが、もう少し詳しく言いますと、複数人でアイデアを出すことによって化学反応を起こし、1人では出せないアイデアを生み出すことを目的とするというのが今回考えているブレストです。ですので、ブレインストーミングを使ったワークで評価をしていきますが、アイデアをたくさん出した人が合格するわけではありません。

それぞれの個性を発揮しつつ、
チームとしてのパフォーマンスを
高められているか。

ドライバー資質 (主体性) ● みんなでアイデアを出しあうことを楽しんでいる。 ● 他のメンバーの意見を巻き込みながら、たくさんのアイデアを出している。 	フォロワー資質 (協働性) ● アイデアが出しやすい雰囲気をつくりだしている。 ● 他のメンバーの意見をよく聞き、共感や尊重の姿勢をもって接している。 	ラーニング資質 (多様性) ブレインストーミングの経験を重ねることで、自分の意見や価値観を提示することを楽しめる人材に成長する可能性を持っている。 	クリエイティビティ資質 (創造性) チームまたは個人として、創造的なアイデアを生み出す力を持っている。 
---	--	--	--

**個性の発揮の仕方はさまざま。
誰しもが「リーダー」である必要はない。**



先ほどとの対比でもう一度考えていきますと、一般選抜がいわゆる個人プレーの入試であるとすれば、総合型選抜はチームプレーの入試であるといえます。それぞれの個性は

人によって異なります。それぞれの個性を発揮しつつチームとしてのパフォーマンスを高められているのかというところを評価上では大きく重視しています。個性の発揮の仕方はさまざまです。誰しもがリーダーである必要はないと考えています。

総合型選抜、探究・ブレインストーミング型は、全体の半分を先ほどのブレストカードを使用したブレインストーミングプログラムで評価していきます。もう半分はペーパーテスト、活動報告書、集団面接、調査書などたくさんの手法を活用して評価しています。今回はお時間にも限りがありますのでブレインストーミングプログラムのほうをより詳しく説明をします。

ブレインストーミングプログラムは 50 分間で実施をしていきます。大きく 2 つのフェーズに分かれていまして、前半がブレストワークです。そして後半が振り返りシートを使ったグループワークになっています。ブレストワークではカードを使用したブレストの方法の解説から始めます。入試の中で練習もしていきます。その上で当日のテーマを提示しまして、そのテーマを基にブレインストーミングを行っていきます。ワークが終わりましたら、そのワークを振り返るためのシートに記入をしていきます。記入をし終わったシートを基にグループでその感想をシェアしていきます。さらに受験生のワークのフィードバックもファシリテーターから行っていきます。

ブレストワークの実施の形態は、受験生の数によっても異なってきますが基本的には受験生が 2 名、在学生在が 2 名、全体を統括するファシリテーターが 1 名、そしてファシリテーターとは別に評価者が 2 名配置されています。このブレスト入試については在学生在が入試の中に入ってくるということでもかなり新規性の高い入試だと感じています。

今回このブレスト入試を導入するに当たっては、その導入の以前から FD・SD の教職協働でこのブレスト入試の手法や、なぜこれをやる必要があるのかという考え方を社会変化にひも付ける形で検証をして、それぞれの教職員が意義を理解するという活動も行ってきました。さらに入試に参加する学生についても、入試に参加しますので育成のワークを繰り返し行っていきます。学生のファシリテーターは、受験生が安心・安全にアイデアを出せる場をつくることを役割としていますので評価はしません。さらに受験生の秘密保持ということもありますので事前に誓約書を提出します。さらに受験生の属性と学生の属性で近い人間がいないかということも事前に確認をした上で試験に臨んでいます。さらにこのブレスト入試はブレインストーミングのアイデア出しをしているそのさまを評価していきますので、評価するタイミングやその着眼点が非常に重要になっています。評価者についても学生を交えて事前に本番を想定したシミュレーションを実施し、しっかりと試験実施体制をつくっています。

続いて後半の振り返りシートです。振り返りシートではワークでの感想をおのおのが記入していきます。さらに、書いたワークシートを使いながらその感想をチーム内で共有していきます。これは受験生も本学の在学生在も一緒になって共有をしていきます。さらにファシリテーターである全体を統括する立場の人間から、ワークについてのフィードバックを受験生一人一人に行っていきます。ワーク自体というよりはワークを通して見たその受験生本人の強みや、本人は気付いていないが大切にしたいほうが良い資質につい

て、具体的な行動やアイデアを示しながらフィードバックを行っています。

といいますのも、ブレスト入試は入試ではあるのですが、その入試自体が教育でもあると考えています。大学入試はともすると募集のための装置と捉えられなくもないのですが、今回の高大接続の議論の中にあるのは、高校と大学をつなぎ、さらにそれを社会につないでいくと。大学がハブとしての存在になることを期待されているとわれわれは考えています。特に本学は社会科学系の高崎商科大学ですので社会との接点を非常に多く持っています。この入試自体を通過点と捉えて、長期的な展望で生きる力の育成に取り組んでいこうというポリシーを持って作られた入試でもあります。先ほどのワーク自体もそうです。それからフィードバックについてもそうですが、入試であり教育でもあると捉えています。ですので、実際には受験生が本学への入学に至らなくても目的は半分達成できていると考えています。入試そのものに本学が育てたい人物像や学びのポリシーが存分に盛り込まれていますので、入試であり大学自体のブランディングでもあると考えています。

入学後については、やはりこの探究にひも付くような要素をたくさん教育の中にも取り入れています。先ほどのブレストカードを使ったワークについても、特に初年次教育の中でチームビルディングや心理的安全性を確保するための仕掛けとして使っています。1～2年生に対して行っているゼミナールの授業を活用して人生の面白がり方など、こういった主体性を高めるような学びに向かう姿勢も入学後も継続して育成するような形を取っています。

まとめになります。今回探究・ブレインストーミング型入試の準備をする中で私が大きく感じていたのは、この探究の導入はやはり大きな社会変化があって、それに向かうために新たな学びや学び方を取り入れていこうということです。これは受験生だけではなくて、私もそうですが大人がまさに今社会のど真ん中にいるわけです。ですので、受験生に求められている能力がわれわれ大人に求められない道理がないと感じながら作っていきましました。本学は教職協働で研修会や教育プログラムの作成等も行っていますが、われわれ自身のアップデートも欠かせないと考えています。

恐らく入試は自学の姿を映す鏡なのだろうと思います。今回のこの総合型選抜もそうですが、入試改革をきっかけにわれわれ自身が大学自体を見つめ直すチャンスだと考えています。以上で探究・ブレインストーミング型について、「ブレインストーミングで探究力の何を見るのか」の紹介を終わりにします。ありがとうございました。

【中島・司会】 羽鳥先生、ありがとうございました。1 つだけ質問ですが、この入試はいつ行われるのかだけ教えていただけますか。何月ぐらいですか。

【羽鳥】 おおよその日程は毎年度同じです。資料がありますのでそれを投影します。この入試は総合型選抜なのですが併願可能な入試です。ですので合格しても入学しなくても大丈夫な入試です。これは2年前のチラシです。試験は10月17日ですので10月ご

ろです。そこから合否が年内に出まして、実際の手続き締め切り日は3月中旬ごろです。他の大学との併願も可能という入試になっています。

【中島・司会】 ありがとうございます。これで4大学の先生方に報告をしていただきました。Q&Aにありますのは、例えば先生方の負担や、今の高崎商科大学もそうですが在学生の方に参加していただくことになるすると研修にどのくらい時間がかかるのか。あと教員や職員の人材は限られているのかといったご質問が多く来ています。この辺のところを後半の討論で取り上げていきたいと思います。

それから最初の桜美林大学さんからのご提案なのですが、やはりこういうような入試は大学間で連携できないかという問いも頂いています。後半の討論ではこの辺についても各大学からのご意見を伺いながら進めていきたいと思っています。よろしくお願いします。■

全体会 2 ○ 全体討論

探究活動を入試でどのように評価するか

■高原 幸治（桜美林大学入学部部長／学長補佐（入学・高大連携））／
 今村 亮（桜美林大学入学部高大連携コーディネーター）／高岡 尚子
 （奈良女子大学大学院人文科学系教授）／美濃地 裕子（島根大学教育・
 学生支援本部大学教育センター准教授）／羽鳥 広平（高崎商科大学広報・
 入試室室長）／池田 文人（北海道大学教授■司会）／中島 範行（富山県
 立大学教授■司会）

【池田・司会】 時間になりましたので始めます。後半はパネルディスカッションです。司会を務めます北海道大学高等教育推進機構の池田です。どうぞよろしくお願いいたします。最初に各大学に共通的な質問を各大学から回答いただきまして、残りの時間が許す限り各大学への個別の質問についてお答えいただきたいと思います。

共通的な質問ですが、大きくは4つの観点があったと思います。まず1つ目は、総合型選抜方法そのものの具体的な方法やその課題についてということです。2つ目は高大接続とその負担感について質問が挙がりました。3つ目は探究活動の評価そのものについての質問がありました。最後4つ目は追跡調査についてでした。

ではまず1つ目の総合型選抜の方法の課題についてです。こちらに関する問い合わせが非常に多かったです。まず実際に行われている方法について、書類審査や調査書の評価などの公平性や信頼性をどう担保していくのかということがありました。また共通テストなどの学力テストを課さない場合が多いわけですが、学力担保の問題やその多面的評価を行う効果、あるいは信頼性や妥当性といった課題に対する学内外の不安感はなかったのかということがありました。あとは、探究力自体が、入試ということで形式知化しなければいけないわけですが、探究力の根幹にあるのは暗黙知的な、非認知的な能力に下支えされていますので、そういったものをどのように評価するのかという問い合わせがありました。まずこれらの総合型選抜の方法と課題について各大学にお伺いします。ではまず桜美林大学さまからご回答いただけますか。

【高原】 はい。まず総合型選抜に限って言いますと二段階選抜で、一次で書類審査を行って二次で面接を行います。あとは一部の学群においては実技の審査があるということになっています。書類審査については先ほど言いましたとおり大学の教員が読むのではなく、本学ではアドミッション・オフィサーと言われる入学部のスタッフを中心とした職員

が読み込みを行っています。他大学が危惧する負担感、評価の目線合わせ（公平性、信頼性、妥当性など）のところで、なかなか時間のない大学教員がそこに関わるといろいろと課題が出てくるのかもしれませんが、それらの時間も十分に確保して、実施していますので、そこについての課題感はあまりないと思っています。

総合型選抜や推薦型選抜の学力担保の話の課題はあると思います。ただここについては高等学校から調査書が出ているわけなので、それを疑ってかかってしまうと根本が崩れてしまいます。そこは示されているものに即して、こちらである一定の点数配分を書類評価の中に加えて評価しています。

大学に入ってから GPA などの絡みでどうなのかということはあるのですが、実際取ってみますとそこまで共通テストや一般入学者選抜との差が出ているのかということそうではありません。それから大学の学びの中で確かに 5 教科の 7 科目や 8 科目というのはベースとして非常に大事である一方で、それ以外にもその多面的なところの部分もやはり大きな学びの要素になっていて、彼らの力や能力の原動力になっています。特に本学で言えば偏差地帯では全国で真ん中ぐらいに位置しているとすると、全員が一律にその 5 教科ができるわけではないです。そういった中で一人一人の能力をもう少し丁寧に見ていくことと、選抜も含め学びの構成要因を組み合わせていくのが重要だと思っています。

今回テーマになっている探究については、ややもするとその探究の成果がどうだったのだという話に陥りがちです。そこには高校の取り組みで先行して探究学習を進めた高校と、今年になってようやく重い腰を上げて導入した高校とでは全く支援の体制も違ってきます。それから意外に農業高校や、工業や商業の高校のほうがそういった取り組みには予算もあり先生方も熱心で、実はすごいパワーがかけられていることもあります。どちらかという、その成果がどうであったかというよりはそのプロセスがどうだったのかにできるだけ焦点を当てて見てあげようということを非常に慎重に考えながら進めてきたところです。いったんこのような感じでよろしいでしょうか。

【池田・司会】 ありがとうございます。高大接続や追跡調査とも絡む内容ですので、後ほどまた改めて補足していただければと思います。ありがとうございました。では続きまして奈良女子大学さまからお話いただけますか。

【高岡】 学力の担保についてのご質問で、なぜ共通テストを課さないのかというのがありました。これについては、最初の段階から多様な入試を行うという意図で一般選抜とは全く違う入試を設計しようというところから始まっています。そのためには共通テストを課さないで早めに合格を出し、それを探究と結び付けていくことを想定していましたので、少なくとも文学部では最初から共通テストは課さない方向で考え始めました。ただ他の学部では、やはり基礎学力ということも含めて共通テストを課したいということがありました。かなり長時間の議論の末、現状は全ての学部がこの入試に参加していますが、一部の学部・学科では合格を出してから入学前教育の一環として共通テストを受けてもらうという体制を取っているところもあります。

探究の在り方をどのように評価するかという点については、桜美林大学さまと同様の考え方をしています。いわゆる一芸入試のように何かとびぬけて優れた結果を求めているのではなく、そこに至る過程を見ているので、調査書に関することにつながってくると思うのですが、日々の積み重ねがどうなっていたのかを重視しています。それを公平に評価できるのかという問題になっていくとは思いますが、入試は多様で、奈良女子大学に Q 入試で入ってくる学生さんは 10%未満です。非常に少数です。すべての学生がこの方法で入ってくるわけではないので、こういうチョイスをして臨んでみようと思う受験生のどういうところに私たちは期待すればいいのかというのを話し合った結果がこの形だにご理解いただければと思います。

【池田・司会】 ありがとうございます。また後ほどよろしくお願いします。では続きまして島根大学さまからよろしくお願いします。

【美濃地】 本学のへるん入試も、アドミッション・ポリシーに沿った人、その人を多面的に総合的な評価軸で選抜したい、そしてこれまでにない多様なタイプの人に入ってきてほしいということで設計をしました。一般選抜の募集人員は全体の 7 割近くありますので、大学入学共通テスト型の方は一般選抜で。へるん入試は、そういうタイプではない学力のある方に来てほしいと考えました。

この入試の設計に当たっては、数年前になるのですが、中国地方の 5 県の高校の代表の先生やそれぞれの教育委員会の代表の方など外部の方のご意見を随分伺いました。その中で、高校時代に取り組んだことをしっかり評価してほしい、ポートフォリオなどもあるのでぜひ見てほしいという意見がありました。ですが、あまりそこを重視すると、ポートフォリオは大変だ、事前の準備が大変だなどという意見もあります。そういったことも考慮しつつ、高校の先生の見取りや、志願者の自分とは何か、何をしたいのかという意味を多面的に評価しよう、ということになりました。調査書は高校から出たものを信頼しています。書類ですので多少そこに手が加わることはあり得ると思いますが、そこは面接でしっかり見取らせていただきます。

入学後の GPA 等につきましては、入った人がまだ 1 期生なので 1 年分しかありません。学科にもよりますが、今のところそれほど大差はないととらえています。そもそも、GPA が高い人を取るための入試ではないということです。もちろん学内でもいろいろな意見はありますが、上述したような軸で設計した入試です。

【池田・司会】 ありがとうございます。では続きまして高崎商科大学さまからよろしくお願いします。

【羽鳥】 はい。本学も高原さんがおっしゃったように、具体的な何かというよりもきちんとそのプロセスが学んでいるかを重視しています。ただ、その高校の探究の学習の中では、やはり探究活動を行うに当たっては何かしらのテーマを掲げないと動きが進みませ

ん。その具体性と抽象性というところですよ。入試の中でどの部分を評価していこうかと考えたときに、具体性から少し離れてブレインストーミングを使って、プロセスの中で学んだ実力を測定していこうという流れになりました。ただ、やはりそれぞれのテーマにひも付いた志向もあるとは思いますが。このブレインストーミング入試もまだ今年で3年目のプロトタイプ的な入試でもありますので、毎年その活動報告書や調査書の活用などはアップデートをかけているところです。ですので先ほどご紹介した入試の評価割合についても、実は2023年度入学者選抜ではまた大きく変わっています。もしご興味があればご覧ください。

ご質問の中に、実業系の高校さまで課題研究や探究を代替していると。それから生徒会活動や部活動などの部分は評価の対象にはならないのですかというご質問もありました。やはりそういった活動の中にもおのずと探究的な学び方は入ってくると思います。ですので2023年度入学者選抜については、そちらの活動報告書上で課題研究、総合的な探究の時間、部活動、生徒会活動などについても評価ができるように改善をして、今回さらにアップデートをしています。

それから暗黙知を扱うというのがありましたが、まさに先ほどの経験学習的なところは形式知化ではなくて暗黙知を扱う部分が大きいのでブレストで評価していこうというのがわれわれの前提としてはありました。以上です。

【池田・司会】 ありがとうございます。総合型選抜は、やはり高校での学びのプロセスをきちんと見たいといったところが各大学で共通して持っているところでしょうか。そういったところを通じて、なかなか評価が難しい探究の暗黙知的な側面などを評価されていることがよく分かりました。

続きまして、それと関係するのですが、先日の全体会1でも話題になりました高校と大学の教育的な接続とその負担感について質問が来ています。まずは高校側の負担についてです。やはりこのような総合型選抜は評価する大学のほうも非常に苦勞をしているということもありますが、それに対応するためにはやはり高校側も負担があります。準備が非常に大変だろうということで、そういった高校の負担感をどう考えているのが1つです。もう1つは大学の教職員の負担も非常に大きいものになってきますので、そういった教職員の負担についてどう考え、どう配慮しているのかといったところが2点目です。ではそちらについて桜美林大学さまからよろしくお願いします。

【高原】 はい。まず高校の先生方の負担感では、特に本学の総合型選抜やその中にある探究で言うと、出願書類（志望理由や活動報告）は文字数が1,600字から2,000字近くを書いてもらうことになります。高校生が、自分の言葉で書類をまとめてくるのはなかなか簡単なことではありません。これは常に1999年にAO入試を導入したときから（書類作成の指導や支援の大変さは）高校側から散々言われてきたことでした。それが先ほど具体例で今村が話した総合・推薦型入試準備セミナーにつながります。

大学では大学生が自己分析を行う、もしくはそれを就職部やキャリアセンターがサポ

ートをするわけなのですが、ほとんどの高校の先生方は自己分析のプロセスを体験しているかもしれないですが、体系的に学んではいません。やはり教科学習を教えるプロとしていらっしゃるので、その部分でどうサポートしていけばいいのかというときに、文章なのだから国語の先生だろうと全部丸投げしてしまって問題になっているということがあります。ここを少しでも解消するためにセミナーを導入しました。もちろん、これだけでは全ては解消し切れないとは思っています。

ただもう一方で言えば、200 字や 400 字ぐらいで書いていただく文章では、彼らがやってきた高校時代の取り組みや大学に懸ける思いは、いくら大人の手が入ったとしてもやはり読み取れないので、ある程度の字数をきちんと書いてもらうことが必要です。それを促進していくことが大事なのだろうと思っていて、余計なお世話かもしれないですが高校側の課題解決に大学のほうからも一部手を出しているということです。

もう 1 つ大学側の負担感で言うと、これはいろいろな負担の感じ方が人によってあるのだろうと思っています。本学で言えば、例えば職員や教員の先生方が高校訪問をする手間を考えるのであれば、高校の先生方も 1 日に何校もの大学や専門学校から訪問を受けてそれを聞いても、ほとんど情報として蓄積できません。そこにお互いが労力をかけてしまうのであれば、むしろそういった高校が今必要としている課題に対して大学が何を提供するかです。それを相殺することである程度双方の負担感を軽減できるのであれば何だろうかということで行きついたのがディスカバだと考えています。

では、現場で動かしている今村さんから、先生方の負担感をどう軽減させているのかについて少しご紹介をお願いします。

【今村】 ありがとうございます。どの大学もそうかと思うのですが、高校の先生方のご負担は年度年度増す一方です。これをいかに減らすように、かつ高校生の価値や規模を広げないかという工夫は必要だと思っています。本学の場合は、プログラム開発の段階での先生方による監修を必ずしていただくことにしています。例えば今日、都立高校の探究の支援に入っているのですが、先生方は授業があってそれほど簡単には動けないので、この辺りは私たちのチームにお任せいただくようにしています。この分担が今うまくいき始めています。

高校の先生方のご負担に関しても私から一言部長の補足を申し上げます。今 2022 年 4 月から新学習指導要領に探究が位置付けられ、高校の先生方はかなり戸惑いながら探究に取り組んでいる印象です。何を戸惑っているかというと、本当にこの指導要領にのっとって探究を進めて 3 年間育て上げた後に、果たして大学はこれを評価してくれるのかという不安感です。私は今日の事例報告の 4 大学が、それは大学入試につながるというメッセージを発することが非常に重要だと思っています。探究にきちんとコミットする高校の先生方に出口を照らす役割を、大学としての責務として感じています。補足は以上です。

【池田・司会】 ありがとうございました。非常に参考になります。高校と大学との接続に

大変なご苦勞をされていると感じました。では続きまして奈良女子大学さまからよろしくお願いします。

【高岡】 はい。ありがとうございます。高校側の負担感についてということですが、もちろんそれが大変なことだということはよく理解しています。全ての調査書と評価書をくまなく読んだわけではないので軽々には発言できないところもあるのですが、大変な労力をかけて生徒さんのために書いていただいているのが大変よく分かります。

どなたが書かれた評価書が一番多いかというご質問がありましたが、やはり在学している高校の先生が評価書を書いてくださっているというのはそのとおりだと思います。さらに現在のように高校で指導する科目として探究が位置付けられていますと、当然指導する側も大変だということになるかと思います。奈良女子大学には附属中等教育学校があり、そちらでもやはり探究の学びを非常に重視しています。そこで実際に携わっている先生方のご苦勞を見ると、高校の先生方が非常に手をかけて生徒さんたちを指導されているのがよく分かります。ですので、それをできるだけきちんと受け止める体制を持たなければいけないと思います。もちろん調査書に書いていただくことも重要なのですが、このような評価書を準備した理由はそういうところにもあります。

確かに評価書を書くのは非常に手間と労力がかかりますが、生徒さんに探究力という形で入学してもらう際には、やはり評価をしていただく方が必要です。志望理由書と評価書の組み合わせや評価者をはじめとする周囲の方々からのサポートは協働につながっていくと思います。そういった側面を重視したいというのをこちらからははっきりと示すことが必要だろうと考え、評価書を書いていただく方へという形でメッセージとして送らせていただいています。

それから当初からあらかじめ指定資料と指定図書は公開することを考えていました。これを見てももらえれば、私たちが考えていることはある程度伝わるかと思います。これを使って課題レポートに取り組み、小論文を書いてもらいますというメッセージをはっきりと発出し、自分の探究とそれを照らし合わせながら学びを深めていただきたいという意図があります。ただ指定図書・資料についての課題や小論文については、それに応えられるかどうかは出願された方によってかなりばらつきがあります。ですから評価の際にそういうところもポイントになってきます。

また、大学教員側の負担ですが、これは基本的に私たち文学部の教員の中で担当を決めてやっています。新しい入試ですので、入試課とも協力しながら作り上げてきた数年間です。担当した教員によると、入試の過程で生徒さんが伸びていくのが手に取るように分かるそうです。二次選考にあたって提出された課題を見て、なるほどこうきたかという具合に、選考に取り組んでいる側の手ごたえも非常に強くあります。ですのでその担当者も交替しながらということも考えていますし、テーマについてもやはりずっと同じものを継続できるわけではないので、それも少しずつ変更していこうとは思っています。4つのテーマについては今のところは続けていくつもりです。

【池田・司会】 ありがとうございます。教育を通じて本当に高校と大学を接続したいという思いがあると思いました。では続きまして島根大学さまからよろしくお願いします。

【美濃地】 先ほど説明の中でグラフを出しましたが、へるん入試の合格者の高校の担任の先生にアンケートを取っています。明日の発表で言おうと思っていたのですが、85%の先生がへるん入試の受験指導が負担であったとお答えです。では何が負担かと聞いたときに、調査書別紙の作成、「クローズアップシート」作成の指導、「学びのタネ」探しなど、負担感の理由となる項目は満遍なく散らばっていました。総合型選抜を受けるということは、へるん入試に限らず大変な負担がかかるのだろうと思いました。ただこうやってアンケートを続けることによって現場の状況も分かりますし、「アンケートにいろいろと書いてありがたかった」という自由記述も頂いています。アンケート結果を受けとめて、へるん入試をブラッシュアップしたいと考えています。

1つ感じているのは、奈良女子大学の先生からもありましたように、入試を通して成長する、ということがあるのだろうということです。へるん入試を作るときにコンセプトとしてあったのは、恐らくこれは受験生にとって負担のある入試で、高校の先生にとっても負担がある、そして大学側も負担がある、ある程度負担のあるものなのだと。しかし、その負担感をもってしても、そこで生徒や学生が育っていく、そして育て続けていくということであれば、それは必要な入試の方法なのだ、という考え方でした。

そしてもう1つ、総合的な探究の時間のみならず、探究学習は今後高校で取り組まれていかなければなりません。できればそれを、大学としても後押しできるような入試でありたいと思いました。へるん入試の作りは、先ほど進路設計の仕方のスライドも出したように、高校で普通にやっている進路指導やキャリア教育がそのまま当てはまる入試だと考えています。へるん入試でなくても、他の大学の入試でも、この考え方で受けられるのではないかと思います。高校生が自分を振り返る、そこを先生が見取るなどされて、それを形成的評価として記録する、それをそのまま調査書別紙に書いていただきたい。ということでお答えになったか分かりませんが、入試を通して高大接続で受験生が育っていくことを、究極的には目指しています。

【池田・司会】 ありがとうございます。やはり同じく高大接続で本当の意味での教育的な接続を目指していらっしゃると思いました。では最後に高崎商科大学さまからよろしくお願いします。

【羽鳥】 高校と大学の負担感ですが、高校の非常に負担が大きいというのは話を聞く限りすごく分かります。それで各高等学校で探究を通してどういった学びを実現したいかは、恐らくそれぞれの高校さまによって課題感が全然違うと思います。私たちは6校か7校ぐらいの高校さまに協力させていただいています。例えばある高校さまは知識を付けさせたい、要するに勉強をさせたいというところが入り口で、ではそれを探究を使ってどういうふう to 実現しようかというふうに行わせていただきました。もしくは中堅進学校や

進学校さまの中には、ただ知識を付ける受験のための勉強というのはこれからどうなのかと、もう少し社会的な視野を広げていくために探究を活用できないかということでオーダーを頂くこともあります。本当に少ない校数ですが一件一件カスタマイズをして教育プログラムと一緒に作らせていただいています。

この探究の学習の中でいろいろな業者さんでコンテンツを用意されているところもありますが、本当に高校の先生方は何をネタにすればいいのか、何を教えればいいのかというところから考えなくてははいけません。しかも高校に合ったものを考えなくてははいけないというところで非常に負担感が大きいのだろーうと思います。今回のこの高大接続改革にしても、社会変化を前提として社会全体で若者を育てていこうということですから、言い方は良くないかもしれませんが、高校も大学も大変になるのは当たり前なのかなと思います。その中で一緒になって頑張っていきましょうというのがこれからの育て方だと思っています。

本学は入学定員が 200 名ぐらいの小規模な大学ですし、大きな大学さまに比べれば教員の数自体もやはり少ないです。大学教職員の負担感というのがもう一方でありましたが、研修の時間や学生の育成についても、ない時間の中で捻出してという形でやらせていただいているのが現実的なところなんです。例えば大きな大学さまでは教授会で一堂に会してそれが終わった後に研修会をもう 1 回やりますというのはなかなか難しいかと思うのですが、本学の場合には教授会の後にそのまま研修会をやりますというふうにして参加していただいたりします。少人数ながらの機動性が生かしている部分もあると思います。

それから今回のブレスト入試の話とも少し関係するのですが、学生へのレクチャーについてはもともと経営学科の中では企業と連携した教育を行っています。いわゆる PBL で課題解決型の教育プログラムをやっています。そういったプログラムに興味を持って入学している学生がたくさんいます。その PBL の中では自分たちで企画やアイデアを出すというのもあります。ブレインストーミングファシリテーター育成という講座を開いたときには、やはりそういった気持ちを持った学生が集まってくれますので、やる気のあふれる学生が集まっていると思います。ただ、やはり負担感は学生にとっても大きいので、その辺りをどういうふうに効率的にやっていくかは、教職員も含めてですが課題だと思われます。以上です。

【池田・司会】 ありがとうございます。追加ですが、学生さんの負担が大きいということでしたがアルバイトとボランティアのどちらなのでしょう。

【羽鳥】 ボランティアです。金銭の授受が発生するとやる気の資質が変わってくるのはやはりあると思うのですが、もちろん全くボランティアというわけではなくてお弁当を出したりはするのですが、普段金銭の授受は発生していません。

【池田・司会】 ありがとうございます。では続きまして追跡調査です。探究の評価というのがあったのですが既にお答えいただきましたので、追跡調査について少しお伺いし

たいと思います。まず入学した学生の追跡調査の具体的な方法なのですが、一般的には GPA を使われる場合が多いと思います。しかし探究力の追跡調査ということを考えると、GPA は適切ではないのでは、というご質問も頂いています。

併せまして、不合格者の方々がどのぐらい別の入試形態に挑戦しているのかなど、辞退者の問題は非常に大きいと思います。追跡調査とは少し違うかもしれませんが、合格者を出した後の追跡調査を含めてその辺りについて少しお伺いしたいと思います。では、まず桜美林大学さまからよろしくお願いします。

【高原】 はい。本学は探究入試 Spiral を導入したのが昨年です。今 1 年生として入ってきている者になりますので、実際に追跡調査をどういうふうにするかについてはまだです。通常の他の入試で入ってきた者であれば GPA はもちろん測ります。それから他の教育機関の会社さんから提供されているアセスメントなどを入れて全体的に見ていくという枠の中には一緒に入っています。

もう一方で言うと、昨年は 20 名ほどの出願でその中から入学をしているので、誰がどこに入学をしているのかが個々に分かります。その辺の実態や入った学生たちが、どのような学び舎活動をしているのかという具体的な話は今村がよく知っているので、そこは事例紹介をさせていただくと少しイメージがつきやすいと思います。今村のほうで少しその話をしてもらいます。

【今村】 はい、ありがとうございます。部長が申し上げたとおりまだ 1 期生が 1 年生に在学しているのみの小さな規模です。One to One で見ていける段階です。合格者に対して年明けに、つまり高校 3 年生の 3 学期の段階から事前のプログラム研修の呼び掛けをして、そこで本人に意志があった者に対してディスカバで研修を受けてもらいながら入学前の段階から活動に参加してもらうということでフォローをしています。なので自分たちがやってきた探究の経験を通して下の世代をフォローするという経験が彼らの学びにつながっているというのが今の状態です。

この辺の重要さとして感じるのは、本学の場合は 2 年生から 3 年かけて専門分野のゼミ的な活動が始まっていきます。そのほうがより学びとしては探究的な要素が強まるのですが、1~2 年生の基礎的な学びの履修段階で彼らが高校段階でやってきた探究的な要素が薄いと感じるケースが時々見られます。ですので、大学 1 年生の基礎的な段階に高大連携活動での探究的な経験を積んでもらうということに非常に相性の良さを感じています。これが今、走りながらやっている 1 期生世代の状況です。以上になります。

【高原】 ありがとうございます。あと併願の話で言うと、併願をする受験生も去年は 20 人受けた中で一定数います。この受験生たちの併願先が結構面白いんです。本来よくいわれる一般選抜や共通テスト利用の場合は、受験生や高校の指導の先生方が偏差値の序列で大学選択をしてくるわけです。でも探究入試自体を導入している大学がまだ少ないので、本学で言えば併願先は慶應義塾大学藤沢キャンパス（SFC）や立命館アジア太平洋大学

(APU)、東北芸術工科大学のような大学です。こういった多面評価をきちんとしてくれる、自分で表現して入れるという入試を受験生が意思を持ってきちんと選んでいると思います。何となく輪切りの中で、ベネッセや河合塾から A ランクだ、C ランクだという評価を受けているからこれにしようという選び方ではありません。そこにもそれぞれの受験生がやはり大学に懸ける思いや自分の取り組んできた思いが乗っているという点で、非常に大きな価値があると思っています。

その後、結果的に本学に来るか来ないかは、マッチングのことや、やはり本人が行きたい志向がどこなのかということによります。やはりこういった探究入試をやっていくというのは、一つそういった高校時代に取り組んできたことを自分なりに評価してほしいという思いのある生徒が一部できちんとしていることによって成り立っていると思います。

【池田・司会】 ありがとうございます。入学辞退者などは何か問題にはなっているのでしょうか。

【高原】 今の段階では探究で入っているこの 1 期生が辞退をしているということはないです。総合型選抜全体で見ればやはり一定数はいます。本学で言えば大学全体でならせば 3 割近くが入ります。本来であればミスマッチが一番低い選抜ではありますが、その中でも途中で退学をしている、もしくはそういった辞退をするということもあります。

【池田・司会】 ありがとうございます。では続きまして奈良女子大学さまからよろしくお願いします。

【高岡】 はい。入学した学生については令和 3 年度入試が第 1 期生になります。まだ今年が 2 年目ですので今後どのような傾向になるかは分かりません。最初に入ってきた学生が学科分属をしているというのはそのとおりです。1 つだけ少しご紹介したい事例があります。私は言語文化学科の教員なのですが、言語文化学科に Q 入試で入ってきた学生がいます。その学生は特に問題を感じておらず、最初の目的どおりの勉強ができていようように見受けられます。何名かの教員がこの入試で入ってきた学生を初年次の特別な授業も含めてずっと見ているので、こういう形の追跡が一番この入試には合っているのかなと思います。同時に GPA で測るというのも非常に重要なところではあるので、その点も含めて今後の追跡が必要だろうというところです。

それから合格者には入学していただくように、入学を確約できる方が受験してくださいという形になっています。現状は合格を出した方は全て入学をしています。入学後は 1 年次の授業に他の学生と同じように参加していますので、特別な問題は今のところ生じていないように感じます。入試当時に自分が志したものと大学の学びのイメージが違ったというマッチングの問題は非常に重要で、そこで完全に学習意欲を失ってしまうということが起こってはいけないと思っています。そういう意味でもかなり時間をかけて入学前の探究に取り組んでももらいたいです。

入試の時点でその応用力とポテンシャルはどのように見られるのかというご質問を頂いていましたが、入試方法の説明の際にも言いましたとおり、かなり内容の深い小論文を課しますので、受験者はここでかなり苦勞をすることになると思います。そこでうまく自分を表現できるかどうかというところが、応用力とポテンシャルというところにかかってくると思います。ただ、これにはやはり繰り返しの体験のようなものが必要で、たった 1 回やっただけではなかなか難しいと思います。そういう体験を通して学んできたことがどれほどエッセンスとして自分の中に蓄積されているかを見ることにもなるわけです。とはいえ、入試はこれだけではありませんので、この方法が合わなくても、別の方法で入学する、あるいは別の大学に入学するということも十分にあり得るだろうと思います。早めに自分の進路を考えることも大事ですが、このように、入試の過程で考えていくこともあり得るのかなと思っています。

【池田・司会】 ありがとうございます。不合格者の方が一般選抜で受けてくることはありますか。

【高岡】 人数の詳細は分かりませんが不合格者で一般入試を受けられた方もいらっしゃいます。先ほど島根大学の美濃地先生がお答えになったのと全く同じです。

【池田・司会】 ありがとうございます。では続きまして島根大学さまからよろしくお願いします。

【美濃地】 へるん入試も今 1~2 年生が在籍している状況です。GPA 以外で何があるかと考えています。例えば、自主的なプロジェクトを何本立ち上げたかというようなことを考えていましたが、ここ 2 年、コロナ禍によりなかなか外に出られない、学外の人との接触をできるだけしないようにという状況です。ですから、なかなか自主プロジェクトの数も多くはなりません。その他の評価軸を何か立てねばならないということは大学の目標にしていますので、今後考えていかなければならないものです。

ただ、入学時に全学生に調査をしています。そこで行った質問項目では、入学時の満足度は圧倒的にへるん入試の入学者は高く、大学の教育内容への理解度も圧倒的に高いです。こういったことからすれば、ミスマッチは起こりにくいのではないのでしょうか。むしろ共通テスト等の点数の輪切りで初めて島根大学を知って、出願して合格してしまった場合よりも、ミスマッチが起こりにくいと考えています。

1 つのデータがあります。大学の教養プログラムに、教養教育の中で「キャリアデザインプログラム」という授業プログラムがあります。これは必修科目ではないのですが、社会に目を向けて学外の人と一緒に共同プロジェクトをするような積極性を持った人が受講するであろう授業プログラムです。この受講率がへるん入試の入学者は高いのです。やはりその志向性として自分を見つめる、他者に興味があるなど、そういったアンテナを張っている人が多いという傾向は見取れています。

「へるんスプラウトルーム」に興味があるというご質問もいただきました。これは Microsoft の Teams 上で、学内の SNS 上、Web 上のものです。実はこれは少し稼働が遅れていまして、昨年度の後期から始めましたので 1 期生は全ての人がこれに登録していません。約 1 割、二十数名しか登録していません。2 期生は今回全員登録を目指しているのですが、これは強制というよりは学生と一緒にこのルームをつくっていききたいという思いがあって、半分できたハーフメイド的なところで見切り発車をしたものです。すると、へるん入試 1 期生の中に、自分はスプラウトルームを活性化したいのだ、と言ってきた学生がいまして、その学生を基に先日、登録者だけで座談会を開きました。今後は座談会を開きつつ、お互いの共有の学びの場にしていきたいね、という話が出ていました。へるん入試で入った学生は、そういう勢いや瞬発力のようなものがあります。それが相乗効果となっていけばいいと思います。これは妄想ですが、今後「へるんスプラウトルーム」のようなものが全学に広がって、バーチャルな空間として全入学生が共同の学びの場になるようなものになってほしいという願望もあります。

【池田・司会】 ありがとうございます。では最後になりますが高崎商科大学さまからよろしくをお願いします。

【羽鳥】 今回そのブレスト入試を導入した経緯や理由が幾つかあります。やはり大きいのは本学で伸びる学生の特徴を反映させられる入試、評価できる入試ということ、高大接続が目指しているものにそぐう入試であるということ、それからやはりそのブレストで育成評価ができるということです。この 3 つが重なったところで入試の導入というのを決めていきました。

毎年学生にはプレイスメントテストというものを受けてもらっています。IR 委員会の中に面白法人カヤックの社外人事部長も入っていただいて伸びる学生の特徴を数値的に分析をしていただいています。GPA の話がありましたが GPA が高くてもそれほどキャリア形成に積極的ではないという子はやはりいます。本学は社会とつながる教育を旨としていますし、やはりキャリア形成の意識が高いということ、早期にそういったことを考えられるのは非常にいいことだと思っています。それを考えたときに、キャリア形成について早期から意識を高く持っている子の特徴があります。成績などはあまり関係なく学び自体が楽しいということを強く思考している子と相関があると分かりました。そういったところを評価できるようにブレスト入試を作ったというのがあります。

ただ、正直なところブレスト入試を 2 年間やっていますが、入学した子は今 1 人しかいないです。その 1 人は 1 年生ですので、これからの伸びはこれから測定するところです。初年度やったときには、ブレスト入試を実際に受ける前にブレインストーミングワークショップというので体験ができる場を用意していました。そちらに参加した子がブレスト入試ではなくて他の入試で出願してきたというのはあります。本学のポリシー自体を理解してくれて、ブレスト入試ではなかったが入学に至ったというのも 1 つの入試の在り方としてはあるのかなと思っています。

【池田・司会】 ありがとうございます。最後になりますが、やはりその総合型選抜は高校にとっても大学にとっても負担がかかるということが大きな課題としてはあるのでしょうか。ただ、それを越えたときには非常にいい高大接続の関係ができると思います。高校で行われている探究学習を入試でそのまま評価するのが理想だと思うのですが、われわれ大学としてはそれぞれ特定の研究テーマでの探究力を見たいなどいろいろとあると思います。その辺りのバランスや調子を取っていかないとなかなか大学間の連携はできないのかなと思います。最後にパネリストの皆さまからこの大学間の連携の可能性について一言ずつご意見を頂きたいと思います。ではまず桜美林大学さまからよろしくお願いします。

【高原】 はい。現在 1 万人近くの高校生にディスカバを受講していただいている、2024 年ぐらいには 3 万人ぐらいの高校生にリーチすることになるだろうと思っています。また、桜美林大学が持っている研究分野や学びの分野を軸に高校に提供しています。かつその提供先の高校は首都圏に限らず、全国の高校からお問い合わせを受けて取り組んでいます。

その大学の研究分野で 1 つ言うと桜美林大学では医学、薬学、工学、農学などの分野を持っていないということと、当然地方に行けば行くほど桜美林大学ではなくやはり地元の大学や地域の大学に行きたいという高校生の数も多いということなどを鑑みると、3 万人全ての高校生を桜美林大学が受け取るわけではないです。実際に出願の割合からすると対象学年の 20%ぐらいが本学を受験している状態です。そういったこともろもろ考えると、このディスカバをプラットフォームにして高校と大学をうまくつなげるようなコンソーシアムを組めることがもう少し先の未来にはあるのかなと思っています。

高校現場のお話を聞いても、やはり 1 つの高校が 1 つの大学だけとやるというのは日本独特の公平性や公共的になんかというところで NG だと。少なくとも国立であればいいというような話はあるかもしれませんが、それでもどうなのかというようなことがよく高校現場では言われています。ではその中で、逆に高校の探究をご担当される先生が 1 人で、5 大学でもいいのですが 10 大学にお声掛けをして、それをアレンジしてやるという負担感は非常に大きいわけです。そういったご調整能力を持っている先生が必ずしも探究の学びに関与されるわけではないとするならば、こういった探究的な学びの装置をみんなで共有するのです。その一つ一つの大学もちろん学生募集という 1 つの問題はありますが、それ以上にこれからの社会において求められる高校生を育てる必要があると考えます。

先ほどの高校の話に戻りますが、やはり総合型選抜は高校教員の負担が高いといいますが、これは多分教科学習をしていて集団で教えられるからそれが楽だと思われるのでしょうか。ですがやはりこれからすごく個々の時代が来るときにそれでは言い逃れができない時代が来ると思っている中で、何か新しい装置を各大学と高校とが連携しながら作っていくのが次の未来だろうと桜美林大学は考えて今活動しています。

【池田・司会】 ありがとうございます。では続きまして奈良女子大学さまからよろしくお願いします。

【高岡】 はい。ありがとうございます。奈良女子大学はもともと規模が大きくありませんし地方の大学です。奈良女子大学の特徴として、全国各地の高校からの受験者がいるというのがあるのですが、文学部では4つ目のテーマとして「ならの探究」を設けています。では、ならの探究をしたい人がどこに住んでいるかということ、別に奈良とは限らないわけです。先ほどの桜美林大学さまの話は本当に勉強になるなと思って聞かせていただきました。現在のコロナの時代を経てさらに、どこにいるか、今ここに住んでいるからこの大学に行くというのがシャッフルされ、どこで学ぶかという目線のようなものもかなり違ってきています。そうしたときにそれぞれの持っている地方の強みがさらに確認されることもあるかもしれません。個人的な意見ですが。

【池田・司会】 ありがとうございます。では続きまして島根大学さまからよろしくお願いします。

【美濃地】 はい。大学間連携は必要な装置であると認識しています。ですが、まずそれは大学内での考え方がそういった方向になっていかないといけない。限られた人と予算の中で、費用対効果も問われ、やったことがすぐに今の志願者に結び付いたのかというところも求められます。そこを桜美林大学さんのように、1万人を相手にやるんだと。今度3万人だったら連携が必要なんだという発想に大学がなっていないと、できないと思います。

島根県は県内に島根大学と島根県立大学の2大学しかありません。私立4年制大学のない県です。島根県教育委員会と島根県立大学と島根大学が連携し、コーディネーターが入って、まず連携しようという動きができたところです。これが今後広がっていくことを希望しています。

【池田・司会】 ありがとうございます。では高崎商科大学さまからよろしくお願いします。

【羽鳥】 はい。やはり単独校で実施するのは費用的にも予算的にも、時間的にもなかなか厳しいところがあると思うのが1点です。あとは、やはり大学や高校によってその学びのタネを見つけるために行うべきことは変わってくると思います。この探究教育は今1年生で本格的に始まったばかりです。これからますますプロトタイピング的にブラッシュアップしていかなくてはならないということを考えれば、大学間で連携をして、もちろんそこに携わっている高校さんも連携をしてという形になるかもしれません。集合知です。お互いに知恵を寄せ集めて出し合って、教育として質を高めていくということです。その

質が高められた教育コンテンツを使って、いろいろなところでいろいろな目的で使えるというのが一番いい流れだと思います。やはりこれだけ価値観が多様化している中で、やはりこの人には合っているがこの人には合っていないという学び方や内容は必ずあると思います。そこをどう実現させていくかがわれわれの考えるべきことだと考えています。

【池田・司会】 ありがとうございます。時間が過ぎてしまいました。まだお答えできていない質問もたくさんあるのですが、ここで総括をさせてください。では中島先生、総括を一言お願いします。

【中島・司会】 先生方、いろいろありがとうございました。また、フロアからいろいろな質問を頂きましてありがとうございました。この探究に関しての試みが始まったばかりで、いろいろな大学や高校、現場が試行錯誤しながら今後どういうものかを探していく過程なのだろうと感じています。課題もありますが、高大連携は、高校連携や大学連携も含めてですがいろいろな方々が集まって知恵を出し合うことが非常に大切だと改めて感じました。

もう1つに、4つの取り組みを聞いていますと、どうやって表現をするのかということですが、言語化し書類に落とすということとともに非常に大切で、皆さんがそこをご指摘になっている気がします。高校、大学ともこの辺についてもまた改めて取り組みを加速させなければいけないと思っています。本日は本当に貴重な機会を頂きましてありがとうございました。お礼を申し上げます。以上です。

【池田・司会】 中島先生、ありがとうございました。あまり慣れない司会で不手際があり大変申し訳ありません。皆さまのご協力によりまして活発な議論ができました。ご協力ありがとうございました。ではこれにて閉会します。ありがとうございました。■

「私立大学の入試改革の現状と課題—首都圏私立大学を中心に—」

司 会： 千田 亮吉（明治大学副学長・教務部長）・小野島 真（明治大学副学長・入試制度担当）

報 告 ①	明治大学の入試制度の現状と課題	148
	小野島 真（明治大学副学長）	
報 告 ②	立教大学の入試制度改革の現状と課題	159
	石川 淳（立教大学副総長）	
報 告 ③	上智大学の入試制度改革の現状と課題	173
	西澤 茂（上智大学副学長）	
報 告 ④	早稲田大学(政治経済学部)の入試制度改革の現状と課題	185
	荒木 一法（早稲田大学政治経済学部教務主任）	
全体討論		195

内 容：

25年度の新教育課程での入試も見据えて、私立大学においても入試改革の議論は今後より活発になるものと思われる。それに先立ち、21年度入試において積極的に入試制度を変更した大学としては、首都圏では早稲田大学、立教大学、上智大学などが挙げられる。これらの大学では、大学入学共通テストや外国語外部検定試験なども組み合わせ、それぞれのポリシーのもとに入試制度改革を実施している。全体会 3 では、これらの大学より、改革の狙いとこれまでの成果、そして今後の課題等について、公開可能な範囲で報告してもらう。一般選抜入試における大学入学共通テストと外国語外部検定試験の位置付けなどとともに、特別入試（総合型選抜等）についても話題を広げ、入試制度全般について議論したい。

全体会 3 ○ 報告 1

明治大学の入試制度の現状と課題

■ 小野島 真（明治大学副学長）

では、始めさせていただきたいと思います。まず、全体会 3 にご参加いただきましてありがとうございます。



本学が全体会 3 を企画しましたが、実を申し上げますと、本学は 2021 年度入試ではあまり大きく入試制度を変更しませんでした。その意味で、私も初めは司会に徹しようかと思っていたのですが、共催校でもありますのでそういうわけにもいかないということで、パネリストで参加する形にさせていただきました。

近年の入試制度改革について

2017年	全学部統一入試において、一部学部で英語四技能方式の2019年度からの導入を決定
2019年	「大学入試英語成績提供システム」「大学入学共通テストでの国語・数学の記述式問題」導入見送り
2020年	入試将来構想検討WG
2021年	大学入学共通テスト
⋮	
2025年	新教育課程のもとでの一般選抜入試

コロナ禍

『大学入試のあり方に関する検討会議 提言』2021年

- ・一般選抜と総合型選抜・学校推薦型選抜との役割分担
- ・一般選抜における大学入学共通テストと個別試験との役割分担

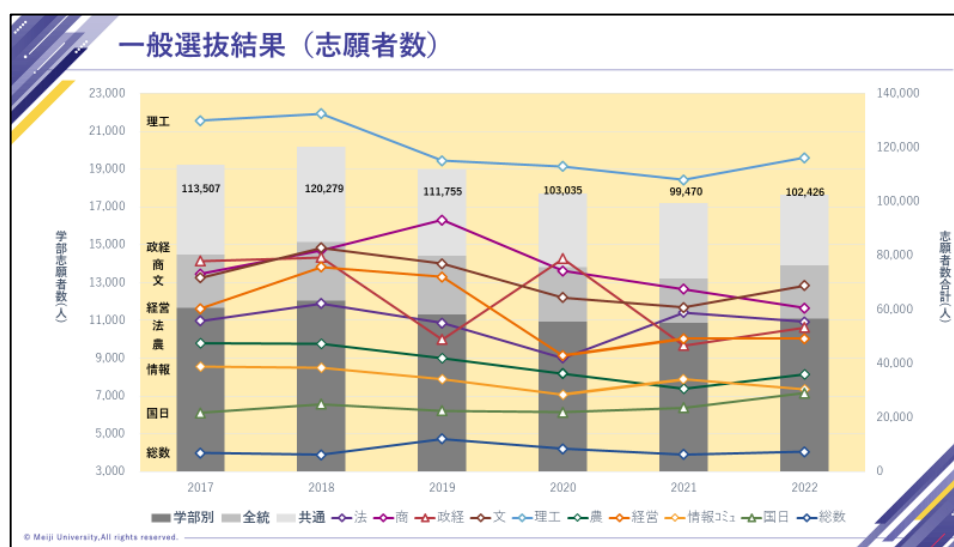
記述式問題の出題のあり方
総合的な英語力の育成・評価のあり方
大学入学選抜をめぐる地理的・経済的事情、障がいのある受験生への合理的配慮等への対応

© Meiji University. All rights reserved.

では、明治大学の入試制度について簡単にご説明したいと思います。まず、本学の近年の入試制度改革に対する動きについて、簡単にご説明します。2021 年度入試で大学入学共通テストと学力の 3 要素や新教育課程が導入されることを受けまして、本学でもちょうどこの時期にその対応を議論していました。基本的には私の前任者が議論していましたが、そのときの議論では、大学入学共通テストにおいて記述式がどうなるか、成績提供システムがどうなるか、いまひとつ見えてこないということがありました。また、新教育課程で教育を受けて受験してくる学生は 2025 年度入試からですので、とりあえず入試制度は動かさなくてもいいのではないかと結論になっています。

2020 年の秋ぐらいだったと思いますが、2025 年度から新教育課程が始まりますし、本学が抱えるさまざまな入試の課題を全体的に検討してみようということで、入試将来構想検討ワーキンググループをつくり、さまざまな検討を行っていくという動きになっています。その中でも大学入試の在り方に関する検討会議ないしは提言の議論なども少し参考にしながら議論を進めていますが、ちょうどコロナ禍でのワーキンググループの船出ということもあり、まだ皆さんにご披露できるような結論は出ていないということで、ご容赦いただけたらなと思っています。

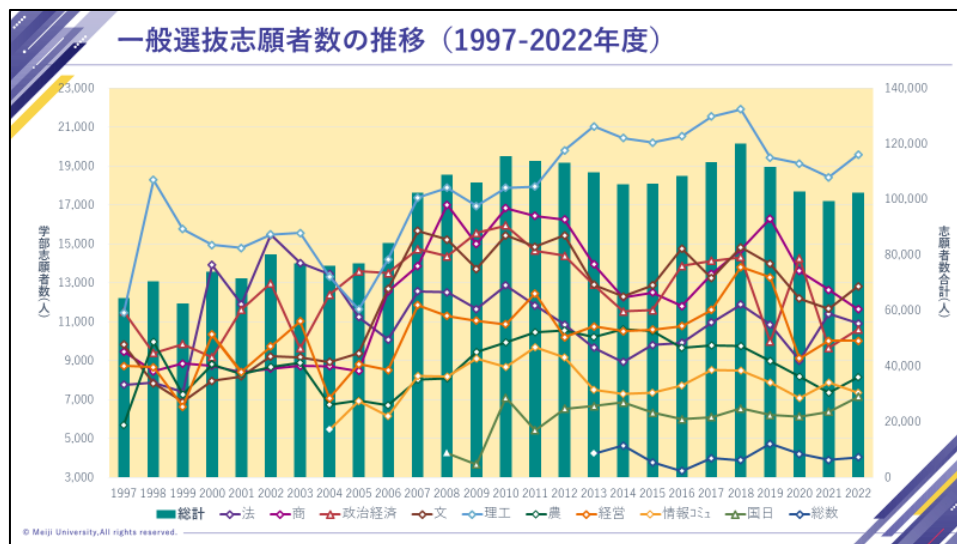
いずれにしても、明治大学でも 2025 年度以降どうするかという議論を始めていることになります。



では、近年における一般選抜の志願者数の推移です。こちらについてもご説明させていただきます。お分かりかと思いますが、2018 年をピークとしまして、今年は 10 万 2,000 人程度で、昨年に比べると若干増えたものの、徐々に減少傾向にあると評価しています。2021 年度入試は 10 万人を切って 9 万 9,000 人になりました。本学ではおよそ 3,500 人ほど減りましたが、他の首都圏の私立大学ではかなり志願者を減らしたところもあるかと思うので、その影響は軽微だったのかなと考えています。

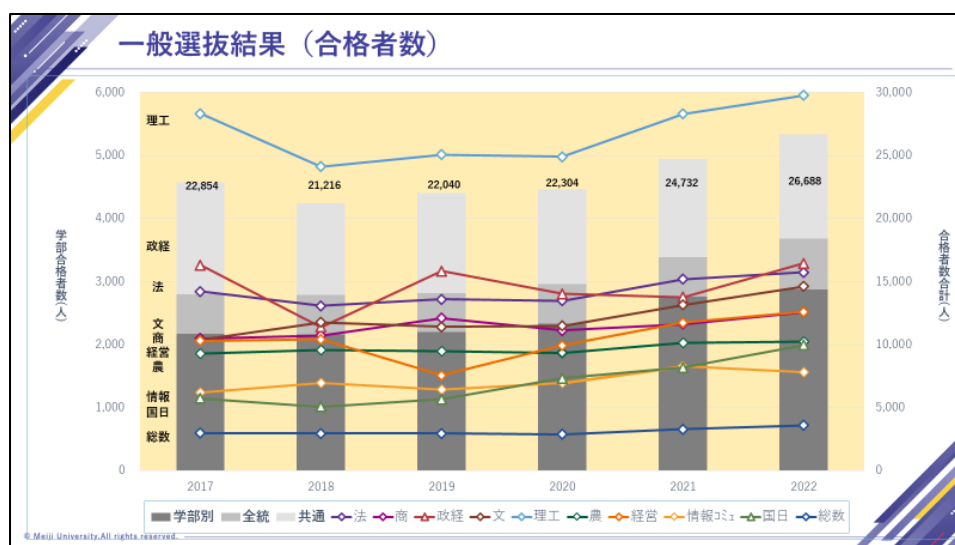
2021 年度入試はコロナ禍で最初の入試であったことと、大学入試改革元年であったた

め、受験生にとってはかなり不安の大きかった入試だったのではないかなと思います。そうしてみると、意図したわけではありませんでした、入試制度を変えなかったことがある程度の不安感の解消につながったのかなと思っています。



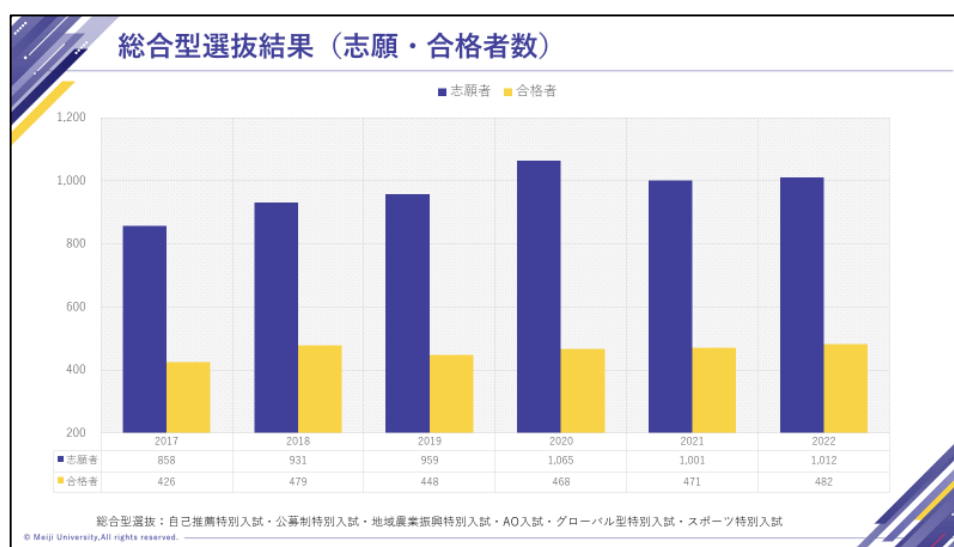
では、もう少し長いスパンを取って志願者数の推移を見てみたいと思います。1997年度からの推移です。こちらをご覧くださいますと、10万人を超え始めたのが2007年度以降になっています。ちょうどその時期に本学では全学部統一入試を導入しました。さらに中野キャンパスなどを設置しまして、志願者数は増加していきました。ちなみに、2010年度と2011年度は志願者数が日本一ということで、かなり話題になりました。

当時の予備校の資料などを見てもみると、全学部統一入試の導入などの大学入試改革にかなり積極的だったことと、スーパーグローバル大学創成支援事業に採択されるなど、国際化への取り組み、専門職大学院の設置などの大学改革が評価されたと記載されています。そのようなことで非常にありがたい結果になっています。

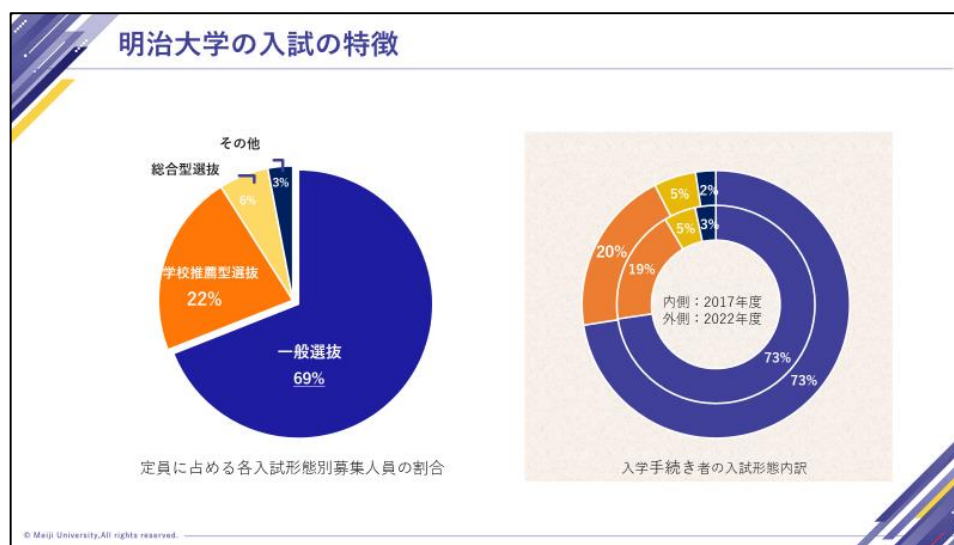


引き続きまして、次に合格者数の推移についてもご説明したいと思います。2018 年度が定員厳格化の年度になっています。確かにこのときは合格者の数が少し減っていますが、2022 年度の合格者は非常に増えて 2 万 6,688 名です。これは定員厳格化前の 2017 年度よりも合格者が増えている状況になっていて、志願者にとっては非常にいいことなのかなと思いますが、個人的には少し懸念しています。

なお、合格者の多い高校としましては、神奈川県、埼玉県などの公立校が多くなっています。合格者の多い上位 12 校の大学全体に占める割合は大体 8%程度になっていますので、かなり幅広い高校から合格者を出しているのかなと思います。



先ほどは一般選抜の状況ですが、こちらはいわゆる総合型選抜の志願者数と合格者数の推移です。こちらは毎年 1,000 名程度の志願者、500 名程度の合格者ということで、比較的安定的に推移しています。

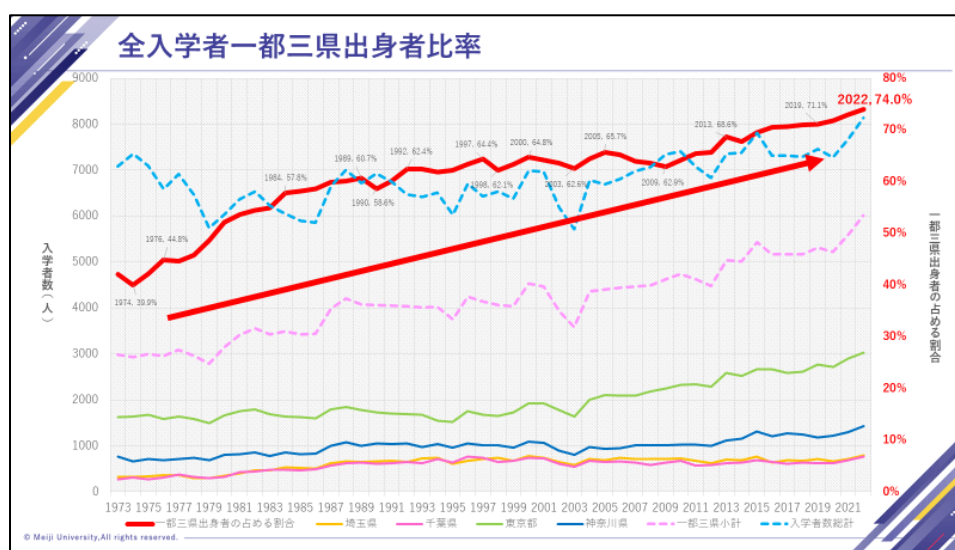


ここまでをまとめますと、まず明治大学の定員に占める募集人員の比率は、一般選抜が69%、約7割ということがかなり大きな特徴といえるのかなと思っています。

ちなみに、右側が入学ベースで見たものですが、こちらも7割を超えています。ただし、こちらの比率は学部によって結構違いがあり、7割を超える学部もありますし、7割を下回る学部もあります。そうした意味で言うと、7割が望ましいというコンセンサスが全学的にあるわけではないことが一ついえると思います。

基本的に一般選抜重視の姿勢は、恐らく今後も大きくは変わらないのではないかなと思いますが、指定校や付属校などのいわゆる学校推薦型や、総合型選抜を重視していないわけではありません。後ほど説明させていただきたいと思いますが、新たな付属校を設置する予定になっていますし、総合型選抜も一つの入試制度としてかなり一般化していることもありますし、非常にメリットの多い方法だと考えています。実際に2022年度入試から国際日本学部では新しく自己推薦特別入学試験を導入していますし、政治経済学部でもグローバル型入試のような総合型選抜を導入しています。比較的評価の高い方法だと考えています。

このように考えていきますと、現在の7割という一般選抜の比率は将来的に増えることはなく、徐々に低下していくのだろうと考えています。ただ、一般選抜はある意味で間口の広い選抜方法であるとも捉えていますので、一般選抜重視の基本的な考え方自体は、あまり大きな変化はないのではないかと個人的に推測しています。



引き続きまして、全入学者での1都3県出身者の比率についても少しご覧いただけたらと思います。大学のホームページで8割を超えるという記載がありましたが、若干定義が異なっていたようでして、入試広報としてはこちらの数値が使われています。全入学者の1都3県出身者、いわゆる出身高校所在地の比率です。こちらの赤い線を見ていただきたいと思います。1974年には40%ぐらいで1都3県以外の学生が6割程いましたが、現在は1都3県出身者が74%でどんどん増えている状況になっています。恐らく他の首都圏の私立大学も同じように感じられているのではないかなと思いますが、多様なキ

キャンパスの実現を考えていきますと、もう少し首都圏以外の学生さんにも来ていただきたいのが本音です。

一般選抜		
学部別入試	全学部統一入試	共通テスト利用入試
各学部独自の試験問題 ・募集人数(合格者)が一番多い ・試験会場は本学キャンパス 合格最低得点率は約60～70%	全学部共通の試験問題 ・複数学部の併願が容易 ・回答はマークシート方式※ ・試験会場は全国8都市 合格最低得点率は約70～80%	共通テストの結果のみ利用 ・本学独自試験の対策が不要 ・検定料が他と比べて安価 合格最低得点率は非公表だが科目数が増えるほど低下傾向
【出願期間】 1月6日(金)～20日(金)～27日(金) 【試験日】 2月7日(火)～17日(金) 【合格発表】 2月14日(火)～24日(金)	【出願期間】 1月6日(金)～17日(金) 【試験日】 2月5日(日) 【合格発表】 2月12日(日)～17日(金)	【出願期間】 1月6日(金)～13日(金) 2月20日(月)～27日(月) 【試験日】 1月14日(土)・15日(日) 【合格発表】 2月12日(日)～17日(金) 3月10日(金)～11日(土)
※全学部統一入試はドイツ語・フランス語のみ記述式を採用。 © Meiji University. All rights reserved.		

では引き続きまして、一般選抜に関して簡単に説明させていただきたいと思います。本学での一般選抜試験は、学部別入試、全学部統一入試、共通テスト利用入試の3つの形態があります。学部別入試の募集人員が最も多くなっていて、全体の50%ぐらいを占めています。全学部統一と共通テスト利用はそれぞれ10%ずつです。したがって、本学の入学試験はかなり学部別入試が中心となっているのではないかなと思っています。全学部統一は基本的にマークシート方式で、地方会場もあります。その辺が少し違うところです。共通テスト利用入試は共通テストの結果だけで判定していくものになります。

共通テスト利用方式（前期日程）	
学部	方式（募集人員）
法学部	3科目方式(60名)・4科目方式(40名)・5科目方式(40名)
商学部	4科目方式(50名)・5科目方式(45名)・6科目方式(30名)
政治経済学部	3科目方式(23名)・7科目方式(77名)
文学部	3科目方式(58名)・5科目方式(27名)
理工学部	3教科方式(31名)・4教科方式(53名)
農学部	4科目・3科目(55名)
経営学部	3科目方式(25名)・4科目方式(25名)
情報コミュニケーション学部	3科目方式(30名)・6科目方式(10名)
国際日本学部	3科目方式(20名)・5科目方式(10名)
総合数理学部	5科目(21名)
※法学部3科目は国語・外国語の他、4教科17科目のうち高得点を利用。 ※商学部の4科目方式は、数学(I・AもしくはII・B)が必須 ※農学部は農学科・農芸化学科・生命科学科が外国語・国語・理科1科目に加えて、数学ないしは理科から1科目を選択する(2科目以上受験の場合には高得点を利用)。食料環境政策学科は、外国語、国語に加えて地歴公民・数学・理科から1科目選択(2科目以上受験の場合には高得点を利用) © Meiji University. All rights reserved. 2022年度一般選抜要項より	

それぞれについてもう少しだけ説明をしていきたいです。まず、こちらが共通テスト利用方式で、前期日程だけを掲載させていただいています。私立専願の受験生も受験

しやすい 3 科目方式もありますが、どちらかという国公立希望の学生向けであると考えられる 4 科目、6 科目、7 科目といった方式も重視されていまして、募集人員もかなり多くなっています。

なお、商学部は 3 科目方式がありません。数学必須になっていることが一つ大きな特徴といえると思います。また、総合数理でも 5 科目になっています。そこが共通テスト利用方式の一つの特徴といえるかと思います。

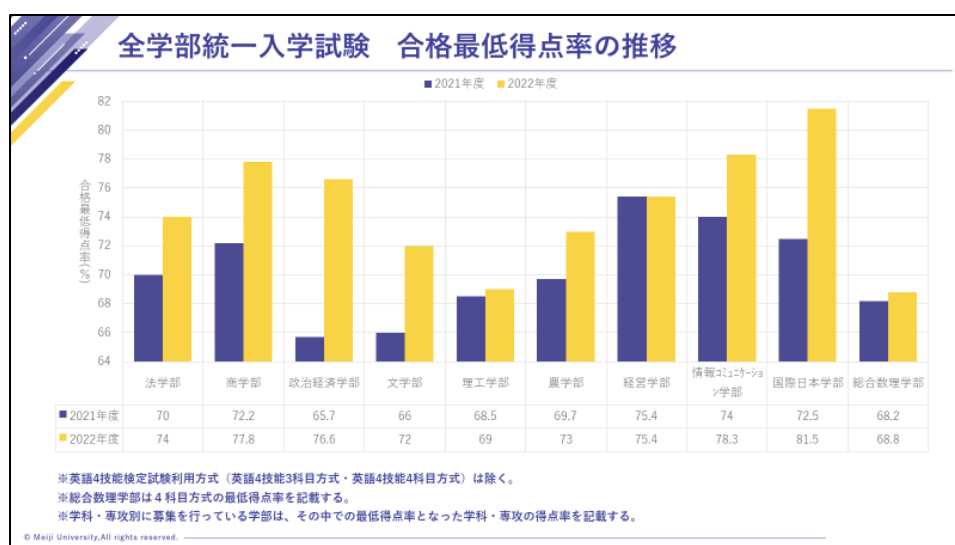
全学部統一入試				
下記、1 時間～4 時間の教科・科目の中から、出願した学部・学科・方式が指定している科目を選択し、受験してください。(注3)				
時限	試験時間・配点	教科	出題教科・科目	選択方法
1 時限	9:30～10:30 (60分) (1科目100点)	外国語	英語(コミュニケーション英語Ⅰ・コミュニケーション英語Ⅱ・コミュニケーション英語Ⅲ・英語表現Ⅰ・英語表現Ⅱ) ドイツ語 フランス語	左記教科・科目を受験する場合、いずれか1科目を選択し解答する。(出題時に事前選択)
2 時限	11:30～12:30 (60分) (1科目100点)	国語	国語総合(漢文を除く)	左記教科・科目を受験する場合、いずれか1科目を当日選択し解答する。
		数学	数学(数学Ⅲ) ※数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学A・数学B「数列・ベクトル」の範囲を含む。	
3 時限	13:50～14:50 (60分) (1科目100点)	地理歴史	世界史B 日本史B 地理B	左記教科・科目を受験する場合、いずれか1科目を当日選択し解答する。
		公民	政治・経済	
		理科	物理(物理基礎・物理) 化学(化学基礎・化学) 生物(生物基礎・生物)	
4 時限	15:50～16:50 (60分) (1科目100点)	数学	数学(数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学A・数学B「数列・ベクトル」)	

(注3) 試験教科・科目の選択によっては、学部・方式別の併願ができません。
学部・方式別の併願ができる組み合わせについては、24ページ「B. 併願について」を参照してください。

© Meiji University. All rights reserved.

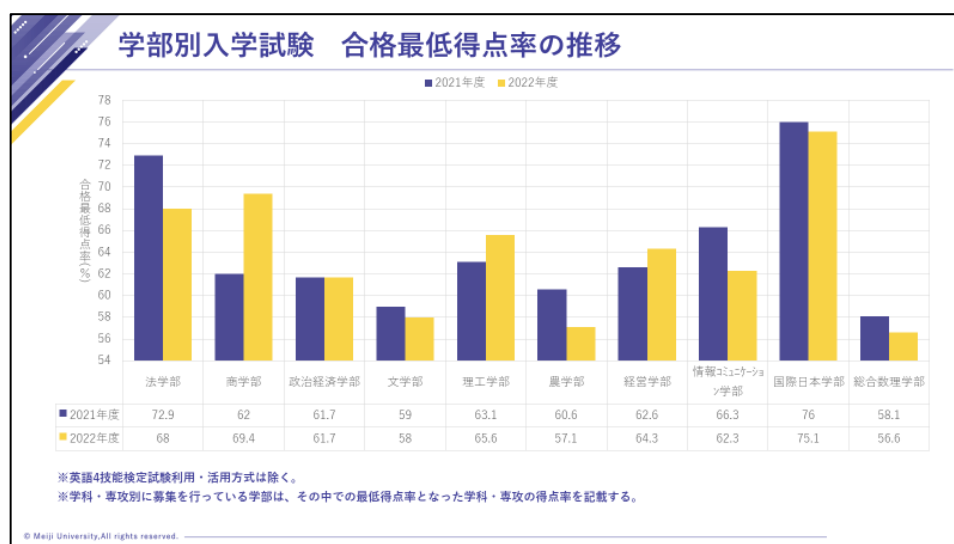
- ・ 出題科目数 13 科目
- ・ 3 科目もしくは 4 科目選択
- ・ 地方会場あり
(札幌・仙台・名古屋・大阪・広島・福岡)

続きまして、全学部統一入試も簡単に説明させていただきたいと思います。こちらが時間割ですが、ご覧のように、非常に多くの科目を出題していることが特徴になっています。出題科目数が 13 科目あり、その中から学部によって 3 科目ないし 4 科目を選択していきます。さらに、札幌、仙台、名古屋、大阪、広島、福岡の地方会場を設置していることも特徴です。学部別では地方会場を設置していません。



ちなみに、こちらが合格最低得点率の推移になっています。問題が違いますので比較し

でもあまり意味はありませんが、こちらは 2021 年度と 2022 年度の比較です。ご覧のように、全学部統一入試は多くの学部において 7 割から 8 割ぐらいの得点率でないと合格できないという結果になっています。言ってみれば、マーク式で問題数は非常に多いですが、問題の中身としてはかなり基礎的なところを問う問題が多い試験と特徴付けることができるのではないかと考えています。



同じ合格最低得点率の推移を学部別でもご覧いただけたらと思います。こちらはマークシートの解答用紙を使っていますが、記述式や記入式もかなり含まれています。学部によってはかなり長い記述を求めるものもあります。当たり前ですが、学部によって試験問題は異なりますので、最低得点率にもかなりばらつきがあります。

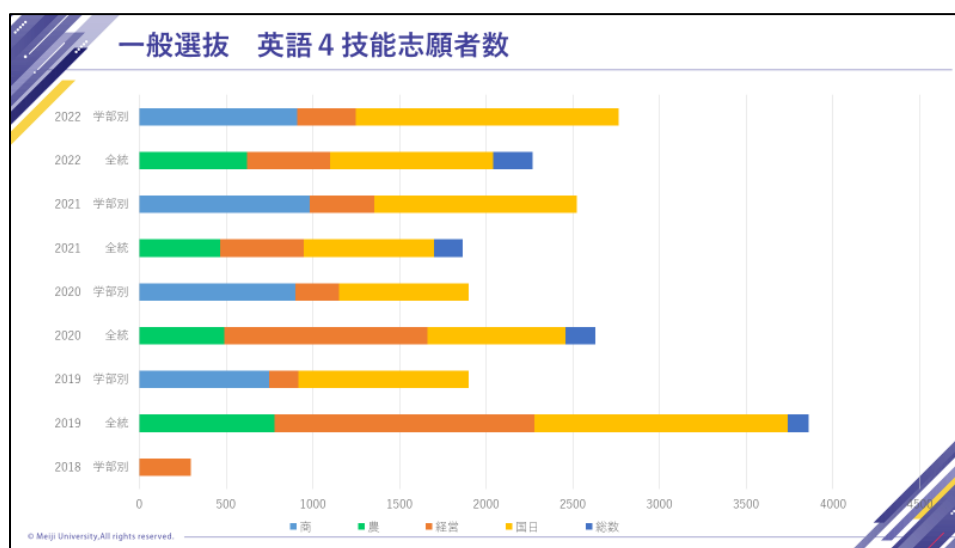
外国語検定試験を利用・活用できる入試

学部	学部別※1	全学部統一※1	共通テスト利用	総合型選抜※2
法学部				
商学部	出願資格			出願資格
政治経済学部				出願資格
文学部				自己アピール
理工学部				
農学部				出願資格
経営学部	出願資格+加点	出願資格+得点換算		
情報コミュニケーション学部				
国際日本学部	出願資格	出願資格+得点換算		出願資格
総合数理学部				

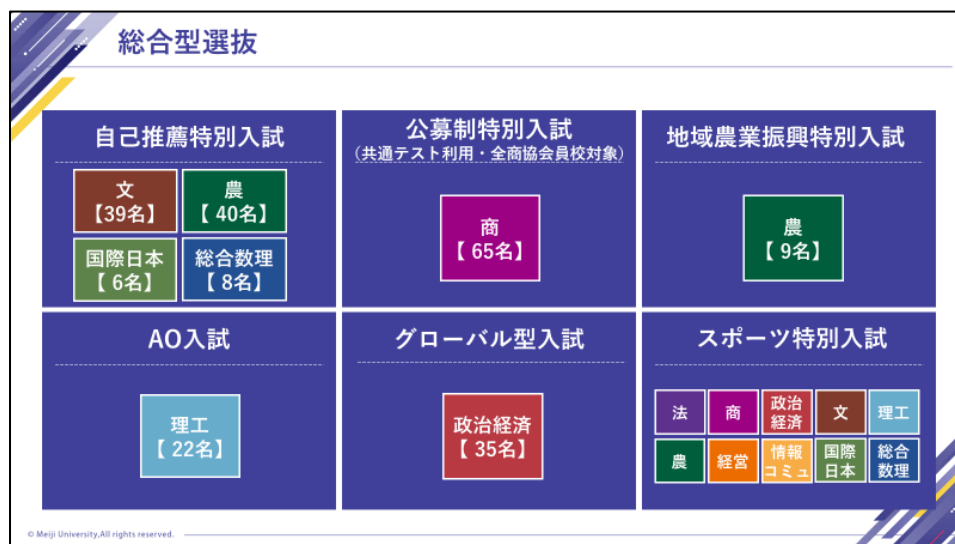
※ 商学部の学部別（22年度）では、英語（独自出題300点）国語（150点）地歴公民数学（100点）の550点満点で判定する。
経営学部の学部別（22年度）では、独自出題の英語を免除し、スコアに応じて得点加算（加算なし・20点・30点）の230点で判定
国際日本学部の学部別（22年度）では、独自出題の英語を免除し、国語と地歴公民の2科目で判定する。
全学部統一（22年度）では、スコアに応じて得点換算、0.9倍換算、0.8倍換算とし、独自出題の「外国語」の得点を利用しない。
※ 総合型選抜については2023年度要項を参照されたい。

こちらは外国語検定試験、4技能がどの試験で利用できるのかを一覧にしたものになります。全学部統一入試は基本的に同じフォーマットでやっていまして、得点換算をする形

になっています。学部別ではかなり内容が異なっているのが一つの特徴といえるかと思っています。あと、総合型選抜で導入しているケースもかなり見受けられます。



ちなみに、法学部、理工学部、情報コミュニケーション学部の一般選抜では4技能を導入していません。本学はSGUということで、国際化を進めることが一つの方針になっていますので、もう少し4技能を活用してもいいのではないかと考えていますが、あくまでも個人的な感想です。ちなみに4技能の志願者数は残念ながら少しずつ減ってきていますが、英検でいえば1級レベルの志願者はかなり増えている状況です。



総合型選抜は大体6%ぐらいですので、募集人員としてはあまり多くありません。先ほどご説明しました政経のグローバル入試などは外国語の外部検定などを使い、総合問題と口頭試問で判定することになります。英語力だけでなく、日本語の表現力や思考力も判定しているのが大きな特徴かと思います。

学校推薦型選抜

指定校からの推薦入試

法	商	政治 経済	文	理工
農*	経営	国際 日本	総合 数理	

※農芸化学科・食料環境政策学科のみ

■明治大学の指定校入試
各学部ごとに選定し、対象校宛に通知。
指定校の選定条件は非公表。

付属校からの推薦入試

明治大学付属明治
明治大学付属中野
明治大学付属中野八王子
明治大学付属世田谷（2029年度入試～）

■新たな付属校の誕生
・2026年4月1日から
日本学園中学校・高等学校を本学の系列校とし、
校名を明治大学付属世田谷中学校・高等学校とする
予定。

© Meiji University. All rights reserved.

学校推薦型選抜、指定校推薦は、情報コミュニケーション学部だけ導入していません。選定の見直し等は基本的に学部によります。付属からの推薦入試は先ほど少しご説明しましたが、今、日本学園中学校・高等学校を明治大学付属世田谷中学校・高等学校という名称に変更して付属校とする議論が進んでいます。2029年度入試から恐らくこうした付属校からの学生さんが入ってくることになるのではないかと思います。

その他入学試験

外国人留学生入試

法	商	政治 経済	文	理工
農	経営	情報 コミュ	国際 日本	総合 数理

English Track入試

国際 日本

海外就学者特別入試

法

UNHCR難民高等教育プログラム特別入試

法	商	政治 経済	文	理工
農	経営	情報 コミュ	国際 日本	総合 数理

社会人特別入試

文

編入学・学士入試

文	情報 コミュ
---	-----------

※スポーツ特別入学試験は総合型選抜として全学部で実施

© Meiji University. All rights reserved.

最後になります。その他の入学試験としてはこのようなものがあります。特徴的なのは国際日本学部で行われているイングリッシュ・トラック入試です。日本人も受験することが可能で、4月入学と9月入学の形になっています。



このような形で、多彩な入試制度を本学では設けているということで、非常に簡単ではありますが、明治大学の入試制度の概要についてご説明をさせていただきました。今後の議論につながればと思っています。

【千田・司会】 小野島先生、どうもありがとうございました。質疑応答の時間がほとんどありませんが、質問は来ていません。明治の場合は最初に先生からお話があったように、入試改革、大きく入試を動かすことは今のところやっていないので、現状の紹介になりました。これをレファレンスにして、他大学と比較しながら、今、明大の入試制度についてご報告いただきました。

私が最初に申し上げればよかったのですが、Q&Aにご質問をぜひお寄せください。賛成票の多い質問から優先的に答えさせていただきます。今、明治大学には来ていませんが、後ほどでもよろしくお願いします。■

全体会 3 ○ 報告 2

立教大学の入試制度改革の現状と課題

■ 石川 淳（立教大学副総長）

立教大学の石川です。



本学では 2021 年度入試で大きな変更を行いましたので、それを中心にお話をさせていただきたいと存じます。では、スライドを共有しながらお話を進めてまいりたいと存じます。



本学は、1874 年に米国聖公会のチャニング・ムーア・ウィリアムス主教が来日されて、

その方の下で開設されたことが始まりです。もともとは聖書と英学を教える私塾が起源です。



2018 年が池袋キャンパス 100 周年ですので、1918 年に築地から池袋に移って 100 年たちました。2024 年に創立 150 周年を迎えようとしています。

もともとの建学の精神はラテン語の「Pro Deo et Patria」で、われわれは「普遍的なる真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために」と解釈していきまして、一貫してキリスト教に基づく教育を目指しています。もう少し具体的に申しますと、モデルは西洋の伝統的なリベラルアーツカレッジで、一人一人を尊重する自由の学府を標ぼうしています。



グローバルリーダー育成を目指し、 英語4技能を評価する入試制度へと変更

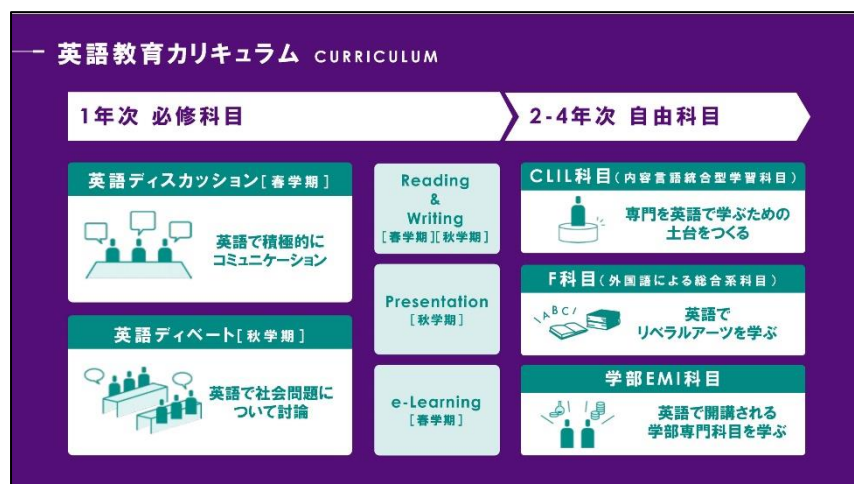
そのような経緯もあり、本学は開設以来、グローバルリーダーの育成を重視してきました。今日グローバル化が進んでいるわけですから、なおのことこの必要性が高まっているだろうと認識していますので、グローバルリーダーの育成を目指して英語4技能を評価する入試制度へ変更したという経緯です。

— 取り組みのポイント

- 1 海外への学生派遣拡大など4分野の目標を設定した国際化戦略「Rikkyo Global 24」を策定
- 2 英語の独自試験を廃止し(文学部の1日程を除く)、英語外部試験のスコアでの評価を導入
- 3 入試制度変更に伴い、英語ディベート科目の必修化など英語の教育改革を行う



取り組みのポイントですが、そもそも入試改革の前に海外への学生派遣拡大など4分野の目標を設定した国際戦略である「Rikkyo Global 24」を策定しています。これに基づきまして、英語の独自試験を文学部の1日程以外は原則廃止し、外部試験スコアでの評価を始めました。入試制度変更に伴い英語ディベート科目の必修化など、英語の教育改革も行っていて、セットであるとわれわれは認識しています。



具体的な英語カリキュラムは、1年次の必修科目としてこれまでも Reading & Writing, Presentation, e-Learning がありましたが、これに加えて春学期には英語ディスカッションのクラス、秋学期には英語でディベートを行うクラスを必修科目として設けています。

また、2年から4年次では、必修ではありませんが CLIL 科目を設けています。これは単に英語を学ぶのではなく、英語で専門領域を学ぶための土台をつくる科目群です。また、F 科目と私どもは呼んでいますが、英語でリベラルアーツを学ぶ科目群と、各学部に設置されている EMI 科目、すなわち学部の専門科目が英語で開講されていて、このように発展していくことを念頭に置いています。



一般選抜制度の概要です。まず、一般入試は立教大学で受験していただきますが、独自の試験科目 2 科目を選択していただいた上で、プラス外部試験、英語資格検定試験もしくは共通テストの英語の成績で合否判定を行っています。先ほど申し上げたとおり、文学部のみ 1 日程で独自の英語試験を課していますが、原則はこういう形です。

大学入学共通テスト利用入試 ADMISSIONS
英語資格・検定試験利用について

**英語資格・検定試験のスコアを提出すると
外国語の得点に換算されます。**

**共通テストの
外国語得点**

**英語資格・検定試験の
換算得点**

➡ **点数の高いほうを合否判定に使用**

☒ 複数スコア提出可能

☒ 最低スコアの設定なし

※英語資格・検定試験のスコア提出は任意です。

もう一つは、大学入学共通テスト利用入試です。これは地元で受験していただくわけですが、共通テストの成績で合否を判定します。もちろん併願は可となっています。大学入学共通テスト利用入試についてですが、英語資格検定試験のスコアを提出すると、私どもで外国語の得点に換算します。共通テストを受けられる方は多いと思いますが、こちらの外国語得点と、英語資格検定試験の換算得点を比較して、点数の高いほうを合否判定に使用することになっています。なお、英語資格検定試験については、複数提出していただいても構いません。全ての中で一番高いスコアを合否判定に用います。また、最低スコアの設定はありません。

大学入学共通テスト利用入試 ADMISSIONS
英語資格・検定試験利用について

2023年度入試 英語資格・検定試験スコアの換算得点 ※一般入試の換算得点ではありません

得点率	ケンブリッジ 英検	英検 (CSE2.0)	GTEC (4技能版)	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT
100%相当	170以上	2,450以上	1,270以上		342以上	690以上	83以上
⋮	⋮	⋮	⋮		⋮	⋮	⋮
95%相当	166	2,400	1,230	*	328	655	78
⋮	⋮	⋮	⋮		⋮	⋮	⋮
85%相当	158	2,300	1,150		300	590	68
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

※IELTS 100%相当 = 6.0以上 92.5%相当 = 5.5 85%相当 = 5.0

これがおおよその換算得点です。一番左が共通試験で何%取ったかということで、CEFRを基準に決めています。例えばケンブリッジ英検 170 点以上、英検でいうと 2,450 点以上は得点率を 100%という大きい形で換算して、高いほうを合否判定に使っています。このように、原則として大学独自の英語試験は行わず、英語資格検定試験、共通テストなどのスコアを合否判定に採用しています。利用できる英語資格試験は英検、GTEC、TEAP、TEAP CBT、IELTS 等々、こちらに載っているものとなります。

一般入試 ここがPOINT ① ADMISSIONS

！ 大学独自の英語試験は行いません

英語資格・検定試験

共通テストの「英語」

これらのスコア(換算得点)を合否判定に採用

☒ いずれか1つあれば
受験可能

☒ 複数スコア
提出可能

☒ 最低スコアの
設定なし

※文学部のみ大学独自の英語試験で受験できる試験日あり(2/11(土))

一般入試 ここがPOINT ① ADMISSIONS

利用できる英語資格・検定試験

実用英語技能検定試験

GTEC

TEAP

TEAP CBT

IELTS

TOEFL iBT

ケンブリッジ英語検定

※詳細は入試要項を参照

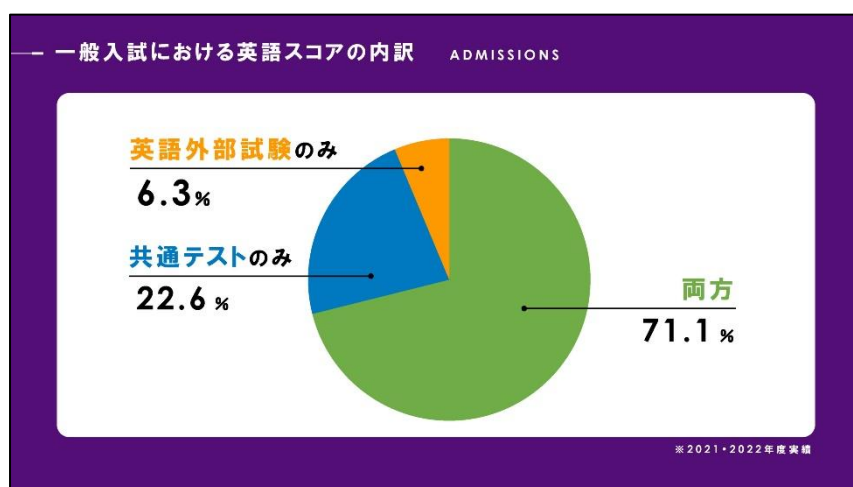
☒ 2年以内のスコアが有効
(出願期間の初日から起算)

☒ 試験による有利・不利はなし

☒ 複数の試験のスコアを提出した場合は、
最も高得点に換算されるスコアを合否判定に採用

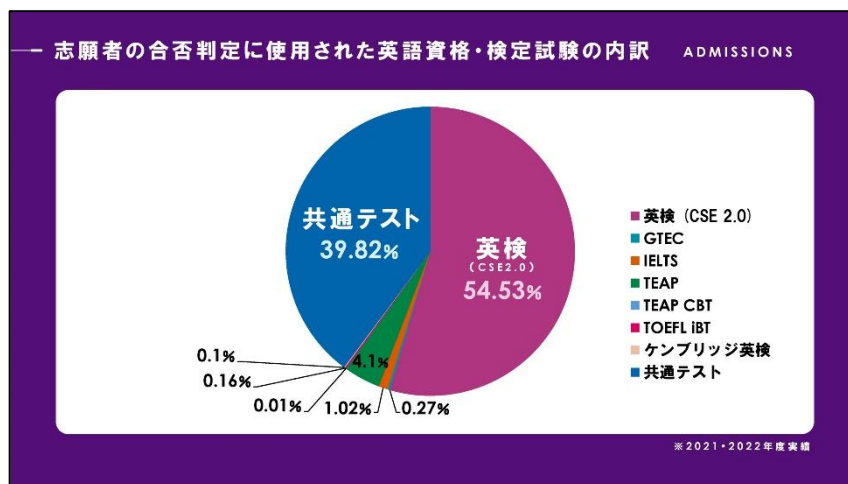
※英検、ケンブリッジ英検・・・級の合否は問わず、スコアを使用

少し話がずれてしまって申し訳ないのですが、ここから一般入試の話です。一般入試も英語検定試験と共通テストのスコアをどちらでも、どちらか片方でも提出することができます。これによって一般入試も合否を判定します。



実際に一般入試で提出された英語スコアはどのようなになっているのかがこちらです。

両方提出した受験生が 70%を超えています。



一方で共通テストだけで、外部試験を提出しない受験生も 22%，逆に外部試験のみの受験生も 6.3%いました。先ほど申し上げたとおり、高いほうを合否判定に使います。実際に使用されたものを見ますと、英検が一番多くて 54.53%，次に多いのが共通テストで 39.82%になっています。



このような入試制度改革を行った最も大きな狙いは、21 世紀の社会をリードするグローバルリーダーを育成したいということです。まず入試で英語力および 4 技能を高める意欲を入学段階で適正に測定し、入学後は質の高いグローバル教育を学生たちに提供することを考えています。

— 入試制度のねらい

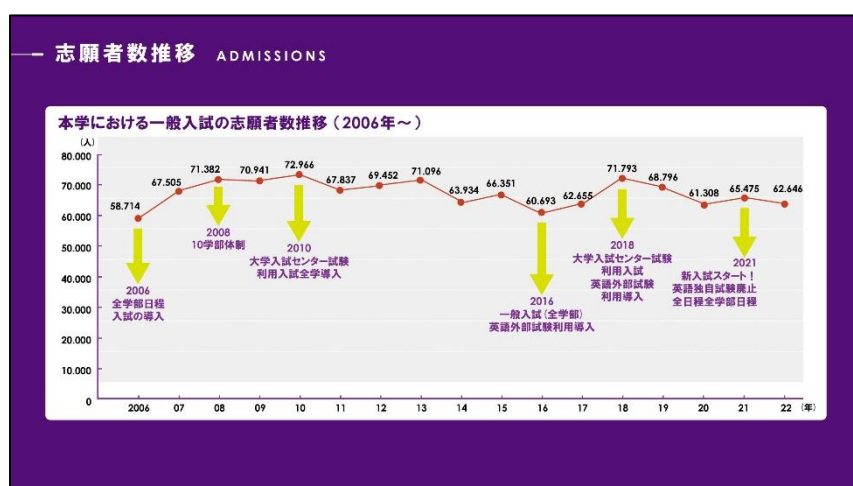
受験のチャンスを広げる

■ **同じ学科を
最大 5 回
受験できる**

※文学部は最大6回
理学部は最大2回

■ **学部・学科の
併願の
組み合わせが
柔軟に**

入試改革を行ったもう一つの理由は受験のチャンスを広げることで、同じ学科を最大5回まで受験できます。学部学科の併願を柔軟に組み合わせられる取り組みも行いました。第1 志望の学科に入学したほうがより勉学に対する意欲が高まり、その後の教育効果も高いため、なるべく自分の希望する学科へ行けるように、このような配慮を行いました。



本学の入試制度全般をご覧くださいと、一般選抜は今申し上げた一般入試、大学入学共通テスト利用入試があります。それに加えて、子どもは特別入試と呼んでいます、自由選抜入試を全学部でやっています。それから、国際コース選抜入試、これはいわゆるイングリッシュ・トラックで、異文化コミュニケーション学部、社会学部、法学部、リベラルアーツを中心としたコースである GLP で行っています。それに加えて、全学部でアスリート選抜入試。経営学部のみですが帰国生入試、全学部で外国人留学生入試、指定校推薦入学。現代心理学部とスポーツウエルネス学部のみですが、社会人入試。スポーツウエルネス学部は 2023 年、次年度に開設される学部です。このような形でさまざまな制度を提供しています。

合格基準の目安は公表していませんが、結果としては一般入試の英語は英検で 1,950 点程度、共通テストでは 70%程度が最低ラインになっているようです。他の科目に関しま

しては、学部によっても年度によっても違いますので一概には言えませんが、過去間で7割ぐらいの正答率がおよその目安になっています。

それから、大学入学共通テストに関しましては、3科目型が85から90%、6科目型は80から85%。これも学部や年によって違いますので一概には言えませんが、一応の目安として提示させていただいています。

2006年からの本学における入試志願者の推移をお示ししたものがこちらです。近年で申し上げますと、2016年の一般入試、特に全学部入試において英語外部試験利用入試を導入しました。2018年には大学入試センター試験利用入試と英語外部試験利用を導入しています。そして、2021年に今申し上げた英語独自試験を廃止と、全日程全学部日程を創設しました。

— 志願者数推移 ADMISSIONS

本学における一般選抜の志願者(前年比較)

	2022年度	2021年度	前年度比	
一般	40,146	44,099	-3,953	91.0%
共通テスト利用	22,500	21,376	1,124	105.3%
3科目型※	17,204	15,468	1,736	111.2%
6科目型	5,296	5,908	-612	89.6%
英語外部利用	15,956	14,189	1,767	112.5%
志願者総数	62,646	65,475	-2,829	95.7%

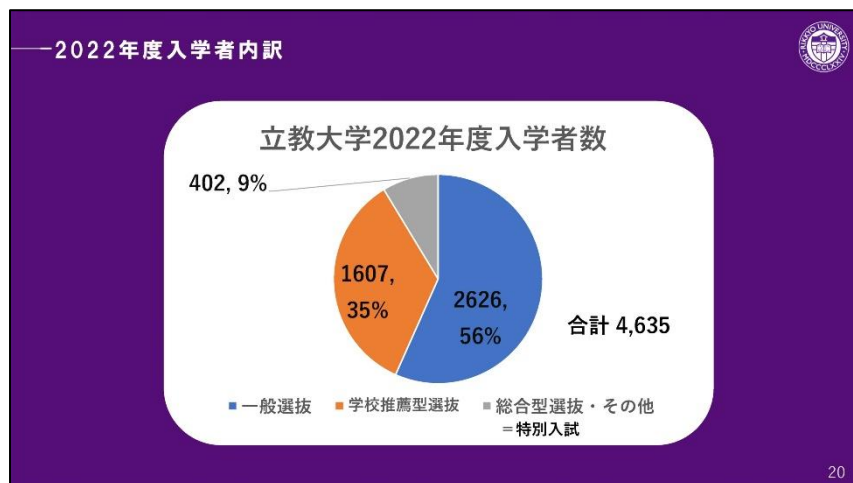
※理学部、ドイツ文学専修の4科目型は3科目型に集計

一般選抜の志願者です。改革を行った2021年度との比較で申し上げますと、一般入試はやや減少、共通テスト利用の3科目型は増えていますが6科目型は減少、英語外部利用は増えています。トータルの志願者総数は、2021年度と比べると2022年度はやや減っている状況です。

— 一般入試における志願者の1都3県比率 ADMISSIONS

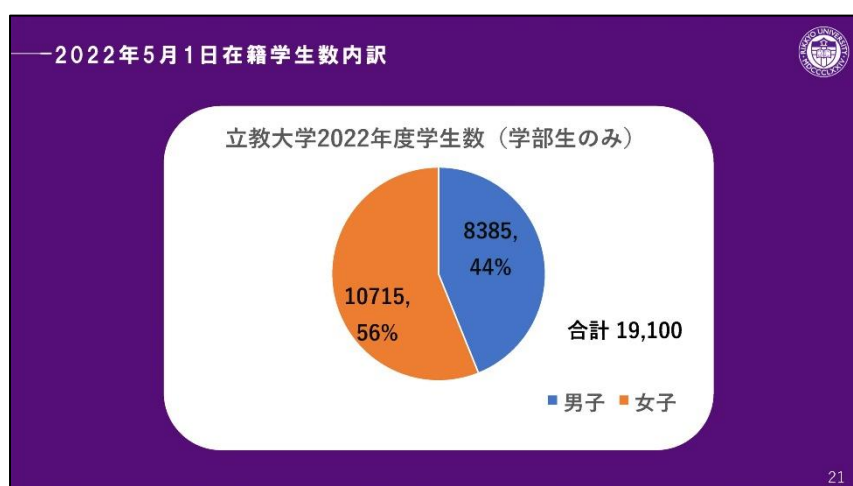
年度	1都3県(%)	1都3県以外(%)	その他(%)
2018年度	78.8	20.6	0.6
2019年度	78.8	20.6	0.6
2020年度	79.0	20.4	0.6
2021年度	79.9	19.6	0.5
2022年度	79.3	20.2	0.5

先ほど明治さんにもご提示いただきましたが、本学もご多分に漏れず、一般入試における志願者の1都3県の比率が高いです。ただでさえ高いのですが、年々高くなる傾向があり、2022年度は79.3%という状況になっています。



こちらは2022年度入学者の一般選抜、学校推薦型選抜、総合型選抜の割合です。こちらでも先ほどの明治さんの数値に比べると、一般選抜の割合が低いです。その分、学校推薦型選抜、総合型選抜が多いです。これはもちろん学部によって違いがありますが、本学の場合、一般入試の出題は学部ごとでなく全学体制で行っていますので、学部によって大きく違うことはありません。大体どの学部もこれに近い形です。

後ほどお話が出るかと存じますが、アドミッション・ポリシーに即した入学選抜を考えた場合に、もちろん一般選抜でもできることは多々あると思いますが、一方で学校推薦型や総合型選抜のほうがよりフィットしたやり方ができるという考え方があり、それも反映されてこのような割合になっていると考えています。

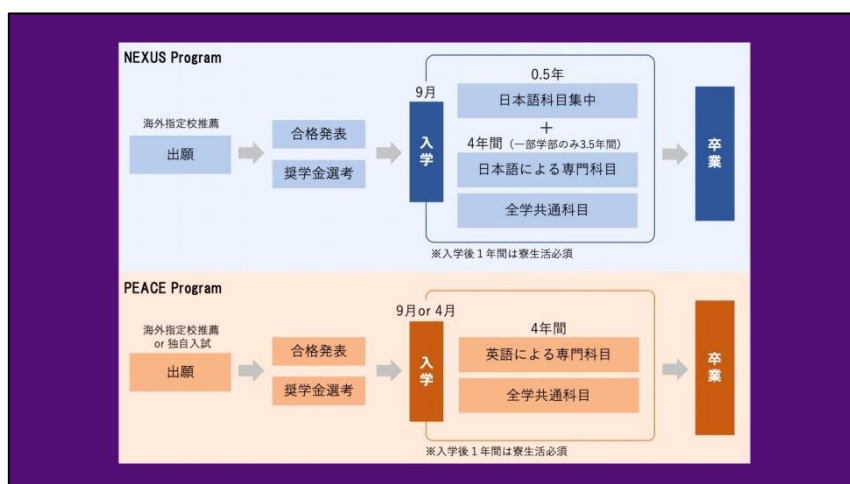


こちらが男女比率で、女子が56%になっています。また、年々女子の割合が高くなっています。これが英語外部試験を全面的に導入した影響かどうかは分かりません。出身地

にしても性別にしても多様性の高いほうがより教育効果は高いとわれわれは認識しています。



もう一つ本学の独自の取り組みとして、Rikkyo Study Project, すなわち RSP というプログラムを設けています。これには2つあり、どちらも留学生を想定しています。



上のほうは私どもが NEXUS Program と呼んでいるもので、全学部対象のどちらかというと日本語で学ぶことを想定したものになっています。入学する前の0.5年で日本語を集中的に学び、その後は4年間、原則日本語で学んで卒業していただく仕組みです。

一方、PEACE Program も同じく留学生向けのイングリッシュ・トラックで、英語で全ての科目を学んでいただいて、そのまま卒業するものです。このように特別な制度がありますので、こちらに合わせた入試制度も行っています。

— 今後に向けた課題


- 2021年度入試改革では、教育改革と一体となった入試制度改革と早い段階からの広報が功を奏し2021年度は志願者数増を実現した。
- 一方、2022年度入試では、その反動もあり志願者減となった。
- 2023年度入試でも18歳人口減少、既卒生もさらに減少、コロナ禍継続と厳しい状況が続く。
- ポストコロナも見据え、「Rikkyo Global 24」の推進のために、グローバル人材育成に向けて入試制度改革の検証と改善が不可欠。
- キャンパス内の多様性を高めるうえでは、海外からの留学生受け入れに加え、1都3県以外の志願者獲得も大きな課題。

24

最後に、今後に向けた課題をまとめさせていただきました。早い段階から2021年度入試改革は教育改革と一体となった改革と広報させていただきました、それが功を奏して2021年度は志願者数が増えました。しかし一方で、2022年度はその反動もあってか、志願者減となりました。2023年度入試でも18歳人口減少、既卒生もさらに減少し、コロナ禍継続で厳しい状況が続くと認識しています。

それから、ポストコロナも見据えて、本学のグローバル化に向けたビジョンであるRikkyo Global 24の推進のため、グローバル人材育成に向けて入試制度改革の検証と改善が不可欠になるだろうと考えています。ポストコロナでは、なかなか難しかった留学生の受け入れ、もしくはこちらからの留学もより活発に、以前のように戻ってくるだろうと思います。もちろん限界もありますが、われわれはコロナ禍においてオンライン授業の使い方などの良さも学びました。留学に行かなくても海外の授業を受けられ、逆に海外の学生が本学の授業を取ることができ、より一層グローバル化が進んでいくと認識していますので、それに向けた入試制度の改革検証もしくは改善が必要であると考えています。

また、キャンパス内の多様性を高める上で、海外からの留学生の受け入れをより一層進めてまいりたいと存じますが、それに加えて1都3県以外の志願者獲得も非常に重要な課題になるだろうと認識しています。

以上、立教大学の入試制度改革についてご説明申し上げます。

【千田・司会】 石川先生、ありがとうございました。質問が来ています。立教大学への質問ということで、英語の独自の試験をやめられたことに関して、入学者の英語力に変化が見られるかどうかということと、あとお答えできる範囲でということになるかもしれませんが、コスト面でのメリットなどがあったかどうかということです。まず、この質問についてご回答いただければと思います。

【石川】 ありがとうございます。まだ2021年度に始めたばかりですし、英語力は毎年測定していますが入試制度を変えなくても毎年変動はありますので、どこまでが毎年の変

動の誤差範囲なのか、どこまでが入試制度によるものなのかはまだ検証できていません。今の段階ではなかなか難しいかなと考えています。ただ、4技能を重視してしまして、それに向けた授業も広がっていますので、相乗効果があるのではないかと期待しています。

それから、コスト面は厳密に計算しているわけではありませんし、もう少し言うと換算などもありますので、正直に申し上げて入試に携わる人間としては仕事が増えている現状もあります。

何よりも4技能をきちんと学ぶことが大事であり、それを大学内でも生かせると。その接続が大事だと考えているので、そういう点では今のところうまくいっているのではないかなと認識しています。以上です。

【千田・司会】 ありがとうございます。もう一つ質問が来ています。石川先生への質問ですが、出身高校の場所による出願の違いはありますかという質問です。これは入試種別ですね。こちらについてはいかがでしょうか。

【石川】 ありがとうございます。英語の外部試験の利用で申し上げますと、やはり違いがあります。首都圏もしくは大都市圏と言ったほうがいいのかもかもしれませんが、外部試験のスコアを提出する割合が高いです。一方、地方の場合は共通テストのスコアだけで提出している受験生の割合が高くなっている傾向があります。これでよろしいですか。

【千田・司会】 ありがとうございます。それからもう一つ質問が来ていまして、これは先ほどの明治大学の小野島先生への質問ですが、立教大学の石川先生も2回ほど言及されました、首都圏からの受験生が非常に多いという話です。小野島先生への質問ですが、この点について石川先生、立教として何か考えていらっしゃることはありますか。

【石川】 その理由ですよね。対策は正直に言って練られていません。理由はコロナも大きかったかなと思います。コロナによって地元志向が強まったこともありますし、経済状況は今いいのか悪いのか分かりませんが、少なくとも悪化するとやはり地元志向が強まる傾向はあると思います。

ただ、本学の場合は半分やっかみですが、特に明治大学さんなどと比べると全国的なネームバリューが低いのも大きな原因かなと考えていました。ただ、同様の悩みを抱えているのでしたら、やはり首都圏の私立大学特有の問題なのかなとも思います。対策は、もちろん地方での広報を強化することを重視していますが、例えば先ほどの学校推薦型選抜等は、学部によって違いますがなるべく地方を満遍なくということですので、一般選抜以外で地方にアクセスすることは重要な手段の一つかなと考えています。以上です。

【千田・司会】 ありがとうございます。実は全体討論の中で、首都圏の私立大学という問題で取り上げようと思っていましたが、今質問が出ましたので、石川先生にお答えいただきました。小野島先生への質問なので、それも含めて全体討論でもう一度この問題につ

全体会 3

いて触れたいと考えていますので、よろしくお願いします。■

全体会 3 ○ 報告 3

上智大学の入試制度改革の現状と課題

■ 西澤 茂（上智大学副学長）

上智大学の高大連携担当副学長の西澤と申します。よろしくお願いします。

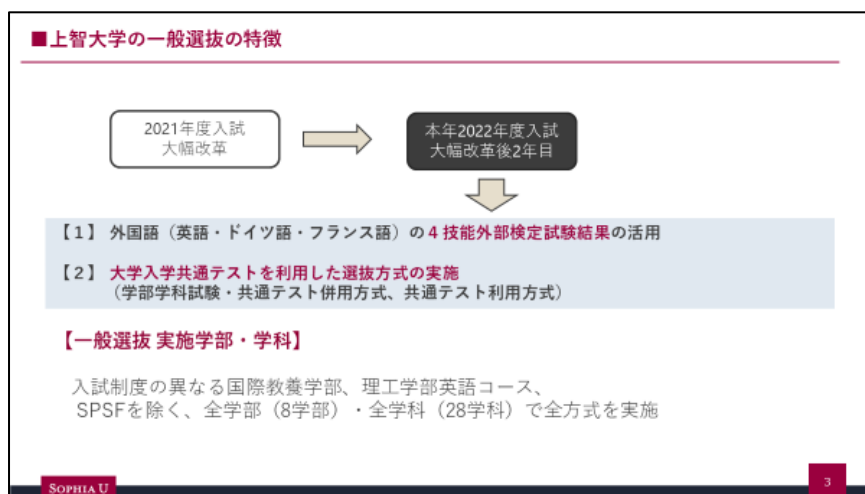


それでは、これから上智大学における入学試験の現状と将来展望について、簡単に報告させていただきます。



まずは一般入学試験制度改革の内容と概要について簡単にご報告したいと思います。上智大学は立教大学と同様に、昨年 2021 年度の入試から大幅な改革を行いまして、本年

2022 年度がその入試の 2 年目になります。



大幅な入試改革の背景としましては主に 2 点あります。1 点目は、外国語の 4 技能の外部検定試験の結果を積極的に活用することです。もう 1 点最も大きな変化として、従来上智大学は大学入学共通テストを活用していませんでしたが、2021 年度から積極的に活用する選抜方式へ大きくかじを切りました。

学部学科試験・共通テスト併用方式と共通テストのみの利用方式の 2 種類の入学試験制度において、大学入学共通テストを導入しました。この一般選抜の実施学部学科については、入試制度の異なる国際教養学部、理工学部の英語コース、SPSF という英語で全ての授業を実施する 6 学科のプログラムを除く全 8 学部全 28 学科で全方式の入試を実施しています。

■一般選抜 3 方式の違い

2023年度 一般選抜方式	大学入学共通テスト 利用	外国語外部検定試験 利用	本学独自試験 実施※3
1 TEAPスコア利用方式 （全学統一日程入試）	—	◎ ※ TEAP/TEAP CBスコアを併用して利用	◎ ※ 教科・科目別の試験（記述式を含む）
2 学部学科試験・ 共通テスト併用方式	◎ ※1	◎ ※ CEFRレベルB2以上で検定試験結果を提出した場合、 共通テストの外国語の得点に上乗せ可能 ※ 通称の外国語外部検定試験から選択可能	◎ ※ 思考力や学習意欲の適性を問う試験 （記述式を含む）
3 共通テスト利用方式 （3教科型・4教科型）	◎ ※1	— ※1 ※2	—

※1：文学部英文学科、外国語学部英語学科の選択言語は英語のみとし、ドイツ語・フランス語の大学入学共通テスト科目、および、外部検定試験結果は利用できません。

※2：外国語外部検定試験結果の提出は基本的に不要。ただし、CEFRレベルB2以上の検定試験結果を提出した場合、共通テストの外国語において、みなし得点として利用可能です。

※3：神学部神学科、総合人間科学部心理学科・看護学科では、全方式で面接試験を実施します。
2段階での選抜とし、第1次試験合格者のみ第2次試験として面接を行い、最終合否判定を行います。

SOPHIA U 4

具体的に 3 方式について、およその枠組みをご紹介させていただきたいと思います。初めに、TEAP スコア利用方式、これは全学統一日程入試とも申し上げますが、TEAP とは上智大学と英検で開発した新しい 4 技能を図る英語検定試験制度です。これを積極的に活用しています。こちらでは大学入学共通テストは活用せず、外国語の外部検定試験、

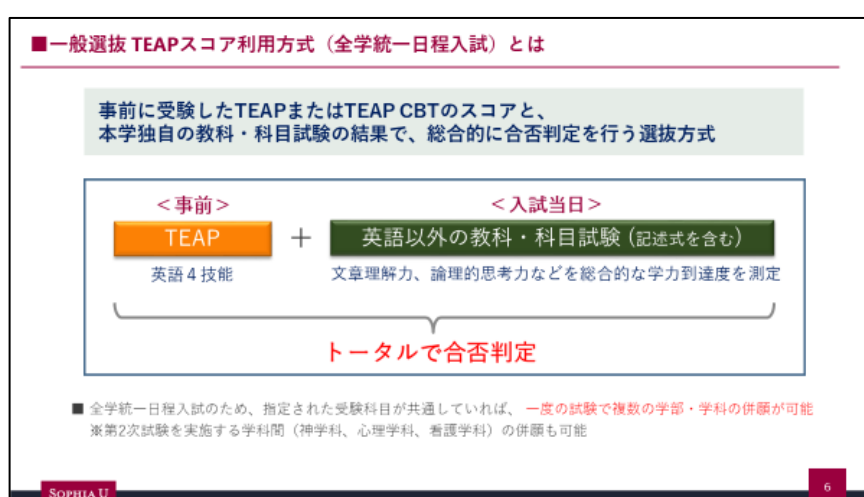
TEAP または TEAP CBT のスコアを得点化して利用するとともに、本学の独自試験を実施します。本学独自実施の内容については、記述式の問題も含んでいます。

一方で、2 番目の学部学科試験・共通テスト併用方式の入学試験制度においては、大学入学共通テストを積極的に活用させていただいています。また、外国語外部検定試験の利用も可能です。CEFR レベル A2 以上を得点化して、共通テストの外国語の得点に上限付きで加点します。その他複数の外国語外部検定試験も選択可能です。さらに本学独自の試験も実施することで、思考力や学部学科の適性を問う試験として、記述式の問題も含みます。

3 つ目は共通テスト利用型方式です。これは大学入学共通テストのみで合否の判定を行う入学試験制度です。



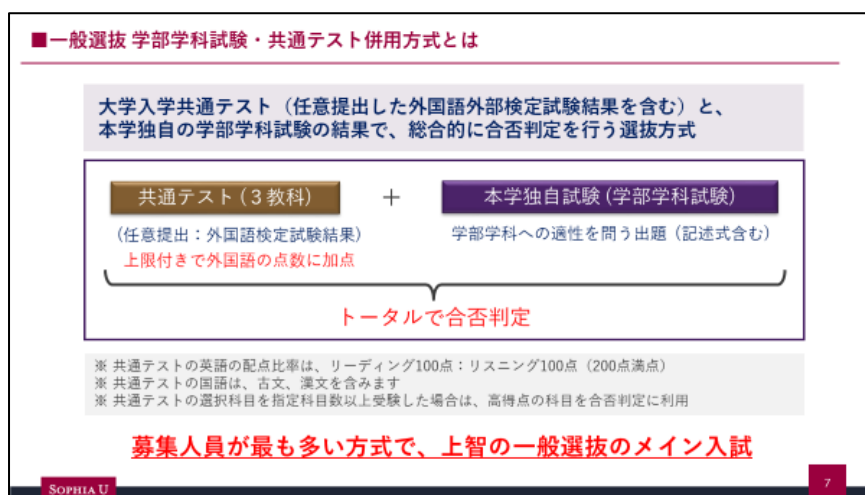
では次に、これらの 3 方式のさらなる詳しい概要について、ご報告させていただきたいと思います。



まず、一般選抜 TEAP スコア利用型、全学統一日程方式ですが、事前に受験いただいた TEAP または TEAP CBT のスコアと本学独自の教科・科目の試験結果で総合的に合否判

定を行う選抜方式です。事前の TEAP の英語 4 技能に加えて、入試当日は英語以外の記述式を含む教科・科目の試験を実施させていただいて、文章の理解力、論理的思考力などを総合的に判断し、学力到達度を測定する入学試験制度を実施しています。これをトータルで合否判定します。

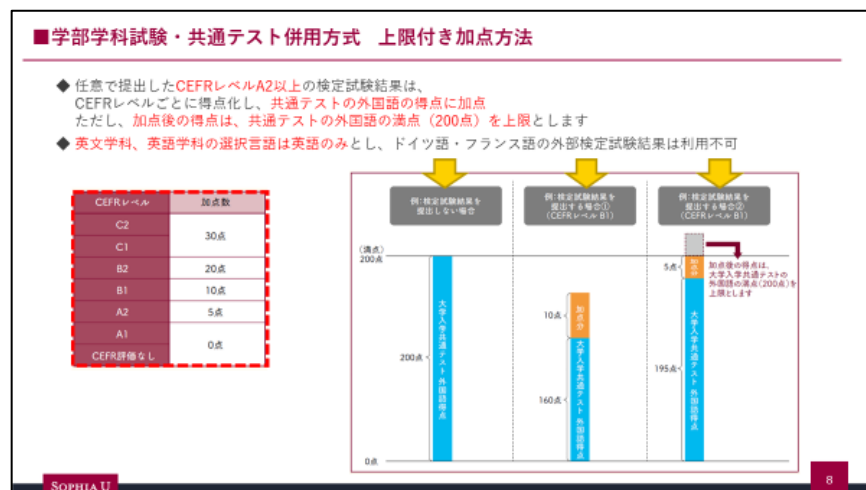
この全学統一日程入試のために指定された受験科目が共通であれば、1 度の試験で複数の学部学科の併願が可能なのが、TEAP 利用型の一つの特徴です。また、神学科、心理学科、看護学科の 3 学科については 2 次試験も実施していますので、こちらとの併願も可能となっています。



2 つ目の一般選抜学部学科試験と共通テスト併用方式は、任意に提出する外国語の外部検定試験の結果を含む共通テスト（4 教科）と本学独自の学部学科試験の合否判定を総合的に行う選抜方式です。具体的には、共通テストと、任意で外国語検定試験の結果を加えて、上限付きで外国語の点数に加算する方式です。

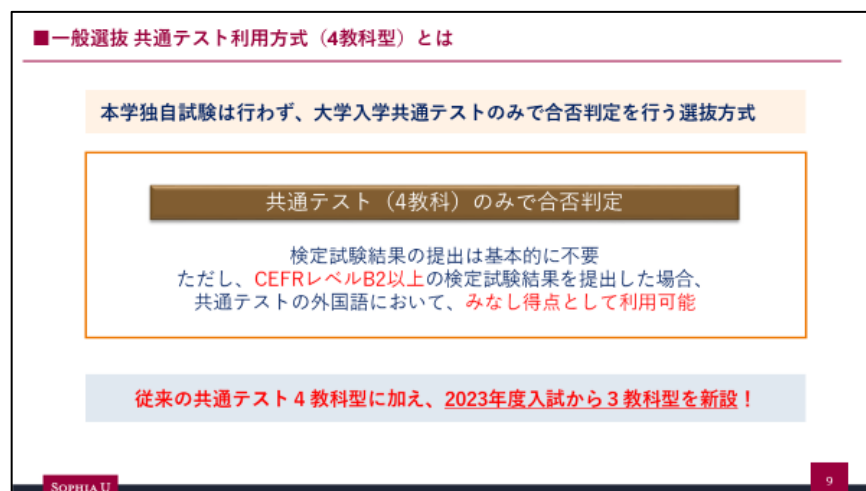
さらに、本学独自試験として学部学科への適性を問う記述式問題も含む学部学科試験を行っています。これのトータルで合否判定を行います。

共通テストの英語の配点比率は、リーディングが 100 点、リスニングが 100 点の 200 点満点で、共通テストの国語は古文・漢文も含みます。さらに共通テストの選択科目を指定科目数以上受験した場合には、高得点の科目を合否判定に利用します。この入学試験制度は、本学においては最も募集人数の多い試験方式で、一般選抜試験のメインの入試になります。



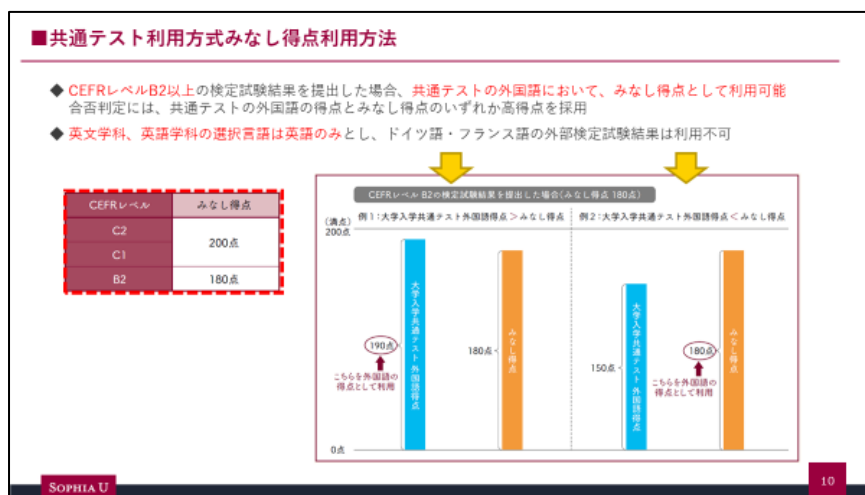
この学部学科試験・共通テスト併用方式の上限付きの加点方法は、かなり上智大学特有のやり方だと思いますので、詳しい内容をご紹介させていただきたいと思います。例えば、任意に提出いただきました CEFR レベル A2 以上の検定試験結果については、CEFR レベルごとに得点化して、共通テストの外国語の得点に換算します。ただし、加点後の得点は共通テストの外国語の満点 200 点を上限とします。また、英文学科・英語学科の選択言語は英語のみとし、ドイツ語、フランス語の外部検定試験の結果は利用できないという特徴もあります。今申し上げた加点数は、CEFR の C1, C2 レベルは 30 点、B2 は 20 点、B1 は 10 点、A2 は 5 点です。

具体的には右側を見ていただきたいのですが、検定試験結果を提出しない場合には、大学共通テストの外国語の得点がそのまま反映されます。一方、検定試験の結果を提出する場合、例えば CEFR レベル B1 の結果を提出した場合には、大学共通テストの外国語の得点が 160 点の場合には、B1 の 10 点が加算され、実質的には 170 点と評価されます。ただし、共通テストの結果が 195 点だった場合には、この 10 点分を加算すると 200 点を超えてしまいますので、この場合には 200 点満点を上限として加点分は 5 点になります。これが上限付き加点方式の特徴になります。



最後に、一般選抜の共通テスト利用型方式で、のみ型という 4 教科型の入学試験制度ですが、本学の独自試験を実施せずに、大学入学共通テストの 4 教科の結果のみで合否判定を行う選抜方式です。検定試験結果の提出は基本的に不要ですが、CEFR レベル B2 以上の結果を提出いただいた場合には、共通テストの外国語においてみなし得点として利用させていただきます。

ここが今年度大きく変わるところですが、この 2 年間で行ってきた共通テスト 4 教科型に加えて、来年度の 2023 年度からは 3 教科型の新設も準備しています。これは後でまたご報告させていただきたいと思います。



この共通テスト利用方式のみなし得点は先ほどと同じような形ですが、CEFR レベル B2 以上の検定試験の結果を提示いただいた場合に、みなし得点として利用させていただきます。合否判定には共通テストの外国語の得点とみなし得点のいずれか高いほうの点数を採用します。CEFR レベルで C1, C2 のみなし得点は 200 点、B2 の場合は 180 点になります。例えば、CEFR レベル B2 の検定試験の結果を提出した場合には、みなし得点が 180 点になります。例 1 としまして、大学入学共通テストの外国語の点数が 190 点の場合は、そのまま外国語の得点として利用させていただきます。一方で、大学入学共通テストの外国語の点数が 150 点の場合には、みなし得点 180 点のほうが大きくなりますので、みなし得点 180 点を外国語の点数として利用させていただきます。提出いただいた共通テストの結果と CEFR レベルのみなし得点との比較でもって外国語の点数を判別するところに特徴があります。

■「主体性」「多様性」「協働性」に関する経験、資格・検定等の提出について

学修データの利用方法

一般選抜の全方式で、Web出願時に、高校生活において主体的に取り組んだ活動の成果や、留学・海外経験、取得した資格・検定などについて、100文字以上、500文字以内で入力をお願いします。

ただし、得点化はせず、入学後の学生指導、高大連携に資するための参考資料として活用します。



SOPHIA U 11

このような3方式の入学試験制度ですが、今回の新しい出願書類では、「主体性」、「多様性」、「協働性」に関する経験、資格、検定等の提出も求めています。一般選抜方式ではウェブ出願時に高校生活で主体的に取り組んだ活動の成果、留学・海外経験、取得した資格・検定などについて、100文字以上500文字以内で入力を求めています。この内容についての得点化はしませんが、入学後の学生指導や高大連携の資料として活用させていただいています。以上の3方式を2021年度入試から導入させていただいて、本年度が2年目でした。

SOPHIA U

志願者数と入学者数の推移



FOR OTHERS, WITH OTHERS

次に、志願者の推移と入学者数の推移について、簡単にご報告させていただきたいと思っています。

2022年度入試結果（全方式合計志願者数：現役・既卒別）

学部	2022年度志願者数			2021年度志願者数		
	現役	既卒	小計	現役	既卒	小計
神	83	35	118	68	33	101
文	2,689	786	3,475	3,005	959	3,964
総合人間科学	1,965	511	2,476	2,603	746	3,349
法	1,991	660	2,651	2,190	803	2,993
経済	3,182	1,041	4,223	4,383	1,868	6,251
外国語	3,078	788	3,866	2,713	620	3,333
総合グローバル	1,573	274	1,847	1,743	370	2,113
理工	2,881	966	3,847	2,879	1,287	4,166
合計	17,442	5,061	22,503	19,584	6,686	26,270

・総志願者は**3,767名の減少**
・既卒生の志願者数は**1,625名の減少**

SOPHIA U

13

2022 年度入試全方式の現役と既卒別のデータです。2020 年から 2021 年においてはほぼ横ばいでしたが、2021 年から本年の 2022 年度の志願者については、残念ながら 3,767 名と大幅な減少になってしまいました。さらに、既卒の志願者も 1,625 名の減少になります。このような形で、残念ながら直近の 1 年間においては減少幅がかなり大きくなっていますが、これが一時的なものなのか、それとも継続的なものか、今分析を急いでいる状況です。

2022年度入試結果（方式別 競争率）

学部	2022年度入試			2021年度入試		
	TEAPスコア 利用型	学部学科試験・共通テスト 併用型	共通テスト 利用型	TEAPスコア 利用型	学部学科試験・共通テスト 併用型	共通テスト 利用型
神	3.3	4.5	16.5	4.0	4.1	9.0
文	3.3	2.9	3.3	3.5	3.3	6.6
総合人間科学	4.5	4.2	4.1	5.0	6.0	11.2
法	3.1	2.9	3.7	3.7	3.0	8.8
経済	3.0	3.3	4.4	4.8	4.1	8.7
外国語	2.9	2.1	3.1	2.7	2.3	7.3
総合グローバル	4.1	2.8	4.8	3.8	3.0	15.1
理工	1.6	2.4	4.6	2.2	2.1	7.1
合計	3.1	2.8	4.0	3.5	3.2	8.2

※競争率算出方法：受験者数÷（正規合格者数+補欠入学許可者数）

・各方式ともに、2021年度から**競争率は低下**

SOPHIA U

14

さらに方式別の競争率を見ていただきますと、大幅な志願者減の影響を受けまして、TEAP スコア利用型、共通テスト併用型、共通テスト利用型のいずれにおいても競争率は下がっている状況です。特に共通テスト利用型は大幅に減少しています。2021 年度入試で初めて導入した際にかかなり高いレベルで合格を切ってしまったことで、今年度の志願者が減少してしまったのかなと分析しています。

2022年度入試結果（エリア別入学者数・比率）

※全学科計

■TEAPスコア利用型			■学部学科試験・共通テスト併用型			■共通テスト利用型		
エリア	人数	比率	エリア	人数	比率	エリア	人数	比率
北海道	4	1.2%	北海道	9	1.0%	北海道	0	0.0%
東北	1	0.3%	東北	12	1.3%	東北	0	0.0%
北関東	9	2.6%	北関東	37	4.2%	北関東	2	4.8%
首都圏	290	85.3%	首都圏	690	77.6%	首都圏	17	40.5%
中部	18	5.3%	中部	70	7.9%	中部	9	21.4%
近畿	7	2.1%	近畿	28	3.1%	近畿	4	9.5%
中国	2	0.6%	中国	10	1.1%	中国	4	9.5%
四国	2	0.6%	四国	8	0.9%	四国	1	2.4%
九州・沖縄	7	2.1%	九州・沖縄	15	1.7%	九州・沖縄	4	9.5%
その他	0	0.0%	その他	10	1.1%	その他	1	2.4%
合計	340	100.0%	合計	889	100.0%	合計	42	100.0%

エリア	人数	比率	エリア	人数	比率	エリア	人数	比率
首都圏	290	85.3%	首都圏	690	77.6%	首都圏	17	41.5%
首都圏以外	50	14.7%	首都圏以外	199	21.3%	首都圏以外	24	58.5%
合計	340	100.0%	合計	889	98.9%	合計	41	100.0%

※その他は、基準認定資格や在外教育施設からの入学者

共通テストを利用する方式では、**首都圏以外**の入学者比率が高い

さらにエリア別の入学者数の比率です。これは先ほどから随分話題になっていますが、本学においてもやはり首都圏からの入学が非常に高い傾向にあります。括弧で囲っている上の部分を見ていただきますと、首都圏は TEAP スコア利用型が 85.3%、共通テスト併用型が 77.6%、共通テスト利用型が 41.5%です。

逆に、赤で囲った部分を見ていただくと、首都圏以外は TEAP スコア利用型が 14.7%、共通テスト併用型が 21.3%です。一番注目すべき点は、共通テスト利用型の入学者が 58.5%ということで、これが先ほどから話題になっている地方からの入学者数が増えた部分ですから、共通テスト利用型がかなり大きく貢献していることが分かるかと思います。

上智大学の一般入学試験の総括・展望

- 2021年度入試：大幅な入試制度改革
 - － 大学入学共通テストの導入
 - － 外部検定試験（4技能）の全方式に導入
 - － TEAPスコア利用型（全学統一日程入試）、学部学科試験・共通テスト併用型、共通テスト利用型の3方式を導入
- 2023年度入試
 - － 共通テスト利用型は、4教科型に加えて3教科型を新設
- 2025年度入試
 - － 新課程対応の入試制度の検討中
 - － 新入試制度の導入予定

これが今の上智大学の入試の状況です。簡単にまとめさせていただきますと、上智大学の一般入学試験については、2021 年度入試から大幅な入試制度改革を行いました。大学入学共通テストを導入した結果、これは先ほどお見せしたとおり、地方の受験者層または入学者層を開拓するのに一定の成果があるかなと考えています。

2つ目として、外部検定試験、4技能の全方式の導入です。こちらも先ほどの立教大学で話題になりまして、どういう効果があったのかというご質問があったかと思いますが、われわれの 4 技能の導入については、残念ながら出願数の減少に影響を与えているかな

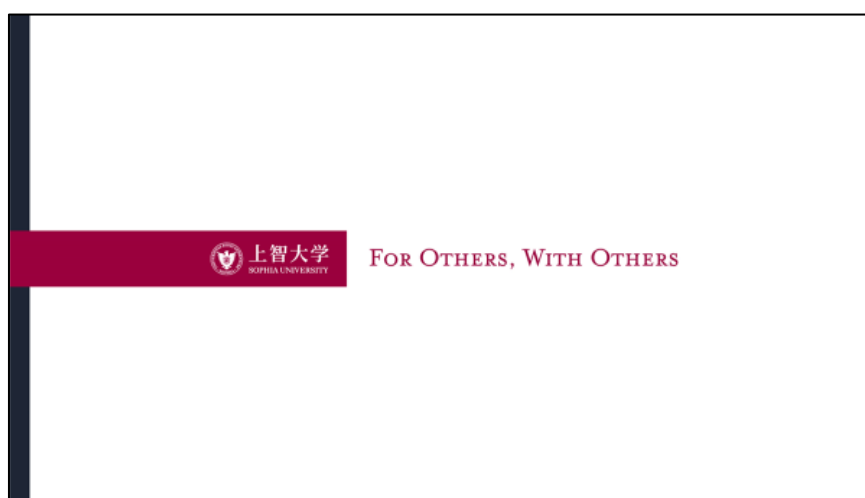
と。やはり 4 技能全ての検定試験結果を提出するのはハードルが高いと考えた受験者が一定数いたのではないかと考えています。

ただ、4 技能の試験結果を提出した志願者また入学者の英語レベルは確実に昔に比べて高まっていることははっきり分かっています。なぜかと申しますと、入学後に実施するプレイスメントテストの結果を見ていますと、導入前に比べたら非常に高い水準で全て上昇しています。さらに、コロナの影響で直近はなかなか留学ができませんでしたが、留学希望や英語の科目を積極的に受講する学生が非常に増えている傾向は顕著に見られていまして、これは 4 技能導入の一つの大きな成果かと考えています。

現行においては TEAP スコア利用型、学部学科試験・共通テスト併用型、共通テスト利用型の 3 方式で、さまざまな特徴の入学試験制度を導入したことによって、多様な受験生の確保が一定数図られているかなと思っています。ただ一方では、入学試験制度が大幅に変わったことや制度が複雑になったことなどを踏まえて、受験生の出願の機会が若干減っているという影響が出てきているのかなと考えています。

さらに、今年度の 2023 年度入試については先ほど申し上げたとおり、共通テスト利用型については 4 教科型の方式に加えて 3 教科型の新設を予定しています。共通テスト利用型の一定数が地方からの出願ということで、3 教科にすることによってより出願しやすくなると考えていまして、さらなる地方からの入学増に貢献してくれればと考えて、導入する予定です。

さらに、2025 年度の新課程対応の入学試験制度の検討も既に行っています。こちらについてはまだ正確に骨子がまとまったわけではないので、本日は報告することができませんが、適時、入学試験制度がまとまりましたら、ご報告させていただければと思っています。また、2025 年度入試においては新たな入学試験制度の導入も検討させていただいていまして、この点についても骨子がまとまりましたら外部に公表させていただければと思っている次第です。



以上が上智大学における入学試験の現状と将来展望です。よろしくお願いします。

【千田・司会】 西澤先生、ありがとうございました。上智大学に質問が来ているのですが、一部はもう答えられています。4 技能入試の入学者のことについては触れられましたが、共通テスト利用入試、併用式も含めて、全体としてもう一度伺いますと、大きく入試制度を変えたことによって、学力と授業に望む姿勢・様子にどのような変化があったかというご質問です。

【西澤】 ありがとうございます。この直近の2年間は、ご存じのとおりコロナの影響で通常の学部運営ができていませんので、なかなか明確な比較はできない状況です。ただ、やはり4技能を導入したことによって、英語に対する抵抗力が本当に低くなったことは日々の授業で実感しています。先ほど申し上げたとおり、上智大学では日本語の科目が中心ですが、多様な英語科目も設置してまして、そちらへ積極的に参加する学生が非常に増えていると実感しています。この4月からは対面式授業に切り替えましたので、キャンパスに来た学生が廊下で会話しているのを聞いた感じでは、私の肌感覚では英語で会話をしている学生が非常に増えたなという印象を持っています。そういったところも含めて英語のハードルがかなり下がってきているのかなと。それが今後、グローバル人材のさらなる発展に貢献してくれればと思っていますし、今年の夏以降は留学制度も本格的に再開する予定ですので、その成果は来年辺りに明確に出てくるかなと考えている次第です。

【千田・司会】 ありがとうございます。もう一つ質問が来ています。CEFRのスコアを加点あるいはみなし得点として受験した受験者はどの程度いたのか、お答えできる範囲で教えていただければということです。

【西澤】 ご質問ありがとうございます。今正確なデータを持っていませんので、データが出てきましたら後の議論の段階で答えさせていただければと思っています。肌感覚でしか分かっていないものですから、こういう場では正確なデータをお伝えしたほうがいいと思いますので、後の議論でお願いできればと思っています。よろしいでしょうか。

【千田・司会】 分かりました。それでは、後でまたこの点についてはご確認した上でお答えいただくということですね。

まだ少し時間がありますが、よろしいでしょうか。まだ先ほどの明治大学への質問が残っていますが、上智大学でも首都圏が非常に多かったということ、実人数としては少ないものの、共通テスト利用入試では地方出身者が非常に増えたということです。そうなりますと、今後も例えば共通テスト利用入試を膨らませていくお考えはありますか。首都圏以外を増やす意味で、そういう戦略は考えていらっしゃるのでしょうか。

【西澤】 今年度からさらに受験しやすくするように、4教科型に加えて3教科でも受験可能にすると。これが今年度の一番大きな変革の特徴になっています。先ほど立教大学のお話がありましたが、われわれ上智大学は、立教大学以上に地方での知名度が低いという問

全体会 3

題があります。海外ではむしろある程度の知名度を頂いていますが、地方からの受験者数を増やすためには、科目数を減らすだけではなくて、やはり積極的な広報展開をしないと、なかなか目を向けてくれないかなと考えています。われわれも立教大学同様に、積極的な広報の展開を今年度は実施する予定です。

【千田・司会】 ありがとうございました。■

全体会 3 ○ 報告 4

早稲田大学（政治経済学部）の入試制度改革
の現状と課題

■ 荒木 一法（早稲田大学政治経済学部教務主任）

早稲田大学政治経済学部で教務主任・広報担当を拝命しています荒木と申します。本日は 2021 年度から実施しました政治経済学部の新入試について、ご報告させていただきます。



これまでご報告された 3 名の先生方とは異なりまして、私がお話をさせていただく内容は、政治経済学部の 1 学部のみのお話です。立場上も含めて、早稲田大学全体、特に他学部に関するご質問等にはお答えしかねますので、あらかじめご了承くださいますようお願いいたします。

アジェンダ



1. 入試改革の概要
2. 改革の背景と狙い
3. 新入試実施にあたっての課題
4. 入学者の属性の変化
TOEFL、数学の学習状況、首都圏外比率、女子比率、高校別入学者
5. まとめと今後の課題

以下で紹介する**入学者データ**は、新入試（一般入試：共通テスト併用型）と共通テスト利用方式（一般入試：共通テスト利用型）による入学者を**合算**したものです。

それでは、私からのご報告の概要について、最初に簡単にご説明します。まず、私どもの新入試、入試改革の概要についてご説明させていただきます。続いて、そのような改革を行いました背景と目的、狙いについてご説明し、そして実際の新入試を実施するに当たって直面した課題とその対処についてお話しします。さらに、理想を申し上げれば、入試改革の成果と申しますか、入試改革の狙いがどの程度達成されたかというお話もできればいいのですが、後ほどご説明させていただきますように、現時点では判断するだけの材料がありません。

ですので、本日は既にデータとして見えてきた新入試によって変化した入学者の属性についてお話しさせていただきます。そして最後に、そのような属性の変化を踏まえて見えてきた課題についてお話しして、本日のお話をまとめさせていただきます。

なお、こちらでご報告する入学者データは、新入試および従来からセンター利用入試として実施していました共通テスト利用入試を合算したものです。このデータを使う理由は、2つの試験は併願が可能になっていまして、約1,000名が毎年併願しています。それは旧入試のときも新入試になっても変わりません。ある意味当然のことですが、そのような併願者は共通テスト利用で合格すると一般選抜は欠席し、共通テストで不合格になると一般選抜を受験するという行動を取りますので、新入試によって入学者の属性がどう変化したかを理解する上では、両方のデータを見る必要があると考えています。

1 入試改革の概要

「英語」、「国語」、選択科目（「世界史」「日本史」「数学」から1科目）の計3科目による選抜方式を廃止し、以下の**共通テスト4科目**と学部独自の**総合問題**による選抜方式に変更

（英語4技能を測定する外部試験の導入は中止）

共通テスト4科目

国語、英語（200点）と数学Ⅰ・A（100点）の必須3科目および選択科目（数学Ⅱ・B、地歴・公民、理科科目などから1科目100点満点相当）の計4科目の得点を各25点満点に圧縮し100点満点で評価。

総合問題

政治・経済に関する日本語、英語の長文（図表・グラフを含む）を正確に理解する能力と、理解した内容をふまえて自らの考えを論理的に説明する記述力を問う。100点満点で評価。

それでは、入試改革の概要についてご説明させていただきます。大きく 2 つの要素から構成されていまして、1 つは共通テストです。これは 4 科目となっていまして、それぞれを 25 点で評価して合計 100 点満点で評価します。中身は国語、英語と数学ⅠA が必須科目で、あと 1 科目は、数学ⅡB、理科、社会等から 1 科目 100 点満点分の最高得点をこちらでピックアップして 25 点に圧縮することになっています。

また、学部独自の総合問題の内容は、政治経済に関する日本語、英語の長文、図表、グラフを含むものですが、それを理解する能力および理解した上で自らの考えを論理的に記述する能力を問う問題となっています。こちらも 100 点満点で評価して、合計 200 点満点での評価となっています。

2 改革の背景と狙い

達成度評価には少なくとも数年を要する。

- 政治経済分野に強い関心をもった高校生を集める
- **新カリキュラム**の教育効果を高める
- 日英両言語による**ハイブリッド教育**の促進

改革と直接的に関係するカリキュラム改革の主な内容

- 政治学基礎科目、経済学基礎科目、公共哲学を全学科で必修化
- 「統計学」を全学科で必修化、「経済数学入門」&「ゲーム理論入門」（経済学科、国際政経学科の必修科目を政治学科生にも履修推奨）
- 日英両言語による「書く力」の涵養 1年次の基礎演習および基礎演習論文にくわえてAWADE (Academic Writing and Discussion in English) を全学科で必修化

このような入試改革を行った狙いは大きく 3 つあります。こちらに書いてあるとおりですが、総合問題で大学入学後に学ぶ内容に直結した問題を問うことで、そのような関心を持った受験生を集める目的があります。また、これから詳しくご説明するように、私どもが行ったカリキュラム改革の実効性を高める狙いもあります。さらに、これまでのご報告にもありましたが、私どもも日英両言語でのハイブリッド教育に力を注いでいまして、そちらの教育効果を高める狙いもあります。

もう少し具体的にお話しさせていただきますと、これがカリキュラム改革の主な内容になります。私どもの学部には政治学科、経済学科、国際政治経済学科と 3 学科ありますが、全ての学科で政治学の基礎科目、経済学の基礎科目、公共哲学を必修化しました。さらに、統計学も全学科で必修化し、従来、経済学科、国際政経学科の必修科目であった経済数学入門、ゲーム理論入門を政治学科生にも履修を強く推奨しています。

また、日本語、英語両言語の書く力、表現する力の育成にも力を入れており、1 年次の基礎演習および基礎演習論文、さらに英語でのライティングとディスカッション能力を育てる AWADE という授業を必修化しました。

このようなカリキュラム改革で力を伸ばしていけるような受験生を集めたいというのが入試改革の大きな狙いになります。

ただ、先ほども少し申し上げましたが、その狙いをどの程度達成したか、できているか

を現時点で判断するのは困難でして、なお数年を要するのではないかと考えています。

3 新入試実施にあたっての課題

- 高校生、関係者への広報活動（受験生の確保）
 - 通常の広報活動＋高校訪問、受験情報メディアへの露出を試みた。
 - 一般選抜志願者数の推移
(2020) 5584名 → (2021) 3495名 → (2022) 2901名
- 出題・採点体制
 - グローバル入試の出題・採点体制を参考に決定。
 - 事前テストはできず「ぶっつけ本番」となったが概ね想定通りとなった。
- 合格者の入学辞退率の推定
 - 過去の経験の蓄積をどう活かすか？
 - 大きく推定が外れた場合に備えて「補欠」制度を新設。
 - 複数の推定方法による推定結果を比較検討し、様々な情報を加味して最終判断。幸運にも概ね正確な予想ができた。

ここからは新しい入試を実施するにあたって直面した課題と、それにどのように対処したかについて簡単にお話しします。

まず、直接的な表現をしますと、この入試改革によって大幅な受験生減少が懸念されていました。数学の必須化、さらに学部独自の総合問題という新しいスタイルの入試を課すことによって、多くの高校生に敬遠されてしまうのではないかと。ある意味やむを得ないことですが、そのような受験生の減少を少しでも穏やかなものにするために、広報活動に力を入れてきました。従来の広報活動だけではなく、高校を訪問して進路担当の先生に率直なご意見を伺うとともに、様々な受験情報メディアへの露出を試みました。

その結果、これは一般選抜のみで共通テスト利用を含みませんが、実際の受験生の推移は 2020 年度から新入試の 2021 年度で約 2,000 名減少し、3,500 名ほどになりました。さらに今年 2 月に実施した入試では 2,900 名程度まで減少しています。ただ、これは新入試を実施する時点で予想していた数値にほぼ一致してしまっていて、おおよそのくらい（3,000 名前後）になるのではないかと考えていました。

また、新しい総合問題の出題および採点体制については、従来から実施していますグローバル入試が非常に似たタイプの問題を出題・採点していますので、そちらをベースに体制を編成しました。ただ、受験者数がだいぶ違います。グローバル入試は大体 500 名規模ですが、恐らく 3,000 名規模になることが想定されましたので、きちんと時間内で順調に終わることができるか、あらかじめテストしようと思いました。事前テストとして附属・系属校の生徒さんにサンプル問題を解いてもらって、それを採点してみることを考えていましたが、コロナでそれもできず、実際はぶっつけ本番になりましたが、事前に想定したとおりのスケジュールで採点を行うことができました。

さらに、これが非常に頭を悩ませたところでもあります。新しい入試を導入したことによって、合格者の入学辞退率がどうなるかを推定するのが困難でした。基本的には過去の経験をできるだけ生かしつつ、さまざまな方法で推定を試みました。ただ、大きく外すことも想定されましたので、私どもの学部ではこれまで採用していなかった補欠制度を

新たに導入して、併せて補欠者の発表も始めました。さまざまな推定を比較検討して慎重に合格者を出した結果、かなり正確に予想することができて、過去 2 年においては補欠者から合格を出すことはありませんでした。

4 入学者の属性の変化

- 高校3年次まで数学（Ⅱ・BもしくはⅢ・C）の学習を継続した割合
→大幅に上昇（「経済数学入門」（経済学科・国際政経学科必修科目）のクラス分けデータから）
- 入学前TOEFL-ITPの平均スコア
→横ばい（英語クラス分けのためのデータから）
- 首都圏（1都3県）外の高校出身者の割合
→上昇（旧入試約19%*、2021年度約21%、2022年度約25%）
- 女子学生比率
→上昇（旧入試約27%*、2021年度約30%、2022年度約31%）
〈* 19年度、20年度の平均〉
- 入学者の出身高校の偏り
→入学者が多い高校の全入学者に占める比率が上昇

ここからのお話は、入学者の属性の変化についてのお話になります。これらは 5 つの点についてお話ししていきます。

まず、数学については先ほど取り上げました経済数学入門という授業は、数学をどれぐらい勉強しているかによってクラス分けが行われます。

基本的には高校 3 年生のときに数ⅡB もしくは数ⅢC の勉強を続けていたかどうかのポイントになりまして、附属・系属校の場合、私ども政経学部への進学者は数学Ⅲの履修をお願いしていますのでほぼ全員が数学Ⅲまで履修していますが、一般選抜の場合はばらつきがありますから、共通テストで数ⅡB を受験しているかどうかでクラス分けを行います。結果的にはほぼ全員が数ⅡB も受験していまして既習クラスを履修し、未習クラスの履修者は非常に少なくなったのが実情です。

また、TOEFL ITP は英語の習熟度別クラス編成のため、入学前の 3 月に入学予定者全員に受験してもらう試験ですが、残念ながらと申しますか横ばいで、平均点等の上昇は見られませんでした。私どもは断念しましたが、先ほどから話題になっています 4 技能外部試験を導入していれば、また少し話は変わったのかもしれませんが。私どもは大学入試センターの成績提供システムが稼働しないことが確定した段階で、とりあえずは導入を断念しました。

次に、先ほどから話題になっている首都圏以外の高校の出身者の割合です。これはありがたいことに伸びました。あくまでも一般選抜、共通テスト利用入試に限ってのことですが、今年の 4 月入学者に関しては約 25%となっています。少なくとも下落に歯止めがかかって、上昇傾向が見られます。女子比率についても同様で、わずかながらではありますが、上昇傾向が続いています。

ただ、首都圏以外の入学者、女子学生の比率が上昇することで、多様性が増した側面はありますが、一方で実は新入試によって入学者の出身高校の偏りが強まったのではない

かという懸念があります。これも後ほど詳しいデータでご説明しますが、簡単に申しますと、全入学者に占める入学者の多い高校からの割合が上昇している傾向が見られます。

入学者比率、首都圏外比率、女子比率 (共通テスト利用と一般選抜の比較)		
入学者/合格者	2021	2022
共通テスト利用	47/635(7.4%)	50/640(7.8%)
一般選抜 (共通テスト併用)	346/730(47.4%)	325/696(46.7%)
首都圏外高校出身者/入学者	2021	2022
共通テスト利用	18/47(38.3%)	28/50(56%)
一般選抜 (共通テスト併用)	66/346(19.1%)	67/325(20.6%)
女子/入学者	2021	2022
共通テスト利用	9/47(19.1%)	11/50(22%)
一般選抜 (共通テスト併用)	110/346(31.8%)	104/325(32%)

具体的なデータでお示ししていくと、まず、先ほど辞退率を読むのが難しいという話をしましたが、結果的にはこのような数字になっています。一般選抜では 50%を若干切るぐらいの入学率となっていて、逆に言えば辞退率が 50%を若干超えています。

一方、共通テスト利用入試は辞退率が非常に高い入試となっています。募集定員は 50 名で、今年はたまたま 50 名ぴったりの入学者でしたが、600 名以上に合格を出していました。そのような入試となっています。

ただ、先ほどの西澤先生のお話とも通じるものがありますが、共通テスト利用入試は、実は地方からの入学者が非常に多い入試となっています。昨年は 4 割程度でしたが、今年は約 56%、50 名中 28 名が 1 都 3 県以外からの入学者となっています。私どもは地方入試を実施していませんが、この共通テスト利用入試は地方入試に代わる、地方から優秀な受験生を集める入試制度として非常に重要な役割を果たしていると考えています。

一般選抜についても 1 都 3 県以外の入学者は約 20%の水準を維持してまして、先ほどから申し上げていますように、少なくとも減少に歯止めがかかったように見受けられます。

女子比率についても一般選抜についてはほぼ 30%を超えてまして、全体としては、漸増傾向が続いているということになります。

入学者数の多い高校出身者が入学者に占める割合

入試年度 (入学者/合格者)	入学者6名以上 (占有率)	同高校群合格者数 (占有率)	入学者3名以上 (占有率)	同高校群合格者数 (占有率)
2019 (414/1288)	9校64名 (15.5%)	198名 (15.4%)	45校190名 (45.9%)	586名 (45.5%)
2020 (310/1117)	2校13名 (4.2%)	40名 (3.6%)	24校99名 (32.0%)	305名 (27.3%)
2021 (393/1365)	12校108名 (27.5%)	347名 (25.4%)	40校215名 (54.7%)	772名 (56.6%)
2022 (375/1336)	12校100名 (26.7%)	336名 (25.1%)	39校202名 (53.9%)	646名 (48.4%)

以上がある意味ポジティブな側面ですが、先ほど申し上げたように、高校の偏りが少し顕著になってきました。上半分が旧入試で、下半分が新入試です。新入試において6名以上の入学者のいる高校は、たまたまですが昨年も今年も12校で、そこからの入学者が100名を超えていまして、一般選抜、共通テスト利用入試における入学者の4分の1を超えています。これは従来に比べてかなり割合が高まっています。さらに3名以上まで広げると約40校で半分を超える55%近い入学者になってしまって、入学者の高校の偏りが強まっていることが非常に懸念されます。

次のスライドは皆さまにお配りしていないものですが、この12校がどのような高校かまで見ていきますと、こちらが具体的な高校名になります。ご覧いただくとすぐお気付きのように、日比谷高校を除いて、首都圏の私立および国立のいわゆる中高一貫校に非常に偏っています。それから、これらの高校は難関国立大学の合格者が非常に多い高校として知られていて、恐らく私どもの学部への入学者も難関国立大学との併願者が多いのではないかと推測されます。逆に言うと、私どもの学部が第1志望の受験生の割合は減ったのではないかと推測されます。

さらに、実はその偏りはこの見た目以上に大きく、早稲田高校はご存じのように私どもの系属校で、内部推薦での進学者が一定数います。この6名は、それとは別に一般受験をして入学した者ですので、実際のこの12校からの入学者はこれより多いです。さらに、地方重視で各都道府県に指定校推薦の枠を割り振っていますが、基本的には各都道府県内で入学者の多い高校に指定校を決めていますので、東京都の指定校、神奈川県指定校等も実はこの中に含まれています。これらを考慮すれば、実際の入学者はこれよりもさらに多いのが現状です。

この傾向は首都圏だけでなく地方でも見られまして、地方からの入学者95名中半分以上が22校からの入学者になります。地域的な集中もあり、愛知県が14名、兵庫・広島が7名、北関東3県を含めると6県から41名になりますし、中高一貫校の集中は地方でも同じで、近畿地方は全部で14名でしたが、13名が国立・私立の中高一貫校、広島県の7名全員が国立・私立の中高一貫校出身者でした。

5 まとめと今後の課題

まとめ

- 入試改革は、首都圏比率の上昇に歯止めをかけるとともに女子比率の上昇につながった反面、入学者の特定の高校への集中を招いた可能性がある。
- 新入試がその主たる目的をどの程度達成したかを検証するには入学者への教育効果を測定する必要がある、かなりの時間を要する。

今後の課題

- 新入試の意図（+学部教育内容を教育目標）を受験生に理解してもらい、第一志望者を増やすには？
- 「幅広い知的好奇心、一定水準の数学力と日本語・英語による文章理解力・記述力を併せ持つ入学者を獲得する」と「入学者のバックグラウンドの多様性を確保する」ことは両立できるか？

以上のお話をまとめさせていただきますと、私どもの入試改革は首都圏比率の上昇に歯止めをかけ、女子率の上昇につながったように見えますが、一方で特定の高校からの入学者の集中を招いた可能性が懸念されます。

また、先ほど申し上げたことの繰り返しになりますが、現時点では私どもの本来の狙いがどの程度達成されているのか判断することはできません。これからしっかりと検証してまいりたいと考えています。

今後の課題としましては、先ほど申し上げたように、私どもの教育目標・教育内容を理解した上で、第1志望としてくれるような受験生を増やすにはどうすればよいか、検討していく必要があるだろうと考えています。

また、一定の知的好奇心や数学力や英語・日本語の記述力を持った学生が特定のタイプの高校に集中しているのであれば、基礎的能力を求めることと入学者の多様性を確保することがある意味で矛盾してしまうことになりますので、どのようにアプローチしていくべきか、矛盾にどう向き合うか考えていくということも今後の課題になるかなと考えています。



以上、簡単ですが私からのご報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

た。

【千田・司会】 荒木先生，どうもありがとうございました。質問が来ています。1つ目の質問の内容には既に部分的に触れられていると思いますが，入試改革を行った早稲田の政治経済学部では国公立大学の難関校との併願の可能性が高まると予想されていて，数学の継続性が上昇したのはそういうことが原因でしょうかと。入学者の属性変化があったかどうかということについて，まずお願いします。

【荒木】 先ほども申し上げましたが，私どもの一般選抜の必須科目は数学ⅠAのみで，ⅡBは選択科目でしたが，実際の志願者のほとんどが数学ⅡBも受験しています。逆に言うと，数ⅠAだけ頑張って勉強して，われわれの学部を第1志望として受験してくれた受験生は少数派だったという事実があります。結果的に入学者もそのような傾向があり，従来の共通テスト利用入試は数ⅡBも必須科目ですので，ほぼ全員が数ⅡBまで履修していました。それから，先ほど申し上げたように私どもの附属・系属校には数学Ⅲまでの履修をお願いしていますので，グローバル入試等で若干例外はありますが，事実上，入学者のほぼ全員が高3まで数学を学び続けていたということになります。

【千田・司会】 ありがとうございました。もう一つの質問ですが，最後に詳しくご説明いただきました特定の高校に集中する傾向の理由ですが，1つはやはり属性が変わりつつあるということ，最後に荒木先生がおっしゃったようなことがあるのかなと思いますが，こちらはいかがでしょうか。

【荒木】 千田先生ご指摘のとおり，一つはやはり難関国立大学との併願者の割合が高くなったことがあると思います。もう一つは，高校によってそれぞれ教育方針があるかと思いますが，私の知る限り，リストの上位にある高等学校は書くことにもかなり力を入れていて，長い文章を中学のときから書かせる教育を行っているので，彼らにとって私どもの総合問題は従来型の入試科目よりもむしろ対応しやすかったのかもしれませんが。実際にある高校訪問で，進路指導の先生から「恐らくうちの生徒にとってこれはむしろやりやすい，障害にはならないだろう」というお話を頂いたこともありました。逆に負担になるとおっしゃった高校の先生もいらっしゃったので，そういった高校の教育方針の違いも影響している可能性があるかなと考えています。

【千田・司会】 ありがとうございました。ちょうど時間になりましたので，前半はここまでとさせていただきます。1つ質問が残っています。私なりにまとめますと，多様性の確保ということで，首都圏の私大としても地方からの入学者を増やしたい。ただ，戦略として，例えば今荒木先生がおっしゃいましたが，欲しい学生の資質が一部の高校などに偏る可能性がある。あるいは，地方と首都圏では英語4技能の外部試験の受けやすさが違う

など、相矛盾する目標を掲げているのかなという気が少しします。もう少しこの点についてお話しさせていただき、また、明治大学にもこのご質問にお答えいただきたいと思います。

それでは皆さま、4つの大学の1回目の発表は一巡しましたが、なおご質問等がありましたら、ぜひこちらのQ&Aにお書きいただければ、次の全体討論の中でまた質問に答えさせていただくことにしたいと思います。■

全体会 3 ○ 全体討論

私立大学の入試改革の現状と課題

— 首都圏私立大学を中心に —

■ 小野島 真（明治大学副学長・入試制度担当）/ 石川 淳（立教大学副総長）/ 西澤 茂（上智大学副学長）/ 荒木 一法（早稲田大学政治経済学部教務主任）/ 千田 亮吉（明治大学副学長・教務部長 ■ 司会）

【千田・司会】 それでは、時間になりましたので、全体会 3 を再開させていただきます。先ほど最後に申し上げましたように、4 大学とも首都圏にある大規模私立大学ですが、地方からの志願者の比率が下がってきていることが共通の話題になりました。最初に頂いた明治大学への質問です。1 都 3 県の入学者割合が上昇しているその理由・背景をどのように分析されていますか、また、地方出身者の割合を高めるため今後何か対策されますか。という質問に対して小野島先生、いかがでしょうか。

【小野島】 もう既に先生方からいろいろ伺いましたので、追加できることはほとんど残っていない状態ですが、まず、石川先生と西澤先生、地方での明治大学の知名度についてお褒めいただきまして、ありがとうございます。ただ、こうしたことも各地に多くいらっしゃる OB・OG のご尽力のおかげだと思っています。そうした意味では首都圏の学生の比率が今後ますます高まっていきますと当然地方での OB・OG の数も少なくなる可能性がありますので、やはり懸念すべき事項なのかなと個人的には思っています。

恐らく複合的な要因があるのだろうと思います。情報化社会とはいえども首都圏のほうが入試情報は多いでしょうし、経済的な側面も影響しているでしょうし、コロナの影響もあるでしょうし、さまざまに複合した要因があるのだろうと考えています。そうした意味で個人的な感想としては、入試制度だけでこれに対応していくのはなかなか難しいのかなと思っています。

特に明治大学では全学部統一で地方会場を設けていますが、残念ながら減少している状況でして、地方会場を増やしてもあまり解決にはならないだろうなと個人的に思っています。

あと、先生方がおっしゃるように、共通テストはどちらかというと首都圏以外の学生さんの比率が結構高いです。首都圏に来なくても地元で受けられる意味では非常にいい制度だなと感じていますが、残念ながら本学では共通テストの志願者も減っている状況です。これをまた拡充していくのもなかなか難しいのかなと考えています。

いずれにしても、当然ながら積極的な広報活動が必要になってくると思います。入試制度だけではない、さまざまな対策を取っていく必要があるのかなと個人的には思っています。以上になります。

【千田・司会】 ありがとうございます。このことに絡めて、多様な学生に入学してほしいというのは共通の願いだろうと思います。一方で、先ほど私が少しお話ししましたが、まず DP、次に CP、そして AP があって、どういう学生を育てたいか、そのためにどういう教育があるか、そのためにはどういう入学者の選抜をするか。そういう順番になっていると思います。

明治大学以外の 2 大学と早稲田の政治経済学部は大きな入試制度改革が行われたわけですが、その結果、地方あるいはさまざまな学生が欲しいということと、早稲田大学の最後の数字がある意味で象徴ですが、矛盾した傾向も表れていると思います。英語の 4 技能もやはり地方と首都圏では受けやすさが違いますから、高等学校の教育力の問題ではなく、集積の効果や情報伝達、情報の使い方などの面で、改革を進めることでさらに首都圏からの受験生が増えることがお話を聞いていて予想できました。いきなり重い話で申し訳ありませんが、その辺についてどのようにお考えでしょうか。明治大学からの報告でしたが、立教大学の石川先生、いかがでしょうか。

【石川】 ありがとうございます。いきなり重い話題を振っていただいて、なかなか難しいところですが、先ほどの荒木先生の発表を伺って、まさしく同じようなことが言えるなど私も感じたところです。例えば、英語の 4 技能もしくは外部試験を重視すると、Curriculum Policy としては合っているわけですが、女子の受験生の反応が高いです。本学の場合、もともと女子学生が多かったわけですが、ますます女子学生の比率が高まると。こういう時世ですから、男女で分けることがいいかどうかはありますが、多様性の意味ではいろいろな方に来ていただきたいのですが、こういうポリシーを掲げてそれに従うと、結局多様性が狭まっていくことは悩ましいなと考えています。

小野島先生のおっしゃったことと全く同じだと思いますが、入試体制でできることには限界があるような気がします。例えば地方の場合は、これも小野島先生がおっしゃったことですが、OB・OG の校友会と組んで講演会を地方でやると。また、先ほども申しましたが、いろいろな指定校を回らせていただくと、もちろん地方にもグローバルなどに興味のある生徒さんはたくさんいらっしゃるわけですから、そういうところと地道に連携を取って、地元でなく首都圏の大学であってもそういった教育ができることをきちんとお伝えすると。もしくは、奨学金の在り方も当然重要なファクターになってきます。

このようにトータルで取り組んでいくしかないかなというところで、全くお答えになっていませんが、矛盾を抱えつつ、しかしやはり取り組まざるを得ないと、そのように認識しています。

【千田・司会】 ありがとうございます。続いて西澤先生、同じ質問について、いかがで

すか。

【西澤】 グローバル、多様性が一つのキーワードになるかと思いますが、本学においては、現状では 90 カ国近い国からの留学生がいます。そういう多様なキャンパスだということを高校生の皆様に伝えて、そういうことに興味を持つ学生さんを募っていきたいと考えています。

まず、国内の多様性に関しては、先ほどの早稲田大学のある特定の学校が集中してしまう傾向は、多かれ少なかれ、われわれの大学においてもあります。そのままでは大体似通った出身校で、似通った学生さんが増えてしまうと思いましたので、積極的に地方からの受験者を募るべく共通テスト導入したという話をさせていただきました。

ただ、地方から受験してくださいね、受験しやすくなりましたよと言っているだけでは、なかなか魅力的な学生さんには来ていただけないかなと思っています。なぜ上智に来なければいけないのかについて、具体的には積極的に海外とのグローバルな展開を行っていることをご理解いただくようにしています。まずは先ほど言った学内の留学生が多いこと。さらに留学の機会、特に交換留学として世界各国の 400 校近い学校との交換留学プログラムがあることを伝えること。さらに出口戦略ということで、グローバルで活躍できるような機会、例えば 3 年生からグローバル企業などのインターンシップが多くあることを積極的に PR しています。多様な人材が集まるキャンパスに来ることによって、出口戦略として将来的にグローバルな展開ができるよというイメージをより積極的に伝え、そういったことに興味を持って東京に出てくる学生さんを日本中から広く募りたいなと思って、今入試制度改革と広報戦略をペアリングで展開している状況です。

また、先ほど上智大学の知名度が非常に低いことを申し上げましたが、上智大学＝ソフィア・ユニバーシティとほとんど認知されていない状況です。他の大学は日本語の名称と英語の名称が一致していますから、そういう点の苦労はないかと思いますが、本学は名称が異なっていて、同一の大学であることをほとんど理解していただいていない状況です。この辺も認知度の向上の意味では非常に重要なことかなと思って、われわれは広報展開を積極的にやっている状況です。

どの大学でもグローバル化と多様化は切っても切り離せない重要な課題だと思っていますので、われわれの取り組みだけではなく、他大学の取り組みも参照させていただいて、より魅力的な人材を開発したいと思っている次第です。

【千田・司会】 ありがとうございます。もともと荒木先生のお話を聞いて私がこの質問をしてしまったわけですし、少し重複するかもしれませんが、教育内容を変えていって、それに合わせた入試をやっていくことと、地方からの入学者の確保に矛盾というか相反する影響があるのではないかということについてはいかがでしょうか。

【荒木】 私も今、先生方がおっしゃったことには本当に心から同意してまして、大学でできることを超えたところにこの問題の本質があるのではないかと考えています。ご質

問を今拝見しましたが、首都圏と地方での教育格差、経済格差の問題が大きく影響しているかと思います。

私どもの大学も、地方で校友会と連携して、コロナ前までは講演会を各都道府県で実施していました。私も何度か講師として参加させていただきました。その後校友会の幹部の方々と会食などをします。率直に申し上げて、恐らくその方たちは非常に経済的に恵まれた方たちですが、そういった方たちでも子どもが2~3人いると全員を東京の私立大学に送るのは難しいというお話をされますし、本当にそのとおりだと思います。

また、東京の大学に行ってしまうともう戻ってこないのではないかと。それこそグローバル人材として、東京や海外で働くことになって、もう帰ってきてくれないのではないかと。率直なご懸念として示される方もいらっしゃると思います。そういったことは、私どものコントロールできることの外にあるのではないかなと考えています。

一方で、多様性と申しますか、さまざまな異なるバックグラウンドの人たちが集まる環境をどうやって維持・発展させていくかは、各大学にとって大きな課題です。幸い私どもは英語学位プログラムを始めまして、9月入学で入ってくる留学生は非常に多いです。また、海外の多くの大学から交換留学生として政治経済学部で1年滞在する学生も非常に増えました。結果として、キャンパスの多様性はコロナ禍にあってもかなり広がっている状況にあります。

ですので、そういったことをご理解いただいて、魅力的な学びの場であることを発信していくしかないのかなと。もっといいお知恵があれば、ぜひ参加者の方から勉強させていただきたいなと思います。

【千田・司会】 ありがとうございます。小野島先生で一巡しますが、先ほど各先生からお話があったように、入試制度だけではどうにもならない部分、経済的な問題で、地方から首都圏に出てくれば非常にお金がかかることもあります。今、質問の一番上で、教育格差があるというご意見を頂いています。教育格差という言い方もありますし、いろいろな意味での教育の機会が、首都圏のほうが非常に潤沢に備わっていることもあるかと思います。いきなり重い話にしてしまって、最後にすればよかったかなと思っていますが。

【石川】 すみません。1つだけ発言してもよろしいですか。

【千田・司会】 どうぞ。

【石川】 不規則発言で大変申し訳ありません。立教大学というよりは私の個人的な見解が強いですが、今、荒木先生がおっしゃったように、地方の親御さんは一回東京に出すともう戻ってこないことを大変気にされています。

そういうことに直接お応えするのかどうかは別です。もちろん海外へどんどん出て行って活躍していただきたいのですが、一方で地方でも活躍していただきたいです。そういう時代だと思います。今はオフィスが地方でも大丈夫な時代ですので、そういう意味

では地方からいらっしゃってもまた地方で活躍できる場をつくれるような人材や、そのまま地元に戻らなくても別の地方へという、彼ら彼女らが卒業後に日本国内でもいろいろ動ける、特に首都圏の大学がそのハブのような役割になれば、また少し違った局面が出てくるのかなと感じました。失礼しました。

【西澤】 われわれも地方の親御さんのご相談を受けていると、一度出ていったら帰ってこないのではないかと心配で、何とか手元に置いておきたいというご意見はあります。ただ、その中でやはり地方での就職先が従来どおり安定した形で確保されているかという、残念ながら右肩下がりの経済の都市が多い状況です。

その中で、若い人たちが地方をどうやったら救えるのかといったときに、地方にずっといることが果たして本当に救える道なのか、少しご相談させていただくことが多くあります。今の世界の流れを一度若いうちに経験してみて、今の日本の置かれている状況や地方の置かれている状況を第三者的に、客観的に見る視点が絶対に必要ではないですかとお伝えしています。

そういう意味で、若いうちに海外へ出ていくことを強く推奨しているのがわれわれの大学の方針でして、ぜひとも地方を活性化すべく、一度海外に出て勉強してきなさいねということを申し上げています。そのまま帰ってこない方もいるかもしれませんが、それはお子さんの自由に任せて、志のあるお子さんであるならば、もう一度自分の生まれた地域を活性化すべく、新しいアイデアをもって展開してくれるのかなと思っています。これが地方のご両親のご懸念に対するわれわれの回答かなと思っています。あまり心配することはないですよ、大きくなって帰ってきますよということをお伝えしています。失礼しました。

【小野島】 1点、荒木先生に質問です。あくまでも個人的な関心ですが、早稲田では地域連携型特別推薦入試のような制度を導入されたという話を聞きました。もしよろしければその辺のことを少しお話しただけるとありがたいと思いますが、いかがでしょうか。

【荒木】 実は学部ごとにそれに参加するかしないかを決めることになっていまして、政治経済学部は参加していないので申し上げにくいのですが、制度自体は地方出身の学生が東京で学んで、卒業後は地元に戻って地域の発展に貢献するという設計になっています。今採用しているのは5学部か6学部かそのぐらいで、約半分の学部が参加している状況です。政治経済学部が参加していない理由については、お答えを差し控えさせていただきます。

【小野島】 ありがとうございます。

【千田・司会】 ありがとうございます。その他この話題についてはよろしいでしょうか。

簡単に言うと入試改革をすることに対して素早く対応できるのは首都圏の受験生ではないかという印象を持ちましたので、最初にそういう質問をさせていただきました。経済的な支援も含めて全般的に大学だけの問題ではなくて日本全体の地域間格差の問題になって、話を広げてしまうとそれはそれで焦点がぼやけてしまいますが、大きな問題だと思います。まず4大学とも共通の悩みと目標があることを確認できました。

ただ、参加者リストを見ると、本日は国公立大学の方も非常に多く参加されています。首都圏の私大はそのまま首都圏の高校生でやってほしいと思われる地方の国立大学の先生方、職員の皆さまも大勢いるのではないかと思います。より良い選択を学生が自由にできて、制約状況が経済的な問題なのであればなるべくそういうことを外した上で、学生の選択がより広がるような方向を考えられるのではないかと思います。この話はいったん区切らせていただきます。

質問が来ていますので、上からでよろしいでしょうか。まず、令和4年度から入試が必然的に変わるわけですが、そこで教科「情報」の扱いをどのように考えておられますかということで、実はそろそろ共通テスト利用入試あるいは一般入試でもどの科目をどうするか、大学として決めなければならない時期にもう来ていますが、お答えできる範囲で、これについてはいかがでしょうか。まず、順番はまたスライドさせていただきまして、西澤先生、いかがでしょうか。

【西澤】 ありがとうございます。重要な問題だとわれわれも認識してまして、情報の科目については、全ての学部 of 学生に今年度から必修科目としています。当然、文学部や神学部など、従来は関連性が低いと思われる学部 of 学生も情報の科目を必修に据えさせていただきました。そうなりますと、当然のことながら新しい入学試験制度において情報の科目を入れたいと考えています。

ただ、まだワーキンググループが立ち上がってさまざまな角度で検討している段階でして、どういう方向性で結論を出していくのかについては現段階で何の結論も出ていないので、具体的な方策について私自身からお答えできるような回答は持っていない状況です。当然今年度中には方針を決めて発表する予定ですので、もう少しお時間を頂ければという状況です。よろしくお願いします。

【千田・司会】 ありがとうございます。荒木先生、この点はいかがでしょう。

【荒木】 共通テストの情報の扱いにつきましては、どの大学もそうだと思いますが、今検討中と申しますか、案をまとめているところです。私どもの大学の場合は各学部で判断した上で全体のすり合わせをする流れになっていますので、現状は学部で議論する準備が進んでいる段階にあります。

【千田・司会】 ありがとうございます。それでは、小野島先生、いかがですか。

【小野島】 皆さんと同じですが、最初の報告でもお話ししましたワーキンググループがありますので、そちらで今検討しているところです。たしか東京大学と大阪大学さんが公表されたという話を聞いていますので、少し焦っている状況ですが、いずれにしても今検討中ということで、できるだけ早めに出していかなければいけないのかなと考えています。

【千田・司会】 石川先生、お願いします。

【石川】 本学も同じです。先ほど申し上げたとおり、本学は全学で動いていますので、全学でワーキングを立ち上げて議論させていただいています。情報の教科書も拝見しましたが、非常に多岐にわたってまして、面白いといえば面白いのですが、なかなか奥も深いので、どのように対応するのか、そもそも対応するのかしないのか、ワーキングで議論しています。以上です。

【千田・司会】 ありがとうございます。この点について、パネリストの先生方、追加で何かコメントはありますか。よろしいですか。

次に、先ほどの地方の問題の続きで、私も日頃から感じていてそれなら自分で確認すればいいだろうと言われそうですが、少子化や過疎の影響で地方の高校数が減少しているので、そもそも首都圏出身者の比率が上がっているのではないかと。18 歳人口や高校生の首都圏への集中というか流入があれば、当然それは自然な流れという見方もできます。このご質問では、高校生数が実際に減っているので地方出身者の比率も減っているのではというご意見を頂いています。これについてはもう少しデータを見て確認する必要もあると思いますが、この点については順番でなくて何かご意見あるいは数字を持っている方はいらっしゃいますか。

【荒木】 私から問題提起の形でお話しさせていただくと、ご指摘のとおりだと思います。当然地方の 18 歳人口の減り方のほうが速いので、そもそも母数が少ないことが大きく影響すると思います。

それは事実とした上で、私が先ほど問題提起させていただいたように、地方の中での偏りは、実は人口に比例していません。どういうことかと申しますと、近畿 14 名のうち半分が兵庫県です。次に多いのは、人口が多い大阪ではなくて奈良県です。また、九州で入学者が多いのは人口の多い福岡ですが、それと同数が鹿児島です。高校に詳しい方はぴんとくるかと思いますが、なぜ奈良や鹿児島が多いかというと、全国的に名前の知れた有力な中高一貫校があるからです。

ですので、少なくとも私どもの学部に関して、地方からの学生の偏りの一番大きな要因は、進学校がどこにあるかだと考えています。愛知県からの入学者が多いのは、私立にも公立にも非常に有名な進学校が多いからで、実際、2 名以上入学している学校が非常に多いです。愛知県のある私立高校からは 4 名も入学しています。加えて世界的大企業のお膝元ということもあって経済的に非常に豊かな地域であることも影響しているかと考え

ています。

確かにご指摘のとおりですが、人口の減り方と比例的に減っているわけではないことももう一つの問題意識として持っておいたほうがいいと個人的には考えています。

【千田・司会】 ありがとうございます。今の荒木先生のご説明と関連する質問が来ています。上位校に中高一貫校があって有利になっている、要するに、地理的に中高一貫校がある所が多くなるというご指摘が来ています。これはそのとおりということですね。今ご説明いただいたことと一致しています。

【荒木】 その傾向が非常に強くあります。ただ、公立高校が非常に強い土地柄もあります。具体的な高校名は出しませんが、先ほど申し上げたように例えば名古屋には非常に全国的に名前の知れた公立高校が複数ありますし、福岡もそうです。広島の場合は国立大学の附属が非常に強く、必ずしも中高一貫校ではありませんが、全国的に名前の知られた進学校が複数あるような地域からの入学者が多い傾向はあります。

【千田・司会】 ありがとうございます。このご指摘で他の先生方、何かありますか。中高一貫校の地域の分布による地方出身者の差もあり得ることだと思います。そうすると、今、荒木先生が言われたように、地方の中での教育格差あるいは教育機会の差というものも存在しているのだと思います。

この話題についてはよろしいでしょうか。それでは、今来ている質問で、事前の打ち合わせでもこういう質問が来たら言えることと言えないことがありそうですねと言っていた話題です。入試改革に対する学内の合意を得る際に大変だったこととしてどのようなことがあるのでしょうか。立教大学と上智大学にはこのままの質問で答えただけだと思います。それから、早稲田大学は政治経済学部の中に政治学科と経済学科の 2 学科があって、率直に言って経済学科寄りのカリキュラム改革なのかなと勝手に思っていますが、そのようなところでもしお話しできることがあればお願いします。それから、明治大学は改革をしていないので、こういうことで改革ができないのですかと私が聞くのは少しおかしいですが、それについてお答えいただければと思います。

まず、荒木先生、学部内で合意を得るのはどうでしたか。お答えできる範囲でお願いします。

【荒木】 もちろん議論はありました。例えば数学ⅠA だけでいいのか、ⅡB も入れるべきかという議論があったのは事実です。ただ、全体として大きな方向性に関して強い反対があったわけではないと理解しています。と申しますのは、政治学の分野でも実証的なデータ分析が重視される流れが非常に強まっていますので、入試改革の方向性については、カリキュラム改革の方向性と合致したものであったので、そう大きな反対意見等があったわけではありません。

むしろ、実際にこれで大丈夫なのかと心配されるご意見があったのは事実です。ですの

で、入試改革によって多くの受験生に受験してもらうにはどうすればいいかということにかなり神経を使ったというのが実情です。改革自体に関して大きな反対意見はなかったと認識しています。

【千田・司会】 ありがとうございます。明治大学、よろしいでしょうか。

【小野島】 ぜひとも石川先生や西澤先生にお聞きしたいところですが、やはりいろいろな問題点はあるかと思います。先ほど少し作題数の話をさせていただきましたが、明治大学で現在独自で出題している科目はたしか 82 科目ぐらいあります。恐らく各大学さんに比較すると、かなり多いのではないかなと思います。そうした作題負担が非常に重くなっているという現状があります。さらに、さまざまな推薦試験や総合型選抜の日程は非常に詰まっている状態でして、この辺りをきちんと整理していかないと、なかなか新しいことはできないのかなと個人的には感じています。

いずれにしても、やはり入試制度は基本的に常に見直していく必要があると思いますので、ぜひとも各大学さんの知見を聞かせていただきまして、明治大学でも議論をどんどん進めていければなと思っています。

【千田・司会】 ありがとうございます。それでは、立教大学の石川先生、お願いします。

【石川】 ありがとうございます。こうですとお伝えできるようなお話はなかなかありませんが、再三申し上げているとおり、本学は全学部体制でやっていますので、全学部のコンセンサスが得られないと進めないという意味で大変苦労しました。逆に言うと、コンセンサスが得られれば全学部で一斉にできると。行動に移した場合は早いところもあったかなと考えています。

英語の外部試験導入に関して申し上げますと、最初に導入したのは 2016 年で、そのときは全面ではなく一部導入してそれを利用するという形でした。その時点で、当然のことながら議論があり、大学は大学で必要とされる能力があるのだから、外部試験で測定できるのかという議論がありました。

しかし一方で、英語を教える方々を中心にそういう技能をきちんと測定できる専門家がいらっしゃいまして、要は外部試験もきちんと信頼できると伝えてくださって使い始めたのが大きかったかと存じます。

加えて、導入するしないもありますが、それをどのように点数に換算するのかしないのか、もっと言うと、本来 4 技能だけでいきたいが、共通試験などはまだ 2 技能ですので、4 技能と 2 技能という全く違った能力を測定しているものをどうやって換算するのかといった議論をずっと積み重ねています。ようやく 2021 年に英語に関しては独自の入試をやめようということになりましたので、そこまでに 5 年かかっているということです。それでも文学部は、われわれはわれわれに必要な英語能力があるからということで、全ての学部で導入ということではありません。やはり時間をかけることが一つなのかなと思います。

ます。

また、これは幸いだと思うのですが、学部独自では問題を作っていません。各学部の教員がどこの学部でもという形で作っています。経営学部に必要な英語能力、社会学部に必要な英語能力ということをもともとあまりわれわれは想定してなかったのですが、そういう意味では外部試験を導入しやすい素地があったのかなと感じています以上です。

【千田・司会】 ありがとうございます。それでは、西澤先生、よろしくお願いします。

【西澤】 まず、英語 4 技能の導入に関してご報告させていただきたいと思います。上智大学は TEAP という試験を英検と共同開発しました。そもそも 4 技能の検定試験の導入は上智大学が手を挙げたという経緯でしたので、ほとんど抵抗がありませんでした。

ただ、検定試験を受けられない地方の人たちはどうするのかと。地方会場が限定されていて、そういう場所まで行くのも大変な学生さんがいた場合の受験機会はどうかと一部指摘された経緯はありましたが、それ以後、あまり大きな声は上がっていません。

先ほども申し上げたとおり、入学してからのプレイスメントテストの結果もかなり向上している実態が見受けられますので、4 技能の導入に関して、あまり反対の意見はありませんでしたし、現状においても否定するような動きはほとんどないのかなと感じています。

もう一つ、われわれの一番大きな改革だったのが共通テストの導入でした。首都圏の大学としては 2 年前まで唯一全く扱っていませんでしたので、かなり大きな改革でした。今までも何度か導入しようという動きはありましたが、上智らしさを特徴として個別入試を重視しようという動きが一定数あったのと同時に、一般入試をそのままにして、さらに共通テストを導入するとなると入試の負担が増えるのではないかという懸念も一部の先生方から指摘されていました。

ただ、今の文科省の大きな入試制度改革の流れの中で、共通テストを導入することによって地方からの受験者数の増加や多様な受験者層をターゲットにできるというメリットがありましたし、結果としてそういう傾向が見受けられるので、われわれとしても非常によかったのかなと。この 2 年間の制度改革においてはかなり機能していると思っています。

一方で、受験者数が減っている原因究明については真摯に検討しなければいけないというのが現状かと思っています。よろしくお願いします。

【千田・司会】 ありがとうございます。今、来ている質問についてはほぼこれでお答えできたと思います。今の改革に向けての学内の合意ということで、それぞれの大学からご説明いただきましたが、この点について、お互いに何かご質問等がありますか。よろしいですか。

それでは続きまして、少し視点は変わりますが、既に大学ごとのご説明の中で入試の全体像を示していただき、その中で総合型選抜や学校推薦型選抜についてもお話を頂いて

いますが、一般入試以外の入学試験、特に指定校入試は今日ずっと話題になっていました。地方の指定校を増やすことで、ダイレクトに地方からの入学者を増やすという手段もあります。地方と限らなくてもいいですが、改めて学校推薦型の入学試験の位置付けや今後の見通しなどについて、可能な範囲でお話しいただければと思います。小野島先生、いかがですか。

【小野島】 最初の報告でも申し上げましたが、1 学部を除いて指定校制度を導入しています。また、どのくらい学生を募集しているかは結構学部によって異なっていて、積極的に指定校を出している学部もあれば、そうでもない学部もあるのが実態です。

地方のお話と結び付けて言うと、これはあくまでも全学のコンセンサスがあるわけではなくて、個人的に思うことですが、一つの方法としてそういう考え方はあり得るのかなと。ただし、いわゆる地方の高校に指定校を出したからといって、必ずしも学生さんを送り出してくれるとは限りませんので、その辺の難しさが少しあるのかなと個人的には感じています。

あと、首都圏以外の地方の学生も当然ですが、海外指定校の形で、海外の方にも来てもらえるような指定校制度を一部学部で導入していますので、今後はその辺も考えていく必要があるのではないかと考えています。

以上になります。

【千田・司会】 ありがとうございます。明治では指定校で入ってきた学生と一般入試で入ってきた学生と、入学後のパフォーマンスはどうですか。

【小野島】 基本 GPA はあまり公開しないことにしていますが、指定校の学生さんは、悪くはないと思います。基本的には恐らくどの大学さんも似たような形なのかなと思いますが、真面目なという言い方はおかしいかも知れませんが、一生懸命授業に出られる学生さんが多いのではないかなと。これはデータを取っているわけではなくて、個人的な印象です。そういった意味で言うと、成績自体は、悪くはないのではないかなと。当然 IR 等で数字は出ていますが、個別の数字については特に公開していないので、ここではお話しできません。

【千田・司会】 ありがとうございます。それでは、石川先生、指定校はいかがでしょうか。

【石川】 ありがとうございます。先ほど申し上げたとおり、地方での知名度が低いので、地方の指定校は、地方にアクセスする重要な役割を担ってくれていると認識しています。一方で、今、小野島先生もおっしゃったとおり、指定すればいいという話ではなくて、送っていただくことが重要ですので、学部によってやや違いますが、指定してそれで終わりではなくて、その後に指定校を訪問して、密にコミュニケーションを取るなどの努力をしている学部もあるようです。

また、どういう形で指定させていただくかについても、例えば英語による学習に非常に力を入れている高校さんや、リーダースhip教育に力を入れている高校さんなど、本学の教育方針に合った高校さんを指定させていただくことで、入学後の教育効果も異なります。また、そういう大学であることを生徒さんがきちんと理解した上で、ただ単に成績がいいから、ここに行けるからということではなく、ここの教育を受けてみたいということが入ってきてくださるとやはり違います。そういったコミュニケーションの取り方をやっているところもありますが、今後の大きな課題かなと認識しています。

それから、これも小野島先生が言及されていましたが海外の指定校ですが、学部によってもやや違いますが、先ほどのプレゼンの中で紹介させていただいた Rikkyo Study Project という海外の留学生に向けたプロジェクトは、ほとんどが海外の指定校からトライしていただくものですので、今後そういった取り組みもより深めていく必要があるかなと考えています。以上です。

【千田・司会】 ありがとうございます。それでは、西澤先生、お願いします。

【西澤】 よろしくをお願いします。まず、指定校の学生さんの成績に関しては、一般入試の学生さんの母集団は大きいので、ばらつきがかなりあります。とてもできる優秀な学生もいれば、残念ながら GPA の低い学生もいますが、指定校の学生は総じてかなり高いです。ですから、優秀な学生さんが多いというのがまずあると思います。

もう一つ、指定校の学生さんに関しては、自分の母校を背負っていると。自分の GPA 次第で先輩たちが指定校の推薦枠に入れるかどうかをかなり意識しているようですから、そういったことも含めて総じて GPA が高くなり、良き伝統が生まれている高校もたくさんあるという傾向かと思います。

先ほどから地方の戦略ということで、そういう形で現状の指定校の枠組みを考えると、過去の実績がすごく大きくなって、おのずから新しい高校が入ってこないことになります。そこは大きな問題だとわれわれは認識しています。新しい魅力的な高校との連携をどうしたらいいのかは今検討している課題でして、今ご指摘いただいたように、新たな取り組みをしている高校、特にグローバル展開などにおいて積極的な取り組みをしている高校については、指定校の枠を付与するようにできないか、今取り組んでいる状況です。

あとは、指定校に関しては希望する学生さんと希望する学科とのミスマッチがかなりあります。上智に行きたいが希望する学科からの指定がないこともかなりあります。こういった点も含めて、指定校との連携、情報交換がとても重要だと考えていますので、指定校との綿密な情報交換は常日頃よりさせていただいています。

また、海外指定校につきましてはわれわれも大変重視してしまして、上智大学の場合にはカトリック、イエズス会、特にカトリックのネットワークが全世界にありますので、全世界のカトリック高校を一つのキーにして、海外指定校の枠を積極的に展開するように考えています。ただ、この戦略はコロナ前に始めたのですが、コロナで完全に止まってしまっていたので、これでもできるだけ早く再開して、従来どおりの流れでもっとスムーズに

国内外への出入りや海外からの指定校の枠も拡大できるように今準備しています。よろしくをお願いします。

【千田・司会】 ありがとうございます。今、私は GPA という言葉を使ってしまったのですが、GPA は高校の評定平均値とほぼ同じようなもので、成績の平均値になります。4 点が満点で、ほとんどの大学がそうになっているのではないかと思います。
それでは、早稲田大学の荒木先生、お願いします。

【荒木】 まず、政治経済学部では国内指定校と海外指定校に分かれていまして、海外については日本語学位プログラムと英語学位プログラムがそれぞれあります。まず、国内指定校は、この制度を設けた当初から 1 都 3 県以外からの入学者を確保することが大きな目的になっていまして、募集は約 90 名ですが、地方に手厚く配分している状況にあります。先ほど少し申し上げましたが、あまり詳細を公開していないのでこの場で言うと怒られてしまうかもしれませんが、基本的には一般選抜、共通テスト利用入試による入学者が多い高校を都道府県ごとに指定する方針を取っています。幸いにして今年はちょうど 90 名の入学者を確保できましたが、先ほどから話題になっていますように、辞退される高校もありますので、少し多めに指定して 90 名を確保しているのが実態です。

ただ、これが非常に難しいのは、先ほど私からのご報告でお話したように、新入試になって特定の高校に非常に偏っています。その結果、入学者がゼロになっている県がかなり出てきているのです。数年に 1 回、指定対象校を見直すのですが、この状況が続きますと次回見直すときに今のルールでは指定が非常に難しいと予想されるため、これから私どもの学部内でどうするべきかという議論を始めることになると思います。

海外指定校につきましては、日本語と英語でだいぶ状況が変わっていきまして、日本語については基本的に日本語教育プログラムのある高校を指定しますので、東アジアに偏っています。これはある意味やむを得ないというか、日本語で政治や経済を十分に学ぶ能力があることが前提になりますから。先ほどお話がありましたが、コロナ前は例えば中国の高校生の場合は夏に卒業してしまうので、秋から早稲田に来てもらって、日本語の授業を取りながら 4 月の正式入学に備えてもらうという制度で運営していました。この制度はかなり長くやっけていまして、かなりうまくいっているのではないかと考えています。

一方、英語のほうは、日本語プログラムを持っていないかなり幅広い高校も指定できますし、東アジア以外の高校も指定できるメリットがあります。ただ、私も英語学位プログラムのリクルート担当をしていたこともあるので実際に経験したのですが、例えばシンガポールのような国の有力高校に行って、世界中の大学が集まった大学フェアのようなところでブースを開いて説明などをさせていただくと、日本に興味を持つ学生さんは一定数来てくださいます。しかし、欧米の有力な大学は優秀な学生さんに多額の奨学金を用意している中で競争していくのは非常に大変だなと。

実際問題として、例えば多くのシンガポールの有力な高校を指定校にしても、なかなか来てくれないというのが実情です。入学者が 1 か 0 かという状況が今も続いていまして、

運営するのは非常に難しいというのが正直なところです。

【千田・司会】 ありがとうございます。指定校の件について、追加のコメントなどはありますか。よろしいですか。

それでは、あと 10 分少々ですが、先ほども少しお尋ねしましたが、パネリストの先生方之间でお互いにこの大学にこの質問をしたい、確認をしたいといったコメントというか質問はありますか。

【小野島】 では、私から石川先生に質問させていただきますが、立教さんでは、個別の学部での出題ではなく全学でというお話でした。昔からそうした体制が取られていたという理解でよろしいですか。

【石川】 ご質問いただきましてありがとうございます。もともと立教大学は 5 学部ですと長いことやっていました。今は増えて 10 学部、来年度は 11 学部になります。良くも悪くも言ったら怒られてしまいますが、5 学部時代の伝統をそのまま受け継いでいるということです。全学でやることのメリット・デメリットは常に議論の俎上（そじょう）に載ることです。これだけ学部が増えると全学部で一緒に動くとき非常に遅くなりますし、また、英語の必要な能力一つ取っても学部によって違いますし、自分の所の教育に合った学生を採りたいのであれば、学部ごとに入試問題を作るべきだという議論もあります。

一方で、大学生として活躍する共通の能力はやはり学部横断的にあるだろうと。そこは学部関係なく測定できるのではないかとということと、先ほど申し上げたとおり、決まるまでは大変ですが、決まった後は割とスムーズに立教大学として動けることは、われわれもやりやすいですし、外部にも立教大学は全体でこのように変わりましたと発信しやすい面もあって、メリット・デメリット両方ありますが、今のところはメリットが大きいかなということで、当面は全学でイメージしています。

【小野島】 ありがとうございます。

【千田・司会】 ありがとうございます。他に何かご質問はありますか。

【石川】 よろしいでしょうか。答えのないようなことを皆さまに伺いたいのですが、年々増える入試業務負担に対して、答えられる範囲で結構なので、どのように考えていらっしゃるでしょうか。本学の場合、1 学部当たりの教員数が少ないのもあり、教員 1 人当たりの負担がとても大きいので、もちろんメインは 4 技能ですが、本音では外部の外国語試験というのもあったと思います。

一方で、今後また情報等も入ってきて、対応できる部分とできない部分があって、正直言って課題であることは全学で認識していますが、どうしたらいいのかなと悩んでいます。そのような悩みを共有いただくだけでも少し心が安らぐのですが、共有できる範囲で

伺えればありがたいかと存じます。

【千田・司会】 分かりました。話せる範囲でということになると思いますが、上智大学の西澤先生、いかがですか。

【西澤】 ありがとうございます。どこの大学でも教員の入試負担の軽減は必須の課題かと思えます。その意味で、上智大学でも外部試験を取り入れたわけです。その他、直近では採点方法の工夫を随分考えていまして、当然記述式になると手採点になります。今まで上智大学の独自試験は全部マークシートのみでしたので、実は採点をやっていませんでした。共通テストを導入したことによって、逆に記述式を入れたので、採点業務が増えてしまって、非常に大きな負担になるのではないかと教員側から随分指摘されました。

その流れの中で、採点方法の工夫ということで、どういう形で効率的に記述式の問題を採点していったらいいのかが議論的になりました。今年度から導入する予定ですが、採点方法のデジタル化に取り組む予定です。紙をスキャンするのですかね。私も詳しいことはよく分かりませんが、デジタル採点を一部導入する予定です。それが負担軽減につながるのではないかとということで今実験を始めたところで、来年度からできれば導入したいなと思っています。

そういう形での採点方法の工夫や、新しいいろいろなテクノロジーを使うことによって軽減できる部分も実はあるのではないかなと思っていまして、われわれはそういうところに注目して、新しい入試制度を考えていきたいと考えている次第です。よろしくお願いします。

【千田・司会】 ありがとうございます。それでは、荒木先生、いかがでしょうか。

【荒木】 基本的には同じですが、1点付け加えますと、私どもの学部では全体の入試業務の軽減とともに、負担の公平化をととても重視しています。業務の性質上、誰が何をしているか全員にお示しすることはできませんが、いわゆる業務分担表のようなものを作って、今誰が何をしているかということを執行部の教員が把握しています。公平な配分をしていることを一応皆さまに信じていただき、軽減化と同時に公平な負担を目指していることを皆さまにご理解いただいた上でお願いしているというのが実情です。

【千田・司会】 ありがとうございます。それでは、小野島先生、いかがですか。

【小野島】 他の大学のお話を聞かせていただきまして、非常に参考になりました。いずれにしても、先ほど少しお話しさせていただきましたが、本学においては入試業務の負担が非常に重くなってしまっているという事実があります。先ほど荒木先生からもお話がありました、公平な負担というのでしょうか。やはりどうしても一部の方に負担が集中してしまうこともありますし、また、本学には10学部ありますが、学部の教員数も全く違

っていて、大きい学部と小さい学部がありますので、その辺の負担の公平性をどうするのか、非常に難しい問題があります。ここは少しでも解決する道筋をつくっていかなくてはいけないのかなと個人的には思っています。

【千田・司会】 ありがとうございます。実は小野島先生との役割分担は、入試改革は小野島先生、入試の実施は私が責任者なので、業務負担のクレームは私のところに来ますから、毎年非常に苦労しています。

Q&A にご質問いただいています。どの形態の入試で入ったかによって大学での成績、先ほど GPA のお話もしましたが、さらに社会人になっての学生の評判は違うのかどうかということです。いまデータをお持ちかどうか分かりませんが、入試形態別の成績はある程度どの大学もデータとして持っていると思います。さらに卒業後の進路などについて、もしお分かりならば。はっきりした数字がなければ、親しいゼミ学生などの様子で感想のような話でも構いません。いかがですか。

【西澤】 このご指摘に関してぜひともお伝えしたい情報があり、高校生に対して OB・OG が大学 4 年間でどう成長して社会人になってどう活躍しているのかということは、多分一番関心のあることのひとつだと思います。今までは大学案内等で OB・OG の紹介をさせていただいていましたが、われわれの大学では昨年来 YouTube を活用させていただいています。全ての学部から魅力的な学生さんを選抜して、その学生さんが 4 年間でどのように成長していったのか、今後どのような将来構想を持っているのかをインタビュー形式でまとめて、動画を作らせていただきました。

ご質問いただいた先生に対しては、上智大学の YouTube を見ていただいて、どのような学生が入学してどう活躍しているのか、ぜひとも学生の目線で見いただければと思います。われわれが「こういうカリキュラムがあって、こういう勉強ができますよ」と言うよりも、はるかに説得力のある動画になっていると思います。高校生を個別に訪問して説明することも重要かと思いますが、より広くいろいろな情報を提供できると思いますので、ご参照いただければと思います。よろしくお願いします。

【千田・司会】 ありがとうございます。入試の区分、つまりどの入試で入ってきたかで分かりますか。

【西澤】 そこまでは出していませんが、先ほど申し上げたとおり、上智大学の場合には指定校、公募制、総合型選抜の入試制度で入ってきた学生さんの GPA は総じて高いです。また、正確には把握できていませんが、YouTube に出ている学生さんを見ると、もともと上智が第 1 希望で、留学なども含めて活用して成長していった学生が多いかなという印象を持っています。

【千田・司会】 ありがとうございます。それでは、指名しませんが他の大学、この件はい

かがでしょうか。ミュートを外していただいて。

【荒木】 では、私から少しお話しさせていただければと思います。ご指摘のように、実際に地方の高校によっては卒業生を招いて話をさせているようです。1つの例を申し上げますと、山陰地方の公立高校から指定校推薦で政治経済学部に入學して、私のゼミを取って、卒業後は総合商社に入社し、その後大変有名な外資系の戦略コンサルティング会社に転職して活躍している卒業生がいます。その卒業生が母校で話したときに、最後に「みんな、ここにはないで東京に出よう」とあおるような檄を飛ばしたら、先生方の反応は相当冷やかだったと言っていました、やはり難しい面もあるのではないかなと率直に思います。先ほどから出ていることの繰り返しになりますが、高校の先生も親御さんたちも非常に複雑な思い、子どもたちに世界で活躍してほしいという思いも持ちつつ、一方で地元にとどまってほしいという思いもあって、なかなか難しい面もあるのかなと。

ただ、指定校推薦であれ、内部進学者であれ、一般選抜であれ、共通テスト利用入試であれ、グローバル入試であれ、入試形態に関係なく、私どもは幸いにも非常に意欲の高い優秀な入学者に恵まれまして、私のゼミ生だけを見ても、卒業後は世界中で活躍してくれています。

【千田・司会】 ありがとうございます。石川先生、いかがでしょうか。

【石川】 ありがとうございます。入試形態別の卒業後の活躍は、残念ながら追えていません。ただ、ご指摘いただいたとおり、高校の卒業生、現役の学生がどのようにしているのかは高校の先生にとっても関心事ですし、また、後輩たちにとっても関心事のようです。1つの学部では、現役の学生が自分たちの学んだ授業を今度はそれをそのまま丸ごと高校生に伝えようという企画があり、そこへ高校生が集まって、先輩が先生役をやっていると。それを見て、「活躍している。私も入ったらああいうふうになりたい」ということで入ってくると。そういう循環はあると思いますので、きちんと彼ら彼女らの活躍をお伝えすることが非常に重要かなと感じました。以上です。

【千田・司会】 ありがとうございます。小野島先生、いかがですか。

【小野島】 本学でも同じように、政治経済学部ではゼミのOB・OGの紹介を積極的に行っています。あと付け加えるとした場合、本学では父母会の活動が盛んでして、全国に父母会があります。大学に学生がいるときだけではなくて、大学のサポーターになっていただいていますので、そうした父母の方のネットワークで、卒業生の活躍のご紹介もあるのかなと思います。この父母会の活動は、本学にとって非常に重要な意味合いを持っているのかなと考えています。

また、どこに就職したかまではIRで多分把握できていると思いますが、その後どうなっているかについてもきっちりとデータを取っていく必要があるのかなと考えています。

【千田・司会】 ありがとうございます。予定の時間を 5 分過ぎました。ご質問については全て今の時点でお答えしたと思います。本日は各大学の現状そして改革についてお話を頂き、また、皆さまからさまざまな質問を頂きまして、非常に活発な意見交換もできたと思います。

私立大学の入試はどちらにしても 1 点刻みで合否が決まるような、受験生にとっては非常にある意味で過酷なものですし、そのような入学者の判定方法はどうなのか、1 点差で合格した学生と不合格になった学生の差は一体どこにあるのかといつも感じています。一方、多くの志願者が来てくれて、時間の制約の下で合否判定をしなければいけないということもあります。入試業務そのものについてもいろいろ考えさせられるところが多いです。

ただ、グローバル化の中で留学生も含めてさまざまな学生に来てもらって、大学で異質な出会いをすることは非常に重要なことなので、それを大事にしてほしいのはどの大学も共通の思いだと思います。そのための入試制度という面もありますし、途中でお話しさせていただきましたが、大学で何を学ぶか、どういう能力を育てるかということが先にあって、それに合った入学試験のための入試改革になるのだと思います。

本日、明治大学だけは今のところ動いていないということで、むしろいろいろ参考にさせていただいた面がありますが、各大学も今はまだ改革を始めて 1 年生、2 年生ぐらい入ってきたところだと思いますので、今後も引き続きいろいろご検討されることと思います。

本日はお忙しい中、非常に多くの方にご視聴いただきありがとうございました。また、質問も多数寄せていただきました。これで全体会 3 はクローズとさせていただきたいと思います。本日は本当にありがとうございました。■

令和4年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第17回） 実施結果

1 大会実施概要

期 日：令和4年5月26日（木）～28日（土）

主 催：独立行政法人大学入試センター

共 催：明治大学

参 加 費：1人 5,000円（税込）

開催形式：Zoomによるオンライン開催

参加申込者数：430人（令和3年度 459人）

		国立大学	公立大学	私立大学	高等学校	その他	合計
参加申込者数		151(184)	74(75)	123(142)	55(23)	27(35)	430(459)
内 訳	教員・研究者	100(117)	36(37)	27 (30)	53(22)	1 (4)	217(210)
	事務職員等	51 (67)	38(38)	96(112)	2 (1)	26(31)	213(249)

単位：人 （ ）は前回大会の参加申込者数。

2. 日程・プログラム

日 程	プログラム	時 間
【1日目】 5月26日 (木)	全体会1 「変貌する高校教育現場：大学はどう応えるか」	14:00 ～ 17:00
【2日目】 5月27日 (金)	主催者挨拶，来賓挨拶 全体会2 「探究活動を入試でどのように評価するか」 全体会3 「私立大学の入試改革の現状と課題―首都圏私立大学を中心に―」	9:40 ～ 10:00 10:00 ～ 12:30 14:00 ～ 17:00
【3日目】 5月28日 (土)	研究会（交流の場：各30分を含む） ◆オープンセッション（第1部） ・第1セッション〔入試広報、共通試験〕 ・第2セッション〔高大連携、高大接続〕 ・第3セッション〔海外の入試、国際入試〕 ◆オープンセッション（第2部） ・第4セッション〔アドミッション・ポリシー、選抜方法（1）〕 ・第5セッション〔追跡調査〕 ・第6セッション〔選抜方法（2）〕 ◆クローズドセッション（第1部）〔選抜方法（1）、その他〕 ◆クローズドセッション（第2部）〔選抜方法（2）、高大接続〕	 9:30 ～ 12:10 9:30 ～ 12:10 9:30 ～ 11:50 13:30 ～ 16:10 13:30 ～ 16:10 13:30 ～ 15:50 9:30 ～ 12:10 13:30 ～ 16:10

大学入試研究の動向

令和4年12月

第40号

発行/独立行政法人大学入試センター

〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23

<https://www.dnc.ac.jp/> ☎03-3468-3311

編集/試験企画部試験企画課



